封術学園～有望な術師達～

遊馬瀬りど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
封術学園～有望な術師達～

【Ｎコード】
Ｎ６９６７Ｖ

【作者名】
遊馬瀬りど

【あらすじ】
封術学園。そこはプロの封術師を目指す若者達の集う国立の高等専門学校である。世界多重層構造理論によって異世界の存在が証明された時代にある特別な事情を抱えた少年と少女が鷹津封術学園の門を開いた時から、世界と異世界の錯綜が始まる。

第0話「はじまり」

★☆★☆★

世界はひとつではなく、いくつもの世界同士が重なり合うようにして同一空間領域に多重構造を成すという創造理論??世界多重層構造理論(ウモデル)が提唱されたのは、そう昔の事ではない。

その理論に基づいて「幽霊を視る力」や「神の声を聴く力」は、現層世界(この世界)とは異なる世界(異層世界)を認識するための力??異層認識力(オラクル)と総称された。

封術。

それは、かつて超自然現象や奇跡、超能力、魔法と呼ばれていたもの。

それは、科学でも魔術でも錬金術でもないもの。

それは、星のすべての情報体を構成している九つの原質(メディオン)を操作し、改変する技術である。

事象を改変するためには、世界と密接に関係し合わなければならない。

故に封術を行使する者??封術師は異層に干渉出来るほどの高いオラクルをその身に宿している。

そしてオラクルの高低は、血統や才能によるところが大きい。

生まれや育ち、生来の能力。

この世界に何一つ、平等なものは無い。

封術は残酷なまでに精緻に組み上げられた世界というシステムによって構築されている。

鷹津封術学園は日本でわずか四校のみ存在する、封術のプロフェ

ッショナルを育てる国立の高等専門学校である。
そこには様々な目的や思想をもって、封術師を目指す若者たちが集う。
それは彼においても例外ではなかった??。

★☆★☆★

??二〇五三年三月末。
冬の肌寒さをまだ少し残しながらも気温は徐々に暖かさを増し、新たな生命が芽吹き始める季節へと移り変わろうとしている頃。
月が地平線の彼方へと沈み、それと入れ替わるようにして陽が顔を出そうとしている。
かすかに覗いた陽の光に照らされた朝靄の向こう。早朝の神来町を灰色のジャージ姿でランニングをするひとつの影があった。
少年の姿をしたその影が吐き出す息は白い。
暖かくなり始めたといっても、陽が昇っていない時間帯では時折吹き抜ける小さな風でさえもジャージ越しに風の冷たさを感じた。
緩やかに流れる河川を右手に見ながら、アスファルトで舗装された土手を駆ける。たまに彼と同じようにランニングをしている人や、手綱を握って動物の散歩をする老人、今の時代ではさして珍しくもなくなった電気自動車とすれ違った。
ふと、視界を横切った影を追って河川へと眼を向けた。
陽の光を感じて水面へと上がろうとしていた魚を求めて、何処からともなく青鷺がやってきたのだ。
水しぶきが跳ねる。狩人となった一羽の鳥は、一瞬の交錯で食料を手に入れた。
加速の慣性を殺しながら浮島に降り立った青鷺を一瞥して、少年は視線を正面へと戻す。

草木が擦れ合う音がやけに響いて聞こえる。
今日は一段と静かだ。
土手は途中で二手に分かれていた。一方は河川のさらに上流に向かって続いているが、そちらは少年のランニングコースではなかった。
もしもこのまま上流へと向かって走ったら自分は何処までいけるのだろうか、と思考の隅で考えてみる。そんなつまらない感慨に浸れる程度には、まだ体力に余裕が残っていた。
思考を切り替える。
もう一方の道は住宅街へと繋がっている。そちらが少年のランニングコースだ。緑成分の多かった河川と比べれば、さながらコンクリートジャングルといったところだろう。高層ビルやマンションはほとんど無いが、ブロック塀で囲まれた一軒家が規則正しく並んでいると、不思議と息苦しさを覚えてしまう。
と、何処かで犬の鳴き声が聞こえた。
この鳴き声はランニングの終点が近づいていることを知らせるサインだと、少年は勝手に思っている。その実態は、朝の寒さに眼を覚まし始めたところにアスファルトを叩く足音を耳にして、条件反射的に吼えているだけなのだが??。
申し訳ないことをしているという自覚はあるが、どうせ眼を覚ますのならば同じだろう、とも少年は思っていた。
道を曲がったことで陽の向きが変わると、似たような景色が続いていた住宅街に色が生まれた。
平屋はない。ほとんどが二階建ての標準的な一軒家だ。
やがて、ランニングの時間も終わりを告げる。
スタート地点にしてゴール地点である少年の自宅まで、残り二百メートルも無い距離。
ラストスパートの必要はない。
今の少年にとって重要なのは一定のペースを保ち続ける持久力。
もちろん、必要なときに必要なだけの力を発揮することも大切だ

とは思う。そこはケースバイケースだろう。それを否定するつもりはない。
と、まるで少年がランニングから帰ってくる時間を見計らっていたかのようなタイミングで、一人の女性が漆塗りの門扉を開けて玄関から姿を現した。
その姿が視界に映ると、少年の表情に自然と笑みが生まれた。
「おかえりなさい、秋弥」
女性は冬の寒さを一瞬で暖かな春へと変えてしまいそうな柔和な笑みを浮かべて、ランニングを終えた少年??九槻秋弥（くつきしゅうや）にタオルを手渡した。
「……ふぅ。ありがとう、姉さん」
秋弥はタオルを受け取って、姉??九槻月姫（くつきかぐや）に礼を言う。
流れ出す汗をタオルで拭いながら、開いたままの門扉を抜けて家の中に入る。
月姫は秋弥の数歩後ろをゆっくりとした足取りで付いてきた。
毎朝ランニングから帰ってくる時間になると、姉は決まって玄関前で出迎えてくれるのだが、何故かいつも彼より先に家の中へと戻ろうとはしなかった。今日もその例に漏れず、背後に月姫の穏やかな笑みと視線を感じながらも、理由を聞いたところで適当に流されてしまうことはわかっていたので秋弥は気にしないことにした。
玄関口でランニングシューズの靴紐を解く。
ジャージの下に着ていたTシャツが運動を止めたことで噴き出した汗を吸い込んで肌にぴたりと張り付いている。不快な気分を覚えるのにはそれだけで十分だった。
「汗ばんで気持ち悪いから、シャワーを浴びてくるよ。朝食は先に食べてて」
月姫に声を掛けてから、秋弥は自室のある二階へと向かう。
標準より少しだけ大きい二階建て構造の一軒家が、九槻家三人家族の住まいだ。
三人??父親は姉弟がまだ幼い頃に巻き込まれた事故によって既

に他界している。研究者である母親は多忙なのか仕事好きなのか。詳しい理由は不明だが自宅に帰ってくることは滅多に無い。
つまり、実質的に秋弥は姉と二人暮らしをしている。
自室のクローゼットから着替え一式を揃えて部屋を出る。
洗面所で脱いだ衣類を洗濯機に投入すると、浴室に入った。
接触式インタフェースを操作して水温を適当な温度に調節する。
冷水が温水へと変わるのを待ってからシャワーで汗を流し落とした。

月姫はダイニングとキッチンの間を行き来して朝食の準備をしていた。
放任主義??と言えば聞こえは悪いかもしれないが、家事全般が全く出来ない学究肌の母親を持つ九槻家では、姉弟揃って人並み以上の家事を行なうことが出来る。
しかし、大抵の場合は月姫が一人でやってしまうため、最近では秋弥の出る幕はほとんどなくなっていた。
先に食べてて良いと言ったはずなのだが、わざわざ秋弥が来るのを待っていたのだろう。
テキパキと無駄の無い所作で配膳を行なう月姫の様子を眺めていると、秋弥の存在に気付いた月姫が微笑みを向けた。
「もう少しで用意出来ますから、座って待っていてね」
必殺の威力を持った月姫の笑顔に逆らえるはずもなく、秋弥は引き寄せられるようにダイニングテーブルへと足を運ぶ。
椅子に座る前にテーブルの上に並べられた朝食に眼を移す。
今日の朝食はフレンチトーストとホウレン草のソテーだった。
「それではいただきましょうか」
朝食の準備を終えた月姫が正面の椅子に座るのを待ってから、彼女の声で互いに合掌をする。
フレンチトーストをナイフで適当なサイズに切り分けてからメイプルシロップをかける。口に運ぶとそのほどよい甘さで口内が満た

された。
「美味しいよ、姉さん」
「ふふ、ありがとう。そう言ってもらえるだけで作った甲斐がありますね」
月姫が口元に指の背を当ててコロコロと微笑んだ。
月姫は早朝ランニングを日課としている秋弥に合わせて、毎朝早起きしては朝食を作っている。それを迷惑だと思ったことは一度もないのだが、自分に構わず、ゆっくり休んでいてほしいというのも、秋弥の偽らざる本音だった。
しかし、それを口にすると月姫は決まって??、
「私が好きでしていることなので、秋弥は何も気にしなくて良いのですよ」
と言うものだから、本人の意思を尊重すべきだろうと思う。
「秋弥が中学校を卒業してから、今日で一週間ですね」
食後のコーヒーを味わっていたときに、唐突に月姫が言った。
「ん……あぁ、もうそんな経つのかな」
カレンダーを眺めながら、まだそれだけしか経ってないのかと内心で思い、適当な相槌を打つ。
「卒業式では桜、咲かなかったですね」
「この季節に咲くほうが最近じゃ珍しいだろう。四月になっても結構寒いし、この調子だと高校の入学式でも咲かないんじゃないかな」
何気ない言葉だったが、入学式というフレーズに月姫がわずかに反応した。
「まあ、それはとても残念ですね。秋弥のせっかくの晴れ舞台なのに……」
まるで呼吸をするようなさり気なさを装った月姫の言葉を、秋弥は危うく聞き逃しそうになった。
「……えっと、晴れ舞台って何の話?」
思わず聞き返してしまう。
面倒事の匂いを嗅ぎ取って秋弥は小さく眉根を寄せたが、そんな

彼の様子には気付かず??あるいは意識的に見ないフリをして??月姫は一転して心底嬉しそうな笑みを浮かべると、右腕を軽く持ち上げた。
その細腕にはブレスレットが嵌められている。単なるアクセサリーではない。細い環状には装飾や模様の類は一切見られないが、合成軽金属特有の磨き上げたような銀の材質は、一目見て高価な物であるとわかる。
それはブレスレット型の高性能多機能携帯端末（デバイス）だった。
月姫がブレスレットの表面を白魚のように細くしなやかな指で軽くなぞると、可視化されたホログラムウィンドウが展開された。
そこからいくつかの操作を行なってホームサーバへと接続をすると、新たに開いたウィンドウにホームポストを表示させて秋弥に見せた。
「今朝、鷹津封術学園からメールが届いていました。ファミリーネーム宛でしたので中身を確認したところ、こんな内容が??」
秋弥の目線が電子書面を追っていることを確認してから、月姫は指先で目的の箇所に輝線を引いた。
そこには次の文章が添えられていた。

『九槻秋弥殿　貴殿を第十三代新入生総代として、入学式の答辞をお願いしたく??』

★☆★☆★

スクランブル交差点の中心に少女はたった一人で立っていた。
周囲には少女以外の人影はおろか、車の一台すら存在しない。
だがそれを訝しむ以上に、少女の周囲には異様な光景が広がっていた。

たとえばそれは、墨で真っ黒に塗りつぶしたような窓一つ無い建物。何の商品も並べられていない商店。すべて赤色の信号機。カラフルに発光する街灯。歪曲した時計盤。逆さまの広告塔。枝も幹も無い、若葉のみの街路樹。

スクランブル交差点を描く白線と少女を除く何もかもが、現実的ではない世界。

しかし少女は、混沌とした世界をすんなりと受け入れることが出来た。

何故ならばこの世界は少女の夢の中だからだ。

生物が夢を視るメカニズムについては、少女が生まれるよりも以前に既に解明されている。

原質（メディオン）？？『地（ムーレ）』『水（ジャラム）』『火（アグニ）』『風（ヴァーヒ）』『波（ヴィクシェーダ）』『虚空（ユーニャ）』『意（マナス）』『理性（チッタ）』『自我意識（チューターナー）』で構成される森羅万象の情報体は、外的な刺激によって得られる膨大な情報を完全な状態では保持しておく事が出来ない。そのため、情報体は外的情報を断片化して記憶の一時領域に格納しており、断片化された情報は脳が休眠（トランス）状態にあるとき、『すべての答え』と言われている星の記録にアクセスを行い、断片化された情報を最適化して脳の記憶領域に保存している。

すなわち、少女が見ている混沌とした光景は、無意識の集合体から取り出された断片情報が完全な形を成す前の状態だった。

この場所に来るのはもう何度目になるだろうか。

眠りにつくと、この世界に訪れることがある。

混沌とした見知らぬ街で、しばらくすると《あれ》がやってくるのだ。

月と太陽が重なり、ダイヤモンドリングを生み出している夜空を背景にして。

異形の怪物が、音も無く姿を現した。

ほとんど球体の胴体に二本の腕を生やし、右手には鋭い剣を、左手には長方形の盾を構えている。脚部や頭部に当たるパーツは見られないが、球体の表面で怪しく発光している四対の赤い点が、怪物

の瞳なのかもしれない。その光が規則的に揺れている。どうやら球体の全体が波打っているようだ。横に並んだ奇形の建造物と怪物の大きさを比較する。宙に浮いているため判断は難しいが、怪物との距離も考えれば身の丈は二メートルほどになるだろうか。

異形の怪物。

少女はその正体を知っている。

??隣神(りんしん)。

それは現層世界と重なり合うようにして存在する、異層世界に住む生物だ。

重層する世界はそれぞれにエリシオン光波長と呼ばれる波長の固有振動を持ち、星の記録領域に論理的な領域(パーティション)を構築してそれぞれの世界を形成しており、互いに干渉することなく、同一領域内で共存しあっている。

しかし、何らかの外的圧力や超自然現象、因果などによって固有振動に微小な変化が生じることがある。このとき、一時的に現層世界が異層世界と部分的な共鳴、共振を起こして星の不文律が崩壊する。

そのとき、現層世界に隣神が顕現する??。

異形の怪物??隣神の四つの光が少女を捉える。

右手の剣で左手の盾を打ち鳴らし、その場で駒のようにクルクルと回転しながら浮遊を開始した。

隣神はゆっくりと少女に向かって進み出す。

だが、少女は動かない。

動けない。

釘付けにされたように、交差点の真ん中で呆然と立ち尽くす。

無意識に左手で胸を押さえた。。

必殺の威力を持った凶刃を回転させて、少しずつ前進を続ける。

隣神は、確実に少女を殺そうとしている。貪欲な赤い光から、強

い意志の力を感じ取った。
もしも夢の中で無残に殺されたとしても、現実の身体はそのままに精神的な死を向かえるのだろうか。
少女にはわからない。考えても詮無いことだ。
音が失われた世界で、不規則に振り回された鋭利な刃が空を切る音が聞こえた。強固な盾が風を押し返す音が聞こえた。
あとわずかで、少女に届きそうな距離まで近づく。
だがしかし、その殺意の塊が少女へと届くことは永遠に無かった。
眼を見開いた少女の眼前で、隣神の刃が不可視の壁によって阻まれている。
少女の左手にはいつの間にか棒状の何かが握られていた。長さは約五十センチほど。木の枝を加工して蔦を巻いたデザインのそれは、先端部がわずかだが膨らんでいる。宝石や金属による華美な装飾は一切見られないが、それは紛うことなき《杖》だった。
少女は杖に意識を集中させた。
無意識領域で構成した新たな情報体を、杖を媒体にして外部へと投影する。
世界を満たす情報体??その根源たるメディオンが少女の構成した情報体へと変貌し始める。事象の改変に伴い、情報体を記録、記憶するエリシオンの過剰光（オーバレイ）が少女と隣神の間で発生した。
夜の帳が下りた世界に光が満ちる。
空も月も太陽も建物も街灯も地面も空気も隣神も何もかもが、光の圧力に飲み込まれた。

少女は寮のベッドで目を覚ました。
ゆっくりとした動作で上体を起こすと、ベッドに腰掛ける。
時間を確認するため、壁に掛けられた時計へと眼を向けた。暗い室内で文字盤の上の針がうっすらと浮かび上がる。
目覚めるにはずいぶんと早い時間だった。

しかし、夢の中で異形の怪物に襲われた直後で、もう一度眠る気にはなれなかった。
少女は指を組み、掌を上向けて天井へと腕を伸ばした。
「うぅ～ん」
と、声に出しながら伸びをする。暗闇に徐々に眼が慣れてきたところで、部屋の灯りを点けた。
初めて夢の世界に隣神が現れてから、どのくらい経っただろうか。
何故、隣神が夢の中に現れるのか。
何故、何度倒しても姿を変えて現れるのか。
それに最近では、隣神が夢に現れる頻度が増してきているような気がする。
杖と封術を使えば簡単に倒せるのだが、当面の問題は寝不足気味になっているということだ??昨日も授業中に少しウトウトしてしまったことを少女は思い出した。
少女は肌寒さを感じて、部屋着の上からカーディガンを羽織った。白いファーにリボンのついたスリッパを履いて、末端の防寒も整える。
春を迎えたとはいえ、今は一番冷え込む時間帯だ。体調を崩してしまわないように気を配っておくに超したことはない。
少女は勉強机の椅子を引いて腰掛ける。
頬杖を突き、友人が旅行の土産でプレゼントしてくれたスノードームをぼうっと眺めた。これもそろそろ片付けなければと思い、だけどもう少し経てばその必要もなくなるなと思い直す。
もう直ぐ少女は、寮を出て行く??。
幼稚舎から大学院までの一貫校である聖條女学院（せいじょうじょがくいん）の高等部へと進学することなく??少女は退寮する。
しかしそれは、少女自身が望んだことだった。
机の上に置かれたカード型の携帯端末（デバイス）に視線を移す。
スタンバイ状態のデバイスから十数センチ離れた空中に、小型のホログラムウィンドウが常時展開されていた。

そこに新着メッセージを告げるポップアップが一件、表示されている。

指を伸ばしてポップアップに軽く触れる。スタンバイ状態が解除され、画面が少女の見やすいサイズへと切り替わった。

それは、鷹津封術学園への入学案内だった。

第1話「鷹津封術学園」

★☆★☆★

時代がどんなに移ろいだとしても入学式の様相は変わらない。それは特別な目的で設立された鷹津封術学園も例外ではなかった。

学園の敷地内、多目的棟に設けられた行事用の講堂に集められた新入生達は入学式の全プログラムを消化し終えると、三々五々と散っていった。

行事中は静まり返っていた講堂も、人の動きが生まれると音が反響するように造られた構造も手伝って途端に騒がしさが増した。

その様子を、秋弥は講堂の最前列に立って他人事のように眺めていた。

新入生のクラス分けについては講堂前の電子スクリーンに表示されている。

式後の教室移動を考慮して各クラス毎に大まかな座席指定があったのだが、秋弥は新入生総代の答辞を行うために列の最前に座るよう、学園側から指示を受けていたのだった。

ちなみに秋弥のクラスは三組であり、講堂内での座席も比較的入口側に近かった。

彼のクラスメイト達（と思しき集団の群れ）は既に講堂を後にしている。

式中に紹介のあった担任教師によって引率されたのではなく、不要な混乱を避けるためにクラス単位で講堂を出て行くようにアナウンスがあったからだ。

放送を聴き、秋弥は最前列にいた一組の学生達に混じって一番最

後に講堂を出る。
講堂前では真新しい制服を着た学生が電子スクリーンを見上げて、これから向かうべき教室の場所を今更ながらに確認していた。
黒を基調とした鷹津封術学園の制服は有名なデザイナーが手がけたものらしい。
男子制服はコートにも似た膝丈の詰襟ジャケットとズボンで、両側から見ると肩口から足首に向かって一本の白いラインが引かれている。
女子制服はブラウスの裾が少しはみ出る丈の、腰を絞ったジャケットと赤チェックのプリーツスカート。ジャケットには男子制服と同様に白いラインが引かれている。
答辞の原稿を提出するため事前に何回か学園に通っていた秋弥は、改めて自分の教室の場所を確認することもなく歩き出した。
多目的棟から教室のある本棟まではそれほど離れていない。建物同士が渡り廊下によって繋がれているため、外に出ることなく移動することが出来る。
集団で行動する者、一人で歩いている者、ウロウロしている者、道に迷っている者。
通路にはまだ右も左も知らない新入生達でごった返していた。
その様子に少し辟易しながらも、秋弥は人の波を縫うようにして進んでいた。
「やっほー、シュウ君」
その途中、秋弥は背後から女子学生に呼び止められた。
呼ばれたのが名前ではなく愛称であったため人違いだと聞き流すことも出来たのだが、その溌剌とした良く通る声に聞き覚えがあったので、秋弥は無視することが出来なかった。
「……ああ、玲衣か」
くるりと振り返ると、秋弥は女子学生??牧瀬玲衣（まきせれい）の名を呼んだ。
反応が少し遅れたのは、一見してそれが玲衣かわからなかったからだ。

「そうだよ。あ、もしかして髪型変えたから気づかなかったのかなっ？」
玲衣はショートボブスタイルの髪を指先で弄んだ。玲衣とは小中学校が同じ所謂幼馴染で最後に顔を合わせたのは中学の卒業式だったのだが、そのときは肩に掛かる程度のセミロングだったはずだ。
髪型一つでずいぶんとイメージチェンジしたものである。
「……いや、封術学園に入学してたんだなと思って」
本当は玲衣の指摘どおりだったのだが、秋弥には何故かそれを素直に認めること対して躊躇いがあった。
そこで、適当な言葉で誤魔化してみることにした。
「ガーン！　ひどいなっ！　そりゃたしかに合格発表の日にインフルエンザで学校休んでたけど……」
すると、玲衣はショックを表す擬音を口に出して講義の声を上げた。
本当にショックを受けている様には見えなかったが、玲衣の言葉尻がわずかに萎んでいったことが気になり、一応フォローを入れておくことにした。
「冗談だよ。ちゃんと玲衣の分も代わりに見ておいたからさ。言わなかったけど」
言えよ、と軽いツッコミが入り、玲衣はムスッとした表情で秋弥を睨め付けた。
言外にヘアアレンジアピールの感想を秋弥が避けようとしていることに気づいたらしい。
「それで……ねぇねぇ、この髪型どうかな、似合うかな？」
直接訊ね直した玲衣に、さて何と感想を言ったものかと、秋弥は彼女に悟られない程度に視線を宙に彷徨わせたが、結局、素直に思ったことを伝えた。
「ああ、似合ってるよ。一瞬、誰かわからなかったくらい……だ？」
と、視線を戻した秋弥は、彼女の背に隠れるようにして立つ女子学生の存在に気づいた。

しきりにこちらを窺っていた女子学生と、自然、眼が合う。
すると女子学生は朱に染まっていた頬をさらに上気させて玲衣の背後に身を隠そうとした??。
「あ、この娘？　さっき知り合った子なんだけどね」
のだが、玲衣が猫のようにしなやかな動きで身体を横にずらしたことによって、女子学生の狙いは断念された。
そして、急に秋弥の正面に立たされる形となった女子学生は端から見ても可哀想なくらいオロオロとし始めた。それは怖がっているというよりも、見ず知らずの人間に対してどう接して良いのかわからずに困惑しているように見えた。
「シュウ君も三組だったよね。あたしもこの娘も一緒のクラスだから、これからいろいろと宜しくっ」
人見知りという言葉を知らない玲衣が女子学生の後ろに回りこんで、彼女の両肩にそっと手を置く。女子学生は玲衣の突然の行動に驚いて大きな黒目を丸くさせたが、両肩から伝わる玲衣の手のぬくもりが彼女を落ち着かせるためのものだとわかって、ほっと胸を撫で下ろした。
「そうなんだ。俺は九槻秋弥。これからよろしく」
玲衣の行動の意図を察した秋弥も、努めて優しい口調を心掛けながら言った。
しかしその裏には、これから同じ教室で過ごすことになる同級生に対して不要な波風を立てたくないという打算も、少なからずだがあった。
プリーツスカートの裾をぎゅっと握って恥ずかしそうに顔を俯かせていた女子学生は、やがてゆっくりと顔を上げると、
「あの……私、朱鷺戸綾（ときどあや）と言います。こ、これからよろしくお願いします」
丁寧なお辞儀をした。
「えっと……、あの、九槻さんの答辞、拝見していました。とっても素晴らしかったです」

綾から唐突な賛辞を送られて、秋弥はわずかに眼を見張った。
新入生答辞は定型的なものに若干のアレンジを加えた程度の内容であり、気の利いたこと一つ言っていない。とてもじゃないが同級生から手放しに賞賛されるようなものではなかったはずだ。
しかしどうやら綾は、そうは思わなかったらしい。
「新入生の答辞は入学試験で一番成績の良かった方がされるんですよね。それに、あんなにたくさんの人が見ている前で、九槻さんはとても堂々としていました」
それを聞いて、秋弥は何となく合点がいった。
封術師を目指すための高等専門学校??鷹津封術学園の入学試験で最も成績が良かった人物というのは、言い換えると同級生の中で最も封術師に近い人物だということだ。
つまり、プロの封術師を目指して入学した綾にとって、秋弥は現時点での憧れの対象として映ったのだろう。
無論、新入生総代に向けられる感情は彼女のような良いものばかりではないのだが??。
「ありがとう、朱鷺戸さん」
謙遜しても嫌味に思われるかもしれないし、知り合って間もない綾がどう思うかわからなかった秋弥は無難に礼を返した。
「あ……、ご迷惑でなければ私のことは綾と呼んでいただけますか？」
と、一転して気恥ずかしそうにソワソワしながら綾は言う。
最初の一歩が踏み出せたからだろうか。あるいは背後に立つ玲衣のさり気ない後押し（？）があったのだろうか。
秋弥に対する綾の態度は戸惑いから羨望へと代わり、彼女とは直ぐに打ち解けることが出来た。話してみると決して口下手というわけではなく、単に引っ込み思案であるということのようだ。
教室までの道すがら、他愛の無い話題の一つとして玲衣と知り合ったきっかけを尋ねてみた。少し早い時間に講堂に着いてしまい、手持ち無沙汰になっていたところに玲衣が声を掛けてきたそうだ。

まったく、物怖じという言葉まで知らないのか、と秋弥は嘆息した。
「それでは、お二人は幼馴染なんですね」
そして今は、玲衣と秋弥の関係について話が移っていた。
「腐れ縁だけどね」
異口同音に告げると、クスクスと笑われてしまった。
「だけど羨ましいです。こうして高校でも一緒だなんて」
高校、と綾は言ったが、この言葉は正確な意味を指してはいない。
封術学園は高等学校ではなく、位置付けは五年制の高等専門学校である。
高等学校が後期中等教育を身に付ける場であるのに対して、高等専門学校は高等教育を身に付ける??その名が意味するものは、より実践的で専門的な技術や能力を育成すること。
それ故に、一般には高校ではなく高専。あるいはそのまま封術学園と呼ぶべきだろう。余談だが、高等教育機関に在籍する者は生徒ではなく学生として扱われる。
とはいえ、入学したばかりの彼らは世間的に見れば高校性と同じなのだから、わざわざ訂正する必要もないだろう。
むしろ綾の台詞で重要なのはそこではなく、羨ましいといった本来の意味。
情報体を構成する原質を操る技術??封術を行使するための力は一部の例外を除けば血縁によって大きく決定付けられる。
それは望んで手に入れることが出来るものでもなければ、努力して得られるようになるものでもない。
その稀有な特性上、封術学園は幼馴染や親しい友人、恋人、家族、そのほか何らかの関係性を持った人と一緒に通うことの難しさが特出しているのだ。
「たしかにね〜。シュウ君はともかく、あたしなんかはホント、良く入れたよって感じだし。インフルでうーうー唸ってるときにママから電話があって合格のこと聞いて、病気とか吹き飛んじゃったよね」

「実際にお前、次の日普通に学校に来てただろ」
「ちゃんとお医者さんに許可もらったし！」
「……医者も認めたってことか。体内の病原体を根絶やしにする封術でも使ったんじゃないのか？」
「装具（そうぐ）も無しにそんなこと、あたしには出来ないし！」
何故誇らしげなのかはわからないが、秋弥はとりあえず首を縦に振って玲衣に同意した。
「病は気から、とも言いますしね」
そのやり取りをどう捉えたのか、綾が微妙なフォローを入れる。
「だけど、玲衣は元々要領が良かったからな。ちゃんと勉強さえしていれば筆記の方は問題無いだろうとは思っていたよ」
「……もしかしてそれは褒めてくれてるのかな？」
「褒めている以外の意味に捉えたのなら、相当歪んだ人格を持ってることになるんだが」
「そ、そんなことないよ！」
「まあ玲衣の場合、問題は適正試験（オラクル）の方だったな」
「お二人の家系も高いオラクルを持っていられたんですか？」
綾が不意に口にした言葉の中に、秋弥は軽い違和感を覚えた。
彼女は、家系「は」ではなく、家系「も」と言った。それはつまり、彼女の家系は生来特別な力を有していたということに繋がっている。
??やはりあの『朱鷺戸』なのか。
朱鷺戸家は封術が体系化されるよりも昔から《星詠み》の占い師を数多く輩出している名家である。綾の名字を聞いたときからそうかもしれないとは思っていたのだが、これで秋弥は確信した。
「あたしは違うけど、シュウ君は確かそうだっけ？」
「……父方がそうだよ」
玲衣の異層認識力（オラクル）の高さは家系によるものではない。
彼女は家族の中で唯一人、高いオラクルを持って生まれた。
逆に、秋弥は父親の持っていた力を遺伝情報として受け取って生

まれた。
両者の間に違いがあるとすれば、それは才能と血縁だ。
「オラクル試験だけは入学試験で結果がわかるからね。筆記試験前の篩(ふる)い落としだよね、アレ」
「でも一般試験のレベルも十分高いですから、封術学園に入学するために勉強したことは無駄にはならなかったと思います」
入試の頃を思い出しているのだろうか。綾は少し遠い瞳をしていた。
「何にしても合格してなきゃこうして出会うことはなかったんだ。ほら、もう少しで教室だ」
特に他意はなかったのだけれど、二人の少女が微かに頬を染めたのを見た秋弥は、彼女達に気取られないように内心で溜息を吐いた。

教室の中は比較的広々としていて、ところかしこに学生達の輪が出来上がっていた。順当に考えれば最後に講堂を出た秋弥達が一番最後のはずだ。
担任教師から何らかの連絡事項があるかもしれないと思い、電子ボード（電子板とも呼ばれる。黒板は機械技術の発展に伴い、十数年前にその役目を終えた）に視線を移す。
電子板には座席毎に区切られたいくつものブロックに、それぞれの名前が振られた画像が表示されていた。
どうやら表示されているのは教室の座席表のようだ。九槻秋弥、朱鷺戸綾、牧瀬玲衣の名前はバラバラの場所にあり、座席表から席の規則性を見出すことは出来なかった。
秋弥達は座席表を確認すると、横に書かれた注意事項に従って自分の名前のブロックに軽く触れる。すると、ブロックの色が白色から水色へと変わって、出席済み扱いとなった。
他のブロックに眼を向けると、全て水色になっている。やはり秋弥達三人が最後だった。

おそらくこれで、全員が出席済みになったという情報が担任教師の携帯端末に送られたはずなので、それほど遅くないうちにホームルームが開始されるだろう。
玲衣と綾の二人は担任が来るまでの間、秋弥の席に集まって他愛の無い話を続けることにしたようだ。
たまに女子グループがそばにやって来ては互いに自己紹介をしあったり、男子からやっかみの視線を送られたりと、秋弥にとっては息を吐く暇さえなかった（もちろんこれは誇張表現である）。
ほどなくして教室のドアが開き、ビジネススーツに身を包んだ女性が入ってくる。
見覚えのあるその顔は、入学式でも紹介にあった三組の担任教師だ。
秋弥は手振りと言葉で二人に席へと戻るようにと告げる。担任教師に気付いた他の学生達も、グループから離れて各々の席に移動した。
と、秋弥の正面に座っていた男子学生が振り返ってこちらを見ていた。逆立たせた短い髪に広い肩幅。その外見から、何らかのスポーツをしていそうな印象を受けた。
「……なんだ、俺の顔に何かついているか？」
適当な軽口を言ってみる。
「眼と鼻と口がついてるぜ。あ、それと耳な。髪の毛って答えもあるか」
すると、見た目の印象とは裏腹に、意外にも軽口を軽口で返されて、秋弥は眼を見開いた。
「……面白いことを言うヤツだな。沢村堅持（さらむらけんじ）」
「おっと、オレの名前を知っているのか。眼ェ付けられるようなことをした覚えはまだ無いんだけどな」
「電子板に名前が張り出されてるだろう」
「はは、それは眼に付くか。そういうお前は新入生総代、九槻秋弥だろ」

「……良く覚えているな」
たった二度、司会進行係の読み上げと壇上での挨拶でしか名前を名乗っていないはずだ。それを今日初めて会った男子学生??堅持はしっかりと記憶していたようだ。
「……お前のことは皆が注目しているんだぜ」
と、彼は声のトーンを落として言った。
（わかっているさ。ここが普通の学校とは違うことくらい）
「お前はどうなんだ?」
あえて、どうとでも解釈が出来る曖昧な表現で問い掛けをした。
「オレか?　そうだな……、後でお前と一緒にいた女の子二人のこと、紹介してくれよ」
それは適当にはぐらかすような答えだった。
しかし、そもそも彼の口調や視線からは、最初から嫉妬や羨望の色が感じられなかった。おそらく、ちょっとした気まぐれで後ろに座る新入生総代の顔を見てやろうとか、そういう類のものだったに違いない。
「オレのことは堅持で良いぜ、これからよろしくな」
「よろしくな、堅持。俺のことも名前で呼んでくれ」
「オーケイ、秋弥」
中学の頃から同姓にはあまり良く思われることのなかった秋弥だったが、堅持とはなかなか馬が合いそうな気がした。
入学初日からこうして交友関係が広がっていくのは、悪いことじゃないなと思う。
そろそろ前向いとけよと声を掛けて、秋弥は担任教師の方へと視線を向けた。
堅持とちょっとした雑談をしているうちに、担任教師は教壇の上に立っていた。首を小さく動かして学生全員が座席に着いたことを確認している。
次に担当教師は教卓の上に掌をかざすと、小さな駆動音とともに教卓上にホログラムウィンドウが表示された。

教卓自体が端末代わりとなったのは、電子板が使われるようになってからだ。
教師は基本的に、この端末を使って授業を行う。
袋環が学生側の面からは不可視に設定されたウィンドウの表示面を指先で二、三度触れた。ホームルームで使う資料を開いているのかもしれない。しばらくして視線をホロウィンドウから外すと、もう一度教室内を見回した。
「よし、二十九名全員揃っているな。入学式でも紹介にあったが、私が君達一年三組の担任教師を務める袋環樹（たいわいつき）だ」
凛とした声。教職者として過剰にならない程度の化粧。年齢は二十代半ばくらいだろうか。目鼻立ちの整った顔の口元にはほくろが一つ。やや釣りあがった柳眉は、セミロングの黒髪とビジネススーツの色も相まってキツイ印象を与えている。
担任教師？？袋環樹は端末を操作すると、電子版に座席表とは別の画像を表示した。
「これからの二年間で君達の封術指導を務めるに当たって、初めにいくつかの注意事項を言っておかなければならない。いきなりで少々堅苦しいかもしれないだろうが、心して聴いて欲しい」
教師と呼ばれる大人は、この学園には二種類いる。
教員免許を持ち、後期中等教育相当の講義を行う一般教師と、教員免許を持たず、封術を専門に教える封術教師。
各学年各クラスを担任する教師は必ず封術教師の中から選ばれる。
封術教師は専攻によって学科が分かれる三学年までの二年間を通して、担当するクラスの封術授業を一人で教える。これは、封術教師毎に教え方が変わってしまうことを避けるための処置である。
もちろん、同じ封術教師と言えども、教師によって封術師としての能力格差は存在する。どんなタイプの封術師が担任になるのかは、学生達にとっても重要な要素の一つだった。
「？？以上だ。質問のある者は挙手をしてくれ。……特になしか。もしわからないことがあったら早めに解決しておけ。聞くことが恥

ずかしいことではないのが、若者の特権だからな」
冗談めかしたような袋環の口調に、静まり返った教室内の空気がわずかながら和らいだように思えた。
「では、明日以降のカリキュラムを君達のデバイスに転送するぞ。学園内サーバのアクセス情報はこれだ。今後も頻繁に使うことになるから、アクセスを容易にするためにウィンドウトップにショートカットを作っておくように。それと、デバイスを忘れた者はアクセス情報のメモを取って、今日のところは電子ボードを見てくれ」
空間に映像を投影するホログラフィティ技術。低コスト化により一般家庭にも普及したことで、学校の授業は黒板や紙媒体を使用するものから、電子ボードやデバイスと呼ばれる汎用型多機能携帯端末へと取って代わった。『書く』ために費やされる作業負担と時間が削減されたことで授業の密度が増したことが最も大きい変化だと言える。
秋弥は左腕のブレスレット型デバイスに意識を集中させた。手首を介して微弱な電気信号を受け取ったデバイスは机上にホログラムウィンドウを展開する。慣れればこのようにして指で触れなくてもデバイスの起動は可能となる。
一斉にウィンドウを立ち上げ始めた周囲に眼をやると、意識起動よりも接触起動の方が明らかに多かった。
秋弥のデバイスには答辞用原稿のやり取りをするために、入学前から学園サーバのアクセス情報が設定されていた。
他の学生がアクセス申請を行っている間、秋弥は一足先に袋環から送られてきたカリキュラムの資料を開いて眼を通すことにした。
「よし、全員アクセス出来たな。大体毎年一人か二人、デバイスを忘れる者がいるんだが、私のクラスに忘れ物をした者がいなくてホッとしているぞ。さて、それでは手元のカリキュラム表を見てほしい。今日のタイムスケジュールは、このホームルームが終われば解散だ」
袋環がウィンドウ上のカリキュラム表に輝線を描くと、各学生の

ウィンドウにも同様の輝線が描かれた。彼女と学生のデバイス間でリアルタイムに同期処理が行われているようだ。
「タイムスケジュールは一週間単位で自動的に更新される。授業の進度によっては多少の変動が有り得るため暫定的なものとなってしまうが、半年単位のカリキュラムも見ることが出来る。予習をする学生もいるだろうから、その辺は上手に活用してくれ」
教室全体を見渡して、ひとつ頷く。
「明日はオリエンテーションと装具選定を予定している。詳しい内容については明日のショートホームルームで伝えるが、君達の緊張を解す意味でもこれだけは伝えておく。三組の装具選定は一学年の一番最後だ」
装具選定という言葉に再び緊張の色を帯び始めた学生達の表情を見て取った袋環は、諭すような口調で続けた。
「装具選定で君達が手に入れる《装具》は在学中、そして、国家封術師の資格を得て卒業した後も君達の力となり、ともに歩み続けることになる大切なものだ。とはいえ、体調や精神の良し悪しで今更何かが変わるようなものでもないことは君達にもわかっているはずだ。特に気負う必要も気張る必要も無い。だから、今日はゆっくり休むと良い」
最後にそう締めくくって、初日のホームルームは解散となった。

第2話「月姫の憂鬱」

★☆★☆★

放課後、クラスメイトと親睦を深めるという理由の玲衣達（綾は彼女に付き合っていただけだが）とは教室で別れた。

学園に残っていても特にすることはない。入学式は始業式に先んじて行われるので、上級生達も今日は学校には来ていない。上級生の中に会いたい人がいるわけでもない秋弥にとってはどうでもいいことだった。ただ、学園内の喫茶店や図書館といった施設も今日は開いていないので寄り道する場所もなく、秋弥は学園を出ると真っ直ぐ家へと帰った。

バイオメトリクス認証を済ませて、玄関を開ける。ただいま、と言おうとしたところで玄関口に見慣れた藁草履があることに気づいた。

二十一世紀も折り返した時代に藁草履でこの家を尋ねて来るような客に心当たりがあるとすれば、一人しか思い至らなかった。

靴を脱いで玄関を上がる。

自室で学園の制服から部屋着に着替える前にダイニングへと向かった。

ドアに手を掛けて開くと同時に、秋弥は「ただいま」と言い直す。

「おかえりなさい、秋弥」

「おかえり、秋弥君」

すると、二つの声が同時に返ってきた。

一方は鈴の音のような月姫の声。

もう一方は張りのある男性の声。年を経て目尻に皺の寄った顔を

秋弥の方に向けた壮年の男だ。
「ただいま。それと、こんにちは、浅間さん」
狩衣に白袴という常装に身を包んだ壮年の男??浅間総一郎に視線を向ける。
「こんにちは。あぁそうか、今日は入学式だから終わるのが早かったんだね」
総一郎は見た目通りの神職者で、神来町の郊外に位置する浅間神社の神主を務めている。
神職者や聖職者は世界多重層構造理論が提唱される以前から異層認識力を用いた祭儀や神託によって異層に住まうこの世ならざるもの??隣神と戦い続けており、現代においては神職者と封術師はほぼ同義とされていた。
総一郎もまた、浅間神社の神主であると同時に封術師??特に調律師と呼ばれる者の一人である。
「ちょうど月姫さんから君の話を聞いていたところだったんだよ。鷹津封術学園の新入生総代なんて凄いじゃないか！　まあだけど、それも当たり前といえば当たり前なのかな」
二人の顔を交互に見比べて、総一郎は納得したように大きく頷いた。
「喉が渇いたでしょう？　何か飲み物を取ってきますね」
秋弥が椅子に腰を下ろすと、入れ替わるように月姫が席を立った。
「浅間さんも何かお持ちしましょうか？」
「いや、私は構わないよ。それほど長居するつもりもないからね」
月姫の申し出を総一郎がやんわりと手で制する。ニコリと微笑んでからキッチンへと向かった姉から総一郎へと視線を戻すと、彼は両手の指をテーブルの上で組み直した。
「……だけど、ようやくこれで秋弥君も本格的に封術師を目指すことになるんだね。どうだい、もう友達は出来たかい？」
「どうですかね。初日なんでまだ何とも。だけど、知り合いと同じクラスになりましたし、話が合いそうなヤツもいましたよ」

それを聞いた総一郎は微笑みを浮かべた。
父親がいたらこんな感じなのかもしれないなと思い、秋弥は直ぐに内心でかぶりを振った。
無いものねだりにすら値しない、余計な感傷だ。
「うんうん、やっぱり若者の本分は人間関係と自己の感情を育むことにあると私は思うよ。良い友人や良い好敵手に恵まれた環境で過ごす学生時代というものは、かけがえのないものだからね」
昔を懐かしむように遠い眼をした総一郎は、途端にハッとなって我に返った。
「いやはや……少し説教臭くなってしまったかな。年を取ると昔を懐かしくなってしまっていけないな。私もおじさんなんで、その辺りは大目に見てくれるかい？」
「いえ、参考になりますよ」
「はは、ありがとう。うちの娘も秋弥君みたいに素直になってほしいんだけどね……。って今度は愚痴になってしまったかな」
神職者の言葉が説教臭い物言いに聞こえてしまうのは、職業病なのかもしれない。
「そうそう。うちの娘と言えば……、昨日から中学三年生になったんだけどね。来年から封術学園に通うために今から受験勉強を始めているよ。私の家系的に適正試験は問題無いと思うのだけれど、一般教養試験の方がどうにも苦手なようなんだ。そこで秋弥君。ものは相談なのだけれど、時間の空いているときで構わないから、娘の勉強を見てやってはくれないだろうか？」
「私で良ければ構いませんよ、浅間さん」
と、コーヒーを淹れて戻ってきた月姫が話に割って入った。
総一郎は月姫がいつ戻ってきたのかわからなかったようで、軽く眼を見張った後に少し困った様な表情をした
「えぇと、私は秋弥君にだね？？」
「秋弥よりも私の方が時間的に余裕があります。それに、この家にお越しいただければいつでもお勉強を見て差し上げられますわ」

総一郎の言葉を遮ると、月姫は理詰めで一気にまくし立てた。表情は相変わらず穏やかだが、紡がれる言葉の端々から総一郎に対する棘のようなものが感じられた気がした。
「そ、そうだね……。それじゃあ今度、時間のあるときに娘をお邪魔させてもらっても良いかな？」
総一郎もまた、秋弥と同じものを感じ取ったのだろう。
二回りほども年の離れた少女に気圧されたように、彼は首を縦に振った。
「えぇもちろん。歓迎いたしますわ」
「う、うん。娘も喜ぶと思うよ。……ふぅ」
「……それはそうと、今日は何の用があって来られたんですか。まさか俺の入学を祝うため、とは言わないでしょうね？」
「おぉっと、そうだった」
この話題をこれ以上続けると月姫の機嫌が悪くなるように思えたので、秋弥は強引な話題転換を試みた。大仰に眼を見開いた総一郎も彼の話題転換に我が意を得たりとばかりに乗ってくる。
知らず知らずのうちに額に浮かんでいた冷や汗をハンカチで拭ってから、総一郎は言葉を繋げた。
「今日来たのは他でもない。先週秋弥君に手伝ってもらった封術の仕事が落ち着いたから、それの事後報告をしようと思ってね。あぁっと……もちろん君の入学祝いも兼ねて、という意味だよ」
「そうでしたか。わざわざありがとうございます」
「こちらこそ、いつも助かっているよ。うちの家系にも一人くらいは秋弥君のように封魔術に優れた者がいてくれれば良いんだけどね」
総一郎が小さく溜息を吐いて、肩を落とした。後半の台詞は彼の独り言だとわかっているので、秋弥は曖昧な笑みを返す。
「浅間さんほどの干渉力があれば、俺なんかの力を借りなくても一人で何とか出来たと思いますよ」
「いいや、そんなことはないよ。全くない。私が安心して調律術を行えるのは、君が護ってくれると信じているからさ」

封術師が用いる事象を改変する技術??封術は、大きく二種類に分けられる。
《封魔術(ふうまじゅつ)》と《調律術(ちょうりつじゅつ)》。
封魔術とは、世界の理を変える力や技術を指す。たとえばそれは、メディオンを操作して大気中から炎や水を作り出す技術や、《この世ならざるもの》に対抗し得る干渉力がこれに含まれる。
調律術とは、世界の理を正す力や技術を指す。世界多重層構造理論により証明された異層世界が現層世界に干渉している状態を元に戻すための力や、同位相体への憑依浄化技術がこれに該当する。
調律術は非常に強力な術式なのだが、反面、術式発動中の術者は外敵に対して完全な無防備状態となってしまう。この欠点を補うため、調律を専門に行う封術師??調律師と、外敵の排除を専門とする封術師??封魔師はツーマンセルを組むのが一般的とされている。
「あそこは振域(しんいき)レベル三まで達していた領域だからね。調律に掛かる時間と、それに比例して高まる危険性を考えたら、秋弥君以上の適任者はいなかったよ」
浅間の家系は代々、祝詞や祈祷によって人や土地の浄化を行うことを得意としていた。これは現代の封術に当てはめると調律術に該当する。
先週の中頃、秋弥は春休みということもあって総一郎が行う調律の護衛役として、彼の仕事に同行したことがあった。
政府に認められた公式の封術師である総一郎と違い、秋弥のように国家封術師資格を持たない者は、政府によって決められた場??たとえば封術学園内??以外での、封術の私的利用を禁じられている。しかし、一人以上の国家封術師(この場合では浅間総一郎)が監督者としてそばに付いていれば、特例として封術の行使が認められている。
「……振域レベル三の割に、隣神はそれほど強くありませんでしたよ」
「そう思えるということは、それだけ君の力が強いということだろ

うね」
「過大評価ですよ。今日から正式な封術師見習いになった学生に掛ける言葉じゃないですね」　秋弥は軽く肩を竦めた。
その仕草が面白かったのか、総一郎が可笑しそうに笑った。
「はは、これでも過小評価だと私は思っているがね。本当に君達姉弟の力は底が知れないよ」
ともかく、と総一郎は言葉を続けながら席を立った。
「お礼を言わせて欲しい。ありがとう秋弥君。今回も君のおかげで万事うまくいったよ」
背筋を伸ばし、頭を下げて腰を折る。それは拝揖と呼ばれる礼法だった。
「……それと、ひと仕事終わったばかりで言い辛いことなんだけれど、もうひとつ別件を頼まれてくれないかい？」
と、頭を上げた総一郎は席に座り直さずに言った。
「……仕事の内容にもよりますが、何でしょう？」
「調律の護衛だよ。と言っても仕事の内容はまだ正式には決まってないんだけどね」
「と言いますと？」
「昔から親交のあった調律師から優秀な封魔師を一人、紹介して欲しいと頼まれてね。私はその仲介役というわけだよ」
「……それで、俺ですか？」
「君以上の適任を私は知らないからね」
総一郎はつい先ほどと似たようなことを言った。
「……わかりました。その仕事を請けますよ」
わずかに逡巡してから、秋弥は頷く。
「そう言ってくれると思っていたよ。仕事の内容は時期が来たら連絡するから、よろしく頼むね」
総一郎は安堵したような笑みを浮かべると、伝えるべき事を伝え終えたからか、それじゃあ私はそろそろ帰らせてもらうよ、と言って背を向け、ダイニングを出て行った。

二人も席を立って、彼を見送るために玄関口へと向かった。

総一郎が帰った後、秋弥は自室で部屋着に着替えてからダイニングへと戻ってきた。

ダイニングに面したリビングのソファに腰を下ろして、大きく息を吐く。

身体的に疲れるようなことがあったわけではない。入学式での答辞はそつなくこなせたと思うし、知り合いで幼馴染でもある玲衣と偶然にも同じクラスになれた。綾、堅持という新しい同級生とも知り合えた。

だからこれは、単なる気疲れだろう。

「……」

頭を上向け、視線を中空に彷徨わせる。焦点を暈した瞳が天井に取り付けられた電灯の輪郭を崩した。光源は二つになって、一つになって、三つになる。意識が朦朧になり、ぼぅっとした思考がぐるぐると渦を巻く。だんだんと彼の脳は原質の根源へと近づき、収束して、拡散、断片化された数多の情報体が星の記録へと??。

「秋弥?」

??至ろうとしたところで、月姫の声が彼を現実へと引き戻した。

視線をわずかに上向けると、逆さまになった月姫の顔が映った。

目鼻立ちの整った顔は左右に均整が取れ、きめ細かく透き通るような肌には化粧っ気がまったく感じられない。朝露を浴びたバラのように瑞々しい唇や、黒真珠を思わせる大きな瞳と柳眉。身内贔屓を差し引いたとしても、月姫は百人いれば百人が振り返るほどの美人であると秋弥は断言出来る。

その、常に微笑を称えた表情に、不意に影が差した。

微睡みに沈んでいた秋弥の思考が急激に覚醒する。

月姫はソファの正面に回りこんで、彼の隣に静かに腰掛けた。

だらしなくもたげていた頭を起こし、上体を捻るようにして月姫

の方に向き直る。
何か思いつめたような表情で時折口を開こうとはするものの、月姫は一向に言葉を紡ごうとはしなかった。
「……どうしたの？」
その様子に耐えかねたのではなく、姉に話すきっかけを与えようとして、秋弥は問い掛けをする。
それでも月姫は逡巡する素振りを見せてから、ようやくのこと、秋弥と目を合わせた。
「あの……先ほどのお話なのですが」
と、躊躇いがちに切り出した。
「うん？」
「今回のお仕事を、その……断っていただけませんか？」
思い掛けない月姫の言葉に、秋弥は目を丸くした。
「急に、どうしたの？」
先ほどと同じ台詞だが、今度は純粋な問い掛けだった。
「……うまく言えないのですが。何だかとても、悪い予感がするのです」
「……っ！？　姉さん、もしかして力が！？」
秋弥は思わずハッとして、無意識的に声を荒げてしまった。
しかし、月姫は悲しそうな表情で首を左右に振った。
「まだ良くわかりません……。私の思い過ごしかもしれませんし、考えすぎなのかもしれません。ですが、もしも……もしも秋弥の身に何かあったらと思うと……」
それ以上は言葉にならなかった。
鼻腔をくすぐるような甘い香りがして、ふと気が付くと、月姫の白く柔らかな両腕が秋弥の首の後ろで浅く交差され、彼は包み込むように優しく、抱きしめられていた。
「ごめんなさい……。私がこんな身体にならなければ、秋弥を護ってあげられるのに？？」
耳元で囁かれた、酷く弱々しい声。

月姫の表情を窺い知ることは出来ない。
だけど、その神秘的なまでの美貌に涙の滴を浮かべているであろうことは手に取るようにわかった。
自然、秋弥は月姫の背中に腕を回してそっと抱きしめ返す。
密着した身体を通じて、お互いの鼓動が伝わり合う。
「……」
「……」
どのくらいの間、そうしていただろうか。
一瞬を引き伸ばした永遠か。
永遠のような刹那か。
どちらともなく、身体を離す。
瞳はお互いを見詰めたままで??。
「いつの間にか、泣き虫になってしまいました」
落ち着いた様子の月姫は、泣き腫らした瞳のままで綺麗に笑った。
「良いんだよ。姉さんのことは俺が護るから」
秋弥は、他人には決して見せることのない優しげな顔で微笑んだ。

第3話「オリエンテーション（前編）」

★☆★☆★

鷹津封術学園の各学年各クラスはひとクラス三十人で編成されている。

一学年で五クラス。五年制の高等専門学校なので学生の総数は最大で七百五十人。

これは一般的な普通科高校や専門学校と対比してみても決して多い数字ではなく、そこにはある明瞭な理由が存在していた。

明瞭な理由??それは封術師を目指す学生達が持つ高いオラクルの多くが生まれ持った才能に起因しているためだ。

異層を認識できる人間は全人口の一パーセント以下。異層に干渉まで出来る人間はそのうちのさらに一パーセント以下と言われている。

異層世界を認識して干渉することが出来る限られた一握りの者だけが異層世界に対抗するための力を??事象を操る力を手にすることが出来るのだ。

封術学園の入学試験にはオラクルを見極めるための適正試験と一般教養試験、さらに封術を学ぶための最低限基本的な知識が問われる専門教養試験がある。

そのうち、前期中等教育にあたる一般教養の試験レベルは有名進学校にも引けを取らないほど高い。封術に特化した部分を差し引いても、封術学園四校はは現代日本における受験最難関校の上位に名を連ねているのだった。

そんな封術学園に入学した学生達が一番最初に行うこと。

それは、これからの五年間を過ごすことになる学舎のオリエンテーションと、情報体（事象）にアクセスして事象の改変を行うための特殊機構??装具を手に入れる装具選定の二つの行事である。
「本日のオリエンテーションの概要を説明するぞ。まず、我々のクラスは寮や部室のある別棟から回ることになる」
立体オブジェクトを用いた鷹津封術学園の地図アプリケーションを学生達のデバイスに転送した袋環は地図を俯瞰視点に切り替えて学園全体を投影させると、ある一点を輝点で指し示した。
「基本的に私は君達を連れ回しながら、逐一設備の説明をするようなことをするつもりはない。そんな幼稚なことを君達に対して行うのは失礼だと考えているからだ。そして、顔を合わせたばかりで何を言い出すんだと思うかもしれないが、ある程度の信頼もしている」
袋環は教卓に両手を突いて口の端を吊り上げた。
「まずは私が君達を信頼することから始めなければ、互いに良好な関係を築いていくことは出来ないからな。だから私は、君達が私の眼の離れたところで羽目を外して好き勝手なことをするとは思っていないし、考えてもいない」
不敵な笑みを浮かべ、白々しいにもほどがある言葉を袋環は堂々と並べ立てた。
ここまではっきりと言われてしまえば、言葉の真偽を見極める以前に下手な行動に出ることは出来なくなる。
実に有効な手段だ。
だが、友好的な手段ではない。
そんな風に秋弥が捻くれたことを考えているうちも、オリエンテーションの説明は続いた。
「割り当てられた時間内は、該当する棟の中を自由に見て回ってくれて構わない。各施設の資料は追って転送するのでそちらを参照してほしい。また、私も引率者として同じ棟内にはいるから、資料では解決出来ない疑問には答えよう」
昨日の袋環の言葉を借りるならば、資料に書かれていることでも

尋ねたら答えてくれるのだろうが、極力そうならないように注意しようと秋弥は思った。
袋環が手元のウィンドウを操作すると、輝点のある別棟オブジェクトから離れた棟??秋弥達の教室がある本棟に紫色のマーカーが一つ浮かび上がった。
「この紫のマーカーは私のいる地点を表している。オリエンテーション中は常に可視化させておくので活用してほしい。それと、これは言われるまでもないことだと思うが、時間厳守だ。守らなければ他のクラスに迷惑を掛けることになるからな。タイムスケジュールで棟の移動時間を各自確認しておくように」
それから、立体オブジェクト地図の使い方やオブジェクト上に他人のマーカーを表示させる方法などの簡単な説明を終えて、朝のＳＨＲは終了となった。

教室を出て行く袋環を見送ったクラスメイト達は、早速行動を開始して少人数のグループを作り始めた。
その間を掻き分けるようにして、玲衣が秋弥の席までやってきた。
「あたしはいつでも、シュウ君の事を見ているんだよ!」
と、開口一番にそう告げる。
「というわけで、シュウ君の識別番号教えて」
いきなり何を言い出すのかと思ったが、後に続く言葉を聞いて、なるほどと納得した。
識別番号というのは、各自の学園地図アプリに割り当てられたユニーク番号のことだ。袋環の説明によると自分の地図上に友人のマーカーを表示するためには、この識別番号を互いに登録しあう必要があるとのことだった。
ところで、各自の地図上に袋環のマーカーが表示されているということは、彼女の地図にはクラス全員のマーカーが常に表示されているということだ。それはつまり、サボっていたり別の場所にいた

りするようなことがあれば、簡単に彼女にバレてしまうというわけだ。
まったく何が『信頼』だよ、と秋弥は内心で思った。
しかしこのことに気づいているクラスメイトが、この中に一体何人くらいいるのだろうか。
「ありがとねっ！　はい、これがあたしの番号だよ」
デバイス同士の短距離無線通信によって識別番号を交換し合う。
マーカーの情報はオリエンテーション中にのみ適用される機能（地図アプリは今後も使用可能）なので、教えたところで何か困るということもない。
識別番号の登録が完了したことで、地図上に赤のマーカーと玲衣の名前が表示された。
「あの……私のも良いですか？」
玲衣の声に比べれば些かか細く、弱気な声。
いつの間に現れたのか、綾が玲衣の隣に立っていた。秋弥は言葉を返す代わりに識別番号を綾のデバイスに送信した。頭を下げて「ありがとうございます」を言いながら、綾も識別番号を送り返す。
ちらりと窺った綾のデバイスは秋弥や玲衣が使用しているブレスレット型ではなく、軽量性や携帯性を高めたカード型だった。
「シュウ君は誰かと回る予定とかってある？」
「いいや、特にないよ」
「それじゃああたし達と一緒に回ろうよ」
「俺は別に構わないけど？？」
途中で言葉を切って玲衣の背後へと視線を向ける。
そこでは女子グループだけでなく、男子グループまでもが玲衣を誘おうとしてこちらの様子を窺っていた。
持ち前の明るく活発な性格に加えて、幼馴染だとはいえ異性である秋弥や人付き合いが苦手そうな引っ込み思案な綾とも仲良くしていることからもわかるとおり、玲衣は誰とでも分け隔てなく接している。

それが高じて中学の頃は男女問わず人気者だったが、どうやら昨日一日だけで早くもクラスメイト達の心を掴んだようだ??なお、今朝も玲衣を中心にして人の輪が出来ていたことに気づかない方が無理な話だった。

皆の思いを知ってか知らずか。玲衣は人差し指を頤(おとがい)に宛がって「んーっ」と唸り、思案気に首を傾げた。

「……そしたらシュウ君がひとりぼっちになっちゃうかなぁって思ったから、とか?」

「れ、玲衣ちゃん」

わざとらしい玲衣の仕草と声とは対照的に、彼女の言葉に困惑した表情の綾を見やり、秋弥は苦笑を浮かべた。

「残念ながらオレはひとりぼっちじゃないんだ。こいつと一緒に回る予定なんだ」

??と言ったのは秋弥ではなく、彼の前の座席で椅子の背を足で跨ぐようにしてこちらを見ていた堅持だった。

「……残念ながら俺はひとりぼっちだったんだ」

「なっ、どうして言い直すんだよ! おいおい、眼を逸らすなって。マジで傷つくだろ!?」「傷は浅いうちの方が、痛みが小さくて済むだろう?」

「出来立てホヤホヤの友人関係に早速ヒビが入っちまったよ!」

「……シュウ君。この、ちょっと煩い人はどちらさんかな?」

お前が言うか、と言いかけて、秋弥はそれを理性で押さえ込んだ。確かに、急に大声で騒ぎだした友人(仮)は朝から妙にハイテンションだった。

「一体誰のせいだよ……。あっ、オレは沢村堅持。親しみを込めて、ケンちゃんと呼んでくれていいぜ」

「ふ〜ん」

「……興味無しですか」

ユーモアのある(と自分では思っていた)自己紹介を軽く流され、肩を落として脱力する沢村を尻目に、玲衣と綾の二人もそれぞれに

自己紹介をした。
「それじゃあ今回は特別に、堅持が一緒に行動することを認めてあげましょう。綾もそれで良いよね？」
おどけた調子の玲衣に同意を求められて、綾は頷いた。
「私は全然構いませんよ。よろしくお願いします」
「……有り難き幸せにございます」
「そうしないと堅持がひとりぼっちになっちゃうもんね」
「……誠に、身に余るほどの有り難き幸せにございます！」
堅持をすっかり手玉に取った様子の玲衣が楽しそうな笑みを浮かべた。
傍目から見ている限りでは、なかなか気が合いそうな二人だった。
「それじゃあ俺達もそろそろ移動しようか」
教室に残っているのはいつの間にか秋弥達だけになっていた。
秋弥が音頭を取ることで、ようやくのこと教室を出て別棟へと向かったのだった。

★☆★☆★

本棟の西側にある別棟は学園の全体図を俯瞰視点で見ると『ロ』の形に似ていた。
鷹津封術学園は全国にわずか四校しかない封術専門の学校として、受験生が全国からやってくる。別棟の一部は親元を離れて入学した学生のための寮として機能しているのである。
「寮は男子寮と女子寮にわかれていて、男子寮はちょうどL字型をしているんだ。残りは部活動用の部室と女子寮だな。ちなみに部室のある棟と各寮は繋がっているけど、寮同士は繋がっていないんだ」
堅持の説明を受けて拡大した別棟の立体オブジェクトを良く見てみると、確かに辺の一箇所だけが繋がっていなかった。

「地方から入寮する男子学生は女子学生よりも多いからな。それに合わせて寮の規模も倍近く大きい。寮室は二人一部屋で六畳くらいの大きさで、たぶん女子寮も同じ構造なんじゃないかと思うんだけど。どうなの、朱鷺戸さん」
別棟への道すがら堅持から入学前の話を聞いてみると、彼が地方出身の男子寮生であるということがわかった。そして綾は女子寮の寮生。
そこで玲衣の提案によって解説役にして別棟を見て回ることにしたのだが??。
「はい。たぶん同じだと思いますよ」
性格故にあまり積極的に話すタイプではない綾は、堅持が行う解説の補佐という役回りに就いている。
「まぁ今日はオリエンテーションってことで各寮共一般開放されてるけど、普段は寮生じゃないと寮に入れないんだぜ」
つまり、寮生でなくても寮の内部を見れる機会は特別な場合を除いて今日のオリエンテーションしかないということだ。
とはいえ、秋弥はあまり興味がなかった。部活に入るつもりも寮に入る予定もない秋弥にとって、別棟は学園生活でほとんど関わりのない場所だと思っていたからだ。
「とりあえず男子寮から見ていこうぜ」
同じ学園内にあるとはいえ、封術学園は一方が六百メートルほどの開けた土地に建てられている。
本棟から他の棟へ向かうためには、一度外に出てから少し歩かなければならなかった。
別棟は寮棟あるいは部室棟を総称した呼び名だ。外観こそ本棟に似ているが、各部屋の窓には寮生達の生活の片鱗が垣間見える様々な模様のカーテンが掛けられていた。
部室棟と呼ばれる一辺だけが唯一各寮へと繋がっているため、寮に入るためには一度部室棟へ入らなければならなかった。
部室棟と男子寮を隔てるガラス扉には生体認証端末とカードリー

ダ端末が備え付けられていた。鍵は封術学園に通う学生達が常に携帯する学生証に設定された入寮権と網膜認証、指紋認証の複合鍵であると堅持が説明した。
今日は一時的にセキュリティ機能がオフに設定されているガラス扉を抜けた際、秋弥は光走査式の感知システムの存在に気づいた。ガラス扉の両縁に施されたその装置が、共連れの入寮を防いでいるようだ。
一介の学生が入る寮にしては厳重すぎる管理手段だと思うかもしれないが、それも仕方のないことだと言える。
世界的に見ても異層に干渉できるオラクルを持つ人間は希少なのである。
その希少な人材が一箇所に集まっているのだから、過剰なセキュリティもやりすぎだとは誰も思わない。
男子寮の玄関傍には、寮長室があった。寮長は寮生の中から選ばれる。現在は授業時間中であるため、電子表札には『寮長不在』と表示されていた。
我が家のように男子寮に入った堅持に続いて、秋弥と玲衣も男子寮に入った。
しかし、綾だけは玄関口でキョロキョロと何かを探しているような仕草をした。
「寮室以外は土足でオーケイだぜ。……もしかして女子寮の方は違うのか？」
と、その様子に目敏く気づいた堅持が言った。
寮生ではない秋弥と玲衣は何とも思わなかったが、どうやら綾は女子寮との微妙な違いに困惑していたようだ。
「女子寮は土足厳禁なので、ここで皆さんスリッパに履き替えるんです。何でも、一昨年の寮長が潔癖症な方だったらしくって。その際に決められたルールなのだそうですが、その方が卒業した今でも定着していますね」
それを聞いて、堅持はかすかに苦い顔をした。

昨今では近隣住宅への砂埃被害などが特に問題視されており、広い土地を持つ封術学園ではそれらの対策の一環として、屋外の施設には低反発性の特殊なラバーソールを採用している。学園の外に出かける場合にはその限りではないが、寮室では靴を脱いでいるのだから、そこまで汚れを気にするほどのものだろうか。

「そんなに汚れるもんか？」

「まあいいじゃない。そっちの方が清潔感があって」

「おい、まるで男子寮が清潔じゃないみたいな言い方だな」

「被害妄想じゃないの？」

玲衣が意地悪な笑みを浮かべる。

「寮長は寮の見回りもしていますので、たぶんちょっとした汚れも気になってしまったのかもしれませんね」

「へぇ……男子寮の見回りは当番制だけどな。だけど寮長って大変そうな仕事だよな。朝早く起きたりとか寮生の管理とか、連絡の周知とかしなきゃいけないんだぜ」

「寮長はどうやって選ばれるんだ？」

「さぁ、まだ良くわかんねぇな。入寮して一週間も経ってないんだぜ」

確かに愚問だった。

寮長用の寮室を除いて、寮生の部屋はすべて一階より上の階に用意されている？？これもセキュリティ上の観点から考えてのことだ。

一階には寮長室と、共同スペースとして使われる食堂、大浴場があり、四人はまず、入口からほど近い食堂を見ることにした。

「朝は六時から七時半までの一時間半。夜は特別な事情がない限り、十六時半から二十一時の二時間半の間ならいつでも飯を食べる事が出来る。食堂自体は二十四時間開放されてるから、雑談用のフリースペースとして使われたりするかな」

「本棟の食堂とは違うの？」

「あっちの食堂はまだ使ってないからわからないけど、設備は一緒だと思う。まぁ学園も広いからな。飯食うためにいちいち移動する

のも非効率ってことだろ」
　大人数を収容可能な寮の食堂は全体的に白を基調とした配色で、長テーブルが規則正しく並べられていた。人の姿がほとんど見られないのは少し寂しく思えるが、それはこの時間帯には秋弥達のクラスの人間しか別棟にいないからであるため仕方の無いことだった。
「結構広いんだね」
　既に寮生として食堂を利用している二人はそうでもなかったが、玲衣は興味深そうに辺りを見渡していた。
「……ところで、あれは何？」
　そして、何かに気づいた様子で玲衣が食堂の一点を指で指し示した。
　視線を玲衣の指が示す先へと向ける。と同時に秋弥もまた首を傾げた。
　食堂の一画に、場の雰囲気にそぐわないレンガ敷きのスペースがあった。
　寮生の二人も入寮当時は同じような思いをしたのだろう。綾が口元に優しげな笑みを浮かべた。
「女子寮のものとは違いますけど、おそらく寮生が造ったものだと思います」
「食堂はフリースペースにも利用されているってさっき言ったろ。ここには寮生が持ち込んだものを共同備品として置いてもいいことになってるんだ」
「備品っていうか、あれは明らかに改築じゃないの」
　レンガ敷きの床に半球型の天井。そこから吊り下げられたシャンデリアには装飾用のロウソクが立てられ、消えることのない火を灯し続けている。さらに壁面にはレンガ造りの暖炉があった。おそらくは雰囲気作りの飾りだろうが、こちらもロウソクの火と同じように、炉にくべられた薪に恒久的な偽物の炎が灯っていた。
　その中で備品と呼べるものは毛先の長いカーペットや座り心地の良さそうなソファと木目調の丸テーブルくらいだろう。

「オレが先輩から聞いた話だと、何か洋風の談話室っぽい雰囲気を造りたいとかって考えた寮生が昔にいたらしいぜ。それで造られたのがアレだ。夜になると結構雰囲気出るんだぜ」
「むしろ何か出そうだねっ」
「棟は調律結界が張られてるから、隣神は出ないぜ」
「言ってみただけよ！」
封術学園ならではの冗談だった。
「それはそうと、どうやってここでご飯を食べるの？」
談話スペースを視界から外して、食堂へと視線を向ける。玲衣の言うとおり、食事用のテーブルはあるが、料理を受け取るためのカウンターが何処にも見当たらなかった。
「受け渡し用のカウンターは時間になると出てくるんだよ。ちょっとわかり辛いかもしれないけど、そこの壁に切れ間があるだろ」
言いながら、壁の近くに寄った堅持が手の甲で壁を二回叩いた。すると、内部が空洞になっていることがわかる軽い音が鳴った。
「食堂のメニューは寮生専用のアプリから見れるんだ。」
ほら、と堅持がハンディタイプの無骨なデバイスからアプリを起動させた。可視化されたウィンドウの上部には男子寮食堂メニューと書かれている。トップ画面には今日の日替わりメニュといくつかの定食が画像付きで掲載され、左側のナビゲーションには単品メニューへのリンクが項目別に用意されていた。
「あらかじめ食べたい料理と時間を指定しておくと、ここで受け取ることが出来るんだ。ちなみに、カウンターが閉まっても食器を返すことは出来る」
まるで経験があるような物言いだったが、触れない方が良いのだろう。
「カウンターが開閉する仕組みになってるのは食堂をフリースペースとして広く使えるようにするためだと思う。寮室は基本的に相部屋だから、生活リズムの違うかもしれない相手に迷惑を掛けないようにって、ここを利用する寮生は結構多いんだぜ」

「女子寮の方でも造りは大体同じですね」
表示した資料によると、現時点で寮生活を行っている学生の総数は三百四十一人??その内訳では男子が約二百六十三人となっていた。これは全学生の約半分にあたる。一人一部屋では部屋数が足りなくなるのも頷けた。
「食堂はこんなもんで良いだろ。次は大浴場の方を見に行こうぜ」
「男子のお風呂場なんて、あんまり興味無いんだけど」
「きっと女子寮と構造は同じだって」
「じゃあ女子寮を見るときに行けばいいじゃない」
「……ジョシリョウのヨクジョウ」
「ごめん、やっぱ今のなしね」
「なんで！？」
「ていうかあたしとシュウ君はどうせ使えないんだから、この辺はあまり見る必要は無かったかもね」
もっともな意見だったので、秋弥も首を縦に振って同意した。寮の施設については当人だけが知っていれば良いと思う。
しかし有事の際には寮を仮住居として利用することもある、と資料には書かれている。
万が一を考慮するならば、一応施設の確認はしておいた方が良いかもしれないという思いもあって、秋弥は何も言わずにいたのだった。
それでも玲衣の多感で繊細（？）な乙女心は、男子の浴場に近づきたくない、女子の浴場に男子を近づけたくないという気持ちを働かせたようで、このままでは平行線になると思った秋弥は、折衷案として寮生の二人に立体オブジェクトを用いた説明をお願いすることにした。
三人はその提案に頷くと、近くの長テーブルに腰掛けて別棟のオブジェクトを表示させた。
「大浴場は朝五時から深夜一時までの間なら自由に利用出来ます。学年による利用時間帯の区別はありません。とはいえ食堂ほど広く

はないので、ある程度時間を見計らって行かないと、満員になっている場合がありますね」
「洗濯物はどうしてるの？」
「浴場の隣に洗濯室ってのがあるんだ。こっちは二十四時間使えるけど、数に限りがあるから寮室毎に利用出来る日が決まってる。オレのとこは毎週水曜と土曜だな」
科学技術の発展によって、洗濯から乾燥までの工程はほとんどが自動化されており、その作業に掛かる時間も日進月歩の勢いで短縮され続けている。洗濯室の設備は入寮者の増加に伴って去年入れ替えたばかりだということだった。
「ん？　洗濯にそんなに時間掛からないだろ？」
自宅で家事全般を行っている秋弥は、経験則からの疑問を声を出した。
「女子寮はいつでも利用出来ますよ」
「男子は女子よりも人数が多いからな。混雑を避けるためのローカルルールだ。……っておい、牧瀬。何だその眼は。何なんだその眼は！　そんな眼でオレを見るなよ！」
急に玲衣からジト眼を向けられて、堅持は狼狽した。
「べっつにー。男の子は数日分をまとめて洗えて楽で良いね、なんて思っても口には出さないよ」
「アレアレ、おかしいな。何故か思いっきり聞こえたような気がしたんだけど。もしかしておかしいのはオレの方なのか？」
「元気の良いやつらだな、まったく」
秋弥が独り言のように呟くと、隣で綾がクスクスと笑った。

第3話「オリエンテーション（前編）」（後書き）

誤字が多かったため若干修正しました。

第4話「オリエンテーション（後編）」

★☆★☆★

結局女子寮には立ち寄らずに部室棟を軽く見て回った（部室は当然のことながら閉まっていて、表札からどんな部活があるのかを確認しただけだった）ところで、次の目的地である特別訓練棟へ移動する時間となった。

特別訓練棟は本棟の北東側にある地下を含めて全四階から成る建物だ。そこには対隣神を想定した戦闘訓練や擬似エリシオン光波長を利用した領域の調律訓練を行うためのあらゆる設備が整っている。

「三年生になるまでは、封魔術と調律術の両方を勉強するんだよね」

「ああ。封魔や調律は個々の血筋や得手不得手である程度分かれるものだけど、基礎技術はどちらも習得しておく必要があるってことだ」

「シュウ君はやっぱり封魔を専攻する予定なのかな？」

「そのつもりだよ。堅持は……聞かなくてもわかるか」

「……お前まで。いやまぁ、たしかにその通りだけどよ」

ぶっきらぼうな口調で肩を竦めた堅持を横目に、視線だけで綾にも問うと？？。

「私は調律です」

コクリと頷いた。

過去、封術学園を卒業した封術師の統計を見ると、前線に立って隣神と戦う封魔師は男性が多く、逆に空間や領域に干渉して世界を正す調律師には女性が多かった。この理由には諸説あるのだが、有力なものとしては男性の脳が一面的な空間認識能力を備えているの

に対して、女性の脳はそれを多面的に備えているという説。一面的とはこの場合、多重層世界に対しての現層世界に当てはまるということだ。つまり、言語操作に長ける女性の脳はマルチに物事を捉えやすいということだ。

「でも堅持と違って、シュウ君は調律も得意だもんね」

玲衣が我が物顔で言うと、すかさず堅持が噛み付いた。

「勝手に決め付けんなよ！　それも事実だけどさ！」

「そうなんですか。私なんて調律しか出来ないから、憧れちゃいます！」

しかし彼の抗議の声は、珍しく力の籠もった綾の言葉によってかき消された。

彼女は黒色の瞳を輝かせて、羨望の眼差しを秋弥へと向ける。秋弥はその視線から逃れるように早足で少し前を歩いた。

封魔術と調律術はどちらも本質は同じ？？事象を操作することにある。

両者の違いは事象へのアプローチ方法だ。

事象、すなわち、あらゆる情報体構成する原質（メディオン）を操るためには、その情報体を理解する必要がある。

九つの原質は互いに組み合わさって一つの情報体を形成している。

封魔では九つの情報体のうち、『波』を除く八種類の原質を改変する。

調律では、『波』という一種類の原質だけを改変する。

言葉の上では封魔術の方が一見扱いが複雑のように思えるが、実際にはその逆で、調律の方が難易度が高い。

調律で操る『波』の原質とは、エリシオン光を指している。エリシオン光は星の記録という膨大な情報を操作する唯一の原質であり、それを操ることは星の情報そのものを操ることに等しい。調律における技術的にはわずかに乱れた光波長域を正すだけだが、世界そのものを改変し得る力を孕んでいるだけに、『波』の原質を理解することは容易ではないのである。

「理屈はそうなんだけど、あたしの場合は感覚的に出来ちゃうんだよね」
「つまりそれが才能や血統に起因していると言われる理由だな。元来より高いオラクルを持っていた神職者が退魔ではなく浄化？？つまり調律に特化した傾向を持つのも同じことだよ」
「今の時間だとオリエンテーション用に第一訓練場で封魔の模擬戦をやってるみたいだぜ。秋弥、行ってみないか？」
「いいよ。玲衣達はどうする？」
「んー、あたしは祭儀場の方に行ってみようかな。たぶん全部の施設を見れなさそうだしね」
「あ、それじゃあ私も玲衣ちゃんと一緒に……」
と、不意に綾が小さく吹き出して、三人は何事かと眼を見張った。どうやら今朝の教室でのやりとりを思い出したらしい。
「……ということは、ここでは一旦別行動ですね」
咳払いをして気を取り直した綾がまとめる。
「オーケイ。じゃあそうだな……。この棟を見終わったらちょうど昼時だし、本棟の食堂で待ち合わせってことでいいか？」
「はいはーい」
「わかりました」
それぞれに了解した女子二人を見送って、男子二人は第一訓練場のある訓練棟二階に向かった。

第一訓練場に通じる廊下の途中で、他クラスの学生の一団とすれ違った。先頭を歩く引率教師が、秋弥達の顔を見て何故か苦い顔をした。
別棟や本棟と比較して特別訓練棟の部屋数はずいぶんと少ない。その理由は封術用の訓練施設が一部屋を広く設けているためだ。当然、部屋は縦にも広い。地上三階建てにも関わらず、高さは六階建ての本棟に匹敵している。各階ごとに本棟の二階分の高さがある計

算だ。
特別訓練棟の各施設は中央に配置され、それを取り囲むように廊下が造られている。そのため施設への入口も廊下と隣接した面ごとにあり、秋弥達は二階に上がって一番近くの入口から第一訓練場へと入った。
途端、何かを打ち鳴らしたような音と、頭上から歓声が聞こえてきた。
視線を歓声のした方へと向ける。秋弥達のいる位置よりも高いところに手すりつきの通路があった。どうやら訓練場内は高いところから全体を眺めることが出来る造りになっているようだ。
続いて、音の聞こえた方を見やる。
十メートルほどの線が四方に引かれた訓練場で制服姿の学生が二人、向かい合っている。
お互いの手には剣の形をした装具（そうぐ）が握られていた。
装具とは人間の原質『意（マナス）』を具現化させたもので、『あらゆる情報体（事象）を構成している原質に干渉するための端末である。
形状は所持者によって異なるが、『意』？？つまり、人の心から生み出されたものであるためか、大抵の場合において鋭い刃を持っている。
続いて身体の正面で装具を構えている学生と、左半身で装具を構えている学生に視線を向ける。お互いに似たような装具を持つ者同士の模擬戦のようだ。
？？二人共強化型近接系直剣というところか。
装具はその形状や事象に与える影響によって、完全ではないがある程度までカテゴライズされている。
己の身体や装具、あるいは狭い領域に干渉する強化型。
行使者を中心に自領域を生み出して干渉する特殊型。
これをさらに干渉対象までの効果範囲で区切り、最後に装具の形状を現実の武器に当てはめることで装具をカテゴライズしている。
向かい合った二人の手には近接系直剣。

ただし正眼の構えを取る学生の装具は両刃、半身で構えた学生は片刃という違いがあった。
まず、両刃の学生が動いた。
学生の構築した新たな情報体が装具を介して大気中へと放たれる。
情報体の改変に伴い、エリシオンの赤い過剰光（オーバレイ）が発生した。
大気中に漂う『火』の原質を燃焼現象へと変えて装具に纏う。
両刃の学生は燃え盛る装具を上段に構えて、一気に振るった。
炎は装具から切り離されて熱波となり、片刃の学生を襲う。
しかし、片刃の学生は同じように火系の封術を用いて熱波を相殺した。押さえ込まれた熱エネルギーは両者の間で膨張して弾ける。
一瞬の轟音。
その中を掻い潜って、両刃の学生が切迫した。
炎の消えた剣で切り掛かる。
それを片刃の学生がすんでのところで反応して受け止めた。
だが、両刃の学生は手を止めることなく、連続で斬撃を放つ。切り上げ、切り下げ、突き、切り払い??両刃の学生が放つ連撃を片刃の学生は後退しながも、その全てを凌ぎきる。
両刃の学生の表情に焦りの色が浮かぶ。
一旦体勢を立て直そうとして大きく距離を取ろうとした??。
そのタイミングで、片刃の学生は攻撃を耐えながら練っていた封魔術式を発動した。
大気中の塵芥を利用して電位差を操る虚空封術『招雷（サンダー・ボルト）』が上空から両刃の学生を狙い撃った。
光速の雷を避ける間もなく浴びた両刃の学生が身体を硬直させて膝を突く。
模擬戦では封術式にリミッターが掛けられている。招雷の術式ではせいぜい数秒間、相手の動きを止める程度の威力に設定されているだろう。
しかし、それだけの時間があれば十分だった。
片刃の学生が一足飛びで距離を詰めると、装具を対戦相手へと向

ける。
模擬戦は片刃の学生の勝利で決着した、と思われた。
そのとき??。
熱波を超える爆発的な炎が片刃の学生を包み、その手から装具が零れ落ちた。
術者から乖離された装具は地面に触れる前に消滅する。
後に残ったのは、招雷の硬直から回復して、自身の装具を対戦相手に向けた両刃の学生と??。
奥歯を噛み締めて対戦相手を悔しげに睨み付ける片刃の学生だった。

??バックドラフトか。
秋弥は両刃の学生が行った一瞬の逆転劇を冷静に分析していた。
バックドラフトとは熱された一酸化炭素が酸素と急激に結びついて爆発を引き起こす現象のことだ。熱波の術式とは異なり情報体の精密な制御が必要となるため、それを用いた中毒術はプロの封術師でも扱うことは難しい。
だが小規模爆発程度ならば、多少の労力さえ惜しまなければ封術師見習いである学生でも十分に発動可能な術式だ。
両刃の学生が直前に発動していた熱波術式。これにより酸素濃度が一時的だが通常よりも低下していた期間があった。一酸化炭素はその短い期間のうちに不完全燃焼体となった装具から生み出されたのだろう。大気中の情報体を操作したのではなく、自然現象によって新たな情報体を生み出したのだ。
後はその情報体に大量の酸素を集中的にぶつければ、そこに炎の爆発が生じる。
近接戦闘の技術では片刃の学生がわずかに勝っていたようだが、封術式の組み合わせの差が今回の勝敗を左右したとも言える。
両刃の学生は『火』の原質を操作する術式が得意なのかもしれな

いと秋弥は思った。
立ち上がり、互いに一礼をして模擬戦が終了した。
「……九槻と沢村か。お前達も見に来ていたのか」
と、入口付近で模擬戦を観覧していた袋環が二人に気づいて声を掛けてきた。
「はい。先生もですか？」
「私は万が一に備えての立ち会いだ」
「あ、そうですか」
「今回の模擬戦はなかなか見所のあるものだったな。封術的な視点だけではなく、自然現象そのものに目を向けることも封術師には必要だということだ」
「封術的な視点、ですか？」
「そうだ。封術師というものはなまじ原質を操れてしまうが故に、その時々の情報体だけを捉えて術式を組み立てようとしてしまうところがある。しかし、情報体という名のリソースは無限でもなければ万能でもない。これは封術師同士の戦いだけでなく、隣神との戦いにおいても当てはまることだが、封術を行使する者同士の戦いは常にリソースの奪い合いだ。流動的な情報体をよりマクロレベルで理解した者だけが、最終的には生き残る」
「はぁ……、わかるような、わからないような話ですね」
堅持が首を傾げると、袋環は苦笑いを浮かべた。
「今は頭の片隅に留めておくだけで良い。これから私が教えていく中で、きっと理解出来るようになるさ」
さてと、と袋環が二人の顔を交互に見つめた。
「模擬戦も終わって私がここに留まる理由もなくなったわけなんだが……。そこで、無理にとは言わないが、この後何も予定がないのならば特別訓練棟は私が一緒に見て回ってやろう。……この棟はお前達が特に利用する施設ばかりだからな」
その予想外の袋環からの申し出に、堅持は眼を丸くした。。
「本当ですか。ありがとうございます！」

堅持は素直に喜んでいるが、秋弥は彼女の表情がかすかに変化したことに気づいていた。
ふと頭に過ぎったのは、先ほどすれ違った他クラスのこと。
もしかしたら袋環は、その担任教師から自身の教育方針に対して何らかの注意を受けたのかもしれない。
しかし、それを問い質したところでさらに苦い顔をされそうな気がしたので、秋弥は黙っておくことにした。
「よし、それじゃあまずはそうだな……。この場所??第一訓練場について解説を始めようか。ここは封魔の技術や対隣神の戦闘訓練をするための施設で、第一から第三まである。それぞれに性質の違いがあるのだが、それは各施設に回ったときにでも改めて解説しよう。……第一訓練場はその中でも、もっとも一般的な使われ方をする訓練場だ。床に描かれた白いラインが見えるか？　訓練場はあのラインの内側へ向けて三重の調律結界を施しているため、よほど派手な術式を行使しない限り外部への影響はない。他にも、波長の擬似共鳴を発生させて隣神を顕現させることも出来る。だがこちらは私のような封術師の教職者が立ち会わなければならない関係上、普段は使えない。専ら封魔術の練習と模擬戦がメインになるだろうな」
「あれ？　さっき、模擬戦にも立ち会ってるって言ってませんでした？」
「万が一に備えて、とも言っただろう。調律結界内には術式リミッターが掛けられているとはいえ、もしも封術式が暴発するようなことがあれば、術者の制御下を離れた封術が調律結界外に余剰改変を及ぼさないとも限らないからな。だからこそ私は、私の担当するクラスの学生達に危害が及ばないようにと立ち会っていただけに過ぎない」
「な、なるほど……」
あまりにも淡々とした袋環の口調に、堅持は反応に困って曖昧な表情を浮かべた。
「ここのことはもう良いだろう。次の場所に行くぞ」

と、袋環はそれ以上掛け合わず、踵を返して訓練場を出て行く。ぎこちない動作で秋弥の方を向いた堅持に肩を竦めただけの答えを返して、秋弥は彼女の後を追った。

★☆★☆★

本棟の学生食堂へ向かう途中で秋弥は玲衣達と合流した。

昼食には若干早い時間だったが、自分達も含めて勝手知らずの新入生でごった返すことが予想される時間帯を選んでわざわざ行く必要もない。

弁当を持参していた玲衣のために一旦教室へと戻った後、四人は中庭を抜けて食堂に入った。

「何か綺麗なところだね！」

「食堂というよりはカフェに近い感じか」

落ち着いた茶褐色のテーブルに椅子が四脚、圧迫感を感じさせないように十分な余裕をもって配置されている。テーブルの上には竜胆の花がさり気なく飾られていた。人工植物の柔らかな緑色や天井から降り注ぐ白色の電灯も雰囲気作りに貢献している。

血気盛んな若者達が腹を空かせて集う学生食堂といえば、もっと混沌としたところを想像していただけに、感動も一入（ひとしお）だった。

加えて食堂内には緩やかなＢＧＭまで流れているのだから、本格的だと思う。

いくつかのテーブルには他の学生の姿が見られたが、秋弥達のような新入生グループではない。学年が上がるにつれて一般科目に対して選択科目や専門科目の比率が増える関係上、授業時間が不規則になりやすい。その空き時間をこの場所で過ごす学生も多いようだ。

四人は壁際に空いてるテーブルを見つけると、その場所を陣取ってデバイスから学生食堂のメニュアプリを起動した。メニューは寮

のものとは異なるようで、品数も圧倒的に多い。選ぶのに迷ってしまうが、どうにか四人は料理（玲衣はドリンクのみオーダー）を選び終えた。
ほどなくして給仕？？地方から入学した学生を支援するために設けられた学生課から斡旋される公式のバイト？？がやってきた。
「以上でご注文のお品物はお揃いでしょうか？」
それぞれの前に料理を並び終えると、給仕は言った。
白いレースで縁取られた黒のワンピースにフリルの付いた白いエプロンを組み合わせたエプロンドレス。左胸に添えられたワンポイントの赤い花飾り。学生食堂の給仕衣装は校内の施設ということもあって肌の露出を最低限抑えたものが採用されている。その結果、衣装を着用する者に清楚さや上品さを付与させている。
カフェのような雰囲気の学生食堂にはぴったりの給仕衣装だった。
四人を代表して、秋弥が給仕の言葉に頷く。
長い黒髪を頭の高い位置でポニーテールにまとめた給仕は深々と一礼して立ち去ろうとしたそのとき、給仕から一番離れた場所に座り、極力眼を合わせないように視線を逸らせていた堅持の存在に気づいた。
「……あれ、沢村くん？」
と、給仕は唐突に堅持の名を呼んだ。
「やっぱり沢村くんだ。ということはこちらの方は……沢村くんのクラスメイトさんだね」
給仕は堅持を除いた三人を不躾にならない程度に矯めつ眇めつ眺めた。
そして、腰に手を当てて上体を前に突き出すと頬を膨らませた。それは先ほどまでの上品な所作とは打って変わって、ずいぶんと子供っぽい仕草だった。
「酷いな沢村くん。気づいてたのなら声掛けてくれてもよかったのに」
しかし、その仕草は怖いくらいに様になっていた。

「あー……悪い。そんなつもりじゃなかったんだ。仕事の邪魔しちゃあ悪いと思ってな」
堅持はバツが悪そうに頭を掻きながら、言い訳がましいことを言った。
「それに今日はバイトがないと思ってたから、ちょっと驚いちまってさ」
「うん。ボクも今日はオリエンテーションがあるから休みの予定だったんだけどね。どうしてもヘルプに入ってほしいって頼まれちゃって??」
堅持のおざなりな謝罪の言葉に対しても給仕は気を悪くしたりせず、直ぐに機嫌を直すと（もとより怒ったフリをしていただけだが）、胸の前でトレイを抱えた。
「ボクとしてもバイトの初日から休むのは事情があっても心苦しかったから、お昼の時間だけでも皆のお手伝いすることにしたんだ」
「ねぇねぇ、お取り込み中のところ悪いんだけど、あたし達にもこの綺麗な人のことを紹介してくれないかな？」
と、二人の会話に割り込む形で玲衣が皆の疑問を訊ねた。
こういう場面でもまったく物怖じしないのは彼女の持つ美点だと思う??人によってはかなり紙一重な美点ではあるが……。
「あぁそうだったな。こいつは??」
「太刀川（たちかわ）です。皆さんと同じ一年生で一組です」
給仕??太刀川はスカートを指先で軽く摘まんで、挨拶のためのお辞儀をした。
続いて玲衣から始まり、綾、秋弥と自己紹介を終えると、まずは玲衣が口を開いた。
「さっそくこんな綺麗な女の子と知り合いになってるなんて、堅持は本当に手が早いよね」
「……そう思うか？」
玲衣の皮肉気な口調にこれまでの堅持ならムキになって突っ掛かりそうなものだったが、今回は何故か声のトーンを落としただけだ

った。
　どうにも様子がおかしかったので、秋弥も便乗して彼を弄ってみることにした。
「お前がそんなやつだったなんてな……。堅持、俺はお前のことを少し誤解していたようだ」
「秋弥まで！？　どういう意味に解釈すりゃ良いんだよ、その言葉！」
「沢村君……不潔です」
「えぇ、朱鷺戸さんも！？」
「実は……沢村くんには夜な夜な、こんな公然の場所ではとても口に出せないようなあんなことやそんなことを？？」
「ちょっと待とうか太刀川ぁ！」
　秋弥達の白々しい棒読み台詞とは違い、口元に手を当て瞳を伏せて俯くという太刀川の演技は何処か真に迫るものがあった。
　全員から追い討ちを掛けられた堅持は肩で息を切らせながら大きく深呼吸をする。
　グラスに手を伸ばして乾いた喉に一気に水を流し込むと、空になったグラスに太刀川がすかさず冷水を注いだ。
「……いいか。お前らは大変な思い違いをしている」
「堅持に弁解の余地はないのだけれど」
「あるよ！　ていうかさせてくれ！」
　容赦の無い玲衣にもう一度声を荒げてから、咳払いをして太刀川を指差した。
「お前ら、こいつを見てどう思う？」
「人のことを指差しちゃいけないって、小さい頃に教わらなかったの？」
「牧瀬はちょっと黙ろうか！　話が全然進展しないだろ！　そこはこの際ちょっとぐらい大目に見てくれよな！」
　あまりにも堅持が不憫に思えてきたのと、彼の言うとおり話が全然進まなかったので、秋弥は玲衣に目配せして止めさせる。

堅持に指差された太刀川は胸の前で抱えていた銀のトレイをわずかに上へとずらして、口元と胸元を隠した。それを見た玲衣がまた何か言いたそうな顔をしていたが、無言の視線でそれを抑える。
不躾にならないように注意しながら、秋弥は改めて太刀川の全身を眺めた。ポニーテールでまとめている艶やかな黒髪は腰下まで届いてる。髪の色がエプロンドレスの黒と見事に調和していた。学生食堂用の給仕服とはいえ、実は太刀川が着るために用意した衣装だと言われても納得してしまうだろう。背丈は女子の平均と比べてやや高く、背筋をピンと伸ばした綺麗な姿勢やエプロンの紐で結われた細いウェスト、スラリとした細身な身体も相まって、凛とした印象を印象付けていた。
と、太刀川は小さな顔に黒目がちな瞳を細めてかすかに微笑んだ。
その仕草に、秋弥は違和感を覚えた。
「どうって……とっても綺麗で可愛い女の子だよね。どんなシャンプーを使ったらこんなにサラサラな髪にになるのかな。後でこっそり教えてくれないかな？」
髪のひと房を手に取り、玲衣はその感触を確かめながら言った。
綺麗と可愛いは同居不可能な表現のような気もするが、そこは女子にだけわかる違いがあるのだろう。
「えぇ、良いですよ。牧瀬さんの髪型も素敵ですね。行き付けの美容院とかあるんですか？」
「何自然なガールズトークしてるんだよ！　ってあぁ、ガールズトークって言っちまった！　ちくしょう……」
一方、堅持は何故か自分の言葉に頭を抱え込んでいた。
「……いや、そうじゃない。牧瀬、お前今なんて言った？」
「サラサラになるシャンプーの話？」
「んなことはどうでもいいんだよ！　今はこいつを見てどう思うかって話をしてるんだ！」
「女の子にとって髪は命なんですけど。だから堅持はモテないんだよね」

「さりげなくオレを貶さないでくれますかね！」
知った風なことを言いやがって……と、これは隣に座っていた秋弥にだけ聞こえる声で呟いた。
「えっと、綺麗な女の子って言ったつもりだけど。それ以外に答えようがないと思うわよ」
秋弥と綾の二人も首を縦に振って玲衣に同意した。
互いにベクトルは違えど、玲衣と綾も十分に美少女と呼んで差し支えないが、太刀川もまた彼女達とは違うベクトルを持った美少女に見えた。
だが、堅持の反応は違った。
俯かせていた顔とテーブルの隙間から、押し殺したような笑い声が漏れ出す。それも直ぐに堪えきれなくなって、腹を抱えて笑い出した。
「綺麗な女の子だってよ。ははっ、笑えるな。太刀川、満足か？」
「ボクに振られても正直困るんだけど……。ねぇ、やっぱり話さなきゃいけないの？」
堅持は困ったような表情の太刀川と二人だけの間で通じるやりとりを交わす。
「……いいか。現実はときに残酷なものなんだよ」
笑うのをピタリと止めた堅持が急に真面目くさった表情をした。
「……わかったよ。それじゃあボクの口から伝えるね」
少しの間逡巡した素振りを見せてから、太刀川は表情を引き締めて女子二人に向き直った。　そして、おもむろに頭を下げた。
「騙すつもりはなかったんだけど、ごめんなさい。ボク、女の子じゃないんです」
一瞬、太刀川の言葉の意味が理解出来なかった。
下げた頭を元に戻して、申し訳なさそうに瞳を伏せる。
女子用の給仕服を着用して、どう見ても女の子にしか見えない女の子が女の子じゃないだと？　と、秋弥も良い具合に混乱してきたところで、太刀川はさらに言葉を続けた。

「改めまして、ボクは太刀川夜空（たちかわ よぞら）と言います。沢村くんと同じ寮生で、ルームメイトです」
その言葉を証明するように、ワンピースのポケットから学生証を取り出してテーブルの上に置いた。確かめてみると、太刀川夜空という姓名欄の隣に《ＭＡＮ》と記載されていた。……証明写真はどう見ても女の子だったが、正真正銘嘘偽りのない男子学生のようだった。
「……」
「……」
「……いや、正直言って驚いた。全然気づかなかったよ」
三人の中でいち早く驚愕から立ち直ったのは秋弥だった。思えば、太刀川の仕草や行動は何もかもが本物以上に本物すぎていた。計算し尽くされた演技と言い換えても良いかもしれない。秋弥が感じていた違和感の原因はこれだった。
残りの女子二人は彼女？？いや、彼が自分達と同じ女の子ではなかったことが信じられないようで、呆然とした表情のまま固まっていた。
「本当にごめんなさい。隠すつもりはなかったんだけど、言うつもりもなかったから。それなのに沢村くんが簡単に種明かししようとするから……」
夜空は非難の眼差しを堅持へと向けるが、その台詞もどうなのだろうと思う。知らぬが仏ということだろうか。
と、まるで呪詛を唱えているのでないかと疑ってしまうほどのボソボソとした声が近くから聞こえてきた。
「……だってだって、あたしよりも顔が小さくて？　背が高くて？　髪が綺麗で？　こんなに可愛い……」
「……私、女の子としての自信がなくなっちゃいました……」
声の主をわざわざ探すまでもない。
どうやら玲衣と綾がショックから立ち直るまでにはもうしばらく時間が掛かりそうだった。

後ろ髪を引かれるような思いの夜空には、堅持からの事後報告を約束させて給仕の仕事に戻ってもらうことにして、出来れば昼休み時間中には二人には復活して欲しいなと秋弥は昼飯を食べながら思っていた。

★☆★☆★

本棟は地上六階建ての建物で、東側と西側の建物を中央の渡り廊下が繋いでいる。

西側は教室棟とも呼ばれており、各学年毎に教室のある階が異なっている。二階部分が一年生で、上の階になるほど学年が上がっていき、一階部分は教員室や事務室となっている。

東側は本棟と渡り廊下で繋がる講堂を合わせて多目的棟とも呼ばれている。多目的棟には実験室や音楽室、美術室などの多目的施設や、《学生自治会》、《治安維持会》という封術学園の二大委員会専用の会議室がある。

本棟一階の中央廊下は中庭と繋がっている。中庭には色鮮やかな花木が植えられており、天気の良い日にはベンチや芝生の上で食事を取る学生も多いようだ。

先ほどまで秋弥達のいた学生食堂は中央廊下の南側に位置している。中庭を抜けていく以外に、東側と西側の南部分が中庭と隣接しているので、そちらを通って食堂に行く事も出来る。

本棟および多目的棟は立体オブジェクト地図の俯瞰視点モードで確認すると『〇一∀』の形に似ており、『∀』の形は一世紀ほど前に使われていたと言われている七セグメントディスプレイの『A』を逆さまにしたものに近い。

さらに学生食堂の真上、多目的棟と教室棟の二階南部分には図書館があり、三階部分だけは南側にも東西を繋ぐ渡り廊下がある。

本棟の広さは特別訓練棟と同程度ほどで、時間内に全てを見て回

ることが出来ないと判断した秋弥達は、四階より上の階を見学ルートから外した。
まずは三階の図書館を見てから多目的棟の三階、二階を見た後、中央廊下を通って自分達の教室がある教室棟二階、一階。そして最後に、一階の中央廊下を通って多目的棟一階と渡り廊下、講堂という順路を選んだ。
「結構歩いたな。これでオリエンテーションも終わりか」
「施設はもっといろいろあるみたいだけど、スケジュール的にはそうなってるね」
「袋環センセがルートから外したってことは、きっと学業とはあまり関係が無い場所だってことだろ」
「でもそう考えると、私には別棟を見て回った意味があまり良くわかりませんでしたが……。九槻さんにはわかりましたか？」
「……これは俺の私見だから鵜呑みにしないで欲しいんだけれど」
と、秋弥は前置きをした。
「封術師見習いの学生は今の日本にとって貴重な人材だってことはわかるな？　その中でも寮生は基本的に二十四時間、学園内にいることになる。他の棟ならある程度は封術教師の目が届く範囲だが、別棟に限っては教師が当直をしているわけでもない。だから、他の棟に比べて厳重なセキュリティを敷いて安全を確保している。それを寮生以外の人にも知ってもらって、普段の私生活においても注意を促したかったんじゃないかな」
考えすぎかもしれないが、あながち間違いでもないように思える。
この辺りの意図については袋環から然るべき説明を受ける必要があったかもしれない。否、むしろ袋環の性格を思えば、学生から質問されることを待っていたという可能性すら考えられる。
今更のことだが、秋弥達のクラスはオリエンテーションの体裁をほとんど保っていなかった。
「はぁ……、九槻さんってやっぱり凄いですね」
「さすがシュウ君だねっ」

そんな秋弥の考えを余所に、考えすぎにも思える私見に対して女子二人からの手放しの称賛を受けて、彼は内心で溜息を漏らした。
次の時間は装具選定なので、必然的に袋環とも顔を会わせることになる。そのときにでも適当に尋ねてみようかと思った。
「それじゃあ次はいよいよ装具選定だな。楽しみだよなぁ、やっぱさ」
講堂を抜けて再び特別訓練棟へと向かって歩きながら、堅持が待ち切れないといった様子で拳を強く握った。
「系統の自己分析はしたの？」
「あぁ？　んなもん必要ねぇって」
「ま、堅持の場合は強化型一択だもんね。綾もそう思うでしょ？」
「えっと……そうですね。何だかそんな感じがします」
和気藹々とした雰囲気の中にも、それぞれに緊張の色が見え隠れしていた。

第４話「オリエンテーション（後編）」（後書き）

本棟の構造が安定していなかったので一部修正しました。

第5話「装具選定」

★☆★☆★

施設名??マナスの門。

鷹津封術学園の真下に広がる地下大空洞に、その施設は存在する。

三組の学生達は特別訓練棟から地下大空洞へと至る通路の途中に設けられた空き部屋で、袋環から《門》に纏(まつ)わる知識と装具選定の説明を受けていた。

「これから君達が行う装具選定にはマナスの門と呼ばれる特殊な施設を用いる。門に関する知識は受験でも問われたものだが、改めて確認しておくぞ。この世界??レイヤホロウモデルに当てはめると現層世界と呼ばれる私達の世界以外にも、世界と呼ばれるものは無数に存在している。それらは総称して異層世界と呼ばれている」

《星の記録》と名付けられた『すべての答え』は単一概念であるエリシオン光によって過去から未来までの全情報を記録している。

全情報??星が持つ全ての情報資源(リソース)の根源は、九つの性質で表すことが出来る。

『地』

『水』

『火』

『風』

『波』

『虚空』

『意』

『理性』

『自我意識』

たとえば、火という情報体は『火』『風』『波』『虚空』、水という情報体は『水』『波』『理性』の原質で構成されている。

情報体としての火と、原質としての『火』は同一視されない。ただし、エリシオン光という概念は原質『波』と等価である。

エリシオン光は主観により観測されて初めて、波長を固定するという特異な性質を有している。

《星》は世界を満たすエリシオン光の性質と、世界という情報体を構成する原質の『波』を利用した。

世界を物理的（フィジカル）に構築するのではなく、論理的（ロジカル）に構築したのである。

世界と、世界に存在する情報体は固定された『波』によって結び付けられる。

すなわちそれは、エリシオン光の固有振動。

火が現層世界に存在するのは、火の『波』が現層世界の『波』と結びつき、その存在を繋ぎ止められているためだ。

もちろんそれは生命にも当てはまる。

現層世界と結びついた者を『人間』と呼び？？。

異層世界と結びついた者を『隣神』と呼んだ？？。

「半世紀前までは幽霊やオカルト、未確認飛行物体（UFO）や未確認生物（UMA）、神や仏と言われていた事物は、レイヤホロウモデルによって一つの回答が出されることになった」

世界多重層構造理論（レイヤホロウモデル）は星の仕組みそのものを定義するに至った。

「だが、そんな不明瞭で不明確な理論を誰が信じるだろうか。誰もがそう思い、事実、誰もがその理論に見向きもしなかった。あの出来事が起こるまではな？？」

袋環の言葉を聞いていた学生達の表情にわずかに変化が生まれたのを見やる。

「それは君達や私が生まれるよりも以前の出来事だ」

袋環が語ったのは過去に起こった四度の大地震。

一九九五年一月十七日？？阪神淡路大震災。

二〇〇七年七月十六日??新潟県中越地震。
二〇一一年三月十二日??東方地方太平洋沖地震。
そして、二〇一九年十月八日??関東大震災。
「最初期の発端が何処にあったのか、それは未だに解明されていない。しかし現層世界の誰の目にも明らかとなるほどに強大な力を持った異層世界の怪物??隣神が目撃されたのは、関東大震災から三日後のことだったという。ただちに自衛隊や機動隊が出陣してこれに対処したのだが、当時の彼らには隣神が操った未知の力が魔法や超能力にも見えたことだろうな」
ともすれば冗談にしか聞こえない話を真面目な口調で続ける袋環に、皆が聞き入っていた。
「そこに、隣神と同じように魔法や超能力??すなわち現代の封術の前身となった力で対抗しようとしたのが、鷹津封術学園を含む四校の創設者である封術師達だった。彼らが最初に行ったことは神仏に仕える者達の召集だ。神官や宮司はこの世ならざるモノを見聞き出来る特別な力??オラクルを有していた。加えて彼らが後生大事に奉っていた神具や宝具は元来より異層世界と強い繋がりを持つ道具だった??」
強い繋がりとは、情報体そのものが持つ『波』、エリシオン光の波長域が現層世界だけでなく異層世界までも内包しているという意味だ。神器はそれ単体で異層へ干渉を及ぼすことが可能となる道具またはそれに準ずるモノを指す。
「彼らは唯一『隣神に対抗出来る力を持っている』からという、ただそれだけの理由で隣神と戦った」
歴史とは単なる記録だ。
そこにはただ、事実のみが綴られている。
だからこそ袋環の語る彼らの想いは、学園の創設者でもある《始まりの封術師》から彼女自身が伝え聞いた言葉なのかもしれない。
「現層世界はこのときより、大きく狂い出した。時折乱れて干渉状態になった異層領域を通って顕現した隣神が現層世界に干渉して、

それが人間によって目撃されたことでＵＭＡだの幽霊だのと持て囃されていた、そんな世界は終わりを告げた」
この出来事を皮切りにして、世界中で不特定多数の人間に隣神の存在は目撃され始めた。
「過去、隣神は情報体としての『波』の強弱によってのみ顕現していた。しかし度重なる厄災によって、星の記録そのものに異常が生じてしまった。数多の世界は論理的な領域を持って互いに干渉しないように存在しているが、物理的な側面??星の記録そのものはたった一つしか存在しない。記憶領域を隔てるエリシオン光波長が誤った情報を記憶、記録してしまうことで、重層する世界同士が特定の領域において、同位相を作ってしまうようになった」
過去の歴史において、隣神が目撃された出来事は世界中で数多く報告されていた。
だが、その事象に決定的な転機が訪れたのは、日本という小さな島国を襲った四度の大地震であると、今では考えられている。
「さて、前置きはこのくらいで十分にして、そろそろ本題に入ろう。古来の装具??神器を用いて隣神と戦った聖職者や神職者達だったが、そもそも彼らを集めて知識を与えた始まりの封術師達とは何者だったのだろうか」
その答えは《門》にある。
門??震災の被害を被った地域の地下に、それは静かに存在していた。
現世と常世を隔てる境界の名を与えられたそれは星の記録領域にアクセスを行う、多重層世界を繋ぐための所謂ショートカットだ。
それがいつから存在して、どんな目的で造られたものかは誰にもわからない。
しかしそれは確かに、そこに存在した。
ただし、これまでは誰の眼にも観測されることがなかった??振域レベルの高い震災が《星の自浄作用》でも修正が間に合わないほど短期間に重なるようにして起こらなければ。

「分類上はＯＵＴ　ＯＦ　ＰＬＡＣＥ　ＡＲＴＩＦＡＣＴＳ（オーパーツ）とされている門は、最初からその場所にあった。人間という情報体が有する『波』では知覚できないほどの深層にな」

その門が突如、現層世界に顕現した。

そしてその場に偶然にも居合わせた、後に《始まりの封術師》と呼ばれることになる者達を門の向こう側へと取り込んだのである。

門は星の記録領域を介して情報体の『意』に働きかけ、世界の仕組みを決定付けている原質を組み変えるための力を与えた。

それが装具？？。

正式名称を事象干渉機構《Ｍｅｄｉｏｎ　Ｉｎｔｅｒｆｅｒｅｎｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ》と名付けられたそれは、言わば生命が持つ心の力。

世界を塗り替えてしまうほどの想いの力だ。

「彼らは強制的に、己が為すべきことを理解させられた。星が元の状態に戻ろうとする自浄作用の担い手として隣神と戦い、世界をあるべき姿へと戻すための力と知識を与えられたのだ」

これがそもそもの発端。

封術の歴史の始まりだった。

《始まりの封術師》達は異層世界の脅威に対抗するために門を利用しようと考えた。

まず、力を持つ者に知識を与えた。

知識を持つ者に、技術を与えた。

技術を持つ者に、名前を与えた。

力は、やがて体系化された。

「封術学園は異層世界の脅威に立ち向かうことを目的として門の真上に造られた。全国に四校しか存在しないのは、現在確認されている門の数がそれだけしかないからだ」

しかし、門は観測されていないだけで世界中に存在するのだろう。

あるいは既に発見されているが、その存在を隠匿されている可能性も十分に考えられた。
「ある地点??すなわち現層世界の領域が異層領域と同調することで人間と隣神は互いの存在を認識し合う。ただし情報体そのものの『波』が変化したわけではない。情報体が持つ『波』はそれぞれ世界の固定波長と密接に関係しているため、情報体同士が互いに干渉し合うことは通常ならば起こり得ない」
袋環は言葉を続ける。
「だが、異層世界の情報体が高い『波(オラクル)』を有していたことで、隣神は一方的に我々に干渉することが出来た。我々が同じようにして隣神に干渉するためには、情報体レベルで異層世界に干渉出来るほどの高いオラクルが必要だった」
そのため、封術学園の入学条件として高いオラクルを持つことは大前提なのであった。
「さらに言えば、『意(マナス)』の原質を司る門は異層に干渉可能なほどの『波』を持つ者にしか、その力を与えようとはしなかった。これについては門が《星の自浄作用》の補助機構としての役割を担っているためではないかと考えられている。不用意に力を与えた結果、重層世界の均衡や秩序が崩れる可能性を考慮した安全装置(セーフティ)なのかもしれないな」
デバイスのウィンドウを閉じながら袋環は言った。
「では装具選定の説明に入ろう。これから向かう《マナスの門》によって、君達は自身の『意』を具現化した力??装具を手にする」
瞬間、学生達の間にどよめきが生まれる。皆、目前に迫った装具選定に緊張している様子だった。
「手に入れる装具の系統や形状がどのようなものになるか。それは手にするまで誰にもわからない。君達の生まれ持った才能や血縁に左右されるかもしれないし、人間関係や家族関係、あるいは性格によって決まるかもしれない。そういえば、それらの情報を用いた装具の自己分析や診断というのもあるらしいな。信じるかどうかはそ

の者の自由だが??」
その台詞に、玲衣が苦虫を噛み潰したような顔をした。袋環はそれ以上何も言わなかったが、それは言外に「当てにならない」と言っているようなものだった。
堅持も玲衣の様子に気づいたようで、事前に自己分析の話を彼女がしていたことを思い出したのだろう。意趣返しをするようにニヤリと笑った。
「まあ、そうだな……。私としては君達が分相応に願った形で想いは実現されるのではないかと思っている。何の理屈も理由もない、楽観的で希望的な観測だがな」
苦笑交じりに袋環は言った。およそ自分に似つかわしくない台詞だとでも思ったのかもしれない。
「装具選定の話の続きは地下に降りてからにしようか。門を直接見たほうが話しやすいだろうしな」
袋環はデバイスを仕舞ってから学生達を連れ立って部屋を出た。
通路の先に設けられたエレベーターへと乗り込む。
エレベーターは学生プラス教師の三十人を楽々収容できる作業用コンテナタイプで、袋環は全員が乗り込んだことを確認すると、首からぶら下げていたネックレスを外した。どうやらそのネックレスが大空洞に繋がる階層へ降りるための鍵になっているらしい。
ネックレスの先端にある空色の宝石をコンソールの窪みに嵌める。
瞬間、コンソールから放たれた赤い光が宝石を走査したかと思うと、身体に小さなGがのしかかり、エレベーターが静かに動き始めた。
皆が階数表示盤を見上げていたので、秋弥も何となくそれを見詰める。表示盤には数字の類は一切見られない。代わりに菱型の輝石が三つと、それらを繋ぐ丸型の輝石が一定間隔で埋め込まれている。
時間が経つにつれて、丸型の輝石は右から左へと光を移していった。どうやらその光が地上からの深度を表わしているようだ。
光は中央の菱形の輝石を灯した。しかしそこで停止せずに、左端

の菱形の輝石を目指して進んでいった。
どのくらいの速度で、どのくらいの深度を目指しているのだろうか。
コンテナ内の急激な気圧変化によって耳詰まりが起こり、耳や額を押さえる学生も出始めた頃、再びエレベーターが小さく揺れた。
Gが逆方向に働いてから徐々に弱まっていく。
エレベーターが停止して最下層に到着したらしい。
ドアが開くと、袋環が先頭に立って歩き出した。
白塗りの通路に天井からの白色光が反射している。地下階の廊下は特別訓練棟の地上階と似たような造りで、本棟の廊下と比べると縦にも横にも広い。窓が無い分、白を用いることで広く見せようとしているのかもしれない。病院を髣髴とさせる病的な白さに少し目が痛かった。
一定とは言えない足音が通路に木霊する。エレベーターが真下へと一直線に下降する以上、大空洞までの通路はそれほど長くないはずだ。
通路は、そのまま大空洞へと繋がっていた。
白塗りの壁は岩肌へと変わり、白色光は広範囲照射型の照明器具へと変わる。
そして、皆一様に感嘆の吐息を漏らした。
学園の地下に広がる大空洞内は踏み固められた地面を除いて全方位の岩肌がむき出しの状態で、天井は最低限光がかすかにしか届かないほど高い。風が届かない密閉空間であるにも関わらず、空気はわずかにも淀んでいない。むしろ地上よりもよほど清い様にも感じられた。また、最低限の照明器具だけしか取り付けられていないようだが、それでも目の前に広がる『それ』を照らすには十分な照度だった。
秋弥は、その鮮やかな朱の色に目を奪われた。
高さ五メートルにも及ぶ『それ』は、鳥居の形をしていた。
「これが、マナスの門だ」

鳥居に近づき、手を触れながら袋環が言う。
彼女に言われるまでもなく、皆は鳥居を見た瞬間に理解していた。世界を隔てる境界として、これほどまでに的を得た形のものはないだろう。地獄の門を見せ付けられるよりもよほど納得できた。
「マナスの門はこのとおり鳥居の形をしているが、他校の門は違う形をしているらしい。私は見たことがないがな。……こうして門を直接見ることができ、そのそばまで近づくことが出来るのは一部の例外を除いてこの装具選定のときだけだ。君達が学園の封術教師にでもならない限り、今日が最初で最後になるかもしれないから今のうちに好きなだけ見ておくと良い」
と、袋環は言った。
「とはいえ、見学は各々の装具選定が終わった後にしてほしい。そうしないといつまでも経っても選定が終わらないからな。では、先ほどの説明の続きをするぞ」
袋環は掌で鳥居を叩く。
「これから君達には、一人でこの門を潜ってもらう」
途端、驚きに息を呑む音がいくつも聞こえた。
「良いか。君達が門の向こう側で向き合うのは己の中の『意』だ。そこに他人が介入することは出来ない。それはあってはならないことだ」
他人と一緒に潜るとどうなるのだろうか。そんな疑問が一瞬、秋弥の頭をよぎった。それを見て取ったわけではないだろうが、続く袋環の台詞がこの疑問を解消してくれた。
「仮に誰かと共連れで入ろうとしたところで、それぞれの『意』に繋がってしまうだけだ。手を繋いでいたとしても、互いの身体を縛り付けていたとしても、それは変わらない。原質の根源では全て、何の意味を為さない」
それは、言い換えれば門を潜ることに肉体の物理的な移動が伴わないということだ。
「だが、そんなに不安がることもない。君達がすべきことはただこ

の門を潜って、装具を手にして出てくるだけだ。その間に起こる出来事に多少の個人差はあるだろうが、向こう側??すなわち心象世界に行ったきり帰ってこれなかった学生は過去に一人もいない」
　気休めにしかならないと思うが、という台詞を言葉の頭に付けなかっただけで、何人かは安堵の息を吐き出した。
「ちなみに、心象世界と現層世界の時間の流れは異なっているということにも注意してほしい。ここで待っている者達にとっては一瞬の出来事でも、中に入った者にとっては早くて十数分程度になるだろうな」
　予想外の袋環の言葉に、再び皆のざわめきが広がった。前の台詞と繋げたら『帰ってきたけど中で何年も経過していた』ということも考えられた。
「シュウ君。戻ってきたらあたし、お婆ちゃんになっちゃうのかなっ」
「それはそれで期待だな」
「あっ、ひっどーい！　絶対に直ぐ終わらせるんだから！」
「時間の経過はお肌の敵ですからね」
　何故か他人事のような口調で綾が言った。
「あの……、質問良いですか？」
　と、前方にいた女子生徒がおもむろに手を上げた。
「何だ？　言ってみろ」
「はい。えっと、マナスの門の向こう側で何らかの問題が発生した場合にはどうしたら良いのでしょうか？」
　その言葉には、多分に怯えの色が混じっていた。
「良い質問だ。その場合には、全力でここまで戻って来い」
　簡潔な答えを聞いた女子生徒は肩を落として俯いてしまった。
　心象世界にいる限り誰にも助けようが無いのだから、そうする他に対処法はない。
　それがわかっていても、聞かずにはいられなかったのだろう。
「他に何か質問のある者はいるか？」

「はい。うちのクラスって一番最後なんですよね。他のクラスの人達のときってどんな感じだったんですか？」
「何事もなく、全員終了している」
それを聞いて、最初に質問をした女子生徒がホッと胸を撫で下ろしたのが見えた。
「だからといって、君達が気を抜いて良い理由にはならないからな。私が、質問されなければそのことについて話すつもりはなかったのだということの意味を、心に留めておいて欲しい」
と、少々複雑な表情で袋環は言った。
しかしそれも一瞬のことで、直ぐに毅然とした表情に戻ると、学生達の顔を見回した。
「ところで、君達の中で既に装具選定済みの者はいるか？　いたら挙手してほしい」
問われ、自分にとっては無関係の話だと判断した学生達がキョロキョロと周囲を窺う中で二人の学生が手を挙げた。
手をスッと伸ばして挙げたのは、背が高くて利発そうな男子学生。恐る恐るといった様子で手を挙げたのは、注目されるのが恥ずかしくて顔を俯かせた女子学生で？？。
「あれ、綾？」
「鶴木と朱鷺戸か。まあ順当なところだな。手を下げていいぞ」
満足げに頷く袋環を見て、一部の学生達が頭上に疑問符を浮かべた。彼らの無言の問い掛けを受けて、袋環が答える。
「神職者や聖職者のように体系化以前から封術を扱ってきた家系というものは、代々より受け継がれてきた独自の技術（封術）や知識を後世へと伝え残すために、家督を継ぐ後継者には幼い頃から封術師としての修行や訓練をさせている。そのためには当然装具が必要になるのだが、封術が国の管理下に置かれるようになって以降、そういった者達には特例として装具選定を行うようにしている」
鶴木と朱鷺戸。
《糸繰り》の鶴木。

《星詠み》の朱鷺戸。
どちらも封術師としての名家だ。
「もちろん、それが理由で封術学園に裏口入学できるようなことはないから、そこは勘違いすることのないようにな。どんなに力を持っていたとしても知識や良識を持たない者に封術師を目指す資格はない。鶴木と朱鷺戸の両名はそのどちらも満たした上で君達とともにいることを忘れないことだ」
全体が見える位置にいる袋環からは、学生の中に不審な視線を二人に向けた者が見えたのだろうか。犯人探しをするような趣味は秋弥にはなかったので、それ以上気に留めないことにした。
「そうだったんだね。言ってくれれば良かったのに」
「オレ、全然気づかなかったなぁ」
「ご、ごめんね。玲衣ちゃん、沢村さん……」
一方、玲衣と堅持から羨望の眼差しを向けられて、何故かペコペコと謝る綾の姿があった。
「でも言われてみれば朱鷺戸って名前、何処かで聞いたことがあるような気がしてたんだ。なるほど、星詠みか。そりゃあ目指すのが調律師で当たり前だよな」
「え、星詠みって何？　何？」
「そこ、静かにしろ」
咎められ、大人しくなる二人。
似たもの同士だな、と他人事のように（文字どおり他人事なのだが）思っていたとき、綾がこちらに視線を向けていることに気づいた。お互いの視線がぶつかったことで綾は直ぐに眼を逸らしてしまったのだが？？。
（なんだ？）
綾の不自然な仕草が気にはなったが、その思考は袋環の言葉によって遮られた。
「他に質問のあるものはいないな？　それでは、心の準備が出来た者から私のところに来い。早く済ませようと最後に済ませようと、

それで君達の今後の評価が変わるわけでも、装具の系統や形状が変わるわけでもないからな。時間が許す限り、私は待つぞ」
説明を終え、袋環は腕を組んで鳥居に寄りかかった。
学生達がおっかなびっくりで周囲の様子を窺う中、真っ先に袋環のところへ向かった学生がいた。
「袋環センセ。オレ、行って来ても良いですか？」
堅持だった。袋環は再展開済みのウィンドウに表示した名簿欄から堅持の名前を探し出してチェックを入れると、
「あぁ、行って来い」、
短い言葉で堅持の背中を押した。
堅持は朱に彩られた鳥居の境界部分に掌をかざした。
すると、その位置を中心にして波紋が広がった。空間を隔てる境界面がそこに存在しているという証だった。その様子を見ていた他の学生から、声にならない声が上がったような気がした。
「それじゃ、ちょっと行って来ます」
誰にともなく、おそらくは自分に言い聞かせるための呟きを最後に、堅持は何気無い足取りで鳥居を潜り抜けようとして？？消えた。
反対側から、彼が出てくることはない。
空洞内が静寂に満ちる。
皆が固唾を呑んで、堅持が帰ってくるのを見守っていた。
時間にして一分が経過しようとしたところで、再び鳥居の境界面が揺れた。
堅持が行きと同じ足取りで現層へと帰還したのだ。
「え、もしかしてこれで終わり？」
右手で頭を掻き、拍子抜けしたような声を漏らす堅持。
彼の左手には、鈍色に輝く剣が握られていた。
「早かったな。装具を登録するからこっちに来い」
袋環に声を掛けられ、彼は彼女の言うとおりにそばに寄った。
「……重剣だな。系統はわかるか？　扱い方を記憶に刷り込まれただろう？」

「えっと、たぶん強化型の近接系です」
「了解した。御苦労だったな、もう休んでいていいぞ。それと装具には名前を付けておくと良い」
肩にポンと手を置かれ、袋環から労いの言葉を受ける。
堅持は一つ頷いてから装具を一瞬にしてリング状に変形させると、学生達の輪の中へと戻っていった。
途端、彼の周囲に人が群がって質問が殺到した。
「ねぇ、中はどんな感じだったの？」
「あー……、何か普通の道だったな」
「道？　それでそれで？」
「遠くの方に丘が見えて、何となくそこに向かって歩いていったんだ。そしたら急に頭の中に声……声だったかな。記憶だったのかもしれないけど、とにかく何かが流れ込んできて、気づいたら装具を持ってたんだよな」
「へぇ……何だか夢の中の話みたいだな」
「そう、それだ。夢を見てるような気分だったな。思い出そうとしてもうまく思い出せないっていうの？　不思議な感覚なんだよな」
「……ちやほやされて嬉しそうね」
律儀にも質問に一つ一つ答えていく堅持の様子を遠巻きに眺めていた玲衣が不機嫌そうな口調で呟いた。
秋弥、玲衣、綾、それと鶴木という名の男子学生はクラスメイトの輪に加わっていない。
装具持ちの二人は元よりあまり関心がないだけだろうが、お祭り好きの玲衣が堅持を囲う輪に加わっていないことが秋弥には少し意外だった。
「玲衣は行かなくていいのか？」
「それは堅持のところに？　それとも門のところ？」
「両方。お前らって何か似てるしさ」
からかうような口調で秋弥は言った。
「えっ……、ちょ、ちょっと！　やめてよねっ、もう！」

玲衣は頬を上気させて、そっぽを向いてしまった。
それを横目に、秋弥は先ほどからチラチラとこちらを見ている綾の方へ向き直った。
「綾、さっきからどうした？」
「……何でもないです」
「何でもないってことはないだろう。さっきから様子が変だぞ」
「はい……ごめんなさい」
「いや、謝られても困るんだけど」
秋弥の方こそ表情を曇らせてしまった綾を見て、申し訳ない気持ちになりかけていた。
視界の隅にジト眼の玲衣が映ったが、それに対しては無視を決め込んだ。
そのままお互いに黙り込んだままでいると、先に沈黙に耐えれなくなった綾が観念して口を開いた。
「あのですね……不躾だと思うかもしれませんが、九槻さんに聞きたいことがあるのですが、良いですか？」
「うん？　何？」
「先ほどの……ここに来る前のことなのですが、九槻さんは封魔も調律も両方出来ると言っていましたよね。それなのに自身の装具を持っていないんですか？」
疑念の種はそれか、と秋弥は思った。
名家の出身で封術学園に入学している以上、彼女の中ではたった一つの可能性に辿り着いているはずだ。しかし同時に、名家であるということがその可能性を否定しているのだろう。
「俺には自分の装具ではないけど、封術を使えるモノが一つあるんだよ」
と、秋弥はあっさりと答えた。隠すようなことではないし、隠すべきことは隠せば良いだけの話だった。
「では、九槻さんは《神器》を持ってるんですね！」
決して大きな声ではなかったのだが、たまたま彼女の声が耳に入

ったのだろう。クラスメイトの輪から外れて一人、マナスの門を眺めていた鶴木がギョッとした眼でこちらを見た。
それを視界の端に捉えつつ、嬉々として両の掌を合わせて高揚している綾に対して、人差し指を口元に当てるジェスチャで、少し静かに、と伝えた。
「あ……ごめんなさい」
そしてまた謝られてしまう。直ぐ謝罪してしまうのは彼女の癖なのかもしれなかった。
「……期待を裏切るようで悪いんだけど、俺が使ってるものは神器とはまた少し違うんだよ」
神器というのは、道具や術具が装具へと昇華したものを指す封術用語の一つだ。
秋弥が微妙に曖昧な表現を用いて言うと、意味がわからないという風に綾が小首を傾げた。
「神器はそれを為す情報体が強力な『波』の原質を持つが故に、異層に対して影響を与えることが出来る。そうだよな？」
それだけの台詞で、綾はハッとして眼を丸くさせた。
「だけど神器では単一の、あるいはせいぜい数個の事象干渉しか発生出来ない。しかし、だからこそ神器は封術師が通常行使出来る事象干渉以上の干渉力を持っている。朱鷺戸家の神器もそうだろう？」
『星鳥の系譜』に連なる封術の名家は、それぞれに固有の神器を所持している。
そして当然ながら、その特出した性質についてはほとんどが秘匿されている。
それは朱鷺戸家においても同じことで、秋弥は《星詠み》という名前から神器の性質を連想するしかない。
綾もそこまでの考えに至ったのだろう。それ以上聞き出そうとはせずに、困惑気味だった表情を柔和な微笑みに変えた。
「わかりました。九槻さんは何か凄い力を持っているということですね」

えらく都合の良い解釈にも思えたが、勝手に納得してくれたのならばわざわざ訂正する必要もないだろう。
そもそも九槻家は朱鷺戸家や鶴木家のような《星鳥》ではない。
神器を持つどころか、封術を扱えるのは姉弟だけなのだから？？。

「さてと、俺もそろそろ行ってくるよ」
クラスメイトの半数以上が装具選定を終えた頃になって、秋弥はようやく行動を開始した。
ちなみに玲衣はどうしているかというと、既に装具選定を終えて、今は女子グループの輪の中心でお互いの装具の見せ合いをしていた。
だからこれは、今も秋弥と一緒にクラスメイト達とは距離を置いたところで傍観していた綾に掛けた言葉だった。
「あ、はい。お気をつけて」
綾のその台詞に、秋弥は不覚にも吹き出してしまった。
「なっ……なんで笑うんですか？」
「いや、ごめんごめん。何か可笑しくってさ……」
謝罪をしておきながら、なおも秋弥は綾から背を向けたままで肩を震わせる。
綾はその正面に回りこむと、半目に開いた眼差しで低い位置から彼を見上げた。
「門の向こうは危険がいっぱいなところかもしれませんよ？」
「経験者はかく語りき、ってことかな」
「……まったく信じてませんね？」
「そんなことはないよ、覚えておく。それじゃあ気をつけて行って来るよ」
実のところ、装具選定は封術師になるための単なる通過点に過ぎないと秋弥は考えていた。仮に装具選定を行わなかったとしても、彼には扱える装具が他にあるのだから、別段気負う必要もなかった。
封術学園で封術を学ぶ以上、それが必要だからやっているだけだ。

それをまさか、意図はどうあれ他人に心配されるようなことになるだなんて、秋弥は思いもしなかったのだった。
そしてそれが少しだけ、昨日の姉の姿に重ねてしまっただけだ。
ただそれが姉から掛けられた言葉じゃなかっただけで、不思議と笑いがこみ上げてきたのだ。
そんなことを思ってしまった自分が可笑しくて??。
??さっさと装具選定を済ませて戻ってくることにしよう。
秋弥が近づいてくるのを認めた袋環は、彼の言葉を聞く前に名簿欄にチェックを付け始めた。さっさと行けと言わんばかりに目線でマナスの門を示す。
最初に堅持を送り出したときとは違う態度に軽く呆れながらも、声を掛けるまでもないと判断してのことだろうと適当に思い直した。
むしろ、さり気なさを装ってはいるが、秋弥を見定めようとする袋環の鋭い視線は隠しても隠し切れていなかったのだが??。
それにはあえて気づかないフリをして、促されるままに門の前に立つ。
堅持のように掌で境界を確かめることはせず、秋弥は普段と何ら変わらない足取りで『マナスの門』を潜った。

第6話「心象世界」

★☆★☆★

一瞬のうちに周囲の景色が一変した。
まず最初に気づいたのは、削り出した岩壁の天井ではなく、澄み渡るような青空が広がっていたということだ。
辺りは何処までも続きそうな高原の風景。耳を澄ませば鳥のさえずりが聞こえてきそうなほどの静寂。
そこに人や動物の姿はない。
ここが地下大空洞とは異なる場所であることは一目瞭然だった。
マナスの門が『意』の根源と繋がっていることから、ここは秋弥の『意（ココロ）』を具現化させた世界なのだろう。
「……何も無いところだな。……ん？」
少し離れた場所に、小さな家がぽつんと建っているのが見えた。
装具を得るためのプロセスがどういったものであるかわからない以上、闇雲に捜索してみるしかない。
さしあたってはあの小さな家を目指してみようと思い、秋弥は歩き出した。
??はじめまして、九槻秋弥。
と、数歩も歩かないうちに秋弥は何者かに声を掛けられた。
「っ！？」
自身の心象世界である『意』空間に他人の介入は有り得ない。
それでも、有り得ないことに無理やり理由をこじつけるとしたら、秋弥に対して何らかの精神への干渉が行われたということだ。
そう仮定した時点で、秋弥は装具を召還しようとした。

??無駄だよ、ここではその装具は使えない。それは元々君の持ち物ではないからね。
声の言うとおり、どんなに意識を向けても装具を召還することが出来なかった。
??私は君に敵対する存在ではないよ。今のところはね。
??ここでは私が君の案内役を務めさせてもらうよ。
装具を召還することは諦めたものの、秋弥は警戒心を解かずに周囲を見回したが、一向に声の主の姿は見当たらなかった。
「お前は誰だ。何処にいる」
??『誰』？　おかしなことを聞くんだね、君は。
??それは人間や、君達が言うところの隣神を指しているのかな？　であれば答えはノーだよ。
「……だったらお前は、なんだ？」
??そうだね。その問いかけの方が正確だ。
??私は君達が《星の記録》と呼ぶものの、言わば意識体や思念体のようなものだよ。
??そういう『概念』だと思ってくれれば良い。
秋弥は思わず眉を顰めた。
人間が定義した《星の記録》とは、全ての多重層世界を束ねる『星』という巨大な情報体が有する記憶そのものを指す。
その意識体??インタフェースだと『彼』は言った。
??もう一つの問いにも答えよう。
??私は何処にでもいるし、何処にもいない。
??私は今、君の意識に直接語りかけている。
??そうしなければ音声と言語の変換がままならないからね。
男女の区別がはっきりとしない中性的な声や、秋弥が理解出来る形の言語（この場合は日本語だと思われる）で『彼』の言葉が聞けるのは、双方の『意』が特別な変換機（コンバータ）を介して言葉のやり取りをしているからのようだ。
どういった仕組みがそれを可能にしているのか、秋弥には及びも

しなかった。
??深く考えなくて良いよ。君が意の根源にいなければ出来ないことだからね。
??私はね、君に少し興味があって話しかけたんだ。
今度こそ秋弥は驚愕に眼を大きく見開いた。
意識体の出現は装具を獲るためのプロセスの一貫だと思っていた。
しかし『彼』の口ぶりから察すると、星の意識体は多重層世界の微小な情報体である自分に興味を持って（実際には見えないが）姿を現したのだと、そう言っているのである。
??そんなに身構えないでくれないかな。本当に少し君と話がしたいだけなんだ。
言われて、秋弥は構えを解いていないことに気がついた。
『彼』の言葉を信用していいものか簡単には判断出来ないが、たとえ精神干渉の類だとしても装具が使えないのであれば対処手段はないに等しい。
諦観にも似た思いで秋弥は構えを解いてから、何となくそちらに声を主がいそうな気がして??空を見上げた。
??ありがとう。あと、もう少し肩の力を抜いていいよ。
「余計なお世話だ」
??世界の均衡を保つ存在というのは、得てして世話好きなんだよ。
「……俺に興味を持ったというのは、どういう意味だ?」
秋弥は単刀直入に本題を切り出した。
秋弥の様子が見えているようらしい意識体とは違い、秋弥からは『彼』の姿が見えていない。姿が見えず、声の性質も読み取れない相手との会話は難しい。相手の表情や声音からの探り合いが出来ない以上、直截的に言葉を紡ぐしかないのだった。
??そんなに慌てなくても、ここでは時間はたっぷりあるよ。
??君の『意（ココロ）』を形にしながらでも遅くはないさ。
??向こうに小さな家が見えるよね？　まずはそこに行こう。

案内役を嘯いていたのは、どうやら冗談ではなかったらしい。
「向こう」と言われてもどの方角かわからなかったので、秋弥は周囲を見回した。
すると、ついさきほど向かってみようと思っていた小さな家が視界に映り込んだ。青い屋根の一軒家を見詰めて、秋弥は『彼』に問い掛けた。
「あれはいったい？」
？？君の世界の中心だよ。

近づいてみると、その家は秋弥の見知ったものだった。
？？着いたね。ここは君の家だ。
周囲の風景が違うので遠目に見たときには気づかなかったが、そこは確かに秋弥が十五年以上過ごしてきた家だった。
「ここが世界の中心？」
？？君のね。
？？中に入ることは出来ないよ。この世界はそういう風に出来ている。
ためしにドアノブに手をかけてみるが、ビクともしなかった。
家は単なる情報として心象世界に固定されているようだ。
？？そこに窓がある。ちょっと中を覗いてみよう。
促されるままに庭を通って裏手へと回り込むと、リビングに繋がる窓から中を覗き込んだ。
「……」
そこには四人の人影があった。
秋弥の両親と姉、そして生まれたばかりの秋弥自身の姿だ。
ただしそれは？？、
？？顔の無い父親。
？？色の無い母親。
？？そして鮮明な姉の姿だった。

言葉もなく、息を呑んでその光景を見詰める秋弥。
それに構うことなく、星の意識体は言葉を紡ぐ。
???それが君の世界。その中心だ。
改めて、星の意識体は断定する。断言する。
???君の意識が生み出した、精神の最も深い部分だよ。
「……これは一体何の真似だ？」
???そんなに怖い顔をしないでくれないかな。私は君の話をしているだけだよ。
???それにこれは『意』を具現化させるために境界を越えた皆が体験することだ。
「……」
???君の世界はここから始まった。
???世界は形作られた。家の外がその世界だよ。
「……何も無いじゃないか」
空を見上げる。
相も変わらずに雲一つない澄み渡る青空だけが見えた。
???そうだね。君の世界は、何も無い。
???君が外界に対して何とも感じていないから、何も無くなってしまったんだ。
秋弥はハッとして、直ぐにそれを気取られないように表情を戻した。
「……ずいぶんと知ったような口を聞くんだな」
???知ったような、ではなく、知っているんだよ。
???君の過去から未来までの全てをね。
冗談みたいな話だが、声の主が本当の意味で『星の記録』の意識体であるのならば、それも頷ける。
???普通ならば、もう少し世界は広がっているはずなんだよ。
???今の人間の寿命はせいぜい八十年程度生きれば十分だろうけど、それでも君が生きた時間はそのうちの十五年だ。
???平均寿命で考えれば約二割だよ。

ようやく、星の意識体が何を言おうとしているのか理解出来た。
だがそれを秋弥自身の口から言葉にする前に、星の意識体は言った。
??この世界の造られ方は、明らかに異常だ。
??いや、異変と言うべきかな。
??九槻秋弥。君には何か、心当たりがあるんじゃないのかな？
それは言い得て絶妙な表現だと思った。
この世界そのものが秋弥自身の心が作り出した心象世界であるにも関わらず、『彼』は「心当たり」と言ったのだ。その心象世界に何もないのだから、心当たりなんて当然あるはずもない。
しかし、秋弥には一つだけ思い当たる節があった。
確固たる自信はないが、『それ』が原因である可能性は否定出来ない。
『彼』は疑問形式で秋弥に問い掛けているが、未来すらも記録している『星の記録』が答えを知らない道理はない。
だからこれは秋弥が何と答えるのかを知った上での、確認の問い掛けだ。
??あるんだね、心当たりが。
「……あぁ」
短い言葉を返す。何となくであるが意識体が大きく頷いたような気がした。
??そう、君のは心当たりがある。
??だからここは、君が持つ本来の世界ではない。
??ただし、ここも確かに君の世界だ。
??この世界の中心は君だ。だけど外の世界は、君の世界ではない。
??この世界は二つの『意』空間が混ざり合ってしまっているんだよ。
確かにそうかもしれないと、秋弥は星の意識体から伝わるテレパシーにも似た言葉の途中で思った。

そしておそらく、その原因となっているのは彼の中に眠るもう一つの装具と？？。
？？私が君に語りかけたのは、九槻秋弥という人格を直接確認してみたかったからなんだよ。
？？そして、話してみて確信したよ。君はこんなにも歪んだ世界（こころ）で正常心を保てている。
「歪んだ世界？」
？？そうだよ。
？？君は気持ち悪いと思わないのかい？　こんなにも綺麗な青空があるなんてさ。
別段そうは思わないが、星の意識体にとってはどうやら違うらしい。
？？きっと、君本来の心は別のところにあって、君の意識のアクセスはそちらへと向けられているのだろう。
？？逆に、もう一つの意識はこの世界へと向けられている。
？？九槻秋弥。
と、星の意識体は彼の名前を呼んだ。
？？君という存在は実に面白く、興味深いよ。
？？どうして君は、こんなにも不確かな世界（こころ）で平然としていられるんだい？
「……俺に聞かなくてもわかるか。お前は過去から未来までの全てを知ってるんだろう」
？？私が知っていることは過程と結果だけだよ。それ以上のことは私の管轄じゃないからね。正直に話すと、私には君の心の動きまでは読み取れない。
？？出来れば君の中のもう一人にも出てきてもらいたかったんだけどね。
？？門前払いされてしまったんだよ。
うまいことを言ったとでも思ってるのだろうか。秋弥のものではない笑い声が漏れ聞こえた。

星の意識体も笑うんだなと、秋弥はあまり関係のないことを思っていた。
???つまり、君の中に眠る別の力は、星の用意した『意(マナス)』の門を潜ってきていないんだよ。だから君は装具を召還することが出来なかったんだ。
???ところで、さっき私は君の意識が君本来の心に向いていると言ったけれどね。
???こうして自身のマナスの根源に繋がっているはずの門を潜った先がこの不確かな世界だということだけが、私にはどうにも腑に落ちないんだ。
???過程も結果も間違っていない。君は『意』の根源へと至り、具現化した『意』の力を手にする。その結果に変わりはない。
???なのにこうして、君はこの世界にいる。それは一体何故なんだい？
星の意識体は問うた。
「そんなこと、俺が知るわけもないだろう」
???自分の心なのに？
そう言われてしまえば、秋弥に反論の余地がなかった。
???九槻秋弥という存在は、《星の記録》にとってのイレギュラー因子となり得る。
と、何の前触れもなく、星の意識体は言った。
???結果が何一つ変わらないのに、過程が変化する。
???過程が変化することで、君を含めた周りの人間の結果が変化する。
???それは《星の記録》の想定未来を書き換える結果へと繋がる。
???そんな可能性を、君は持っているんだよ。
「未来は不変ではないのか？」
???不変だよ。永劫不変さ。あらゆる可能性世界を内包しているという意味ではね。
???ただし、その可能性世界を予測することが難しくなる。

？？望む世界の形が変わる。と言っても君にはうまく伝わらないかもしれないけどね。
テレビやニュースペーパーで人が死んだと聞かされても自分には関係のないことだと思えるほど、一人の人間が認識出来る世界は狭い。
星の意識体が語る言葉は、あまりにもスケールが大きすぎて秋弥には理解出来なかった。
？？いっそ世界をあるべき形に修正するために、君の中のもう一人には消えてもらおうかとも考えたときもあったのだけれどね。
なおも、星の意識体は言う。
？？だけれど、私は星の記録から君の一生を覗き視て、今日、こうして直接君と会える機会があることを知った。
？？九槻秋弥。私がこんなことを言うのは多重層世界に対する重大な秩序違反だと思うけれど、九槻秋弥という情報体の未来について少しだけ話そうと思う。
？？もちろん君がこの世界から元いた世界に戻ったときには、私が話したほとんどのことは夢を見た朝のように忘れてしまうだろう。だけど、それで良い。
？？君の意識の根底に私の言葉は残り続ける。そういう風に操作しておくからね。
「……」
饒舌に語る星の意識体に口を挟むことなく、秋弥は黙って耳を傾ける。
？？君はこれから様々な困難に巻き込まれ、立ち向かうことになる。
？？これまでの人生以上に濃密で意味があり、数多くの人々との出会いと別れを経験する。
？？そして君の行動によって周囲の人間の人生が変わる。歩むべき未来が変わる、かもしれない。変動する可能性世界を私の『意』で情報操作することは難しいから、はっきりとしたことは言えない

けどね。
???そのとき、場合によっては《星の修正力》が君と敵対することにもなるだろう。
???それでも、君達二人ならば、その数奇な運命を乗り越えられると私は信じているよ。
「……曖昧な表現が多くて具体性が伴わない話だな」
占いみたいなもんだな、と秋弥は軽く肩を竦めた。
高次元存在との会話というものは一方的なものなんだな、とも。
「誰にだって言えそうな胡散臭い台詞だ」
???だけど私が言う場合とでは、言葉が持つ重みが違うんじゃないかな？
不必要に突っ掛かっておきながら、そのとおりだと素直に納得するのも癪なので、秋弥は口元を吊り上げただけに留めた。
???あまりはっきりと伝えてしまうとね。たとえ忘れてしまうとしても、記憶の残滓がその情報体の未来を変えてしまいかねないんだ。
???因果律は絶対だよ。世界を俯瞰する私が言うのだから間違いない。
???私の言葉で君の可能性世界が少しでも変化してしまうのは惜しい。
???君は稀に見る、良い『観察対象』だ。
それが星の意識体、否、星そのものの本音なんだろう。
???……おや、どうやら少しお喋りが過ぎたようだね。
???君はそろそろ元の世界に戻った方が良さそうだ。
これまで片時も言葉を乱さなかった星の意識体が、少しだけ言い淀んだように思えた。
???皆が心配しているよ、いろいろな意味でね。
と、星の意識体は意味深な台詞を末尾に付け足す。
「……？」
秋弥は疑念に首を傾げたが、星の意識体はそれに答えようとはし

なかった。
??案内役として君が力を得るのを最後まで見届けたし、務めは果たし終えたかな。
独り言のように呟いた星の意識体の台詞にハッとして、秋弥は己の左手を見た。
その左手には、星の意識体が語る歪な世界を彩る、澄み渡る空にも似た蒼色の刀身を持つ不定形の剣??装具が握られていた。
??君の場合、扱い方についての導入(インストール)や設定(マニュアル)は不要だろう。君が意識した瞬間、具現化した君のマナスはそこにある。
??それにしても、なんて歪な色だよ。
??それが君本来の世界(こころ)から生まれたものだとしたら、やはり修正した方が良いのかもしれないね。
抑揚の乏しいその言葉に、かすかに諦観にも似た色が混じっていた気がした。
??九槻秋弥。君とはまた会うことになるだろう。これは全ての可能性世界における確定事項だ。
??そのときこそ、君の本当の世界(こころ)で会おう。
??またね。

★☆★☆★

世界が急激に色褪せていく。
蒼空がバラバラに砕けて、隠れていた岩肌が顔を覗かせる。
起伏のあった草原は均されて土の地面へと変わっていた。
光量が減ったことで明暗が切り替わる。
視界がわずかに、暗がりに染まる。
音が聞こえた。
地面を揺らすような地響きと、人の声だ。

何か、様子がおかしい。
視界が徐々に暗がりに慣れ始める。
その中央に巨大な輪郭が映った。
地下大空洞内で、巨大な怪物が暴れていた??。

第7話「隣神」

★☆★☆★

時間はほんの少しだけ遡る。
秋弥が『マナスの門』を潜ってからずっと、綾は一人で鳥居の方を見詰めていた。
「あれ、シュウ君は？」
すると、女子グループから離れて戻ってきた玲衣から声を掛けられた。
「さっき装具選定を受けに行ったよ」
「そっか。ありがと」
「あれ、牧瀬と朱鷺戸さんだけなの？」
続いて堅持が二人のところへ戻ってきた。
堅持の問いが前の玲衣と同じものだったことに苦笑しながら、綾は答えた。
「はい、九槻さんは装具選定に行きましたよ」
同じ問い掛けに対して、今度は丁寧語で答える。
彼女の家系？？朱鷺戸家は血統を母方に求める女系制の家系だった。
その直系である綾は幼い頃より母親から封術の手ほどきを受けて育ってきた。
反面、あまり男性とは接する機会に恵まれなかったのである。
（頭ではわかっているのに、難しいなあ）
男の人とどのように接していいのか。綾は未だにその距離感を掴めずにいた。
（やっぱり、よそよそしいって思われちゃうのかな）

だけど幸いなことに、「ふぅん」と応じた堅持に気分を害した様子は見られなかった。
そもそも堅持と面識を持ったのは今日が初めてなのだから、綾のよそよそしい態度は別段不自然なものではなかったのだが？？生真面目な性格の彼女にはそのことにまで気が回らなかった。
「じゃあ三人で待とうぜ」
「そうだね。そうしよっか」
そんなことを考えているうちに、堅持と玲衣は二人で話を進めてしまっていた。
（どうして二人は、こんなに直ぐに仲良く出来るのかな）
とてもじゃないけど自分には真似できそうもないなあと、綾は思う。
「そうだ。ねぇねぇ、綾の装具ってどういうのなの？」
「私の装具ですか？」
急に話を振られて、綾は眼を白黒させた。
「うん。見せてほしいなぁ」
「あ、オレもちょっと気になるな」
「えっと……、ちょっと待ってね」
興味津々といった様子で瞳を輝かせる玲衣の視線に半ば押されるようにして、綾は両の手を首の後ろに回すと、首飾りを外して手の中に収めた。
「綾の装具はネックレスにしてるんだね」
玲衣の言葉に頷く。
心象世界から持ち帰った装具はそれ以後、指輪や首飾りのような装飾品の形で待機させておく場合が多い。
これは封術師が装具を召還させる際に、装具の元となる情報体が形を持って存在している方が召還に要する時間を短縮できるからである。
もちろん、ちゃんと訓練すれば形を保たなくても装具の召還は可能になる。

綾は首飾りを両手で包み込むと、祈りを捧げるように額へと持っていった。
（??きて）
瞬間、首飾りは装具へと形を変えていた。
両手を胸の前まで下ろす。
装具の召還には情報体の再構成に伴う過剰光（オーバーレイ）は発生しない。
装具召還のプロセスは事象の改変とは少し異なるらしいのだが、詳しいことは綾にもわからなかった。
「これが、私の装具です……」
恥ずかしげに目元を伏せながら、両の掌を上にして装具を玲衣達に見せる。
「えっ……でもこれって」
と、玲衣の口から戸惑いの声が漏れた。
「これが装具なのか？」
堅持の口からも同じ種類の声。
「どうみても御札だよね？」
綾の両手??その親指を除く八本の指の間には合計六枚の札が挟まれていた。
表面に紋らしき模様が刻まれたそれは確かに御札そのものだった。
「これは術符『祈札（いのりふだ）』です」
二人にまじまじと見詰められて、綾は頬をほんのりと上気させた。
「へぇ……朱鷺戸さんの装具は刃の無い装具なんだ」
「すっごい。あたし、初めて見た」
「オレもだぜ。といってもクラスの奴らの装具しかしらねぇんだけど」
「装具は『心の刃』、なんて言葉があるくらいだもんね。……あれ、刃の心だっけ？　まあどっちでもいっか。とにかく珍しい装具なんだよね、きっと」
「私の家系では……、その、皆こういう形の装具だったから……」
「あっ……と、ごめんごめん。こらっ堅持！　いつまでジロジロと

見てんのよ」
「あ、いてっ！？」
綾が暗がりでもはっきりとわかるほど赤面していることにようやく気づいた玲衣は慌てて謝罪の言葉を口にすると、脇に立つ堅持の頭を軽く叩いた。
「ったく、少しは手加減しろよな……。ごめん、朱鷺戸さん。気ィ悪くさせたか？」
「いえ、良いんです。こちらこそごめんなさい。つまらないことでお二人に変な思いをさせてしまいました」
「うぅん。装具を見せて、なんて言ったのは私達なんだから、綾が謝ることじゃないよ」
ばつが悪そうに語気を弱めた玲衣に、綾は頭を振って応じた。
「……えっと、私の装具は見てのとおりの御札で、沢村さんの言うとおり刃はありません」
気まずい雰囲気を打開するため、綾はその発端となった装具へと話題を向けることにした。
「……ふぅん、なるほどな。そういうタイプもあるんだな」
「これはどんなカテゴリに含まれるの？」
「特殊型遠隔系術符っていうんだよ。絶対数は少ないから……うん、少し珍しいかもしれないね」
答えながら、朱鷺戸家の封術師は皆が同系統同形状の装具だからあまり気にしなかったなあ、と綾は思った。
装具は人の心が具現化して形を得たものだと言われているが、その心の有り様が家庭環境に依存するものなのか、はたまた血縁に依存するものなのか。その謎は未だ、解明されていない。
だがしかし、『星鳥（ほしどり）』に連なるほとんどの家系は、系譜レベルで同系統同形状の装具を持っているという事実もまた、確かに存在している。
「特殊型かぁ。ちなみにオレと牧瀬は強化型だぜ」
「私達とはタイプからして完全に違うんだねっ」

「お二人共個性があって良いと思います」
別段意識したわけではないが、半ば以上自身の血縁に対する皮肉が篭められた台詞を綾はうっかり口に出してしまった。
しかし、彼女の家庭事情を知らない二人は特に気に留めた様子もなく、「そうだよな」と頷き合っていた。
「そういえば、綾はいつ頃に装具選定を受けたの？」
「中学校に進学した頃だから……、だいたい三年前くらいかな」
「じゃあ三年も先輩だね。これからは調律についていろいろ教えてね」
はにかむような玲衣の笑顔に、綾も微笑を返す。
「封魔はオレに任せろってんだ」
仲間はずれにされたと思ったのだろう。堅持が拳を握って息巻く。
「私達にはシュウ君がいるから、堅持の出番は皆無だね」
だがそれを、玲衣は冷たくあしらった。
「ん……、秋弥？」
と、今までならば直ぐに憤るはずの（綾の視点からでもそう見える）堅持が、玲衣の言葉に疑問符を浮かべた。
「そういや秋弥のヤツ、まだ戻ってきてないのかよ」
堅持の呟きに、綾はすぐさまカード型端末で時刻を確認した。
「……もうそろそろ五分くらい経ちますね」
「五分って、すっごい遅くない？」
現層世界と心象世界では時間の流れが異なっている。それは三人共が身をもって体験済みのことで、同時に自身の体感時間に対して現層世界の時間はほとんど進んでいなかったことも知っていた。
「おいおい。まさか心象世界（向こう側）で何か問題が起こったわけじゃないだろうな」
不安げな声で呟いた堅持を、玲衣はキッと睨み付けた。
「バカなこと言わないで！　シュウ君に限ってそんなことがあるわけないじゃない！」
「おあっ……わ、悪かった」

思い掛けず本気の怒気を含んだ玲衣の口調に、堅持は反射的に己の非を詫びた。
「……とりあえず、先生のところに行ってみませんか？」
急に声を荒げた玲衣に驚いて身を強張らせていた綾だったが、立ち直ると二人に恐る恐るそう提案した。
「そうだな。牧瀬も一緒に行こうぜ」
「うん……」
堅持を先頭に、三人で袋環のところへと向かう。
何事かとこちらを注目する袋環に、堅持が代表して訊ねた。
「すみません。秋弥……九槻が五分以上経ってもまだ戻ってきてないんですけど」
「何？」
袋環が名簿に視線を這わせる。おそらく名簿にメモした門の入出時間を確認しているのだろう。
「……ふむ。確かに少し遅すぎるな」
名簿から視線を上げた袋環が眉を顰める。
「しかし、マナスの門は他人の干渉を完全に断絶する。中で何かあったとしても私達にはただ待つことしか出来ない」
袋環が眼を伏せて首を横に振る。聞き様によっては冷淡とも取れる言葉と仕草に、堅持が苦い顔をした。
「……お前達が心配する気持ちもわからないでもないが、現実世界と心象世界のズレは必ずしも等価であるとは限らない。例えば現層（こちら）世界（の世界）での五分が心象世界（向こうの世界）での三十分かもしれないからな」
気休めを言っている風ではないのは、袋環の真剣な口調から感じ取ることができた。
「だからお前達も、あまり気張らずに九槻が戻るのを待ってると良い」
堅持と玲衣に目を向けると、二人共わずかながら緊張が和らいでいる様子が窺えた。
「わかりました。……門のそばで待ってようぜ」

堅持の提案に、綾は玲衣と揃って頷く。
袋環はそれ以上何も言わず、再び鳥居の柱に背を預け直した。
「まあ心配してても埒が明かないし、気長に待とうぜ」
「そうよね。シュウ君なら大丈夫」
それは自分自身に言い聞かせるための言葉に聞こえたが、うんうん、と頷く玲衣の様子に、綾はこちらまで勇気づけられたような気がした。
「そうだ。玲衣ちゃんって九槻さんの装具って見たことある？」
「え、秋弥って装具持ってんの？　なんで？」
驚きの声を上げる堅持に、綾は神器と呼ばれる装具の話をした。
「へぇ……、そんな凄いものを秋弥は持ってるかもしれないのか。で、秋弥が装具選定を受けに行ってるのは、自分の装具を持っているわけじゃないからってことか」
「玲衣ちゃんは小学校から九槻さんと同級生だったんだよね。何か知らないかな？」
この話もまた堅持にとっては初耳だったのだが、口は挟まずに視線を玲衣へと向けていた。
「少しなら知ってるよ。でも『アレ』は神器とはちょっと違うと思うな」
ある意味では神器だけど、と玲衣からは意味不明な答えが返ってきた。
「もしかして綾、シュウ君に興味あるの？」
「っ！？　ち、違うよ。そういうのじゃないから」
思いもしない方向へと話が転換しそうな気がした綾は両手と首を振った。
頬がわずかに紅潮したのは緊張によるものだと、思い込んでおく。
確かに初めて会ったときからカッコいい人だとは思っていたけれど……、と思考がそちらへとシフトしそうになって、内心で慌てて取り消す。
気持ちを落ち着かせるために、ひとつ深呼吸をした。

「そういうのじゃなくてね……。えっと……、あれ？　神器じゃないの？」
思い返してみれば、秋弥も確か同じことを言っていたような気がする。
「うん。剣の刃が深い赤色で、何か凄い形ををしてるんだよ」
身振り手振りで形状を表現する玲衣に、綾は首を傾げた。
玲衣の怪しげな行動に、ではなく、彼女が『それ』を装具と言わずに単なる『剣』と言ったことに対して引っ掛かりを覚えたのだ。
「きゃあ？？？？？？？？？っ！」
しかしその違和感は地下大空洞内に突如として響き渡った甲高い悲鳴によって、形になる前にかき消された。
「な、なんだ！？」
堅持が素早く左右へと視線を向ける。
声が空洞内に反響していてその出所がわかりづらいため、直接眼で確認しようとしているのだろう。
「見て、門が！」
と、いち早く何かに気づいた玲衣が『マナスの門』の方を指差した。
玲衣が示す先を眼で追うと、門の境界面が大きく波打っていた。
その波紋の広がり方は、人の出入りに発生するものととても良く似ており、そして綾のその思いを裏付けるように鳥居の向こう側？？心象世界から女子学生が勢い良く飛び出してきた。
「きゃーっ！？」
女子学生は足の裏から伝わる地面の感覚が唐突に変化したことで足を縺(もつ)れさせた。
駆けていた勢いもそのままに数メートルの距離を危なげに移動した後、盛大に転倒した。
「うわっ、痛そう……」
玲衣が眉を寄せて小さく呟いた。女子学生の一番近くにいた綾達は、何事かと彼女のそばへと駆け寄った。

「おい、大丈夫か？」
「あ……ぇ……ああ」
堅持が声を掛けるが、気が動転している様子の女子学生は口を開閉させるだけで、言葉にならない音を発することしか出来なかった。
（いったい何があったんだろう）
綾の内心の疑問は、直ぐに違う形で明らかとなった。
堅持と玲衣が気遣わしげな視線を女子学生へと向ける中、領域に何かが干渉する気配を感じ取って門の方を見詰めていた綾はそれに気づいた。
鳥居と綾達の間に唐突に発生した空間の裂け目。その隙間から、高い異層認識力（オラクル）を持つ者にしか見えない高密度のガス状の塊が溢れ出していた。
それは徐々に形を成して、やがては身の丈三メートルを超える黒い巨人を形造った。
「？？隣神！？」
綾は咄嗟の判断で装具？？術符『祈札』を召還すると、そのうちの五枚を周囲の地面に向かって均等に放った。予め硬質化の情報改変を与えていた術符が地面に突き刺さったのを確認すると、残った一枚に素早く術式を送りこむ。手札の一枚を中継して、地面に配置された札同士が白色光で結ばれた。
無意識領域での演算処理を終えると、綾を中心にして五芒星の結界術式が発動した。
「玲衣ちゃん、沢村さん。結界の外には出ないでね」
「……星条の波障に中てられて隣神が顕現（現れた）したのか」
と、いつの間にか鳥居から離れて綾達のそばまで来ていた袋環がぐったりと項垂れたままの女子学生を一瞥して言った。
「星条？」
聞き覚えのある名前に、綾は小首を傾げて聞き返した。
「それは『星鳥』序列一位の、あの星条ですか？」
「そうだ。朱鷺戸、すまないがそのまま結界を維持し続けてくれ。

他の学生達の退避が完了したら、直ぐにコイツの始末をつける」
そう言うと、袋環は綾の返事も待たずに綾達に背を向けて離れていった。
「おいおいおい、どうなってんだ。何で隣神が顕現したんだよ」
「波障ですよ」
袋環の言葉をそのまま引用すると、「波障？」と玲衣が問い返した。
「波長障害？？心象世界で何があったのかはわからないけど、この方？？星条さんの心の乱れが自分自身の『波』を暴走させてしまった。そして暴走した『波』が領域の『波』と共鳴現象を発生させてしまったのよ」
説明しながら、綾は別の事を考えていた。
波長障害が起こる例としては心の奥底に仕舞い込んだトラウマを引き出された場合や、心を大きく揺さぶるような外的な衝撃が挙げられる。
ただし、世界を構成する『波』には必要十分以上の緩衝（バッファ）が組まれていると、世界多重層構造理論は示している。人間という情報体が持つ『波』に障害が発生した程度では、世界の『波』に干渉することが難しいとも？？。
しかし、現に目の前には顕現した隣神がいて、今にも綾達に襲い掛かろうとして大きく膨らんだ右腕の拳を握り締めている。
女子学生？？『星鳥の系譜』序列一位の家系である彼女の『波』はそれほどまでに強大だということだろうか。
「共鳴を起こすと現層領域の波長域が拡大する？？そこを通り道（ショートカット）にして隣神が顕現したんだと思う」
「それってすごく拙いことよね……。あたし達どうなっちゃうの？」
玲衣が綾と隣神を交互に見詰めて、不安げな声で言った。
その疑問に、綾は小さくかぶりを振る。
「袋環先生が封魔で撃退してくれるのを待つしかないよ……」
気休めならばいくらでも言える。

だけど綾は下唇をかみ締めながら、純然たる事実のみを告げた。
結界術式を発動中の術師は他の封術を一切使えない。仮に使えたとしても、綾が使える低級の封魔術式では、目の前の巨人を牽制することすら難しい。
今の自分に出来ることは、とにかく隣神の攻撃を耐えるための結界に注力することだけだった。
「オォオオォオオオォオオォオオォオォオォオォオン」
と、隣神は己の置かれた状況を理解し始めたのか、空気を震わすほどの雄叫びを上げた。
「ちょ、ちょっとまっ……」
「きゃっ！？」
堅持が戸惑い、玲衣が短い悲鳴を上げる。
雄叫びと同時に、隣神は握り締めた拳を振りかぶった。
乾いた音が大音量で響く。
「……うっ」
数瞬遅れで、綾の表情に苦悶の色が浮かぶ。
隣神の放った拳は結界に阻まれて綾達へと届くことはなかった。
しかし、即席で発動させた結界では隣神の攻撃を相殺しきることが出来ず、余剰分が術者の精神に負荷を与えていた。
「綾、大丈夫っ！？」
「……平気だよ」
心配そうに眉根を寄せる玲衣に、綾は努めて気丈に振舞ってみせる。
いま、この場で満足に封術を使えるのは自分だけだ。
だから、綾が三人を護らないといけない。
そんな使命感が、彼女の心を満たしていた。
「ウォォオォオォォォォ」
いっそう大きな声とともに、二度、三度と拳が放たれる。
結界と拳がぶつかった点を中心にして、蒼色の光情報流が放射状に拡散する。

そのたびに、綾の表情には苦悶の色が深みを増した。
封術師としては見習い以前の素人に近い玲衣の眼から見ても、綾の張った結界があまり長く持ちそうにないことがわかった。
結界が壊れるか、綾が倒れるか。どちらが早いだろうか。
「ったく、袋環センセは何してんだよ！」
危険の最前線に身を置きながら何も出来ない自分に腹を立てたのか、八つ当たりにも似た苛立ちを含んだ声で堅持が言った。
視線を上げて、ちらりと袋環の方を見やる。
学生達の避難は終了したように見えるが、袋環は何やら男子学生と口論をしていた。何を話しているかまではわからないが、長く見積もっても後一分ほどは持ち堪えなければならないだろう。
（それまではなんとか……）
頑張ろう、と内心で小さく呟いて視線を隣神に映して？？。
綾は驚愕に眼を見開いた。

★☆★☆★

「でけぇ、何だよあれ！」
「うそ、隣神なの！？」
突然大空洞内に現れた隣神に、学生達は色めき立っていた。
「落ち着け、慌てるんじゃない。無闇に動こうとはせず、一箇所に集まって大人しくしているんだ」
決して大きな声を出したわけではないが、有無を言わさぬ口調で袋環が言う。
装具選定を終えて地面にしゃがみこんでいた学生も、グループで装具談義をしていた学生も、彼女の指示に従って移動を始めた。
その間も、袋環は綾達と隣神の姿を常に視界に収め続けていた。
隣神の雄叫びに続けて、情報体同士が激突し合う音が空洞内に反

響する。
綾の張った結界は隣神の攻撃を何とか防いでいるようだが、簡易結界ではそう長くは持たないだろう。
早く援護に行かなければとはやる気持ちを抑え込みながらに袋環は思う。
「??袋環先生」
と、不意に名前を呼ばれて声のした方を振り向いた。
「……なんだ、鶴木」
「先生、僕も隣神退治に協力させていただけませんか?」
思いもしない鶴木からの提案に、袋環は眼を瞬かせた。
「……やる気があるのは認めるが、あの隣神はおそらくクラス四。お前達一年生が倒せるような隣神ではない」
「お言葉ですが、僕は末席ながらも『星鳥』の一員です。多少の戦闘訓練だって積んでいます」
「勘違いするな。これは訓練じゃない」
底冷えのするような声色と冷え切った眼差しを向けられた鶴木は、言葉もなく立ち尽くした。
??必要以上に萎縮させてしまっただろうか。
しかし、今はそんな小事に構っている暇はなかった。
「私にはお前達に対する監督責任がある。すまないが、わかってくれ」
鶴木を納得させるための理由付けをして彼を下がらせる。
学生達の避難があらかた終了したのを確認すると、袋環は隣神の方へと向き直った。
そして、袋環も気がついた。
袋環と綾達にとっての死角??隣神の背後から正面に回りこむようにして放たれた十数本の黒針が、綾の結界を突き破ろうとして一直線に迫っていた。
今から装具を召還して、慣性や停止の計算を全て除外した跳躍術式を最大出力で発動させたとしても、最早間に合わない。

「朱鷺戸！」
一点に集中させた隣神の攻撃は間違いなく綾の結界を破壊する。
そして、貫通した黒針が結界内にいる綾達を串刺しにするだろう。
誰もがその光景を想像した。

第7話「隣神」（後書き）

一部誤字を修正しました。

第8話「魔剣」

★☆★☆★

マナスの門を潜って現層世界へと復帰した秋弥が最初に見たものは、巨大な隣神の後ろ姿だった。

現層世界でどのくらいの時間が進んでいて、何が理由で現層世界に隣神が顕現してしまったのかはわからない。

隣神の体躯に隠れてしまって反対側の状況を窺うことは出来ないが、誰かが隣神と戦っている様子は見られなかった。

と、右腕だけが異様に膨れ上がった隣神がその拳を二、三と奮った。

かすかにだが、隣神の身体越しに光情報流の拡散現象が見える。

誰かが封術結界によって隣神の攻撃を防いでいるのだろう。

視線を隣神から外す。

遠くに学生達の塊が見えた。隣神が顕現した状況で唯一人の封術師である封術教師は何をやっているのだろうかと思っていたのだが、どうやら学生達を一箇所に集めて安全な場所まで避難させていたようだ。

秋弥は視覚情報だけを頼りにして状況の分析を続けていた。

そして隣神の背後にいた秋弥だけが、誰よりも早くそれに気づいた。

隣神の背中？？その肩甲骨辺りの皮膚が不意に波打った。まるで何かが隣神の体内から皮膚を突き破ろうとして暴れているようにも見えた。

それを認めた瞬間、秋弥は左手の人差し指に嵌めていた簡素な銀

色の指輪を装具へと具現化させていた。
しかし、召還された装具はつい先ほど心象世界で手に入れた蒼の刀身を持つ装具ではなかった。
煌々と輝く真紅の剣??。
秋弥はそれを右手で握る。
隣神の背から幾本もの黒針が飛び出したのとほぼ同時に、秋弥は一歩を踏み込んだ。
瞬間、足裏に発生した運動エネルギーを改変して爆発的な加速力を得ると、空中を跳ぶように疾駆した。
結界と隣神の間へ瞬時に割り込むと、全ての黒針が向かう一点に真紅の剣を構える。
剣の刀身と隣神の黒針が接触して、ガラスが割れるような甲高い音が響いた。
「秋弥！」「九槻さん！」「シュウ君！」
突然目の前に現れた秋弥に、結界の中にいた三人が驚きと安堵が入り混じった声を掛ける。
隣神の攻撃を片手で易々と受け止めたまま、秋弥はちらりと結界の方を窺った。
声を聞いた時点で半ば予想していたことだが、結界を張った術者は綾だった。
幾分顔色が優れなかったが、秋弥と眼が合うと微笑みを浮かべた。
その結界の中に、見知った三人以外の学生がいることに気づく。
学生の顔には見覚えがあった。確か装具選定前に袋環に質問をしていた女子学生だ。
意識を失っているのか、今はぐったりとしている。
ふと秋弥は周辺領域の『波』の乱れを感じ取った。直ぐにそれを女子学生の状態と結びつけて、隣神が顕現した原因が波長障害によるものではないかと推測するに至った。
「……領域の調律が必要か」
現層領域と異層領域が混在した領域を元の状態に戻すためには、

調律術式を用いて異層の干渉状態を正す必要があった。
問題はこの隣神をどうするかだが??。
「ウォォオォォォォォォォォン」
視線を隣神へ戻すと、黒針の攻撃を受け止められて激昂した隣神がよりいっそう大きな雄叫びを上げる。
秋弥を新たな敵だと認識した隣神は一点集中で放った黒針を一旦背中へと戻すと、今度は秋弥の全方位を取り囲むように放った。
しかし秋弥はそれに動じることなく、真紅の剣を地面に突き立てると柄に両手を重ねた。
装具を通じて空間領域の情報を意識野へと取り込む。
空間領域から迫り来る黒針の座標情報をトレースすると、全てのポイントに極小の結界術式を展開した。
一つ一つの黒針に、大した威力はない。
綾の張った結界術式よりもやや強度の低い結界だが、黒針一本の攻撃を防ぐのにはそれで十分だった。
全ての黒針が結界と接触して空中に静止する。役目を終えた結界が霧散すると、続いて秋弥は炭素の紐を作り出した。
大気中の炭素を利用した束縛術式??それが地面と黒針を結び付けて隣神の動きを封じた。
「オォォォォォォォォォォォン」
束縛を解こうとした隣神は地団太を踏みながら暴れたが、強固な情報改変を受けた炭素紐の結合はそう簡単には壊せない。
「朱鷺戸、今のうちに後ろに下がれ」
背後から袋環の声が聞こえた。秋弥も首だけで振り返り、玲衣達に向かって軽く頷く。
四人が退避するのを最後まで見届けず、秋弥は正面へと向き直った。
真紅の剣を地面から引き抜く。左の掌に火球を生み出すと、未だもがき続ける隣神へ向けて放った。
「オォオオォォォォン!」

火球は着弾点から周囲に飛び火して隣神の全身を焼いた。空洞内が薄暗いことと隣神の身体が黒色であるため気づかなかったが、どうやら隣神の全身は黒い体毛で覆われていたようだ。
期せずして予想以上の効果に、秋弥はひそかに笑みを浮かべる。
干渉力が弱まって存在が維持出来なくなれば、隣神はこの現層世界から消える。
身動きも満足に取ることが出来ずに身体を焼かれるのは辛いだろうが、死ぬよりはマシだろう。
殺してくれというのならばそれはそれで構わないが、生憎、言語を介するほど、この隣神は高位の隣神ではなかった。
（獣人型。クラス四といったところか）
「オォォォン。ウォォォォウウウウウン」
隣神が膨らんだ右腕をさらに一回りほど膨らませて大きく振りかぶった。最後の力を振り絞って、がむしゃらに秋弥を殴りつけようとした。
秋弥はその拳を受け止めようとして、真紅の剣を身体の前に構える。
大岩を思わせる拳が秋弥に迫ろうとした??。
その瞬間。
隣神の姿が秋弥の目の前から掻き消えた。
何者かによる横殴りの強打を受けて、勢い良く吹き飛んだのだ。
大空洞の壁面に激突する手前で、影のような隣神はその存在ごと現層世界から消滅する。
途端、静寂が辺りを包み込む。
突然の出来事に誰もが言葉もなく呆気に取られている中で、秋弥は構えていた剣を下ろすと、強打を放った闖入者へと眼を向けた。
秋弥の視線の先には、フリルがたくさん付いた赤いワンピースを身に纏い、金色の長い髪を靡かせた十歳前後の少女が立っていた。
燃えるような紅の双眸と、視線が重なる。
少女のそばまで歩み寄ると、秋弥は徐に真紅の剣を少女に向かっ

て軽く投げる。
少女は両手を伸ばして胸の前で受け止めると、ふくれっ面の顔で秋弥を見詰めた。
「リコリスの剣を投げるなんて、酷いわ」
「……どうして勝手に出てきた」
少しだけ困った顔で秋弥が呟く。
少女の姿を認めて、面倒なことになりそうだ、と内心で思う。秋弥の態度から彼の感情を読み取った少女は、きまりが悪そうにそっぽを向いた。
「だってだって、遊びたかったんだもん」
見た目どおりの子供っぽいことを言って拗ねた少女に、秋弥はがくりと肩を落とした。
「しゅう??」
「九槻！　今直ぐそいつから離れろ！！」
と、不意に袋環が大声で叫んだ。
秋弥と少女が揃って袋環を見る。
彼女の緊迫した声音に、我先にと秋弥のところへ駆け寄ろうとしていた堅持達が驚いて足を止めたのが見えた。
「……どうしたんですか、センセ？」
いつの間にか十指に爪型の超近接系装具を装着して全身に緊張感を纏わせた袋環に、堅持が恐る恐る声を掛ける。
「あの少女は……クラス一の隣神だ！」
目の前の光景が信じられないというように、袋環は眼を見開いたまま答えた。
袋環の鍛え抜いた異層認識力（オラクル）は、少女が放つ強大な情報の干渉圧を感知していた。
異層世界の生物である隣神には、その強度に応じて十段階にランク付けがされており、数字が若いほど高い知能と干渉力を有している。
なお、封魔師の場合はクラス四を一人で倒せるようになってよう

やく一人前と認められる。先ほどの黒い隣神は秋弥と袋環の判断による暫定ではあるが、クラス四に当たる。そして、クラス一にカテゴライズされる隣神に対しては、封術師による大規模な討伐隊が組まれるほど強大な存在とされている。
袋環の言葉に学生達がざわめく中、彼女の態度が気に食わなかったのか、少女が憤りの声を発した。
「……何なのアイツ。もしかしてリコリスを殺そうとか考えてるの？」
静かに、壮絶な笑みを向ける。
袋環は本能的に身体を一歩後ろに引きそうになって、すんでのところで踏みとどまった。
「それに、クラス一ですって？　たかが人間が面白いことを言ってくれるわね。貴女達のくだらない尺度でリコリス達を測ろうだなんて、本当に馬鹿馬鹿しいわ」
少女は真紅の剣？？秋弥から受け取った彼女自身の装具を変形させて身体のサイズに合わせると、その切っ先を袋環へと向けた。
「良いわよ。ちょうど遊びたかったところだし特別に相手をしてあげるわ。せいぜいリコリスを楽しませて、死になさい」
言葉とともに、周囲の構造情報が光エネルギーへと変質して剣の切っ先に集中した。袋環は反射的に腰を深く落として高エネルギー弾の射線上から逃れようとした？？
「……いったぁ～い。何するのよ、秋弥様ぁ」
？？のだが、それよりも先に秋弥が少女の前に屈み込んで視線の高さを合わせると、右手を少女の額へと伸ばして軽く小突いた。
その拍子に高エネルギーの情報体は改変前の状態へと戻り、少女の干渉を受けていた領域は潮が引くように緩和していった。
「そんなに痛くしてないだろう……」
小突かれた額を片手で押さえて涙声で訴える少女の頭を優しく撫でながら、秋弥が言う。
幼い子に接するような彼の態度に、しかし少女は嫌がる素振りを

微塵も見せず、むしろ嬉しそうに眼を細めた。
見様によっては微笑ましい光景なのだが、それは少女が同じ人間であればの話だ。
状況が理解出来ずに臨戦態勢を維持したままの袋環と、度重なる隣神の顕現に怯える学生達。地下大空洞内にいるすべての人間の眼が、秋弥と少女の二人へと向けられていた。
秋弥は少女の頭をぽんぽんと軽く叩いてから言った。
「リコリス。すまないが調律を頼んでもいいか？」
「うん！」
秋弥の言葉に隣神の少女？？リコリスは二の句も無く即答すると、刀身が短くなった真紅の剣を地面に突き立てて調律術式の準備に取り掛かる。
そして秋弥は、そんな彼女を背で庇うように立つと、袋環へと向き直った。
「九槻……これは一体どういうことだ？」
説明を求める袋環に、秋弥は何をどう話したものかと逡巡した。
「お騒がせしてすみませんでした」
頭こそ下げなかったが、ひとまず謝罪の言葉を口にする。
「まずは装具を仕舞っていただけませんか？　この娘は教諭の言うとおり隣神ですが、敵ではありません」
つい先ほどまで少女に生殺与奪の権利を完全に握られていた袋環は、秋弥の台詞に眉根を顰めた。
クラス一にカテゴライズされる隣神を前にして、一介の学生の言葉に「はい、そうですか」と簡単に応じるわけにもいかない。
当然、唯一の対抗手段である装具を手放せるはずもなかった。
「……それに、先に装具を召還してこの娘を挑発したのは教諭のはずです。それにこの娘は自分自身を護るために力を使おうとしただけにすぎません。……少し言葉が荒っぽかったかもしれませんが、悪気は無いんです。もう一度だけ言いますが、装具を仕舞っていただけないでしょうか？」

袋環はなおも訝しげな視線を秋弥の背後へと向ける。
その視線の先には彼の言葉に従って、まるで人間と同じように封術を扱う少女がいた。
いまや強大な干渉圧も、身体の芯が凍りつくような戦慄も、全く感じられなかった。
「……わかった。九槻、今はお前の言葉を信じよう」
袋環は大きく息を吐くと、緊張状態を維持しながらも爪型の装具をイヤリングへと戻した。それを見た秋弥が内心で胸を撫で下ろしたことには、どうやら気がつかなかったようだ。
「それで、その隣神は何者なんだ？　それにその装具は一体なんだ？」
腕を組んで全員の疑問を代表して問うた袋環の言葉に、秋弥は溜息を一つ吐いて諦観を込めた声で言った。
「この娘はリコリス。装具は『紅のレーヴァテイン』」
そして？？。
「高位隣神と、近接系魔剣ですよ」

★☆★☆★

特別訓練棟から地下大空洞へと繋がるエレベーターの唯一の途中階。
大空洞に程近いその階には『マナスの門』を一望出来るゲート観測室があった。
学園の封術教師と特別に許可された学生のみしか入室できない観測室に、二人の女子学生がいた。
女子学生達は特殊強化ガラス窓を通して、眼下に広がる大空洞内を食い入るように見詰めていた。
「……驚いたね。あれは本当にクラス一の高位隣神なのかい？」

大空洞内部の会話は観測室に設けられたスピーカーを通じて全て筒抜けだった。
それでも、女子学生の言葉には多分に猜疑の色が滲んでいた。
「……どうやらそうみたいね。しかも隣神があの一年生に従っているようにも見えるわ」
目の当たりにした光景に絶句していたもう一人の女子学生が独り言のように呟く。
「それにあの装具は……異能型？」
その言葉に、一方の女子学生が眼を見開いた。
「まさか！　いやしかし……、あの剣は学生の装具じゃないんだろう？」
「そうね。そう言っていたわ。でも、だとしたらおかしなことになると思わない？　私達は彼があの装具を使っていたところを見ていたはずよ」
女子学生は話しているうちにだんだんと気持ちが落ち着き始めたのを感じた。椅子に深く腰を下ろして息を大きく吐く。
「装具には相性が？？いえ、相性なんていう言葉では片付けられないほどに、装具と担い手の間には強固な繋がりがあるのよ。だって、装具は自分の心が生み出したものなんだから。誰よりも上手に扱えるし、逆に、自分以外の誰にも扱えない……」
「つまり、ユウキはあの装具を神器の一種だと言いたいのかい？」
女子学生？？ユウキは首を横に振った。
「いいえ、そうじゃないわ。……黒い隣神が針で攻撃したときのこと、覚えてる？　あのとき彼は射線上の座標に対して正確に結界術式を発動させていたわ。神器ではあそこまで精密な封術を行使することは出来ない……」
「それじゃあ、いったいどういうことなんだい？」
「わからない、としか答えられないわね」
学園の制服の基調色を反転させた？？学生自治会役員専用の白い制服に身を包んだユウキが、眼を伏せて弱音を吐く。

その様子がよほど珍しかったのだろう。一般学生用制服の右腕部分に赤い腕章を巻いた女子学生がにやりと笑った。
「まあ何にしても面白い一年生だね。今年は大した収穫は無しかと思っていたけれど、最後にとんでもない怪物が現れたもんだ」
女子学生はユウキの隣に腰掛けると、細い腕と長い足を組んだ。事後処理へと向かいつつある地下大空洞での顛末を俯瞰視点から眺めながら、楽しそうに笑う。
「興味あるね、あの力には……」
女子学生は内より沸き上がる感情を押さえきれずに身を震わせた。灰色の瞳に強い意志の光を宿して件の男子学生？？秋弥の姿を瞳に焼き付ける。
「クラス一の高位隣神を従えて、クラス四の隣神を一人で圧倒する一年生かぁ……」
「ユウキも、彼に興味があるのかい？」
「貴女とは違う意味で、だけどね」
肩を竦めるユウキに、女子学生は笑みを返す。
「はは、そうかい。まあでも、ユウキの妹さんも無事で何よりだったよ」
「……ちょっと、私の妹をモノのついでみたいに言わないでよね」
女子学生の物言いにユウキは半ば呆れ気味に言った。
「だけど本当にもうあの子ったら……さっそく心配ばかり掛けるんだから」
「まあ良かったじゃないか。これで彼との接点も出来た」
「だからぁ……」
勝手に妹を利用しようとしないでよ、と言ったところで女子学生は聞かないだろう。
言葉の代わりに、ユウキは大きな大きな溜息を吐いた。

第9話「異能型」

★☆★☆★

「??失礼しました」

装具選定の後で本棟の東側六階にある袋環の研究室??封術学園に籍を置く封術師は学生に封術の手ほどきをする側らで封術の研究を行うための専用の個室が与えられている??へと連れて行かれた秋弥は、それから約二十分後、ようやく退出許可を得てその場を後にしたのだった。

研究室で袋環から問われたことは二つ。

一つは秋弥自身が手に入れた、彼本来の装具のこと。

もう一つは隣神リコリスのこと。

しかしそれは別段深入ったものではなく、単純にリコリスの危険性についての話でだった。

封術師の責務が異層世界から現層世界を護ることである以上、それは当然の確認事項であるとも言えるのだが……。封術師云々以前に一人の現層世界の人間として、本当はもっといろいろと聞きたいことがあったに違いない。

しかし結局、袋環がそれ以上のことを秋弥に訊ねてくることはなかった。

その他に話したことと言えば、次の月例会議で他の封術師教員に装具選定での出来事について説明をするという話と、リコリスの存在が正式に認められるまでは学園内で彼女を呼び出さないようにという注意だけだった。

そもそも秋弥にしてみてもリコリスが顕現したことは予想外の事

態だった。
何せリコリスは現層世界の人間ではなく、異層世界の隣神なのだから。
彼女が秋弥の意思に関係なく己の意思だけで顕現することが出来てしまう以上、袋環の言葉に確約することは出来なかったのだが、その場合には彼自身が抑止力となることで今のところはそれで何とか納得してもらえた。
「シュウ君！」
と、研究室を出たところで玲衣、綾、堅持の三人が不安げな表情で駆け寄ってきた。
「悪いな。いろいろと心配を掛けたみたいで」
秋弥は開口一番に謝罪の言葉を口にする。
「ホントだよ！　もうホントに心配したんだよ！」
「でも、九槻さんが無事で本当に良かったです」
「綾の方こそ、結界で皆を護ってたんだろう。良くやったよ」
瞳を潤ませた綾に、秋弥は笑みを向けた。
「……オレは隣神が顕現したのを見て、すっかり秋弥のことが頭から吹き飛んでたぜ……」
堅持がばつが悪そうに頬を掻いたのを見て、玲衣と綾の二人がわずかに反応したのを秋弥は見逃さなかった。
だが、突然の事に気が動転して自分と周囲のことだけで手一杯になってしまったという三人の心情も十分に理解出来たので、秋弥はそれを見なかったことにした。
と、視線を外した先にある階段の陰にちらりと人の姿が見えた。
ちょうど階段を上がってきた女子学生は秋弥達の姿を見つけると、躊躇いがちに近づいてきた。
その女子学生には見覚えがあった。波長障害を起こして意識を失っていた女子学生だ。
もう歩き回って大丈夫なのだろうかという秋弥の心配をよそに、女子学生は彼らの前まで来ると深く頭を下げた。

「さきほどは助けていただいて、ありがとうございました」
秋弥の活躍については気絶していて知らないはずだから、このお礼の言葉は堅持達三人に向けられたものだろう。
「それに、私の波障で顕現した隣神まで退治してくださったようで……、本当にありがとうございました」
そう思っていたのだが、続く彼女の言葉は秋弥にだけ向けられた言葉だった。
大方、意識を取り戻した後に誰かから聞いたのだろうと、秋弥は勝手に推測した。
「大したことじゃないよ。それよりも、もう動き回って大丈夫なのか？」
「はい」
頭を上げ、元気であることを仕草でアピールする女子学生は何処か天然系だった。
「あ……私、星条奈緒（ほしじょうなお）です。これを機会に仲良くしてくれたら嬉しいです」
ずいぶん嫌な機会だなと顔には出さずに内心で思ったのだが、天然成分の入った女子学生？？奈緒は、自身の放った言葉の違和感には気づかずにニコニコと微笑んだ。
奈緒が『星鳥の系譜』序列一位の星条家縁の者であることは疑いようもない。クラス分けリストの中に彼女の名前を見たときから思っていたことが、秋弥の中で確信へと変わっていた。星条の名が持つ意味と、彼女が持つクラス四の隣神を呼び込むほどの高いオラクルを結びつけることは容易なことだった。
「そうだ！　これから装具選定の終了記念に外の喫茶店に行こうよっ」
「お、いいな。昨日は開いてなかったもんな」
唐突とも言える玲衣の提案に堅持が便乗する。綾はどちらでも良さそうな感じで静かに笑みを浮かべた。
「ねぇ、奈緒も一緒にどう？」

いきなり名前で呼ばれた奈緒は瞳をぱちくりとさせたが、必要以上に距離を取らない玲衣の態度に特に気にした風もなく、嬉しそうに頷いた。
民主主義がどうこう以前に、この状態で秋弥だけが断れるはずもない。
玲衣の無言の問い掛けに、秋弥は首を縦に振って答えを返した。

★☆★☆★

上級生にとっては春休みが明けて初日の登校日ということもあり、また、放課後という時間帯も相まって、本棟の外に設けられた喫茶店には午後のお茶や歓談を楽しむ学生達の姿で賑わっていた。
その中に新入生の姿があまり見られないのは、入学二日目で学園の設備にまだ慣れていないというよりも、上級生ばかりの喫茶店に入ることに躊躇いを覚えているからだろう。そんな新入生達を横目に五人は店内に入ると??上級生達からは若干不躾にもとれる好奇な視線を浴びることになった??全員が座れる席を適当に見つけて腰掛けた。
「ここでの注文手順も食堂と一緒なんだな」
「学園全体で同じ注文システムを組んでいるんだろうな。……玲衣はさっきから何をキョロキョロとしているんだ?」
「えっ!?　ううん、何でもない何でもない。太刀川さん……じゃなかった、夜空君がいたりしないかななんて、そんなこと全然思ってないよ!」
素っ頓狂な声を上げながら、玲衣が慌てた様子で両手をぱたぱたと振る。
「ん……、茶店でバイトしてるって話はまだ聞いてないから、たぶん太刀川はいないと思うぜ」

「え？　なんでわかったの？」
どうやら自分で口にしていたことには気づいていなかったらしい。それだけ昼食の一件が玲衣にとって衝撃的な出来事だったということだ。
「……『まだ』ってことは可能性としてはありえるってことだよね。いつでも心の準備はしておかないとね」
その様子はまるで好きな人の姿を探して焦がれてるみたいに見えた。しかしそれを口にすると玲衣は間違いなく怒るだろうと思い、秋弥は黙っておくことにした？？のだが。
「玲衣ちゃん。何だかそれ、好きな人のことを意識してるみたいだよ」
恋愛話に敏感な年頃である綾が、くすくすと笑いながら言ってしまった。
「そ、そういうのじゃないんだから！　シュウ君も変な勘違いしないでよね」
上気する頬を両手で抑えながら真っ赤になって否定する玲衣に、急に矛先を向けられた秋弥は眼を白黒させた。
「あの、太刀川さんってどなたですか？」
「……知らなければ幸せなこともあるんだよ」
意味がわからずにきょとんとした表情の奈緒を放置して、秋弥は喫茶店メニューからコーヒーをオーダーした。
給仕？？もちろん夜空ではなく普通の学生バイトだった？？がテーブルに全員分のドリンクを運んで後ろに下がると、さっそく今日の出来事についての話題に花が咲いた。
「こう言ったら身も蓋もないかもしれないんだけど、奈緒も災難だったね」
「それでも装具を手に入れた後だったのは救いでした。……もう心象世界には二度と行きたくないです」
そのときの事を思い出したのだろう。奈緒は両腕で自分の身体を抱きしめながら、辛そうな表情で呟く。

誰も心象世界で奈緒の身に何が起こったのかを根掘り葉掘り聞こうとはしなかった。
波長障害が起こるほどの心の揺さぶり??それは彼女の精神のとても深い部分にあって、誰にも触れられたくないトラウマであるからだ。
「……私も、お姉ちゃんみたいにもっと強くなれれば良いんですけどね」
「奈緒にはお姉さんがいるんだ？」
「うん、お姉ちゃんは強くて、格好良くて、何でも出来るんですよ」
綾はまるで自分のことのように、とても誇らしげに姉のことを話した。
「星条さんのお姉さんって、もしかして学生自治会の星条悠紀会長のことですか？」
アッサムの紅茶を頼んだ綾が角砂糖を一つ摘まんでティーカップに落としながら訊ねた。
「お姉ちゃんを知ってるんですか？」
「入学式の日に会長挨拶と送辞をしていましたからね」
堅持と玲衣の二人は揃って首を傾げた。どうやら二人共あまり覚えていないらしい。
ただ、綾が自治会長を覚えていた理由はそれだけではないだろう。
『星鳥の系譜』に連なる家系として、序列一位の星条??その直系血族にして次期跡取りの最有力候補と目されている星条悠紀の名前を綾が知らないなずがない。
それを知ってか知らずか。単に姉のことを知っている人に出会えたからか、奈緒は嬉しそうに笑った。
「私はお姉ちゃんに憧れて、少しでもお姉ちゃんみたいになりたくて封術学園に入学したんですけど……。最初からこんなことじゃ先が思いやられますよね」
しかし、直ぐにその表情に影を落とすと自嘲気味に微笑んだ。
「そんなことないよ！　あたしなんて完全に素人だけど、これから

たくさん勉強していけば良いって思ってるもん。だから、ね、一緒に頑張ろうよっ！」
「オレも封術のことはほとんど知らないけど、秋弥と朱鷺戸さんは頭一つ飛び抜けてるみたいだからな。一緒にいろいろと教えてもらおうぜ！」
「牧瀬さん、沢村君……ありがとうございます」
二人の励ましに、奈緒は眼の端に涙の粒を浮かばせていた。
「そういや秋弥に聞きたいことがあるんだけどよ。あの隣……いや、お前の使った装具は一体何だったんだ？」
堅持は言い掛けた言葉を途中で止めて、質問を別のものへと変更した。それは誰が聞き耳を立てているかもわからない公衆の場で、隣神リコリスの話題を避けた結果だ。
その意味を汲み取った秋弥は目配せした後で言った。
「やっぱり話したほうが良いか？」
「いや、無理にとは言わないけどよ……」
入学早々から不可抗力であるとはいえ隣神リコリスの顕現という予想外の事態を起こしてしまった以上、もはや彼女に関する話題は避けられないだろうと秋弥は思っていた。
リコリスに関わる内容を簡単に説明するわけにはいかないが、彼女の持つ紅の装具であれば、少しくらいならば話しても問題ないだろう。
「そうだな……真紅の装具についてだったら少しだけな」
秋弥はブラックコーヒーに口をつける。
適度に喉を湿らせてから、ゆっくりと口を開いた。
「まず、俺は装具を二つ使える。一つは今日の装具選定でみんなと同じように心象世界で手に入れた装具。もう一つは、星条さんの波長障害で顕現した隣神を還そうとして使った紅の装具だ」
「……あ、あの！」
と、両手でグラスを持ってストローでジュースを飲んでいた奈緒が急に大きな声を出した。

「ん、どうした？」
「えっと、その……」
奈緒はしどろもどろになりながら、頭の中で組み立てた言葉を必死に口に出そうとしていた。
「あの……、私のことは名前の方で呼んでもらえますか？」
言った途端、恐縮したように視線をグラスの中の液体へと移して俯いてしまう。
「へ、変な意味とかじゃないんです。名字で呼ばれるとお姉ちゃんと混同しちゃうかもしれませんし、それに名前で呼ばれる方が慣れていますから」
慣れの問題なのかなと思いつつも、秋弥は深く考えずに「わかった」と応じた。
「それじゃあ話を戻すけど、俺自身の装具については今は置いておくとして、真紅の装具の話だな」
「『神器ではない装具』ですよね？」
「そうだ。神器と呼ばれる装具が何を指しているかはもう知っているだろうから省くぞ」
全員の顔を見回して頷きが返ってきたのを確認する。
「近接系魔剣『紅のレーヴァテイン』？？それが真紅の装具が属するカテゴリと名前だ」
「装具の系統はどちらになるんですか？」
綾からの二択を前提とした質問に、秋弥はわずかに逡巡した後、やや声を潜めて言った。
「……異能型だ」
その瞬間、全員が驚愕に眼を丸くした。
装具の系統には『強化型』と『特殊型』にカテゴライズすることが出来ない特別な系統が存在している。それらは『異能型』としてカテゴライズされるのだが、そのほとんどが机上の空論に近い例外的な性質を持ち合わせているとされている。
何故なら？？。

「奈緒、異能型の定義を知っているか？」
不意に秋弥から視線を向けられた奈緒は、質問を反芻してから答えた。
「……異能であること、ですか？」
あまりにもそのままであったため、秋弥は軽く吹き出してしまった。
「な、何で笑うんですか！？」
「いや、悪い悪い……。奈緒の言うとおり、異能型は異能であるから、異能型なんだ」
「ごめんシュウ君。全然意味がわからないんだけど」
首を傾げる玲衣と、それを見て首を傾げる綾。
秋弥は知る由も無いことなのだが、綾は彼が現層世界を離れている間に、玲衣から彼の装具の話を少しだけ聞いていた。その際に綾は、玲衣が彼の装具について詳しく知っているものだと思い込んでいたのだが、今の彼女の様子から、どうやらそうではないらしいことがわかった。
「なら玲衣に聞くけど、強化型と特殊型の違いを説明出来るか？」
「うん。入試の基礎知識だもんね。強化型が使用者や装具自体に干渉することに特化したもので、特殊型が自分の領域を生み出して支配下に置くことで、空間領域に干渉しやすくすることに特化したもの……だったよね」
「入試レベルで言えば、ほぼ正解だ。装具の系統は大きくこの二種類で系統分けされている。例えば堅持の装具は強化型で、綾の装具は特殊型だったな。両者に違いは、その人物の人生そのものの違いとしか言えないだろう。生まれてから？？あるいはそれ以前の血縁から現在までに育んできた心の形が、装具の系統や形状として表れる」
心の有り様によって系統が決まるという考え方は心理学的な観点から判断されたものであり、必ずしもそれが当てはまるとは限らない。

しかし、心理テストのような自己分析もあながち間違っているというわけでもなかった。
「そうだな……、もっと具体的な例を挙げると??これはあくまでも心理学と統計学に基づいたものだから、自分のことだとは思わないで聞いてほしいんだけど??強化型の持ち主は自意識過剰であったり、自己防衛が強い傾向がある。特殊型の持ち主は他人に依存しやすかったり、優柔不断な一面が多く見られたりする傾向がある。まあこれは最も典型的な例だけどな」
一度言葉を切り、コーヒーで再度喉を潤す。
「自身を世界の中心として考えたとき、この世界には『自分』と『他人』しか存在しないことになる。このとき、それを二元論的に捉えるのではなく定量的に捉えれば、人間の心の有り様はそのどちらかに必ず傾倒する。その結果が装具の系統や形状となって、それぞれの違いを生み出す。そして異能型というのは、強化型の傾向にも特殊型の傾向にも当てはまらないものを示している。心の有り様として言うなら極端な話、自分という殻に閉じこもることも、他人に何かを求めたりもしないってところか」
「え、それってどういうことなの?」
「……つまり、人間としての心の有り様を逸脱しているということだよ。もちろん特殊なケースは存在するけれど」
「だから、普通は考えなくても良いんだね」
ソーダフロートのアイスクリームを突きながら、玲衣が言った。
「そういうことだ。人が操る装具においては、ほとんど必然的に異能型という系統を消去法で除外出来てしまうんだ」
「えっと……つまりあの紅い装具は、九槻さんのものではないということですよね?」
「それって、神器ということですか?」
装具が本人以外使えないことは封術を行使する者の常識であり、本人以外でも使える装具は神器と呼ばれていることもまた常識となっている。

話をまとめると、秋弥は紅の装具を使えるが、その紅の装具は異能型であり、異能型は人の心からはほとんど生まれないという。これらの条件を満たすことができる装具は神器以外有り得ないのではないのかと、奈緒は思っていた。

その疑問に対して、綾は「あれ？」と首を傾げていた。『神器ではない装具』を謳いながら、それでは神器と何ら変わらないではないかと……。

思案気な二人の様子を見て、秋弥は苦笑した。

「二人共間違ってはいないんだけど、現代（いま）の封術体系ではそれをうまく表現出来る言葉がないんだよ。だから今は、そういうものだと思ってほしい」

自分で言っていて可笑しくなるくらい曖昧な表現ではあったが、『星鳥の系譜』である二人にはその言葉だけで十二分に伝わったようだ。残りの二人は、もとより何でも良さそうだった。

紅の装具は秋弥の装具でもなければ、ましてや封術体系によって定義された神器にも当てはまらない。それは隣神リコリスの装具であり、秋弥はある事情からそれを使えるというだけのことだった。

「異能型と他の系統がどう違うのか、これで大体わかったと思う。それじゃあ一体、異能型の装具は何に特化しているのかというと？？」

とはいえ、異能の説明は非常に難しい。それが示す範囲は限りなく広く、一概にこれだと言えるものがなかったし、何より周知のサンプルケースがほとんどない。よって、秋弥は紅の装具を例にして説明することにした。

「たとえば、真紅の装具は原質（メディオン）への干渉に特化している」

ただし、この説明は正鵠を射てはいない。

秋弥は紅の装具が持つ異能の本質を隠し、広義的な捉え方が出来る言い方を選んだ。

「原質への干渉？　それって普通の干渉と何が違うの？」

「玲衣の言っているそれは情報体への干渉のことだろう。根本的に

違うぞ」
「あ、そっかー……、ってごめん。全然わかんない」
「……まあ仕方ないか。事象改変のプロセスは情報体が持つ原質の組み換えで、それはどちらか言えば化学変化に近いものだからな。一のものからは一のものしか作れないし、十のものからは十のものしか作れない。情報体への干渉というのは常に等価交換であって、また、ある側面では質量保存の法則にも縛られたりもするからな」
「あっ」
思わず声を上げたのは綾だった。彼女は直ぐに紅の装具の異能性について察しがついたようだ。
それでも頭を捻る三人のために、秋弥は言葉を続けた。
「原質への直接干渉なら、それらの必要条件を満たさなくても事象の改変が出来てしまうんだよ。何故なら、基になるものが情報体ではなく原質そのものだからな」
情報体が持つ九つの原質の総量は決まっている。事象の改変は基となる情報体が持つ原質の総量以上の改変を行うことは出来ないし、各原質の量によって術式で改変可能な事象にも制限が生まれる。
しかし、世界を満たすメディオンに直接干渉出来るのであれば、一から十を生み出すことはおろか、原質から情報体を生み出すことだって出来る。
「おぉ、なるほど！　何となくわかったぜ！」
「えぇ！　それってすごくない！？」
「そっか、だから異能……」
三者三様に驚きと納得の入り混じった声を上げた。
その様子を見て、秋弥は紅の装具について偽りの情報を含めたことに少しだけ胸が痛んだのだが、それをおくびにも出さずに温くなったコーヒーを口に含んだ。

第9話「異能型」（後書き）

説明回です。

第１０話「学生自治会」

★☆★☆★

鷹津封術学園に入学して約三週間が過ぎた頃。
午前の授業を消化し終えた秋弥は、いつものように彼のまわりに集まってきた玲衣達と他愛の無い雑談をしながら学生食堂へと向かっていた。
装具選定での事件の顛末については今のところ三組の学生達にしか知られていない。
学園の封術師教師全員が集まるという月例会議。そこで何らかの判断が下されるまでは不必要な混乱を招かないようにと、袋環から緘口令が敷かれているためだ。
不本意ながら三組のクラスメイト達から一目を置かれる立場となってしまったというのに、この上月例会議の結果如何で一体どうなることやらと、秋弥は今から気が重かった。
とはいえ、人の噂も七十五日。
クラス内においてはある程度落ち着きを取り戻し始め、ずいぶんと遅れ気味ではあったが平穏な学園生活が始まろうとしていた矢先の出来事だった。

『？？……や君。至急学生自治会室までお越し願います』

唐突に鳴り響いた学内放送の内容に、秋弥は眉根を顰めた。
「おい、今何かお前の名前が呼ばれたような気がしたんだけど」
普段から学内放送に意識を傾ける者は少数だろう。多くの場合、

それは自分に関係の無いことであるか全体に関係のあるであるかのどちらかなので、部分的に聞き取れればそれで大体の内容を察することが出来る。
秋弥達は足を止めてそれぞれのデバイスを展開した。放送は学園内に設置された埋め込み式のスピーカーから発せられていたが、同時に学内ローカルネットの連絡欄にも同様の情報が展開されているのが常だった。

『??繰り返します。一年三組の九槻秋弥君。至急学生自治会室までお越し願います』

再度、同じ内容の放送が響く。
「ホントだ、シュウ君のことだね」
「学生自治会からの呼び出しですか」
「大方、何か悪いことでもやったんじゃねぇの?」
「シュウ君とあんたを一緒にしないでくれないかなっ!」
「ん? 奈緒、どうした?」
堅持達が口々に言い合う中、奈緒が何か思うところがありそうな表情でこちらを見ていた。
「……もしかしたら、お姉ちゃんからの呼び出しかも」
「お姉ちゃんって……。あ、そっか。奈緒のお姉さんって自治会長なんだよね」
「うん。この間、家でお姉ちゃんから九槻君のことを聞かれたから。あっ、でもでも変なことは何も言ってないよ」
「ううん……、だとすると何の用事なんだろうね?」
「さあな、行ってみればわかるだろう」
玲衣達からの視線を向けられた秋弥は、軽く肩を竦めて答えた。
また何か面倒なことが起こりそうな予感をひしひしと感じてはいたが、情報が不足している状態で無駄な憶測をしてやきもきしていても詮無きことだろう。

学生自治会室があるのは本棟東一階。南二階の学生食堂へ向かうために秋弥達が歩いていたのは本棟西二階。それほどの距離があるわけでもないが、話の内容によっては時間が掛かってしまうかもしれない。

「とにかく、ちょっと行ってくるよ。どのくらいで戻れるかわからないから、昼食は先に食べててくれ」

「オーケイ。後で話聞かせろよな」

手を上げ、玲衣達と別れた秋弥は足早に学生自治会室へと向かった。

★☆★☆★

本棟東一階、学生自治会室。

その入口の前に立った秋弥はデバイスから学内施設の学生自治会を選び、表示された各種メニューから入室者許可リストを開いて自分の名前を探して選択した。

数秒後、自治会室の電子錠が解除される。科学技術が発展し、デバイスを用いることで日々の仕事や雑務が機械的に行われるようになったが、開錠の判断だけは部屋の管理者によってリアルタイムに行われる。それが開いたということは秋弥の入室が内部にいるであろう役員の誰かに認められたということになる。

「失礼しま??」

扉に手をかけ、開きながら挨拶をしようとしたところで秋弥は出掛かっていた言葉を止めた。

床に敷かれた毛先の長い絨毯。ローテーブルを挟んで一度座ったら沈んだ身体を起こすことが容易ではなさそうな三人掛けのソファが二脚。壁には過度な装飾が施された調度品の数々が並んでいる。

ここが学園の一施設内であることを忘れてしまうほどに絢爛豪華

な様相に、秋弥は一瞬だが言葉を失った。
「……失礼します」
咳払いこそしなかったものの、尻切れていた台詞を仕切り直して学生自治会室へと入る。
「いらっしゃい、九槻君」
入口から見て正面奥に備えられた執務用机の向こう側から、柔らかく穏やかな声で迎えられる。
「直接会うのは入学式以来かしらね。元気にしてた？」
「ご無沙汰していました。星条会長は元気そうですね」
そばまで近寄ると、白の制服に身を包んだ学生自治会長？？星条悠紀（ゆうき）は左右で色の違うヘテロクロミアの瞳を弓なりに細めてニコリと微笑んだ。その仕草につられて揺れたウェーブの髪が背後の窓から差し込む日の光を浴びてキラキラと輝く。
「覚えててくれたんだね。少し嬉しいかも」
「会長が俺の方を覚えていたことの方が驚きですよ」
秋弥は入学式の折に悠紀と少しだけ話をしたことがあった。新入生総代としての秋弥の答辞は、学園と在校生の代表である悠紀からの送辞に対して行われたものなのだから、それも必然と言えるだろう。交わした内容はほんの些細なものでほとんど覚えていなかったが、星条の名は彼の記憶に深く刻み込まれていたのだった。
「私は学生自治会長ですよ？　全学生の名前と顔を覚えていてもおかしくはないでしょう？」
本気なのか冗談なのか。人の良さそうな笑みに隠れて真意を読み取ることが出来ない。おそらく後者だろうが、否定する材料も見つからないので黙っておく。
「急に呼び出してごめんなさいね。何か飲み物を用意するから、そこのソファに座って少し待っていてね」
そう言って示されたソファには既に先客がいた。悠紀と同様に自治会役員専用の制服を着た男子生徒が眼を伏せ、腕を組んで座っている。

秋弥は促されるままにソファに腰を下ろすと、男子生徒が徐に瞼を開いて秋弥を見た。
「僕は副会長の朝倉瞬(あさくらしゅん)だ。君は？」
「……一年の九槻秋弥です」
秋弥の学年を聞いた男子学生？？朝倉は、眉をわずかに動かした。
鼻歌交じりに紅茶を淹れている悠紀をよそに、初対面で会話の無い二人の間に気まずい沈黙が生まれる。
会長だけではなく副会長まで交えて一体何の話をするつもりだろう。全学生を統治するツートップを前にして秋弥が思考を巡らせていると、ソーサーに乗ったティーカップがそっと彼の前に差し出された。
「お待たせしたわね」
三人分のティーカップを並べ終えた悠紀は、朝倉の隣に一人分の間を空けて腰掛けた。
「九槻君の口に合うかはわからないけれど、まずは紅茶をどうぞ」
笑顔でそう進められてしまえば断り辛い。
セットで用意された角砂糖やミルクには手を付けず、ストレートのままでソーサーからカップを取り上げる。紅茶の香りが鼻腔をくすぐり、口をつけると仄かな甘味と苦味が口内に広がった。
「……それで、学生自治会の会長と副会長の二人が俺に一体何の用なんですか？」
「それは僕からも会長に聞きたいことなんだが？？」
朝倉も会長へと視線を向けた。どうやら副会長も何も知らされずに呼び出されたようだ。彼は秋弥と違って、学内放送ではなく直接呼び出されたのだろう。
「そうね。お昼の時間も限られてるし、単刀直入に言うわね」
悠紀は意味あり気な笑みを浮かべると、一呼吸置いてから言った。
「私達学生自治会は、九槻君を自治会役員に任命したいと思います」
「なっ！？」
声を上げたのは、秋弥ではなく朝倉だった。

「会長！　彼はまだ一年生だぞ！」
眼を見開いて驚きを露にする朝倉に、悠紀は余裕の笑みを返した。
「えぇ、もちろん知っているわよ」
「だったら！？」
「ねぇ、朝倉副会長。貴方は一年生も五年生も、同じ学園の学生だとは思わないの？」
「そういう問題ではない」
「いいえ、そういう問題よ」
渦中の中心であるはずの秋弥を差し置いて、二人だけの議論が目の前で展開されている。
それを客観的に眺めながら、秋弥は何故自分が自治会役員に任命されたのかを考えていた。
これが自治会の伊達や酔狂でないのであれば、考えられる理由は限られている。
秋弥が今年度の新入生総代であるということ。
あるいは、装具選定の一件に関係しているということ。
前者の場合、入学式から数週間の間を置いて秋弥を呼び出した理由が見つからない。とすれば後者か。しかしその場合、悠紀はどのくらい紅の装具やリコリスのことを知っているのか。
「僕が言いたいのはそういうことじゃない。彼にはまだ早すぎると言ってるんだ」
「どうしてそうだと決め付けられるのかしら？」
「決め付けているわけではない。だけど、まずは外側から学校行事や学生自治会の職務について知るべきだと言っているんだ！」
「言ってないわよ。だけどそうね、朝倉副会長の言うことにも一理あるわね」
「なら？？」
「でもそれは一理でしかないわ。一理あって一利なしよ、朝倉副会長」
「……」

「私だって入学したての一年生が学園運営を満足に行えるとは思っていないわよ。でもそれは私達上級生が手本となって教えてあげれば良いことでしょう？」
「そうかもしれないが、それならせめて二年生になってからでも遅くないのでは……」
次第に、朝倉の声からは力が失せ始めた。
「それじゃあ遅すぎるのよ」
「何が遅いと？」
「……私が、九槻君にいろいろなことを教えてあげるための時間よ」
悠紀が小悪魔的な笑みを二人に向けて、秋弥と眼が合うと蒼い左眼で軽くウィンクをした。その仕草で彼女の言葉が半分以上冗談であることを秋弥は見抜いたのだが、完全に視線を彼女にアジャストしていた朝倉はそれに気づかなかった。
どうやら秋弥が学生自治会に入ることは、悠紀の中でほどんど確定しているらしい。
「……俺はまだ拝命するとは言っていませんが」
それを察して口出しをした秋弥の小声を、悠紀は軽く聞き流して朝倉へと向き直った。
「貴方の負担になるようなことは何もないわ。彼の面倒は全面的に私がみます。これでもまだ何か言いたいことはあるかしら？」
「……それでは会長に負担が掛かる？？」
「良いのよ。だってこれは私の我侭だもの」
「……であれば僕以外の他の役員達にも是非を問うべきだ」
「皆は二つ返事で頷いてくれたわよ。役員の中では、あとは朝倉副会長だけなの」
朝倉のその言葉を待っていたかのように、悠紀は言った。
「……」
ぐうの音もでないとはまさにこのことだろう。
悠紀は一番説得が難航しそうな朝倉をこの場に同席させることで、彼が曖昧な返事でやり過ごすための退路を絶った。

朝倉が秋弥を一瞥する。その表情は何かを言いたげに見えたのだが、彼は直ぐに視線を戻してしまった。
「……スフィア会長も？」
「自治会役員の任命が自治会長と維持会長の二人の合意によって決定されることくらい、朝倉副会長にもわかっているでしょう。その上で私は、役員全員からの合意も得たいのよ」
「……会長の言いたいことはわかった。だけど……、やはり僕は納得出来ないし、賛成も出来ない」
朝倉の言葉を聞いて、悠紀は深い深い溜息を吐いた。
「だったら仕方がないわね。……貴方の意見は尊重されません」
前言を一瞬で撤回して切り捨てた悠紀の台詞に、朝倉が絶句した。と同時に、朝倉は頭に上っていた血が急激に引いたことで、別の考えにも至った。
何故悠紀はそこまでして秋弥を役員に引き込もうとしているのか。そもそも彼を引き込みたい理由とは何なのか。
「……一つだけ教えてほしい」
「何かしら？」
「どうして、この一年生なんだ？」
端から話を聞いている限り、朝倉が難色を示しているのは秋弥が入学してまだ日が浅い一年生であるということを気に掛けてのことで、それは学園の一員としての自覚や経験を憂いてのことであるようにも思えた。
「そんなに怖い顔をしなくてもいいじゃない。理由ならもちろんあるわ」
そしてようやくのこと、悠紀は自分のティーカップへと手を伸ばした。ミルクを落としてマドラーでかき混ぜると、ティーカップをそっと口元に運んだ。
「装具選定の視察の後で、面白い学生がいると私が言ったのを覚えているかしら？」
？？視察？

これには秋弥の方が、朝倉よりも先に反応した。しかし、それを気取られるような仕草は表面には出さなかった。
「それが彼??九槻秋弥君なのよ。私とスフィア会長は装具選定中の九槻君を視ていた。彼が使った装具も、彼の行動の一部始終も、ね。この任命はその上での判断です」
三度(みたび)驚愕に彩られた朝倉の瞳が、秋弥と悠紀を交互に見詰めた。
「……そうか。何処かで見た名前だと思っていたけど、装具選定の報告書だったか。だけど報告書には、波長障害による隣神の顕現以外に眼の引くような内容は何も書かれていなかったはずだが」
「そうでしょうね。本当の情報を意図的に隠したんだから」
悪びれずもせずにさらりと言った悠紀の言葉に、今度は秋弥も眼を丸くした。
朝倉の反応を見るに、隠された情報というのは隣神リコリスや紅の異能型装具のことでほぼ間違いないだろう。
そして悠紀と、スフィアと言う名の学生だけが何処かからそれを視ていて知っている??。
「ごめんなさい、朝倉君。詳しいことは貴方だけじゃなくて、他の皆にもまだ話すべきではないと思ったの。それに、私自身が自分の眼で見たものをまだ信じ切れていないんだもの」
朝倉の名を役職名を付けずに呼んだ悠紀は、眼を伏せると首を静かに横に振った。
「だけどきっと九槻君は私達の力になってくれるわ。だから、私を信じてくれないかしら?」
朝倉が何かを思案するように眉根を寄せながら、視線を秋弥へと向ける。
様々な感情の籠もった瞳が秋弥を見詰める。
その値踏みするような視線に秋弥は一言注意しようかと口を開き掛けたが、真剣な眼差しで秋弥を見定めようとしている朝倉に声を掛けることは憚られた。
やがて、朝倉はゆっくりと息を吐き出すと言った。

「……わかった。僕は会長の慧眼を信じることにする。だけど、彼が学生自治会に入りたいかどうかはわからない。そこは彼の意思を尊重してほしい」
「ありがとう。もちろんわかっているわ」
安堵したように穏やかな笑みを浮かべた悠紀を見て、朝倉の瞳が僅かに揺らいだ。
「それじゃあ僕は一足先に教室に戻るけど、いいか？」
「えぇ、時間を取らせてしまったわね」
「それは全然構わない。……あまり時間は無いかもしれないが、君もゆっくりしていってくれ」
朝倉は紅茶を一気に飲み干すと、悠紀に礼を言ってから自治会室を出て行った。
必然的に悠紀と二人っきりとなってしまった秋弥だったが、会話らしい会話も見つからず、すっかりぬるくなってしまった紅茶に口をつけていた。
「……えっと、ごめんね九槻君」
しばらくして、悠紀が申し訳なさそうに言った。
「どうして謝るんですか？」
「だって、九槻君の話だったはずなのに、内輪だけで盛り上がっちゃって」
「そんなこと、全然気にしてませんよ」
「うぅん、私が気にするのよ。だから、謝らせてね」
ごめんね、と、悠紀は両の掌を合わせて顔の脇に添えて、可愛らしく謝罪した。
何処までが本気で何処までが冗談なのかわからない人だな、と秋弥は無表情のままで思っていた。
「それで、九槻君を呼んだ理由についてはさっき言っちゃったんだけど、最初から説明した方が良いかしら？」
「えぇ、是非お願いします」
結論は既に出ているのだが？？それ以前に既に言っているのだが

？？お互いにそれをおくびにも出さずに話を続けた。
「うん、まずはそうね……。九槻君は学生自治会が普段何をしているところなのか知ってるかしら？」
「人並にはですけど」
学生自治会は学園に在籍する全学生の代表として、諸活動の管理や運営、行事への協力をするための組織だ。一般教育機関で言うところの生徒会のようなものだと捉えておけば良いだろう。
そう説明すると、悠紀はひとつ頷いた。
「そのとおりよ。だけど本当はもう少し広義的で、学生自治会は《自治》の名を冠しているとおり、学園のあらゆる行事や運営を取り仕切る権利が与えられているのよ」
一介の学生に与えるには過ぎた権利だけどね、と悠紀は付け足す。
「私達学生自治会の役員は私と朝倉副会長を含めて五人。これだけの少人数で鷹津封術学園を管理しているということになるの。これって実はとてもすごいことだと思わない？」
曖昧な笑みを返すと、悠紀はつまらなそうな顔をした。
封術学園は学園組織やその成り立ち自体が特殊である。それを鑑みれば学園を学生が運営していると言われても、驚きこそすれ、それ以上に思うところは何もなかった。
「とはいえ、教師の採用とかそういう話になってくると、さすがに私達では手に負えないんだけどね。学園長にはもう会ったかしら？」
鷹津封術学園の封術教師は学園長が直接選んでいるのよ」
学園長？？封術体系の基礎を作り、鷹津封術学園を創設した《始まりの封術師》の一人。
入学式では席を外していたために会うことが出来なかったのだが、学生自治会に入れば学園長とも顔を合わせる機会が増えるのだろうか。
「さてと、学生自治会の説明はこれで終わりよ。他に何か聞きたいことはある？」
返事とともに首を横に振ると、悠紀は満足げに微笑んだ。

その笑顔の裏に何かとても重要なことを隠しているような気がしたのだが、形になっていない疑問を投げかけても納得のいく答えが返ってくるとも思えないので、その疑問は棚上げとなった。
「それじゃあ前置きはこのくらいにして……あら？」
不意に悠紀が首を傾げた。
向かい合って座る秋弥の背後？？学生自治会室の入口へと眼を向けている。
秋弥も釣られるようにしてそちらを振り返ると、自治会室の扉が音もなく開いた。
「おやおや、もしかしてお邪魔だったかな？」
新たな来訪者は、ソファに座る二人を見つけるとニヤニヤとした笑みを浮かべた。
「何言ってるのよ。今必死に彼を口説いているところよ」
あっけらかんとした悠紀の口調に秋弥は思わずげんなりとしてしまったが、当の本人は何処吹く風だった。
「おっと、そうなのかい。それじゃあワタシも、及ばずながらユウキに加担しようかな」
来訪者はソファには掛けずに執務机の前まで進むと、その上にすとんと腰を落とした。
片足を胸の前で抱え込んだその姿勢は、秋弥の座っている位置からだとスカートの中身が完全に見えてしまっていた。残念なことに（？）スカートの下にはスパッツを履いていたが、それでもやはり眼のやり場には困ってしまう。
「初めましてだね、クツキ。ワタシのことは知らないと思うからまずは自己紹介をするよ。治安維持会リーダーのスフィア・智美（ともみ）・アンダルシアだ」
セミロングの金髪に灰色の瞳を持つ英国風美少女が独特の口調で名乗る。
一般学生と同じ黒の女子学生服を身に付けた彼女の右腕には、治安維持会役員の証である赤の刺繍が施された腕章が巻かれていた。

「初めまして、九槻秋弥です」
立ち上がり、小さく一礼する。座って座って、と手振りで示されたので再びソファに腰を降ろした。
スフィアは興味深げに秋弥をまじまじと眺めてから、ふと思い立ったように悠紀の方を向いた。
「ユウキ、彼に何処まで話をしたんだい？」
「ちょうど自治会の役割について説明をし終えたところよ」
「なんだ、それじゃあ話は簡単じゃないか」
何に時間を掛けていたんだ、とでも言いたげな眼差しを悠紀に向けたスフィアだったが、涼しい顔でスルーしようとしていたので、「まあいいか」とだけ言うに留めた。
「クツキ。キミに是非、学生自治会に入ってもらいたい」
それは言い方こそ違うが、先刻悠紀が言った内容と同じものだった。
やや唐突ではあったが、新しい来訪者による本日二度目の任命に対して、今度こそ彼の言葉を遮る者はいない。
二人が沈黙する中、やがて秋弥はゆっくりと口を開いた。
「光栄なことだとは思いますが、俺は、自治会に入るつもりはありません」
拒絶の答えを、秋弥は告げる。
だがしかし、まるで初めから拒絶されることを想定していたかのように二人の表情は揺るぎなかった。
むしろ？？。
「あらら、見事にフラれちゃったね」
「言い忘れていたけれど、私も最初に同じことを言って、同じようにフラれちゃったのよね」
「何だって？　それは聞き捨てならないな。ユウキの魅惑の笑みで迫られて、落ちない男がいるって言うのかい？」
「貴女の妖艶な容姿には負けるわよ」
うふふ、あはは、と微笑みあう学園の真のツートップ。

秋弥は何故か彼女達の掌の上で踊らされているような気持ちになって、苦々しい顔をした。
「参考までに聞かせてほしいのだけれど、入りたくない理由は何かしら？」
スフィアとの怪しげな三文芝居を終えた悠紀が小首を傾げた。
切り替えの早い人だな、と思いつつ、秋弥は予め用意していた理由を伝えた。
「大小いろいろとありますが、一番の理由は興味がないからです」
それは秋弥の本心だった。
学園の運営や管理という面倒事を進んでやりたがるような奇異な人間はどれほどいるというのだろうか。また、学生自治会に入れば多くの時間をそちらに費やすことにもなるだろう。それに悠紀から聞いた話だけでは、自治会に入ることで秋弥にとって何かメリットらしいメリットもあるとは考えられず、単に面倒事が増えるだけのように思えた。
なるほどね、と悠紀が頷き、スフィアが意味深な笑みを見せた。
「逆に言えば、興味を引くような何かが学生自治会にあれば、キミは入ってくれるんだね？」
「……必ずしもそうだとは言い切れませんが、まあ可能性はありますね」
彼女達が他にどんな隠し玉を用意しているのか知らないが、顔を見合わせた二人の会長には何か思い当たる節がありそうだった。
「だったらクツキ、キミはそれほど遠くないうちに学生自治会に入るよ」
はっきりと、スフィアはそう断言する。
「そのときは私が手取り足取り教えてあげるわね」
「おやおや……、それはまた淫靡な響きだね、ユウキ」
「そこはせめて甘美と言ってほしいわね……。スフィアも一緒にどうかしら？」
すばやく秋弥の隣に移動した悠紀が、彼にそっと身を寄せた。

それを見たスフィアは跳ねるように机から飛び降りると、空になったソファとローテーブルを回り込んで秋弥の反対側に腰掛けた。
「いいのかい？　ワタシは激しいのが好きだよ？」
スフィアの性癖になんて興味無かったが、上級生？？それも少女という単語の上に美が重なるタイプの？？二人に両サイドから挟まれた秋弥は緊張に身を強張らせた？？。
「……会長達。くっつきすぎです」
？？ということもなく、動じた様子もなかった。
「このソファは元々三人掛けよ？」
しかし悠紀は悪びれた様子も無く、しれっと答える。
その間も、肩と肩が触れ合うほどの距離感に何一つ変化はない。
「隣に座られたら話辛いんですよ。だから対面のソファに戻ってください。それが嫌なら俺が移動します」
「おぉ！？」
「わわ、待って！」
立ち上がりかけた秋弥を二人が強引に引きとめる。再びソファに引きずり戻された秋弥は大きな溜息を吐いた。
「はあ……いつから自治会室は夜の怪しい店に変わったんですか」
「ごめんなさい、悪乗りしすぎました」
冷たい声で秋弥に咎められた途端、悠紀は身を縮こまらせてしおらしく謝った。三人掛けのソファとはいえ、小柄な彼女が端に寄ったことでわずかながらスペースが生まれた。
「まさか色仕掛けも通じないとはね」
反対に、面白そうなものを見る眼とニヤついた笑みを一切崩そうともしないスフィアであったが、これ以上余計なことをして秋弥の機嫌を損ねると拙いと思ったのだろう。静かに向かいのソファへと移動して真ん中に腰を下ろすと、長い脚を組んだ。
「そんなところもやはりカグヤの弟ということかな。一筋縄じゃいかないね」
唐突に出た姉の名前に反応して、秋弥はスフィアを見つめた。

「近くにあんな美人がいると、基準が高くなるのかな」
「……あの、スフィア会長は姉さんを知っているんですか？」
「ん？　もちろん知っているよ。ユウキとカグヤ、それとワタシは三年生まで同じクラスだったからね。それに在校生だったら知らない者はいないと思うよ。何せ去年の封術事故は？？」
「スフィア！」
瞬間、悠紀が鋭い声を発した。あっと反射的に声を出して口を噤んだスフィアは、慌てた様子で秋弥に向き直った。
「すまないクツキ。身内に対する配慮が足りなかったよ」
「……いえ、良いんです」
「良くないわよ……」
俯き、表情を隠した悠紀がポツリと言った。
「各学園の学生自治会は四校統一大会の運営も行っているのよ……。それはつまり、事故を未然に防げなかったことの責任は私達にあるということなの。だから、全然良くないのよ。全然、良くない……。私が不甲斐なかったばっかりに？？」
「星条会長」
「……っ！」
「姉さんは誰のことも責めていませんし、自分に出来る限りのことを尽くしました。だから、そんな風に思わないでください。会長がそう思っていると姉さんが悲しみますし、浮かばれない……」
月姫は昨年行われた四校統一大会？？封術学園四校の学生が集って封術の技術を競う大会？？に代表選手の一人として出場していた。
月姫が出場した競技は封術の力のみを純粋に競う競技だったのだが、その際に対戦相手の選手が放とうとした封術が暴走してしまった。
術者の制御下を離れた封術は情報体の異常改変を起こし、やがて元々の情報体が内包可能な総量の臨界を向かえて大規模な情報爆発を引き起こした。
ギャラリー席や会場内外に張った封術結界では情報爆発に耐え切

れない。そう判断した月姫は展開していた己の封術を全て解くと、全神経を集中させて新たな封術結界を展開した。
その封術結界は異常改変で膨れ上がる情報体を囲った。月姫は結界の体積を狭めることで密度を高めて、情報爆発を結界の内側に抑え込もうとしたのである。
結果的に被害は最小限で済んだ。情報体のそばにいた相手の選手は情報爆発の余波で吹き飛ばされて全身に打ち身や骨折を負ったが、その程度のものだった。
そして月姫は??封術結界で抑え切れなかった情報圧力を精神に直接受けて、生死の境を彷徨った。
辛うじて一命は取り留めたものの、『意(せいしん)』に重度の負荷を受けたことで封術の行使に必要な装具を呼び出せなくなってしまったのだ。
「九槻君……」
当時の出来事を思い出していた秋弥は、悠紀の幾分落ち着いた声によって我に返った。
焦点を悠紀に合わせて、彼女の瞳を見つめる。
「ねえ九槻君。不躾なことなのは承知で一つ聞いても良いかしら?」
悠紀も真っ直ぐに秋弥の視線を捉えて、決して瞳を逸らそうとはしなかった。
「何でしょうか」
「月姫は……、今はどうしているの?」
「自宅療養中ですよ。封術を使えないのに封術学園に通うわけにも行きませんし……。それに、まだ感情のコントロールがうまく出来ないんです」
入学初日に月姫が見せた突然の涙と抱擁。その過剰な感情変化は、心や精神といったものを司ると言われている『意』を月姫自身が制御しきれていないことの現われだった。
感情が不安定な状態の月姫を外に出すわけにも行かないため、学園側にも休学届けは提出済みで、あとは彼女の心があるべき形に戻るまで待つしかない。歯痒かったが、それは誰かがどうにか出来る

ものではなく、月姫自身の問題なのであった??。
「そっか、教えてくれてありがとね」
「案外カグヤのことだから、クツキと同じ学年になるまで休学し続けるかもしれないけどね」
茶化すようなスフィアの言葉に、悠紀が笑みを浮かべた。
そういえば二人は姉と同じクラスだと言っていたか。
二人の様子から、何か秋弥にとって良からぬことを姉から吹き込まれているのかもしれない。
「あっ……もうそろそろ昼休みも終わりだね」
ふと眼に映った時計を見て、スフィアが言う。
「あら、ホントね」
「楽しい時間は早く過ぎるっていうけど、あれは本当だったね」
「楽しかったのは貴女だけでしょうに……まあいいわ。ごめんなさい、九槻君。結局何のお構いも出来なくって」
膝に手を当てて屈伸をするように立ち上がったスフィアに向かって、やれやれと息を吐いた悠紀は申し訳なさそうに言った。
「本当は装具選定のときのことをもっと詳しく聞きたかったのだけれど、それはまた今度の機会にするわね」
「そのときはワタシも同席させてもらいたいね。クツキのあの力には興味以上に惹かれるものがある」
秋弥からも二人に聞いておかなければならないことがあるのを思い出した。
「俺からも一つ聞きたいことがあります。二人はどうして、装具選定でのことを他の役員に隠したんですか?」
三組の学生達と同じように、封術教師である袋環から口止めされたのだろうか。
しかしそれでは腑に落ちない部分もある。
悠紀は学生自治会によって学園の運営が行われていると言っていた。ならば、装具選定の報告書を提出したのは一年生の各クラスを担当する封術教師達だろう。当然そこには、袋環が提出した報告書

もあったはずだ。
そこに記載された内容を、悠紀は役員達の眼に留まることがないように改竄、隠蔽した。
その理由は一体何なのだろうか。
「それはね。月例会議が過ぎれば九槻君とあの隣神の女の子のことはきっと全学生に知れ渡ることになるわ。だからそれまでの短い間だけでも、貴方の力を知っている人は少ない方が良いと思ったのよ」
そう言って、悠紀は悪戯っぽく笑った。

第１１話「騒動」

★☆★☆★

昼休みも残り僅かとなった頃、秋弥は西側二階の廊下を歩いていた。

思った以上に長時間二人の会長に捕まってしまったため、本日の昼食抜きは既に確定していた。確認せずに来てしまったが、今更学生食堂へ行ったところで玲衣達が待っているということもないだろう。

その道すがら、秋弥は悠紀から告げられた自治会役員の任命について考えていた。

（自治会に入れば、去年の封術事故を調べることが出来るか？）

学園の運営は学生自治会によって行われている。その中には封術事故の起こった四校統一大会も含まれていると、悠紀自身が話してくれた。

四校統一大会で起こった事故が偶発的なものであったとは考え辛い。

秋弥はそのときの試合をギャラリー席から観戦していたのだが、姉の対戦相手であった鷺宮封術学園の制服と学園カラーである蒼のマントに身を包んだ封術師見習いは、学園代表の一人に恥じない技術と力を持った選手であることは疑い様もなかった。そんな対戦相手が暴走を引き起こすような無茶苦茶な術式を組むとは思えなかった。

にも関わらず、何の前触れもなく突然、発動しかけていた封術式が破綻した。

それには、何か特殊な要因があるはずだ。
それに『興味を持つ何か』というのも気に懸かった。自信満々に断言したスフィアが嘘を吐いているようには思えなかったし、悠紀のわざとらしい三文芝居もその『何か』について言及されないように誤魔化そうとしていたようにも思えた。
などと考えているうちに教室の前までやってきた秋弥は、中の様子が騒がしいことに気がついた。
閉ざされたドアの向こうから漏れ聞こえてくる怒声に聞き覚えがあった。またぞろ厄介事が起こったのではないかと内心で辟易しながら、ドアを開けて秋弥は教室に入る。
教室の中央付近に人集りが出来ていた。
ドアという名の遮蔽物が無くなってクリアに聞こえてきた怒声はやはり??。
「何かあったのか？」
人垣を作っていた三組のクラスメイト達のうち、一番身近なところにいた男子学生に後ろから声を掛ける。
「それがよ。俺も良くわからねぇんだけど、牧瀬が鶴木に突っ掛かったみたいなんだよ」
「ふぅん」
「何か聞いてる限りだと九槻がどうとか……って、おわっ！？　九槻！？」
素っ頓狂な声を上げた男子学生??丹羽(にわ)に片腕を上げて挨拶をすると、こちらを振り向いた数人のクラスメイト達が揃って眼を丸くした。
「九槻君、大変なのよ！」
「牧瀬が鶴木に襲われてるぞ」
「違うわよ、鶴木君が玲衣を襲ってるのよ！」
「そうか……って一緒じゃねぇかよ。おい、九槻。お前早く仲裁に入れよ！」
「お前の嫁だろ、早く何とかしろよ」

「皆！　皆、道を空けて！」
渦中の人物である（らしい）秋弥が現れたことで、混沌としていた教室内に一層拍車が掛かったようで、人垣の群れが思い思いのことを言い始めた。若干訂正が必要なものも中には混じっていたような気もするが、今は気にしない方が良いだろう。
人垣が割れて、中央で対立する二つが露になる。
眼鏡を指で押し上げて嘲笑にも似た皮肉気な笑みを浮かべる鶴木と、眉を吊り上げて、毛を逆立てて威嚇する猫のような玲衣がお互いに睨み合っている。玲衣のそばには堅持が立ち、瞳を怒りの炎で燃やしている。そこから少し離れたところでは綾と奈緒が二人を止めに入ろうとして入れず、オロオロとしていた。
「鶴木にシュウ君の何がわかるっていうのよ！　勝手なこと言わないでくれる！？」
「ふん、それはこっちの台詞だよ。『アレ』は封術師にとって害悪にしかならない」
「はっ！　害悪？　んなわけねぇだろうが。お前、秋弥が隣神を倒すところ見てなかったのかよ」
「見ていなかったのは君らの方だろう。隣神を倒したのも調律を行ったのも九槻じゃない。あの隣神の方じゃないか」
「隣神がどうしたってんだ！　秋弥が俺達を助けてくれたのは事実なんだから何の問題もねぇだろうが！」
「君は馬鹿か？　隣神を従えてるような人間のすることを真に受けたのか？」
小馬鹿にするように、鶴木は鼻で笑った。
「思考停止も大概にするんだな。愚かしい」
「な……っ！？」
「あの紅い装具だってそうだろう。何故九槻は神器を逸脱した装具を自在に扱えるんだ？　そのことに何の疑いもしないなんて、本当におめでたいな」
あくまでも冷静な態度を崩さない鶴木とは対照的に、挑発されて

怒りの感情が沸々としている玲衣と堅持。
一触即発？？二人の表情は今にも鶴木に掴み掛りそうなほど鬼気迫るものだった。
「……綾。奈緒」
秋弥は二人のそばに近寄ると、そっと声を掛ける。
「……！」
驚いて声を上げそうになった二人を口元に人差し指を当てる仕草で制した秋弥は、手招きをして後ろに下がらせた。
その際にちらりと玲衣達の方に視線を向ける。互いに互いの姿しか見えていない三人が秋弥の存在に気づいた様子はなかった。
「九槻君！　大変、大変なの！」
「玲衣ちゃんと沢村さんが！」
「少し落ち着け、二人共」
静かな声で諭すと、二人は大きく深呼吸をした。
「綾、一体何があったんだ」
「えっと、お昼ご飯を食べ終わって教室に戻ってからのことなんですけど」
学生食堂で昼食を済ませた綾達は昼休みが半分を過ぎても秋弥が戻って来なかったので、一足先に教室へと戻った。
すると、秋弥を呼び出す学内放送を聴いていたクラスメイト達が綾達の周りに集まったそうだ。
装具選定での事情を知っている彼らは学内放送とそれを結びつけて、学生自治会からの呼び出しがその件に関係しているのではないかと勘ぐったのだという。
詳しいことはわからないと綾達は答えたのだが、そのとき偶々近くを通りかかった鶴木が何かを言ったらしい。
綾と奈緒は彼が何と言ったのか聞き取ることが出来なかったのだが、その言葉を聞いたらしい堅持が突然、鶴木に掴み掛かろうとしたらしい。
玲衣が咄嗟に止めに入ったのだが、二人の口論を聞いているうち

に火がついて、気がつけば今のような構図になっていたということだ。
時折奈緒からのフォローを受けながらの綾の話を聞き終えた秋弥は困った表情を浮かべた。
口論の内容を訊ねると、それは学生自治会からの呼び出しに起因したものだった。
隣神リコリスや秋弥が用いた紅の装具について、危険だ、観察対象にすべきだと論じた鶴木に対して、それを誹謗中傷だと受け取った堅持と玲衣がヒートアップしたようだ。
学生自治会が学園に与えている影響力を、星条会長と同じく『星鳥』の一人である鶴木は知っていたのだろう。だからこそ、学生自治会からの呼び出しをそのように受け取ったのではないだろうか。、
「私、どうしていいかわからなくて……」
押し黙ってしまった秋弥を見て不安を覚えたのか、綾が瞳に涙を浮かべて見上げてくる。
秋弥はそんな彼女を安心させようとして笑みを向けた。
「とりあえず俺が何とかするしかないだろうな。二人はここにいてくれ」
そういえば二人共『星鳥』だったなと思いながら、秋弥は火中の栗を拾うが如く、三人の間に割って入った。
「ずいぶん盛り上がってるな、玲衣」
「……っ！？　シュウ君……」
「九槻……」
驚きに眼を見開いた玲衣。背後に鶴木からの刺すような鋭い視線を感じた。
「秋弥！　コイツがお前の？？」
「？？堅持」
堅持が何かを言おうとしたが、それを遮って秋弥は彼の名前を呼んだ。
「鶴木に何を言われたかは知らないが、お前がそこまで怒るような

ことじゃない。それと玲衣。ミイラ取りがミイラになってるぞ」
まさか窘められるとは思っていなかったのだろう。堅持が面食らった表情を秋弥に向けた。と同時に玲衣は事実を突きつけられてバツが悪そうに俯いた。
そんな二人の様子を見た秋弥は、鶴木に悟られないように目配せと頷きを以って「後のことは引き受ける」と伝えた。
「鶴木、悪いな。くだらないことで二人が迷惑を掛けたようだ」
「ふん。まるでこいつらの保護者だな、九槻」
意識して二人を背中に庇うように見える動作で、秋弥は鶴木へと向き直る。
同級生を完全に見下した態度の鶴木を、冷ややかな眼で見詰めた。
「そういうお前こそ、本人のいないところで陰口を言うタイプには見えなかったけどな」
「……なんだと？」
「今なら俺に直接言ってくれて構わないぞ。何でも言ってみろよ」
前言の謝罪は何処へやら。わざと相手の神経を逆撫でするような言葉を並べる秋弥に、鶴木本人よりも外野の方がざわめいた。
何を考えてるんだ、何故そんなことを言うんだ、という心の声が聞こえてきたような気がした。
「なんだ、やはり陰口しか言えないヤツだったのか」
さらに鶴木を挑発すると、彼の眼鏡の奥に潜む瞳に光が灯った。
「……僕は、九槻じゃなくても隣神を倒せたと、そう言っただけだ」
やがて、鶴木はぽつりと言った。
「それなら、お前になら倒せたと？」
「そうだ」
「だったらお前はどうして何もせずに見ていたんだ」
「それは……」
鶴木は一瞬口ごもった。
「それは先生に止められたから……」
「なるほどな」

秋弥が人の悪そうな笑みを浮かべる。
いつしか会話の主導権が秋弥へと移り変わっていた。
「つまりお前は、『自分になら対処出来たが他人に止められたから何もしなかった』と、そう言いたいんだな」
「……っ！」
鶴木だけでなく、秋弥を除く全員に緊張が走った。
「おかしな話だな。そこにいる朱鷺戸綾は自分の判断で沢村堅持と牧瀬玲衣、星条奈緒を護るために結界術式を使った。綾は封術師として最善を尽くしたと思うが、その間お前は一体何をしていた？」
「……」
「それに袋環教諭の救援も間に合わなかったあの場面で、俺が助けに入らなかったら綾達は今頃どうなっていただろうな」
「……れ」
「まぁそれも全部仮定の話だ。お前の話と同じく、な」
「……黙れ」
「お前がどんなことを教わってこれまで生きてきたか、そんなことはどうでもいい。だけど、封術師を目指すのなら血縁、生まれ、才能？？お前が持って生まれたあらゆるものを生かして自分で判断をしたらどうなんだ？」
「？？黙れよ！」
感情をむき出しにして鶴木が怒鳴った。
秋弥は鶴木が表面上だけで冷静さを装っているということを一目見て看破していた。
相手が直情型の玲衣と堅持だったからこそ鶴木は冷静さという名の仮面を被り続けることが出来ていたが、突然乱入してきた秋弥によって状況がリセットされた上、会話の主導権が奪われてしまったことでその仮面が崩れかけていた。そこに追い討ちをかけるように秋弥から立て続けに挑発を受けたことで、ついには被っていた仮面が決壊したのだった。
「だったら今ここで見せてやるよ！　僕の力を！」

言葉とともに鶴木は装具を召還する。肘から手の甲までを覆う篭手が制服の上から瞬時に装着されると、それを秋弥へと向けた。
瞬間、篭手の先端にある発射口から黒曜石にも似た色を持つ菱形の物体が飛び出す。
眼を凝らさなければ視認出来ないほどの極細の糸で篭手と結び付けられた菱形の物体は振子??ペンデュラムと呼ばれるものだ。
鶴木の血統が得意とする、糸を用いた束縛系封魔術。その血を受け継ぐ鶴木真の装具は強化型中距離系振子である。
刃にも似た振子が、秋弥目掛けて飛翔した。
為す術も無くただ呆然と立ち尽くす秋弥を見て、鶴木は内心でほくそ笑んだ。
いくら感情に任せた行動だったとはいえ、鶴木は理性まで完全に失ってはいなかった。ギリギリで静止させて一泡吹かせてやる。そんな思いを抱いていた鶴木だったが、次の瞬間に起こった現象によって、彼は逆に一泡吹くことになった。
綾と奈緒が両手で瞳を覆い、玲衣が悲鳴にも似た高い声を上げる中、振子は秋弥の目の前で突然停止したのである。
鶴木の意思によってではない。
突如空中から舞い落ちた血よりも紅い一片の花びらに触れた振子が、加速度と慣性を失ったのだ。
「な、ななな……」
鶴木は声を戦慄かせた。振子に対する術式の行使は今もなお続けている??現に浮力を操作していることで振子は空中に留まり続けているのだから。
しかし、どんなに振子への干渉力を高めても、振子は一寸たりとも前に進もうとはしなかった。
振子に触れた花びらはひらひらと舞いながら、床に落ちる前に光の粒となって消滅した。
「無駄だ。術式をキャンセルしてもう一度組み直さない限り、もう何も出来ないぞ」

秋弥が冷めた視線を鶴木へと向ける。装具を召還した様子は見られないが、彼が何らかの術式を発動させたことは間違いない。
だが、どんな術式を使えばこの上体を生み出すことが出来るのか、鶴木には見当も付かなかった。
「それに、本棟内での装具および封術の使用は禁止されている。わかったら直ぐに装具を仕舞った方が良い」
鶴木は憎々しげに唇を噛み締めながら、指摘されたとおりに装具を装飾品へと戻した。
「九槻……お前は一体何の術式を発動させた……」
忌々しげに秋弥を睨み付けたままで鶴木が問うた。
無知であることは恥ずべきことではない。無知のままでいることが恥なのである。
その点において、秋弥は内心で彼を評価していた。
「特定エネルギーの供給を無力化する情報改変の封魔を使っただけだ。……俺ではなく、リコリスがな」
リコリス??袋環がクラス一と評した高位隣神の名を聞いた鶴木の瞳に、憎悪とも嫌悪とも取れる強い負の意志が宿った。
「……九槻、僕はお前を絶対に認めないからな」
「認めてくれと頼んだ覚えはないんだがな」
ニヤリと口元を歪める秋弥に、鶴木は舌打ちをすると苛立ちを隠そうともせずに言った。
「約束しろ、九槻。休み明けの対人戦闘訓練で僕と戦え」
一方的なライバル意識と、闘志の炎を燃やしながら。
前期の授業カリキュラムに目を通していた秋弥は、対人戦闘訓練というのが特別訓練棟の施設を利用した最初の実技授業を指しているのだと察した。
衆人環視が見守る中で、鶴木はその授業内容にある模擬戦の対戦相手に秋弥を指名したのである。
「あぁ、いいよ」
秋弥は軽い口調でそれに応じる。

瞬間、教室中が歓声で沸いた。
「だけど、今度からは他のやつらを巻き込むようなことは止めてくれ」
と、不意にドアの開く音がして一般教養の教師が午後の講義を行うために教室に入ってきた。
その瞬間に教室内を包み込む異様な雰囲気と、学生達が一箇所に集まってたことに教師は違和感を覚えていたのだが、まるで示し合わせたかのように全員が静かに自席へと戻っていくのを見て、気のせいだったのかと思い直した。
結局、鶴木が最後まで謝罪の言葉を口にすることはなかった。

★☆★☆★

通常、中学や高校の授業は一コマ四十五分から五十分で行われるが、高等教育機関に属する鷹津封術学園の講義（授業）は一コマ九十分で行われる。
人間の脳のリズムが九十分周期であることと関連があるのかは定かではないが、午前二コマ、午後二コマから三コマが封術学園の標準的なカリキュラムとなっている。
この日は午後の講義が二コマ入っていたが、昼食を抜いたことが原因かその直前のいざこざが原因か、午後の一コマ目を終えたところで精神的な疲労感が良い具合に溜まり始めていた。
そんな秋弥の席のまわりに、十五分間の休憩時間を利用していつものメンバーが集まってきた。
その四人の表情が、暗く沈んでいる。
気まずそうに眼を逸らす玲衣。その様子を不安げに見つめる綾と奈緒。そして、授業中もしきりにこちらを気にする素振りを見せていた堅持。

皆が揃ったのに、いつもの会話は無い。
四人は互いの様子を窺うばかりで口を開こうとはしなかった。
「……あー」
そんな状況に耐えかねたのか、堅持が頭を掻きながら言った。
「さっきはその……秋弥にも迷惑を掛けちまって悪かったな」
「ん？」
堅持の台詞が鶴木との一件を指していることはわかる。しかし、彼の言葉の意味が理解できずに首を捻った。
「迷惑？　どういう意味だ？」
「どういうって……そりゃぁな」
互いに顔を見合わせる堅持達を気持ち的に一歩離れて見ていた秋弥は、ふと表情を消した。
「俺は、どういう意味で迷惑を掛けたなんて言ったのかって聞いてるんだが？」
やや声を低くして言った秋弥に、堅持が気圧されたようにたじろいだ。
綾と奈緒の二人は秋弥を纏う雰囲気が唐突に変化したことに驚いて眼を丸くしている。
「い、いや、ごめん」
「ごめんじゃないし、否（いや）でもないんだよ。俺はただ理由を聞いてるだけだ。もしかしてそれも答えられないのか？　何となく口にしてみただけなのか？」
「……」
「えっと、あの……九槻さん？」
「綾、すまないが少し黙っていてくれ。今は堅持と話をしているんだ」
堪らず何かを言おうとした綾に対して、堅持からわずかも視線を逸らさないまま、秋弥は彼女の台詞を一蹴した。
「どうなんだ、堅持。何も言えないか？」
女子三人がハラハラと事の成り行きを静かに見守る中で、秋弥か

らの強い視線を正面から受け続けた堅持は、やがてゆっくりと言った。
「いや……そうじゃねぇよ」
それは弱々しく、か細い声だった。今にもかすれて消えてしまいそうなほどの声。
「オレが短気だから、鶴木のヤツの安っぽい挑発に乗っちまったんだ。それなのに、関係のない玲衣や、お前まで巻き込んじまってさ。それで、お前らに迷惑を掛けたなって……」
言い終えて、下向けていた堅持の視線がわずかに持ち上がった。秋弥はその双眸を捉えた。
「……馬鹿か、お前は」
「……っ！」
奇しくもそれは、堅持が鶴木から言われた言葉と同じだった。
ただしそれは、堅持を嘲るものでも、ましてや馬鹿にしたものでもなかった。
鶴木のものとは百八十度意味合いの違う、同じ言葉だった。
「堅持、お前は勘違いをしている。……本当に謝らなければいけないのは俺の方だ」
少しも謝ろうとしている態度ではなかったが、辛気臭く気まずい空気を打開するためには、不遜な態度に徹した方がより効果が高いと秋弥は判断した。
「お前は確かに怒りっぽい。否、感情の起伏が激しいと言い換えようか。だけど、今回の原因を作ったのはお前の短気さじゃないだろ。それは一つの側面的な見方にすぎない」
秋弥が何を言おうとしているのかわからず、堅持は怪訝そうな眼差しで秋弥を見詰めた。
いいか、と言葉を繋ぐ。
「お前が腹を立てたのは何でだ？　お前がその安っぽい挑発に乗ったのは何故だ？　自分の事でもないのに、どうしてだ？」
まるで電撃が走ったかのように、堅持は身を硬直させた。堅持と

鶴木の口論に煽られて便乗する形となった玲衣も、彼の言葉が自分に向けられているかのように聞き入っていた。
「そもそもの原因というなら、それは全て俺のせいだ。お前がたまたま俺と同じ年に封術学園に入学して、たまたま俺と同じクラスになって、たまたま俺の前に座ってて、たまたま俺の友達になった。たったそれだけのことで、お前は俺みたいな他人のことで、怒れるような人間なんだよ」
??俺には真似出来そうもない。
心の中でそう付け加えて、秋弥は表情を戻した。
「だから、俺がお前に感謝することはあっても、お前が俺に謝る必要も、迷惑を掛けたと思う必要も無いんだよ」
片頬を持ち上げ、ニヤリと微笑む。
「友達ってのは、きっとそういうもんだろ？」
「九槻さん……」
「九槻君……」
何やら感激した様子の大人しめ系女子二人を横目に、賑やかし系二人の顔色を窺った。
枯れた花みたいに萎れていた玲衣の表情にも光が射しこむ。
「そうだね。うん、落ち込んでたあたしが馬鹿みたいだったよ！」
やがて活発で華やかな玲衣のイメージが帰ってくる。逸らしていた視線が秋弥のそれと重なると照れたようにはにかんだ。
「玲衣は綾達を見習って、もう少し大人しくした方が良いかもしれないけどな」
「な、なにをーっ！」
「??秋弥」
もう一人の賑やかしに、名前を呼ばれる。
「その、ありがとな」
「感謝される謂れもないんだがな。まあ、もらえるものはもらっておくよ」
「……お前ホント、イイ性格してるよな」

「性格が良いなら何も問題ないだろ」
「イイ性格だって言ってんだよ！」
「それと、次からはそんなくだらないことで、つまらないいざこざを起こさないようにしてくれよな」
「……なんだよ。やっぱり迷惑に思ってるんじゃねぇか」
「違うよ。気に掛けてるんだ」
「……チッ」
小さく舌打ちをする堅持。
それが彼なりの照れ隠しなのかもしれないなと秋弥は思った。

★☆★☆★

「ふぅん、奈緒のお姉さんとスフィア会長の二人がね……」
ようやくいつもの雰囲気に戻った堅持達だったが、十五分という短い休憩時間はあっという間に過ぎてしまい、四人は自席へと戻っていった。
そして午後の二コマ目を終えて放課後を迎えたところで、再び四人は秋弥の席の回りに集まっていた。
「ということは、何か悪いことして呼び出されたわけじゃなかったってことか」
「だから、シュウ君をあんたと一緒にしないでって言ってるでしょ」
「んだとコラ！」
「もう、二人共止めなよー」
奈緒が玲衣と堅持を宥める。すっかりその光景に慣れてしまった綾は傍観者気取りでコロコロと微笑んだ。
「九槻さんは自治会に入ろうとは思わなかったんですか？」
「ああ、今のところそのつもりはないよ。だけど？？」
？？だったらクツキ、キミはそれほど遠くないうちに学生自治会

に入るよ
スフィアの言葉がどうにも胸のうちに引っ掛かっている。
彼女の言葉に従うのなら、それは直ぐに明らかになるということだったが??。
「……あの、九槻さん?」
呼び掛けられ、秋弥は直ぐに思考の海から抜け出した。気遣わしげな綾に、何でもないよと笑みを向ける。
「でも勿体無いなぁ。だって、学生自治会だよ。それも自治会長と維持会長の二人のお墨付きだなんてさっ!」
「つうかそれだよそれ。やっぱり装具選定でのアレが理由か?」
幾分声のトーンを落とした堅持の言葉に、秋弥は頷いた。
「はっきりとそうだと言われたわけじゃないが、会長達の口ぶりからするとそうだろうな」
「何処かからシュウ君を見てたってこと?」
「それならたぶんゲート観測室だと思うよ。訓練棟からエレベーターでゲートに下りる途中にあるの。一般学生は入れないんだけど、お姉ちゃんならたぶん??」
自治会長権限で入れるのではないか、ということらしい。同じように治安維持会長であるスフィアにも入室権限があるのかもしれない。
「まあ今直ぐどうこうってわけでもないし、気にしていても仕方のないことだよ」
ただし、そうだと思えるだけの確信が秋弥の中にはなかった。

第１２話「新人封術師×封術師見習い」

★☆★☆★

「？？ここか」

デバイスに投影した地図と現在位置を確かめて、この場所で間違いないことを確認する。

廃業となった病院跡？？。

学校帰りに直接訪れたため制服姿のままの秋弥はその外観を一頻り眺めた。

特に目立った様子はない。異常も見られない。

それでも強いて挙げるならば、廃病院とその周辺一帯が異様に静まり返っているということだろうか。

調律の護衛役を依頼した封術師との待ち合わせ時間までまだしばらくある。

その間に秋弥は廃病院の外側をぐるりと一周して異層領域の様子を調べることにした。

★☆★☆★

学生自治会からの呼び出しから数日後。

ゴールデンウィークの連休を翌日に控えたこの日の朝方、秋弥の元に一通のメールが届いた。

送り主は？？浅間総一郎。

浅間神社の神主を務める壮年の男からだった。

メールの内容は入学初日に彼が話していた封術の仕事に関するも

ので、日課のランニングから戻り、月姫の作った朝食に舌鼓を打ち、食後のコーヒーを飲みながらメールを一通り読み終えると、秋弥は了解の旨を返信した。

★☆★☆★

学内放送による呼び出し以降、学生自治会から再び呼び出されることもなければ、学園内で悠紀やスフィアと顔を合わせる機会もなかった。紅の装具??魔剣『紅のレーヴァテイン』について話を聞きたいというようなことを言っていたので、てっきり直ぐにでも行動を起こしてくるものかと思っていたのだが、どうやら当てが外れていたらしい。

外れてはいても、残念ではない。むしろ秋弥にとって喜ばしい限りだった。

余計な詮索も接触も、正直に言ってしまえば鬱陶しいだけだ。

出来るだけ関わり合いにはなりたくないとも思っている。

そして出来ることならば、五年間の学園生活を穏便に過ごしたい。

普通の学園生活を送って、

普通に友達を作って、

普通に勉強して、

普通に進級して、

普通に卒業する。

そうして一人前の封術師となって??それから。

??それから、どうしたいのかな。

「え?」

物思いに耽っていた秋弥は、怪訝そうな綾の声にハッとした。

「ぼうっとしてましたね。どうかしたんですか?」

「……いや、ちょっと考え事をしていたんだ」

放課後、秋弥と綾の二人は図書館で時間を潰していた。
堅持、玲衣、奈緒の姿は見られない。堅持と玲衣は運動系の部活に、奈緒は文科系の部動にぞれぞれ入部しており、今日はその活動日のため不在だ。
綾も文科系の部活に入っているが、今日は休部とのこと。五人の中では秋弥だけがどの部活にも属していない。所謂帰宅部なのであった。
故に今日は、綾と二人っきり。
と言えば高校一年生男子にとっては胸躍るシチュエーションだが、生憎二人がいる場所は色気も何も無い学内の一施設であり、周りには他の学生達も多くいた。
「そんなに難しい内容なんですか？」
怪訝そうに首を傾げる綾に、秋弥はゆっくりと首を横に振った。
対面に座り、参考書を開いて一生懸命ノートに数式を書いている綾を眺めているうちに、我知らず物思いに耽っていたなどとは言えないだろう。いや、案外言ってみると面白い反応が返ってきそうな気もしたが、図書館という場所柄もあって自重する。
ちなみに秋弥が読んでいるものは『封術的視点における時間的概念』についての論文だ。
封術学園の図書館には封術教師や封術の研究家が記した研究内容や論文が数多く蔵書されている。秋弥は時間を見つけては人知れず図書館を訪れていたのだった。
なお、今日は総一郎から依頼された仕事の時間まで暇を潰す必要があったため、別の用事で図書館に行くという綾と共にやってきていたのである。
「難しいとか以前に、一高校生が理解出来る内容じゃないさ」
直前まで考えていたことを払拭するように、秋弥は冗談めかした口調で言う。
言葉とは裏腹に、秋弥は論文の内容をほとんど理解していた。相対性理論を軸に置いた考え方を封術で包(ラップした)んだ時間操作術とその実現

性に関する考察はなかなかに興味深かったのだが、『時間』を説明するための原質が不透明であり、思考実験の域を出ていなかった。
「綾の方こそ勉強は捗ってるのか？」
あまり不自然にならないように注意しながら話を逸らす。
綾の用事というのは、五月末に控えた前期中間試験の勉強だった。
封術学園は一年間を前期と後期の二期に分けている。四月から七月までを前期。二ヶ月間の夏休みを挟んで十月から三月までを後期として、それぞれに中間試験と期末試験を行う。
「それなんですけれど、少し難しい問題があって……」
どうやら解けない問題に当たった綾は、秋弥から意見を聞こうと思ってノートから顔を上げたときに、物思いに耽っていた秋弥に気づいたようだ。
やや言い辛そうな綾の態度から、秋弥はそのように結論付けた。
「どの問題だ？」
なので、こちらから促す。
すると綾は少しだけ表情を和らげて気を楽にした様子を見せた後、開いていた数学の参考書を秋弥の位置からでも見やすいようにひっくり返して問題文の一点を指差した。
「どれどれ……」
秋弥は示された問題文を目で追った。一ヶ月先の試験に備えて予習をしているためだろう。綾の示した問題を解くにはまだ習っていない解法を使う必要がありそうだった。
「どうですか？」
綾は上目遣いでそっと秋弥の様子を窺った。
「……解法の見当は付いてるのか？」
しかし顔を上げた秋弥と不意に目が合って、慌てて視線を逸らす。
「は、はい、たぶんですけど……もしかしたら間違っているかもしれません」
参考書に書かれた解法の中から使えそうなものを選んで用いたからか、不安気な声で綾が言う。

「なるほど。……ノートの方を見せてくれないか？」
「あ、はい」
おずおずと差し出されたノートを受け取る。ノートにはやや丸み掛かった数字や記号の羅列が規則正しく並んでいた。その数式を順に追っていくと、途中式の計算結果が不正に導き出されている箇所を発見した。
「……あ」
問題の箇所を指摘して正しい計算結果を伝えると、正しい答えが導き出された。
理数系で出題される問題の多くはクローズドエンドであるため、解法がたとえ無数に存在していたとしても、必ず最終解答に収束するように成り立っている。
この場合、計算に用いた解法が何であれ、よほどの見当違いをしていない限りはちゃんと正しい答えに辿り着けるはずだと、秋弥は思っていた。そういう視点から計算式を読み解いたため、秋弥は途中式が間違っていることに気づいたのだった。
「ケアレスミスでしたね……。ありがとうございます」
「まあ応用も突き詰めれば基本の組み合わせだからな。逆に言うと基本さえしっかり出来ていれば、応用問題で苦労することも少なくなるはずだよ」
それは聞き様によっては上から目線の発言にも捉えかねない言葉だったが、真面目な性格の綾は「なるほど」と呟きながら秋弥の言葉をノートにメモしていた。
「俺からも一つ聞いていいかな？」
綾の勉強が一段落したタイミングを見計らって、秋弥は訊ねた。
「何で今から試験勉強をしてるんだ？　高一の最初の定期考査なんて入試の延長だと思うんだけど」
その率直な疑問に対して、綾は頤（おとがい）に人差し指を宛がって唸った。
「んー……試験が一般と専門の筆記だけでしたら、二週間くらい前からでも良かったのですが？？」

（それでも二週間前なのか……）
秋弥は彼女に悟られないよう、内心でげんなりした。
「??封術学園の試験って封術の実技試験もありますよね。でも私達が訓練棟を自由に使えるようになるのは連休明け以降なので、先に筆記試験の勉強を済ませておこうかと思ったんです」
オリエンテーションでは一部の施設を除いて全棟への立ち入りが許可されていたが、訓練棟のような特殊な施設を普段から自由に使用するためには、特別な許可証（ライセンス）を発行してもらう必要がある。
その許可証が発行されるのが五月の連休明け以降であるため、入学後の一ヶ月間は装具を用いたあらゆる実技授業がカリキュラムに組まれていないのだった。
「実技はあまり自信無しか？」
「はい……、封魔術式はちょっと苦手で」
「そうか。調律が試験対象になるのは後期からだったな」
簡単な封魔であれば、術式の発動規模も、対象に取る原質の改変量も調律と比べて小さい。
徐々に術式の練度を上げていくのであれば、どうしても序盤に習得する術式は封魔に偏ってしまうのである。
綾は家系的に調律寄りの傾向が強い。
必然的に、というわけでもないが、封魔が苦手だというのも頷けた。
「……あっ、そうだ」
不意に何かを閃いたらしい綾は、急にそわそわとし始めると視線を机に向けて言った。
「えっと、も、もし九槻さんさえ良ければ、わた……、私に封魔を教えていただけませんか？」
顔を俯かせてうまく表情を隠しているが、髪の隙間から覗く耳は耳朶まで真っ赤に染まっていた。綾の勇気を振り絞ったお願いに秋弥は??。
「いいよ」

と、軽い口調で応えた。
「何か玲衣と堅持からも同じことを言われそうだしな」
一瞬、綾の中の気持ちバロメーターが歓喜で跳ね上がったのだが、続く言葉を聞いて六割ぐらいにまで急降下した。
「ん、どうかしたか？」
「何でもないですぅ……」
一喜一憂する綾の様子を不審に思いはしたものの、秋弥は言及を避けた方が良さそうな空気を感じ取ったのでこの話題にはそれ以上触れないようにした。
再びの沈黙。
論文のページをめくる音とノートにペンを走らせる音が響く。
図書館の持つ独特な雰囲気は不思議と心地良いと感じる。
多くの人が集まっているにも関わらず静寂に満たされた館内。年月を経た紙の束が醸し出す匂い。まるで時間が止まってしまったかのようにゆっくりと流れているような感覚。そして、高密度の情報体が頻繁に行き交う知的領域がそこかしこに構成されている。
と、唐突に聞き慣れた着信音が鳴り響いた。
図書館で不用意に音が鳴ることは非常にマナー違反な行為であるが、秋弥が周囲から咎めるような視線の集中砲火を浴びることはない。
五感への直接接続（ダイレクト・リンク）。
デバイスに組み込まれた一機能であり、特定のパターンを持つ微弱な電気信号を体内へ向けて発信することで、着信音を脳に直接送るというものだ。
ただし、この機能は直接肌に身に付けるタイプの携帯端末でしか使用することが出来ない。な幻覚作用を得ようとしたり、脳に多大な負荷を与えるようなことがないよう、端末側で厳重なセーフティロックが掛けられているためだ。
脳への直接接続技術は、脳科学において日進月歩の勢いで進化を続けている分野の一つだが、それを嫌悪している人も少なからずい

る。
自分の目で見たもの。聞いたもの。感じたもの。嗅いだもの。触れたもの。
その境界があやふやになることを嫌っているのだろう。
（そういえば綾もカードタイプだったか）
現在では軽量性や携帯性に優れたカードタイプよりもファッションの一部として、また、身に付けるという習慣が付けやすいブレスレットやチョーカーなどのアクセサリータイプが主流となっている。
今度機会があったら訊ねてみようと思いながら、スタンバイモードのデバイスを立ち上げた。メールアイコン上に表示された新着メールのポップアップを選択すると、届いたメールが自動的に開かれる。
送り主は今朝と同じく浅間総一郎。
本文には本日の仕事に関する詳細な情報が書かれていた。
時間、場所、同行する封術師の名前と経歴、総一郎からの注意事項と激励。それらを一読するとウィンドウを切り替えて集合場所までの距離と移動時間を調べた。続いて集合時間から移動時間を差し引いて学園を出る時間を計算する。思いのほか近い場所だったので、長くても後二十分は時間を潰さなくてはならない。
「玲衣ちゃんからのメールですか？」
ホロウィンドウを閉じかけたところで、綾から声を掛けられる。
今日の勉強はもう終了なのだろうか。綾は参考書をかばんに仕舞おうとした姿勢のまま問うた。
「いや、違うけど」
むしろ何故玲衣からだと思ったのか、秋弥の方こそ彼女に問いたかった。
「あれ……九槻さんがメールを読んでるなんて珍しかったので、てっきり玲衣ちゃんからかと思ったのですが」
その帰結は決定的に間違ってると声を大にして言いたかった。それではまるで玲衣と二人で一セットみたいじゃないか。

あまりにも見当違いな思い込みをされると後々の関係にも影響しそうだったので、玲衣のいない今を契機と見た秋弥は自己弁護をした（どうして自分が自己弁護なんてしなければならないのかと、本気で思い悩んだ）。
「一応言っておくけど……、俺と玲衣は別に綾が思っているような関係じゃないからな」
「え、えっ？」
「……何でそんなに意外そうな顔をするんだ。最初に話したような気もするけど、玲衣とは偶々小中で一緒だっただけで？？いや今となっては現在進行形なんだけど。ただそれだけなんだ」
「そう……だったんですか？　何だかいつも一緒にいるような気がしていたので、ひょっとしたらと思っていたのですが……」
「いやいや、ひょっとしないから」
秋弥は心の底から、全身全霊を以って否定する。
もしかして綾だけでなく、三組のクラスメイト達からも同じような目で見られているのだろうか。
そうなれば、それはそれで非常に由々しき問題だった。
「とにかく俺と玲衣はそういう関係でもないし、これも玲衣からじゃなくて仕事のメールだよ」
秋弥は大きな大きな溜息を吐いた。それとは対照的に、綾はかすかに嬉しそうな笑みを浮かべる。
しかし、それも直ぐに疑問の色で塗り潰された。
「……お仕事、ですか？」
「あぁ、封術の仕事」
「……ぅえぇっ！？」
一テンポ遅れて、綾が驚きの声を上げた。
途端に、非難の視線が周囲から突き刺さる。質量を持った（ように感じられた）視線に華奢な身体を萎縮させた綾が周囲にぺこぺこと頭を下げた。
「ごめん、何か驚かせてしまったかな」

改めて姿勢を正した綾に、心持ち身体を前に寄せて、ひそひそ声に近いトーンで秋弥は言った。
「封術のお仕事ということは……封術師の方と一緒にですよね？」
封術師見習いが学外で封術を行使するための条件である以上、その制約は絶対に遵守しなければならない。もしも破るようなことがあれば国家封術師の受験資格を恒久的に剥奪されるだけでなく、マナスの門を通じて装具を呼び出せないような処置が施される。
それだけ、封術という存在が社会に与える影響は大きいということだ
「まあ、必然的にそうなるな。封魔師として調律のサポートをする仕事だよ」
「わぁ……、やっぱりくつ……秋弥さんはすごいです……」
綾がウットリとした瞳で秋弥を見つめる。
「……っ！？」
周囲に人がいるとはいえ、二人っきりで熱の篭った視線を真正面から受けて動じずにいられるほど、秋弥は人生経験を積んではいなかった。
純粋な色を滲ませた直視に耐えられずに視線を逸らす。
綾が秋弥の名を呼ぶときの呼称がいつの間にか「九槻さん」から「秋弥さん」に変化したことすらも、秋弥は気に留めることが出来なかった。

★☆★☆★

閑話休題。

逃げるように、と言ってしまえば聞こえは悪いが、事実、秋弥は待ち合わせの時間に遅れそうだからと強引に話を打ち切って図書館

を後にした。
余談だが、綾は秋弥に感化されたのか、もうしばらく図書館に残って勉強をしていくことにしたらしい。
そして現在、待ち合わせの約五分前。
予定よりも早く現地に到着してしまった秋弥は仕事場となる廃病院の周りを歩いていた。
「……ん？」
再び廃病院の入口前へと戻ってきたとき、来たときにはなかった人影があった。
体型に合ったビジネススーツを折り目正しく着こなしてフレームの無い眼鏡を掛けた、一見すると神経質そうな男性が廃病院を見上げている。
この男が封術師？？依頼人の調律師だろうか。
秋弥が近寄っていくと、男性が視線を戻した。
「おや？　おやおや……」
秋弥を見て、次いで彼の服装を見ると、男性は大げさに眉尻を下げる。
「失礼するけど、もしかして君が封魔師……の？」
言葉が疑問系の形を取るよりも先に逡巡したのは、『封魔師』と言おうとした自分の言葉に違和感を覚えたためだろう。
無理もない話だ。
秋弥は依頼人の封術師にわざわざそうだとわかるように、家には帰らず、鷹津封術学園の制服を着たままでこの場所にやって来たのだ。
それは単に制服姿が目印になるからというだけの理由ではない。
封術師ではなく、封術師見習いであることを言外にアピールするためだった。
「はじめまして、九槻秋弥と言います」
「あ、うん……はじめまして。僕は封魔師の向江仁（むかえ じん）」
訝しんでいる様子の男性？？向江に、秋弥は総一郎からの依頼で

封魔師として調律のバックアップを頼まれたのだと伝えた。
当然それは依頼主である向江も知っていることなので、これは言わば事実確認のようなものだった。
「そうか……、君が浅間さんの言っていた優秀な封魔師なのか。まさか学生が来るだなんて思いもしなかったよ」
優秀な、というフレーズには引っ掛かりを覚えたが、総一郎の秋弥に対する過大評価は今に始まったことではない。まさかそれを言い触らしているとは思わなかったが、向江は封術師見習いである秋弥を総一郎のお墨付きもあるということで、割とすんなり受け入れてくれた。
「ここで立ち話しているのも時間が勿体無いし、中に入って話そうか」
向江に促されるまま、彼に続いて廃病院の中へと入った。

★☆★☆★

「僕もね、ついこの間までは君と同じ鷹津封術学園の学生だったんだよ」
元はエントランスだったはずの場所に立って、向江は言った。
わずかに病院だった頃の面影を残してはいるが、植木は養分を得られずに枯れ果て、待合用のソファーは横倒しされ、インフォメーションカウンターには埃の山が堆く積み上がっている。空気は淀み、停滞したように動かない。
外がまだ比較的明るい時間帯とはいえ、電気設備が機能していない病院内は薄暗くて注意して歩かないと躓いてしまいそうだった。
「今日は僕の封術師としての初仕事でね。前々から親交があった浅間さんに無理を言ってお願いをしたんだよ。優秀な封術師にサポートを依頼して欲しいってね」

仕事内容は廃病院の近隣で暮らす住人が目撃したという隣神の調査と対処、及び異層領域の調律。
周囲に視線を這わせながら、向江は時折何かを探るように足を止めた。
秋弥もそれに合わせて立ち止まる。
「九槻君は浅間さんとの仕事経験もあるのかな？」
「はい、それなりには」
「なるほどね……。あ、別に君の事を信用していないとか、そういうわけじゃないんだよ。浅間さんが君を推薦したということは、それだけの実力が君にはあるということだからね」
取り繕うように弁解する向江に、秋弥は「気にしてませんよ」と返した。
そもそも、授業の一環としてや家庭環境によるところを除いてしまえば、封術師の仕事に封術師見習いが同行するというケースはほとんどレアケースと言っても良い。
封術師見習いは封術師がそばに付いていないと学外での封術の使用が認められていない。
そして同時に、封術師には封術師見習いを監督するという責任が発生する。
このため、隣神と命懸けの戦いに発展する場合もある現場には極力封術師見習いを連れて来たがらないというのが、その理由の最たるところだった。
向江が秋弥のことを内心でどのように思っているかはわからないが、今のところ文句の一つも口にしないのだから、こちらが気に病む必要もないだろう。
二人は病院内を歩きながら、異層領域が発生している箇所を探す。
その調査方法には現層世界が有する固有振動と同パターンの波長を放出して、異層世界の固有振動パターンと競合・共鳴を起こしている空間を探すという手法を用いている。
これは、時間は掛かるが最も確実な手段であると同時に、調律師

である向江が得意とする方法なのだということだった。
「む……こっちだ」
何かを察知したらしい向江が右側の扉に手を掛ける。スライド式の扉は錆付いてすべりが悪くなってるのか、開けるのに多少の苦労を必要とした。
現層世界に異層世界の領域が発生するケースはいくつか考えられる。
そのうちの一つが、次元振動によるもの。
次元振動とは、その名の通り現層世界を含めた多重層世界における次元レベルでの振動??すなわちエリシオン波を指す。
層ごとに一意の固有振動数を持つ多層世界は、あるときを境にして急激に漸近することがある。
このとき、漸近する二つの世界層が有する固有振動パターンが一部分でも重なり合うと、強力に干渉しあって共鳴現象を引き起こす。
そこでは『時間』と『空間』が入れ替わり、二つの世界を繋ぐ事象の穴（ポイント・ホール）が発生する。
これが次元振動による異層領域の発生だ。
一度でも共鳴現象が発生すると、固有振動の重なりが解けてもしばらくの間は異層世界の余韻が滞留してしまう。
その滞留を解消させて世界（現層）をあるべき形に戻すことが、調律師の役目だ。
「案外早く見つかったね。それじゃあ早速調律を開始するから、九槻君。その間の護衛をお願いするよ」
「わかりました」
短い返事とともに、秋弥は右手で無造作に下げていた装具を構え直す。
「……ふむ、君の装具は綺麗だね。実に羨ましい」
蒼白く発光する水晶のような刀身を持つ三尺ほどの剣を見つめて、向江が感嘆にも似た吐息を漏らす。
「僕の装具と比べたら、まるでこれがおもちゃみたいに見えるよ」

向江は自身の装具をひらひらと弄んだ。彼の装具は刃渡り二十センチほどのダブルエッジで、峰の部分にノコと呼ばれる凹凸が見られることから、サバイバルナイフ型の装具であるようだ。
強化型近接系にカテゴライズされる装具を手の中で弄ぶ。そのまま室内を歩き回って共鳴現象が顕著に現れている部分を捜索すると屈み込んで、装具をリノリウムの床目掛けて突き立てた。
向江の装具が音も立てずに溶け込むようにして波紋を残しながら床へと沈んでいく。向江は新品同様のスーツが汚れるのも構わずにその場で片膝立ちの姿勢を取ると、装具の柄に両手を添えて瞳を伏せて意識を傾けた。
すると、向江の身体から淡い光が生まれた。
情報体を構成するメディオンが向江の腕を通じて装具へと流れ込む。
大気？？否、大気を構成する情報体が震える。視覚では捉えることが出来ない干渉力の鬩ぎ合いを、秋弥は異層認識力（オラクル）によって肌で感じ取っていた。異層領域の上書きを行うために展開した向江の最適化領域（ティマイズ・フィールド）に、領域の情報体が抗っているのである。
振域レベル一。
極小規模の異層領域だが調律にはそれなりに時間が掛かるだろう。
瞬間、物陰で何かが蠢いた。
異層領域の異常を察知した隣神が姿を現したのだ。
体長三十センチほどで長い尻尾が特徴の『根棲（ねずみ）』と呼ばれる隣神だ。
その名が体を表わすように、姿はネズミそのもの。
根棲は四本の短い足を忙しなく動かし、嗅覚と聴覚を用いてしきりに様子を窺っている。
と、奥からさらに二匹の根棲が現れる。
根棲達は互いの鼻先が触れ合うほどの距離まで近づくと人間の可聴域では聞き取ることの出来ない高周波で会話を始めたようだ。
秋弥は調律に集中している向江の邪魔にならないよう、静かな足

取りで根棲のそばに寄った。
根棲達は地面を通じて秋弥の存在を認識して、二対六つの瞳を一斉に向ける。そのうちの一匹が予備動作も無く突然飛び掛ってきた。
それを装具の横薙ぎで払い落とす。鋭利な刃で胴体を真っ二つに分断された、かつて根棲と呼ばれていた存在が地面に落ちる。
二匹目がそれに気圧されることもなく、勇敢にも一匹目とほぼ同じ動作で跳ねた。
返す刃で一閃。
まるでフィルムの焼き回しのように同じ光景が続いた。
さすがに三匹目は無謀に飛び掛かろうとはせずに後退ったが、秋弥も一歩を踏み出す。ストロークの差だけ、お互いの距離が縮まる。
その瞬間、身体だけでなく、上半身に捻りを加えて背後へ横薙ぎの一閃。
秋弥の背後に回り込もうとしていた新たな根棲が一瞬にして斃される。
振り返った一瞬の隙を突いて最初の一匹は姿を隠したが、去る者を追ってまで始末する必要はない。
今の秋弥が為すべきことは、あくまでも向江の護衛だ。
調律中の向江はそれ以外の何も行うことは出来ない。
意識を完全にエリシオン波へと委ね、情報体を構成する基盤の役目を果たす『波』の操作に注力している。
調律術式は集合的無意識領域をエリシオン波長の演算のために使う。
人間が意識可能な??制御可能な脳の演算処理は全体の三パーセントにも満たないと言われているが、それは真ではない。
マナスの門を用いて心象世界を抉じ開けたことで『意(マナス)』を操作する術を身に付けた術師は、装具を通じて己の『意』にアクセスすることが可能となる。
意識領域から無意識領域へ。
潜在的に眠り、先天的な演算能力を持つ無意識領域を用いること

で、通常の限界を超えた演算処理を可能にしているのである。
それが調律術式の基礎??最も初歩的な技術だ。
向江は意識と無意識の大部分を領域改変のための演算処理へと回しているようで、秋弥が根棲を撃退したことも、もっと言えば秋弥が動いたことにすらも気づいてないだろう。
一心不乱に、脳に掛かる負担で時折顔に苦渋の色を滲ませながら、向江は調律を行っている。
その様子を見守りつつも、秋弥は片時も気を抜くことなく、二人に襲い掛かる根棲の群れを悉く撃退していく。
根棲はクラス十??ヒエラルキーの最底辺に属する隣神だが、個体数が圧倒的に多いため集団で襲われると対処が難しいとされている。
しかし、廃病院の根棲はせいぜい二、三匹で襲ってくる程度で、数こそ多いものの撃退するのに大した苦労を必要とはしなかった。
異層領域が消滅すれば、根棲自身も現層世界に留まれなくなるにも関わらず??。
調律中の術者が隣神に襲われやすい理由は、現層世界を棲家としている隣神が自身の存在理由を護ろうとするためだ。
異層領域が調律されなければ、隣神は現層世界に留まり続けることが出来る。
故に隣神は封魔師ではなく調律師を狙い、調律師は封魔師を雇う。
秋弥がこれまで封魔師として調律師??総一郎の護衛を行ってきたときにも、弱い隣神は集団で、強い隣神は個で調律師に敵意を向けていた。
(何か不自然だ)
両の手指では収まりきらない数の根棲を倒し終えた秋弥は、刃に付着した原質(メディオン)の残滓を振り払いながら思案した。
だが結局、答えが見つかるよりも先に異層領域の調律が済んだようだ。
精神的な疲労による吐息を漏らしながら、向江は装具を手の内に

収めて立ち上がった。
「ふぅ……ここの調律は無事に完了したよ」
「お疲れ様でした」
封魔術式を一切使用せず、疲労の色すらも微塵もない秋弥が彼を労う。
異層領域を失ったことで原質の粒子となって消滅していく根棲達の亡骸を向江は眺めた。
「なるほど、腕は確かのようだね」
「クラス十の隣神ですよ。封術師なら誰だって倒せます」
「封術師、ね……」
何処か含みのありそうな物言いをする向江。
「ところで、君の装具は強化型なのかい？」
「……そうですね。強化型近接系片手剣です」
聞かれたままの答えを返す。すると向江はわずかに瞳を細めた。
と、不意に上の階から大きな物音が聞こえてきた。
「？？ん？」
二人して天井を見上げる。
まるで大質量の物体が地面に落ちたときのような衝撃音に、秋弥は眉根を顰めた。
「近隣住人が目撃したという隣神かな？」
「さあ……、でも、その可能性は高いと思います」
事前に総一郎から知らされていた情報では、住人が目撃したという隣神の具体的な情報までは得られなかった。
それでも、目撃されたという隣神が根棲程度の低級隣神ではないことくらい容易に見当が付く。
「それじゃあ、九槻君。ちょっと上の様子を見てきてくれないかな？」
何気無く言った向江に、秋弥はかすかに眉根を顰めた。
「……向江さん。俺はまだ封術師見習いですよ。封術師と別行動を取るわけには……」

面倒な制約であるのは違いない。
それが望まない結果だったとしても封術師見習いと仕事をともにする以上、そのルールは遵守しなければならない。
……というのは建前上の話で、向江の提案は彼にとってもありがたい話だった。
病院一棟程度の規模で付かず離れず行動する必要性を秋弥は全く感じていなかった。
今日が初仕事と言っていただけに、封術師としての責務に潔癖なのではないかと懸念していたのだが、どうやらそうでもないらしい。
「大丈夫だよ。根棲程度の隣神なら調律中の僕でも予め結界を張っておけば防げると思うし、君があっちの隣神を抑えていてくれれば調律もスムーズに進むと思うから」
「……わかりました」
あくまでも不承不承な態度を装う秋弥に、何処か満足そうに見える笑みを向江は浮かべた。
「僕は地下階の様子を見てくるよ。この調子だとまだ数箇所くらい調律が必要なところがありそうだからね。上の隣神は君に任せたよ」
はい、と返事をして、秋弥は彼と別れて上の階を目指した。

第13話「隣神×封術師見習い」

★☆★☆★

階段を上って二階に到達した秋弥は、そこで足を止めることなく三階を目指した。

隣神の気配？？現層世界の領域に満ちる情報体の干渉圧を、細い糸を手繰り寄せるようにして追う。

三階の廊下に出た途端、鼻腔をくすぐる甘い香りがした。

廃材やら瓦礫やらが無秩序に散乱する廊下に、カツン、カツン、と足音を響かせる。

そこに、カツッカツッカツッ、と小刻みな足音が重なった。

リコリス？？隣神の少女が自然な足取りで秋弥の横に並んだ。

「？？薄暗いね」

「ずいぶん前から使われなくなってたんだろうな。ライフラインが停止して人の手が入らなくなった場所は朽ちるのが早いからな」

「ふぅん、そっかぁ」

「余所見も良いけど、足元には気をつけろよ」

リコリスが現れたことには驚く素振りを全く見せず、むしろ隣にいることが当然であるかのような態度で秋弥は彼女を気遣った。

「ちゃんと見えてるから大丈……あっ」

言っているそばから転びそうになったリコリスを間一髪で抱きとめる。

「えっへぇ〜……」

秋弥に抱きとめられたリコリスは満面の笑みを浮かべて、そのまま彼の右腕に抱きついた。

リコリスの行動が彼の気を惹くためのわざとであることは百も承知だったが、秋弥は抱きつく少女を無理に振りほどこうとはしなかった。
「今日はご機嫌だな」
「うん！　だって久しぶりに秋弥様と二人っきりなんだもん」
両腕を巻きつけるようにしてギュっとしがみつくリコリスに眼を向ける。彼を見上げるリコリスの瞳は自然と上目遣いになった。
「ねぇ秋弥様、秋弥様ぁ。リコリスは秋弥様の言いつけを守っていっぱい、いぃ～っぱい我慢したんだからね」
何かを期待するようなキラキラとした真紅の瞳に見つめられた秋弥は、足を止めると空いている左手で彼女の髪をそっと撫でた。
ちなみに蒼の装具は向江と別れた時に仕舞っている。装具は必要に応じて召還すれば良いし、持ったままでいるのは何かと不便だった。
頭を撫でられて気持ち良さそうに眼を細めたリコリスはまるで猫みたいだった。
「だけどお前、一度勝手に出てきたよな？」
「……うっ」
一転してばつが悪そうに表情を硬くしたリコリスの小さな頭を、今度は優しく叩く。
「だけどまあ自分でも悪いと思ったから、家の中でも顕現（出ない）しないようにしてたんだろ？」
「うぅ……」
お見通しだとでも言いたげに、錦糸のように滑らかな金色の髪を梳く。
「……もう、怒ってない？」
怯えるようなリコリスの言葉に、秋弥は眼を見張った。
「そりゃあ少しは困ったけど……。最初から怒ったりはしていないし、それでリコリスのことを嫌いになったりはしないよ」
「そっかぁ……そうだよね。秋弥様はいつだって優しいんだもんね」

リコリスは目元に浮かび掛けていた涙の粒を屈託のない笑みで弾き飛ばすと、秋弥から手を離して舞うようにステップを踏んだ。
「あぁ……やっぱり外の世界は気持ち良いなぁ」
ワンピースの裾を翻して、一回転。
「埃っぽいところだと思うけどな」
「気持ちの問題なの。存在のエネルギーで満ち溢れてる感じが好き」
苦笑交じりの秋弥に、彼の正面に立ったリコリスが腰に手を当てて頬を膨らませながら抗議する。
「存在のエネルギー……原質（メディオン）」
原因と結果。
事象と記録。
存在（メディオン）と証明（エリシオン）？？。
上機嫌なリコリスとともに歩みを再開する。
途中、異層領域が生じている病室を見つけたが、規模は一階のそれと大差無かったため、後に来るであろう向江に調律を任せることにした。
「……さっきよりも強い干渉圧を感じる。近いな」
隣神の干渉圧を追って三階中央のナースステーションの通り過ぎた秋弥達は、だんだんと強まっていく干渉圧に静かに身構える。
「誘われている感じがするな。リコリス、お前にもわかるか？」
「うん、わかるよ。明らかに誘ってるね？？」
リコリスは笑う。
「誘ってる相手が、狩人（ハンター）だとも知らずにね」
秋弥に対して見せた人懐っこい少女の姿からは想像も付かない、残忍な笑顔で笑う。
「そうだな。さっさと退治して帰ろうか」
応じるように、秋弥は蒼の装具を召還する。
と、初めて秋弥の装具を見たリコリスが可愛らしく小首を傾げた。
「ん、どうした？」
その様子に、秋弥が訝しげに声を掛ける。

だがリコリスは何も言わずに、ただ観察するようにジッと蒼の装具を見つめた。
「……これって多分、人間みたいに言うと『とくしゅがた』っていうんじゃないの？」
実体を持たない蒼い刀身に細い指を通しながら不思議そうに唸る。
「あぁ、そうだよ。特殊型遠近接流剣だ」
「でもでも、秋弥様はさっき『きょうかがたきんせつけいかたてけん』って言ってたような？？」
「そうだったか？」
とぼけて見せたが、それで誤魔化せるとは到底思っていなかった。
「あの人間に、『ウソ』ついたんだね？」
リコリスの問い掛けに、秋弥は肯定も否定も返さなかった。しかし、黙秘こそが彼女の言葉を肯定している証だった。
「ふぅん……」
探るようなリコリスの視線を涼やかに受け流す。それを何か考えがあってのことだと読み取ったのか、それ以上追及されることはなかった。
メールに渡されていた資料によると、病院の三階より上は一般病棟となっている。主要な医療設備はなく、中央のナースステーションと病室のみ。
病室は一人用の個室もあれば四、五人で共有する大部屋まで大小様々であるが、一際強い干渉圧を放っている病室はどうやら個室のようだ。
扉の前には三〇九のプレートが掛けられている。病院が廃業となる前に回収されなかったのか、プレートの下に患者の名前が書かれた紙が貼り付けられていたままとなっていた。
背後にリコリスを従えて、病室の扉を開ける。
ベッドや袖机などの調度品が取り払われた病室は個室の割にとても広く感じられた。壁に掛かっていた唯一の調度品とも呼べるカレンダーが八年前の七月で時間を停止させている。

開業当時は病的なまでに白かったであろう壁には四方八方に大きな亀裂が見られ、割れた窓ガラスの破片が床に散らばって、沈みかけた夕陽の光を浴びて煌いていた。
「何にもないね」
扉を開けただけで中の様子が一望出来てしまうほど、何も無い。そこには隣神の姿など影も形も無かった。
それでも秋弥は、何が起こっても対処できるようにと慎重に病室へ足を踏み入れた。
隣神の存在証明ともいえる干渉圧はまだ残っている。
それが残滓なのか、はたまた単に姿が見えないだけなのか、まだ判断が付かないが??。
室内にはいないだけで、たとえば壁面などに張り付いて隠れているのかもしれない。
窓辺に近づこうとしてガラス片を踏む。ガラスの割れる音を聴いた瞬間、秋弥は窓枠に佇む一匹の黒猫に気づいた。
ハッとしてバックステップを踏む。秋弥は黒猫に視線を固定させたまま、一瞬にして扉の前まで戻ってくる。
黒猫は窓枠から床へひょいっと飛び降りると、ゆっくりと部屋の中央へ向かって歩いた。
その姿が次第に大きくなる。両者の距離が縮まったことによるものではなく、黒猫の質量が増大しているのだ。
「??『禰子(ねこ)』」
長い年月を経て神格化した猫の隣神だ。猫又との違いは尾が二つに分かれてないことだろうか。
全高二メートルほどまで巨大化した黒猫の隣神を下から上へと眺める。夕陽を背景にして闇に溶け込むような黒の体躯。その四本の足はまるで靴下を履いているかのように白く、秋弥を威嚇して大きく膨らませた尻尾の先も同じように白い。
禰子は全身の毛を逆立たせると、肉球の隙間から尖った爪を伸ばして、前足を横に薙いだ。物がなくて広く見える室内とはいえ、動

き回れるスペースは限られている。
秋弥は封魔術式の補助を得て高く跳び上がることで禰子の攻撃を避わした。
「住人が目撃した隣神というのは、コイツのことか」
着地して背後の壁を一瞥する。爪が通過した後の壁には横方向に三本の亀裂が出来ており、その衝撃によって秋弥達の入ってきた扉が音を立てて崩れ落ちた。
壁中に広がる幾本もの亀裂は、この隣神の引っ掻き傷によるもののようだ。
「秋弥様ぁ、頑張ってぇ〜」
いつの間に移動したのか。リコリスは重力に逆らって壁面に立ち、紅の装具を振り回して歓声を飛ばした??当然、身に着けている洋服も金色の髪も何もかもが、彼女と同じように重力に逆らっている。
手を貸すつもりのないらしいリコリスを横目に、身体を禰子へと向ける。攻撃が避わされたことで警戒心をより一層強めた禰子は、四肢の曲げて身を低くした。
飛び掛ってくる前兆だ。
そう考えた時点で秋弥は横に飛び退いていた。数瞬遅れて、突進した禰子が隣を通過する。
慣性を殺して滑るように振り返る。壁に頭をぶつけた禰子は目標を見失ってキョロキョロとあたりを見回している。
禰子と相対するのは初めてだったが、どうやら長い年月を生きていても知能は猫並らしい。
見失っていた秋弥の姿を見つけると、禰子は振り返ることなく、今度は尻尾を振り回した。伸縮自在の尻尾が鞭のように部屋中を飛び交う中、秋弥は不規則な軌道を冷静に読み取って避わし続ける。
その間、一切の攻撃を与えようとはせずにひたすら動き回りながら、秋弥は大気中に広がった塵芥を利用して、ある術式の演算を行った。
演算し終えた術式を待機状態で保持したまま、なおも攻撃を避わ

し続けていると、唐突に尻尾の攻撃が止んだ。
猫の性で同じ行動を続けることに飽きたのだろうか。秋弥は距離を取って次の行動を窺った。
禰子が尻尾で地面を何度か叩く。攻撃のためではなく、動物的な反射行動のようだ。隣神を知覚出来る者にしか感じ取ることの出来ない地響きが地面??現層世界と重なり合った異層世界の地面を揺らす。
隙だらけだな、と丸まった禰子の背中を見つめながら思っていると、隣神が緩慢な動きでこちらへと向き直った。
「キシァァァァァァァァァァ」
口角を吊り上げて鋭い牙を覗かせ、鳴き声を上げる。後ろ足に力を蓄えるように重心を後ろに移して、再び突進をしようとしている。
（来いっ！）
装具を身構えて、内心で呟く。禰子の隣神は現層世界の動物を遥かに上回る身体能力によって、加速術式の補助封術を掛けている秋弥と同程度の移動速度を実現している。
だからこそ、隣神が動いてから動き始めるのでは遅い。
秋弥の視線は隣神の後ろ足へと注がれている。隣神が床を蹴る瞬間の筋肉の動きを、床の軋みを見逃さないように??。
タンッ。
しなやかで、それでいて力強い音が鳴った瞬間??。
隣神は、秋弥が発動させた束縛系術式の網によって、捕縛された。

★☆★☆★

「やったぁ。さすが秋弥様ぁ」
横から飛び付いてきたリコリスを抱きとめると、秋弥は塵芥の分子結合を組み変えて生み出した網の中でもがく禰子を見上げた。

禰子は現層世界の猫が神格化した生まれた隣神であり、多くの隣神は異層領域内でしか存在できない。また、現在向江が調律を行っている異層領域の振域レベルでは、禰子のようなクラス七相当の隣神を長期間、現層世界に留め続けることも難しい。

禰子が現層世界に留まれているのは、黒猫が隣神へと変質したことで生じた存在定義の矛盾を解消するために、《星の矛盾許容》と呼ばれる自浄作用（サーキット）によって、情報体に内在する『波』が現層領域に異層領域の回路を作り出したためだ。

さらに言えば、次元振動によって偶然にも生まれた異層領域から、禰子のエサとなる根棲が顕現するようになったことで、栄養摂取（エネルギー）にも不自由しなかったことだろう。

であれば、一階の異層領域を調律していたときに、集団で襲ってこなかった根棲の異常行動にも、一応の理由付けが出来る。

調律が成功すれば、現層世界との接続（コネクション）は強制遮断される。

不可抗力によって望まない顕現をし、不幸にも捕食者??禰子の餌食となった根棲は、最低限の犠牲だけで現層との接続を遮断しようとしたのだろう。

餌場が無くなって困るのは禰子なのだから、元の異層世界へ還りたい根棲を脅して調律師を襲わせた。

事の顛末はそんなところだろうか。

網に捕らわれてもがき苦しむ禰子も、災難といえば災難だ。

猫が神格化することなど、滅多に起こるものではない。

おそらく何らかの心的障害（ストレス）によって、突然変異を起こしたのだと推測出来る。

「ねぇ秋弥様。この禰子どうするの？」

リコリスが自身の数倍もある禰子の隣神に物怖じした様子も見せず、あまり興味無さそうな声で言った。

「異層世界へ還す」

しかし、淡々と告げた秋弥の言葉には意外そうに眼を見張った。

「どうして？　斃（たお）しちゃえばいいのに」

「還せるのなら元の異層世界に還してやりたいんだよ」
穏やかな秋弥の口調に、リコリスは満足げな笑みを浮かべると、そっと身を離して紅の装具を差し出した。
蒼の装具を仕舞い、代わりに紅の装具『紅のレーヴァテイン』を受け取る。
リコリスが遠ざかるのを確認してから、秋弥は禰子の正面に立った。
身動きが取れずに悲痛な鳴き声を上げる禰子を見上げ、ふと悲しそうな表情を見せる。
だがそれも一瞬のことで、直ぐに表情を引き締め直すと、装具を肩の高さで水平に構えた。
右腕を押し出すようにして、ゆっくりとした動作で装具を突き出す。
魔剣『紅のレーヴァテイン』は調律術式を行使する際に装具が地面へと溶け込むように、静かな波紋だけを残して禰子の身体の中へと溶けていった。
悲鳴は起こらない。
禰子の痛覚を遮断しているのではなく、魔剣の刃が禰子を傷つけていないのだ。
禰子は憑き物が落ちたかのように、暴れることをやめた。これから自分の身に何が起ころうとしているのかわからずに、身体の中へと浸食していく装具を何処か愛嬌のある大きな瞳を見開いてジッと見詰めた。
秋弥はレーヴァテインの柄から右手を離して、その掌を禰子の身体へと向ける。
すると、禰子の身体から徐々に光の粒??情報体を構成する最小単位であるメディオンの粒子が生まれて、吸い込まれるように魔剣の中へと消えていった。
「??ゲート（狭）・オブ（き）・バビロン（門）」
その光景を眺めて、リコリスが小さく呟いた。

存在エネルギーを内包した光の粒子は、少しずつ、ゆっくりとだが確実に禰子の存在を分解し始めた。
『波』の原質を自在に操る異能??。
それが、魔剣《紅のレーヴァテイン》を異能たらしめる特異な性質。
秋弥はその異能を用いて、禰子の『波』から異層世界へ通じる近道（ショートカット）を作り出したのだった。
魔剣は対象となった情報体の『波』を読み取り、本来在るべき世界へと通じる門（ゲート）の役割を果たす。ただし魔剣自体が門の役割を担うため、そこを潜り抜けて元の異層世界へ還すには、情報体を一度、情報の最小単位である原質（メディオン）へと分解しなければならない。
ゆえに、狭き門。
断片化された情報体は門を抜けた向こう側??異層世界で再構成される。
秋弥は禰子を構成する原質を一つたりとも逃すことのないように意識を強く傾けた。
光の粒子が体外へと溢れ出るほどに禰子の存在は弱まり、その身体はうっすらと透き通っていく。
時折、粒子の奔流に紛れるようにして、一際強い発光現象を伴う粒子が禰子の情報体を離れて、レーヴァテインの中へと吸い込まれていった。
そして、そのたびに秋弥は視た。
此処ではない、此処に似た何処かの光景。
??その光の正体は、遠い日の禰子の記憶だった。

★☆★☆★

そこは病室だった。
開け放たれた窓の向こうで一陣の風が舞い、レースのカーテンを揺らす。
室内には暖かな光が満ち、白い壁や床、ベッドを照らしていた。
その可動式ベッドの上で、上体を起こして読書をしている一人の少年がいた。
病院服に身を包み、線が細く、薄幸そうな少年だ。
彼はふと何かに気づいたようにこちらを向いた。
「どうしたの？　何でこんなところにいるの？」
声変わりをする前の、女の子のような高いソプラノ声。
本の中でしか見たことのない『ソレ』を目の当たりにして、少年は内心の驚きを隠せずにいた。
本を閉じて、ベッドから這い出ようとする。
しかし、少し動いただけで少年は苦痛に顔を歪めた。左腕に繋がれた点滴用の管に気づいて、残念そうに溜息を漏らす。
「ねえ、こっちにおいでよ」
少年が何を言っているのか、『ソレ』には理解出来なかった。
『ソレ』は少年に近づいてみることにした。

少年はベッドの上に飛び乗ってきた『ソレ』を見て、そっと手を伸ばした。
彼の手は震えていた。
それが恐怖によるものなのか、はたまた興奮によるもののかはわからない。
おそらく前者だと思うけれど、確信はない。
『ソレ』は自ずから少年の手に触れた。
途端、吃驚した少年は手を引っ込めた。
だけど直ぐにもう一度手を伸ばして、『ソレ』の身体に触れた。
「わっ！　とっても柔らかい」

最初はおっかなびっくりだったけれど、だんだんと慣れてきたのか、『ソレ』の感触を確かめるように優しく、何度も何度も繰り返し撫でた。
心地良い体温を感じた。
人の持つ温もりを、『ソレ』は感じていた。

廊下の向こうから誰かが近づいてくる音を聴いた。
丸めていた身体を起こして、ベッドから飛び降りる。
その際に爪をシーツに引っ掛けてしまったようで、ベッドの上の少年は慌ててシーツを整えていた。
「もう行っちゃうの？」
言葉の意味を理解したわけではないが、少年に呼び掛けられたような気がして、『ソレ』は振り返った。
だが返す言葉を持たない『ソレ』は何も応じることが出来ずに、静かに病室を出て行こうとする。
少年が遠ざかっていく『ソレ』の背中を寂しそうに見送っていると、『ソレ』と入れ替わるように、白衣を着た初老の男性が病室へと入ってきた。
男性が足元を通り抜けた『ソレ』に気づかなかったことに、少年は胸を撫で下ろしたのだった。

「やあ、また来てくれたんだね」
壁に掛かったカレンダーが一枚捲られた頃、『ソレ』は再び少年の病室を訪れた。
何てことはない、ただの気まぐれだ。
それでも少年は純粋に、無邪気に、とても嬉しそうに、読んでいた本も投げ出す勢いで、こっちにおいでと手招きした。
手招きをするのは自分の役目じゃないのかと『ソレ』は思ったの

だが、生憎それを伝えるための共通言語を持ち合わせていなかった。
「触ってもいいかな？」
問い掛けても答えられるわけがない。言語体系が人間とは異なる『ソレ』は、この前と同じようにベッドの上に飛び乗ると身体を丸めて寝そべった。
それを肯定と取ったのだろう。少年は『ソレ』の背中を撫でた。
「初めて君が来たときにね、僕、先生に怒られちゃったんだよ」
一方的に、少年は話を続ける。
「シーツの上に君の毛を見つけてね。あんまり煩く言うものだから、耳にタコが出来るかと思っちゃったよ」
少年は本の知識から得た『ソレ』の扱い方を試してみようと思い、顎下へと静かに指を這わせた。
「ずっと一人だったんだから、少しくらい大目に見てくれても良いのにね」
少年に喉元をくすぐられて、『ソレ』は気持ちよさそうに鳴いた。

少年は一人でいるとき、ずっと本を読んでいる。
少年にとっての世界とは、眼に映る病室のことであり、本の中のことだった。
いつも。
いつもいつも。
いつもいつもいつも。
少年は一人だった。
病室に訪れるのは『ソレ』と、白衣の男性。
後はたまに妙齢の女性がやってくることもあったが、少年と少し話をすると、持ってきた荷物を忙しなく片付けて直ぐに部屋を出て行ってしまうのだ。
少年はベッドから出ることも出来ず、窓枠で区切られた先に広がる、広い世界を知らない。

『ソレ』は頻繁に少年の病室を訪れるようになった。
だんだんと、彼の言葉を理解出来るようにもなってきた。
「そうだ。君の名前を教えてよ」
名前なんて、無い。
少年だけでなく、『ソレ』も一人ぼっちだったから。
互いに身を寄せ合うように、傷を舐め合うようにそばにいるだけだ。
「もしかして名前が無いの？　それじゃあ僕が名付けても良いかな」
好きに呼べば良い。
どうせその名前で呼ぶのは君だけなのだから。
「えっと……、うぅん……、難しいなぁ」
腕を組み、眉間に皺を寄せて唸る少年を見て、『ソレ』は暢気に欠伸をした。
「決めた！　今日から君のことはサクラって呼ぶね！」
その日はちょうど、窓の外に桜が見える季節だった。

サクラ。
とても綺麗な三つの音。
「サクラ」
名を呼ばれて、サクラは少年を見上げた。
「サクラ」
もう一度、少年は笑顔でサクラの名前を呼ぶ。
「サクラ」
今度はイントネーションを微妙に変化させて言った。
一体何だというのだろうか。
サクラ、サクラと屈託の無い笑顔で繰り返す少年を見詰める。
？？今日からそれが、私の名前となった。

水滴が窓ガラスを叩く音が聞こえる。
外の天気は、雨。
此処に来る途中で少しだけ身体を濡れしてしまった。
「拭いてあげるから、こっちにおいで」
病室にやってきたサクラを見て、何処からか取り出したタオルを両手に、少年は言う。
濡れた身体でベッド目掛けて飛び跳ねると、水滴が撥ねて少年の顔に掛かった。
「冷たいなぁ、もう」
タオルで身体を包まれる。サクラに触れることにもすっかり慣れた手付きで身体に付着した水滴を丁寧に拭き取っていく。
少年に触れられることは、何故だか嫌いじゃなかった。

「???夢があるんだ」
???夢？
「大人になったら、僕は学校の先生になりたい」
遠い眼差しで、少年は将来の夢を語った。
「学校っていうところはね、同じ年齢の人達がたくさんいて、一緒に勉強したり、運動したり、遊んだりするところなんだって」
まるで他人事のような少年の言葉に、サクラは違和感を覚えた。
丸めていた身体を起こして、問い掛けるように少年をジッと見詰める。
その視線に気づいたのか、少年は困ったような笑みを浮かべた。
「……僕、ずっとこんな調子だったから、一度も学校に行ったことがないんだよ」
シーツを握り締める拳が弱々しく震えていた。
もしかしたら、涙を堪えているのかもしれない。
「だから、この病気が治ったらもっとたくさん勉強するんだ。それで学校の先生になって、皆に勉強を教えたり、一緒に運動ができた

らいいなって。……おかしいかな？」
おかしくはない。
立派な夢だと思う。
それから少年は、他にもたくさんやりたいことがあるのだと言った。
それは幼い頃からずっと病院で生活を続けていた少年らしい、ささやかだが当たり前の夢ばかりだった。

「今日は何だか調子が良いんだ」
いつ訪れてもベッドの上で横になり、可動式ベッドの補助を得てかろうじて上体を起こしている少年を見て、言葉どおりに調子が良いとは到底思えなかった。
筋肉も握力もすっかり衰えて、歩くどころかサクラを持ち上げることすらも叶わない少年が、それでも嬉しそうに笑顔を見せた。
「今度、手術するんだってさ」
手術。
その言葉の意味を、サクラは知っている。
いつか少年から聞いた、病気を治すために必要なこと。
手術をすれば病気が治る。
少年はそう思い込んでいる。
その思い込みこそが彼を支える力になっているのかもしれないと、サクラは思った。
だから、一層力強く鳴いてみせた。
少しでも少年の生きる助けになれれば良いなと、そう思いながら？？。

季節が巡り、春がやってきた。
少年からサクラという名前をもらってから、二度目の春。

サクラは久しぶりに少年の病室を訪れた。
実はここ数ヶ月の間にも、何度も病室を訪れていたのだが、何故かいつ来ても少年はいなかった。
ベッドの上にいない少年を見たことがないサクラにとって、それは不安と呼べるに値する衝撃の出来事だった。
だから、ベッドの上に少年の姿を見つけたとき、サクラは思わず安堵してしまった??。
病気が治らなかったために再び戻ってきた少年を見て、涙が浮かぶほど安心してしまったのだ。
「……あ、サクラ」
ゆっくりと視線を移した少年が、サクラを見て柔らかに微笑む。
懐かしい、三つの音。
サクラはすっかり定位置となったシーツの上に軽く飛び乗る。
頬がこけて肌の色が一層白さを増している少年は、ニット帽で頭の先から目元のギリギリまでを覆い隠していた。
その豹変ぶりは同じ人間が見たら眼を丸くして驚くほどだろうが、人間を匂いで嗅ぎ分けているサクラにとっては見た目の変化などあまり関係のないことだった。
少年の骨ばった指が、サクラの存在を確かめるようにそっと触れた。
感触は違ったけれど、確かにそれは少年の持つ温もりだった。

「……僕のおうちは、母子家庭なんだ」
身体を横に向けて、袖机の上に置かれた紙袋を眺める。
「母子家庭ってわかるかな？　お母さんと僕の二人だけってことなんだけど……、お父さんには一度も会ったことがないんだ。お父さんの話をするとお母さん泣いちゃうから……あんまり聞かないようにしてるんだけど。僕が生まれたってことは、この世界のどこかに僕のお父さんがいるってことだよね」

紙袋はつい先ほど、少年の母親と思われる女性が置いていったものだ。
「……ねえサクラ、君のお父さんとお母さんは何処にいるのかな？」
少年に問われて、初めてサクラは自分の中から両親の記憶が抜け落ちていることに気づいた。
少なくとも、自立出来るようになるまでは育てられてきたはずだ。
なのに、過去の記憶が全く思い出せなかった。
「お母さんはいつもいつも、朝早くから夜遅くまで働いているんだ。……本で読んだんだけど、母親一人で子供を育てていくのってすごく大変なんだって。それなのに、僕の身体はこんなだから、お母さんには余計に苦労を掛けちゃってるんだ」
少年は心の痛みに耐えるように、胸をぎゅっと握りしめる。
「だけど、お母さんは仕事の合間で僕の見舞いをしてくれるんだ。それだけでも僕はすごく嬉しくって、それと同じくらいとても情けなくって……。お母さんのために何かしてあげたいんだけど、何にも出来ない自分がもどかしいんだ……」
きっと少年の母親は、彼がこうして生きていてくれるだけでも、嬉しいに違いない。
それが、母親というものじゃないだろうか。
無責任でご都合主義な思いかもしれないけれど、そんな気がした。

程良い室温を維持し続けるために窓が閉められているにも関わらず、その存在を主張し続ける蝉の鳴き声は耳障りだった。
そんな夏の日??。
「……僕が死んでしまったら、君は……、一人ぼっちになってしまうのかな」
縁起でもないことを少年は言った。
「たとえば、君がいなくなってしまったら……、僕はとても悲しいし、たくさん泣いちゃうと思う。でもそれは、悲しむことも泣くこ

とも出来なくなった君のためなのか、自分のためなのか……」
少年が何を言いたいのかわからない。
難しい話をしようとしているのだろうか。
「ねえサクラ」
弱々しい光を宿した少年の瞳が、サクラをジッと見詰めた。
「僕がいなくなったら、君は悲しむかい？」
？？当たり前だ。
？？私がどんな想いで、君のいなかった数ヶ月を過ごしてきたと思っているんだ。
二、三鳴き声を上げて抗議をすると、少年は申し訳なさそうにサクラの頭を撫でた。
「ごめんね。……でも、最近目を瞑ると考えてしまうんだ。僕の病気はもう一生治らないんじゃないかって。……眠ったら、そのまま眼を覚まさないんじゃないかって。夜、一人でいるのがとても寂しくて、怖いんだ……」
サクラを撫でる手が震えている。シーツの上に水滴がポツポツと滴り落ちた。
「こんなことお母さんに話したら、もっと悲しませてしまうだけだから言えないけれど、本当はずっと怖かった……。それを誤魔化そうとして、無理して笑うようにしてきた……。だけど、僕の身体のことは僕が一番良く知ってるんだ……」
嗚咽交じりの少年の声はだんだんと涙声へと変わり、サクラを撫でていた手は力無く下ろされた。
サクラは身を起こすと、俯いて涙を零す少年のそばに寄った。
首を精一杯上に伸ばして、小さな舌で少年の頬を舐める。
涙は、しょっぱい味がした。

このところ、少年はずっとベッドに寝たきりだった。
サクラがベッドの上に乗っかっても、身を起こそうともしない。

かろうじてシーツの隙間から腕だけを出すと、まるでサクラの姿が見えていないかのような手付きで探すのだった。
だからサクラは、自分から少年の腕に触れる。
そうしてやっと、少年はサクラの存在に気づく。
「あぁ……サクラ、来て、くれたんだね……」
少年の視線は天井の??その向こうに広がる青空を見詰めているようだ。
「……何だか、身体が思うよう、に動かないんだ……。こうして、サクラに触れ、ているのに……、僕の手が、僕の足……、が、僕の身体が……僕のものじゃない、ように……感じるんだ……」
??大丈夫だよ。私はちゃんと、君を感じているよ。
「あれ……、サクラ、何処行っちゃったの？　……もう帰っちゃったの？」
サクラに触れていた少年の手が、突然、ベッドの上を右往左往しはじめた。
「待って、まだいかないで……」
??私は、ここにいるよ。
サクラは鳴き声で存在を示そうとするが、少年の手はサクラを探し続けた。
「……暗いんだ。何も見えないんだ……、だから……お願い……、僕をひとりに、しないで……、ひとりぼっちはもう、嫌だよ……」
触覚だけではない。
視覚や聴覚も、少年はとうに失っていた。

「血圧五十五……五十……なおも低下を続けています！」
「駄目です、心臓停止！」
「自然治癒は絶望的です！」
「電気ショックを与えるぞ！　モニターから眼を離すなよ！」
「頼む、持ち堪えてくれ……！」

「??二十一時五十六分十秒。ご臨終です」
白衣を着た男性が、感情を押し殺した声で事務的な言葉を告げた。
少年の手を握って必死に名前を呼び続けた母親は、呆然とした表情でベッドの上に静かに横たわる息子の顔を見詰めた。
集まった医師や看護師の中には、瞳に大粒の涙を浮かべているものもいる。
たくさんの人達に囲まれて。

少年は、その短い人生を終えた。

袖机の上に一輪の花が飾られている。
黄色い花だ。
花の名前は知らないけれど、そういえば少年の病室で花を見たのは初めてだったような気がする。
空気を入れ替えるためか、開けっ放しの窓からは心地良い風が流れ込んできている。
サクラは、いつもそうしていたように、ベッドの上へと飛び乗った。
その際に、綺麗に整えられたシーツに皺が寄ってしまったが、誰にも咎められるということはないだろう。
ベッドの上にはもう、少年はいないのだから??。

??ねぇ。
??君はいつ此処に帰ってくるの?
??私はずっと、君のことを待っているから。
??君の帰りを、此の場所で待ち続けているから。

？？だからお願い。
？？私をひとりに、しないで……。
？？ひとりぼっちは、寂しいよ……。

★☆★☆★

永遠に引き延ばされた刹那の刻を旅する。
膨大な記憶情報によって頭の中がぐちゃぐちゃに掻き乱される感覚。
きつく閉じられた瞼の裏で迸る強烈な閃光。
頭痛。眩暈。吐き気。
禰子の記憶と自身の記憶がない混ぜになり、自己という存在を失いそうになる。
『波』は世界であり、記録であり、記憶だ。
その原質を操る魔剣『紅のレーヴァテイン』は分解した情報体が持つ記憶を読み取る。
魔剣へと取り込まれた情報体の原質は、装具の所有者であるリコリスと深層領域で繋がっている秋弥に禰子の記憶を見せた。
世界に記された記録（レコード）ではなく？？。
禰子が感じた世界の記憶（メモリー）だ？？。
だから今の秋弥には、禰子の気持ちが手に取るようにわかり、また、痛いほどに伝わった。
禰子はずっと、待ち続けていたのだ。
この病室で、何年も前に亡くなった少年のことを、たった一人で待ち続けていたのだ。
壁に掛けられたカレンダーは少年が亡くなった年月で止まっている。
病院が廃業になっても、

何度季節が巡ろうとも??。
長い年月が、いつしか己の姿を変えてしまったことにも気づかずに??。
病室を訪れる者達から少年の還ってくる場所を守るために、この隣神は戦い続けてきたのだろう。
もはやほとんどの情報が現層世界から失われた禰子を見上げる。
その秋弥の左手を、リコリスの小さな手が握った。
禰子の記憶を共有しているリコリスと二人で、禰子の最後を見送る。
いつか見た記憶の中の彼女と同じように、禰子は身体を丸くして気持ち良さそうに眠っていた。
「おやすみ、サクラ」
秋弥は、今はもういない少年が名付けた禰子の名前を呼んだ。
最後の粒子が宙に舞い、静かに現層世界から消えていったサクラの表情は、不思議と安らぎに満ちていた。

第１４話「違法封術師×封術師見習い」

★☆★☆★

廃病院に住み着いた??否、大切な人の還る場所を護り続けた隣神が現層世界を去った瞬間、世界を満たすエリシオン波の共振現象が二人を襲った。

共振は多層世界の垣根を越えて現層世界に物理的な影響を及ぼし、秋弥達の立っている病室の床が音を立てて崩落する。

足場を失い、秋弥の身体がふっと宙に浮く。奇妙な浮遊感覚は重力に従い一瞬にして消え失せて、その身体は真下へと落下を始めた。

秋弥はリコリスの手を離さないように、繋いだ左手に軽く力を篭める。

しかしその左手はリコリスの柔らかな手ではなく、虚空を握り締めていた。

反射的にリコリスを探そうとしたが、直ぐに無駄なことだと思い直して握り締めた左手を緩やかに開くと、そこに蒼の装具を召還する。

次いで、耐衝撃性を持つ薄い膜を体表面に張る強化系統の封魔術式??防護膜（ハード・コート）を発動した。

秋弥の身体を縁取るように数ミリの間隔を開けて情報改変の光が走る。

防護膜は肉体強化の封魔術式に数えられている封術の中でも初歩中の初歩の術式だが、それゆえに応用力が高く、また、術者の力量によってその性能が大きく変化する。

たとえば今回秋弥が展開した防護膜は膜厚がおよそ一センチで耐

衝撃性だけでなく、耐刃性も付与している。
そのため、宙に舞うガラス片が彼の制服や身体を傷つける心配はなく、バランスを制御して地面に着地した際の衝撃もほとんど感じられなかった。
秋弥は軽く足踏みをして地面がさらに崩落しないことを確認してから、吹き抜けとなってしまった天井を見上げた。
崩れた床面??秋弥の視点から見れば天井面??の数からして、どうやら一階まで落下してきてしまったようだ。
秋弥は部屋を出て他にも崩壊している箇所が無いかを探した。
建物の一部が崩れたことで粉塵が周囲に舞って視界が悪い。
この粉塵で喉や肺を傷めていないのは防護膜に付与した追加効果のおかげだ。
隣の部屋や向かいの部屋にも、崩れたばかりだと思われる瓦礫の跡がいくつも見つかった。
「層間共鳴振動か。厄介だな」
瓦礫の山を見詰めて、独り呟く。
情報体は同層世界内で固有となるエリシオン波と、存在世界を定義する『波』のエリシオン波を有している。
共鳴振動と呼ばれる現象には二種類あり、同層に存在する情報体が互いに共鳴、共振する現象を情報体間共鳴振動と呼び、多層世界間や部分的に切り出した多層領域間で共鳴、共振する現象を層間共鳴振動と呼んでいる。たとえば世界多重層構造理論（レイヤホロウモデル）では直感や一目惚れ、気が合うなどを情報体間共鳴振動による現象の一つであると位置付けている。
対して層間共鳴振動では層のエリシオン波が共振によって一時的に増幅されるため、不変的な性質の『波』を持つ無機物は増幅に耐え切れずに自壊する。
病院の崩壊規模から見積もっても、崩壊が情報体間共鳴振動によるものだとは考えにくい。
逆にこれが秋弥の予想どおり層間共鳴振動である場合、建物の崩

壊よりももっと大きな問題が浮上してくる。
共振対象となった層??現層と異層の間に世界同士を繋ぐ回廊(ルート)が生まれることだ。
これは次元振動による異層領域の発生とほぼ同様の現象であり、異層領域が現層領域に生まれるということは、異層世界の住人たる隣神が顕現する可能性が高まるということである。
と、崩壊を層間共鳴振動が原因だとほぼ断定して周辺の調査を続ける秋弥の足元を抜けるように、小さな黒い影が横切った。
瓦礫を避けてチョロチョロと素早い身のこなしで動き回るその影の正体は根棲(ねずみ)だった。
なんだ根棲か、と関心を無くして視線を外そうとした秋弥は、不意に感じた違和感に眉を顰めた。
一階と地下階は向江が調律を行っていたはずだ。そして三階で発見した異層領域のうち、禰子の矛盾許容によって生み出された異層領域の方は既に消滅している。
根棲の生命力は異層領域から離れて長い間存在を維持出来るほど高くはない。調律が既に完了しているのならば、根棲は存在力を奪われて弱っているはずだ
にも関わらず部屋の片隅で元気に動き回る根棲を見て、秋弥は嫌な胸騒ぎを覚えた。
踵を返して病室を出る。
病院の廊下は構造的に直線に作られているため、視界が多少不鮮明であっても道程に困ることはほとんどない。瓦礫に足を取られないようにだけ注意して、秋弥は足早に地下へと降りる階段へと向かった。
階段口は層間共鳴振動の影響で無残にも崩れ落ちていたが、階段の崩れた部分は飛び越せない距離と高さではなかった。そう判断すると軽く助走をつけて階段の折り返し地点まで一足で飛び降りる。着地の衝撃で辛うじて支えられていたらしい階段がわずかに軋んだが、人一人分の重さを支えるだけの余裕は残っていたようで、その

まま残りの半分を一足飛びで降りた。
地下階は地上階ほど酷い有様ではなかったが、医療器具や不法に廃棄された計測機器など、病院だった頃の名残が一層強く残されていた。
初めから地下に異層領域は無かったのかもしれないが、もし予感が的中しているのならば、地下の異層領域は未だ調律されずに残されているはずだ。
秋弥は廊下の奥へ向かって腕を伸ばすと、掌から現層領域の固有振動波と同じ波長の波を放出した。これは向江が用いた異層調査術式を広域対象とした応用術式で、原理としては音波探知機（ソナー）のそれに近い。狭い範囲を対象にしてパターンの整合性を測るのではなく、不特定箇所へ向けて波を放つため信頼性と精度は劣るが、術者の異層認識（オラクル）力が高いほど、反射波の読み取り精度が上がるため、その分確実性が向上する。
秋弥の異層認識力は非公式ながら層間共鳴振動現象を観測出来るほど高いのだが、これは彼が隣神リコリスの力の一部を共有しているためで、封術専攻の次元振動学では人間が次元層間の共鳴、共振現象を観測することは不可能であると論じている。
層間共鳴振動現象と情報体間共鳴振動現象とでは、文字どおり次元が違うのである。
しかしこの力を持つがため、秋弥の放った異層調査術式は並の調律師が行う術式のものよりも遥かに高い精度を誇っている。
発動した術式は音速に近い速度で空間を走査し、反射波が秋弥の掌に再び収まる。波のパターンに無視できない揺らぎを読み取った秋弥は苦い顔をした。
「……やはり調律されていない異層領域があるみたいだな」
層間共振の発生源と行方不明の向江。
振域レベル一以下の異層領域の調律はこの際後回しにするとして、どちらを優先して探すべきか。
層間共振の発生源は早急に見つけ出して調律を行う必要があった

が、向江が仕事を放棄して何処へ行ってしまったのかも気掛かりだった。
それにどうも、この二つの事柄は無関係ではないように思えた。
ならば先に探すべきは？？やはり層間共振の発生源だろう。
向江は新米とはいえ封術師なのだから、発生源のそばにいれば必ず現れるはずだ。
最悪の場合、向江が現れなかったとしても自分で異層領域の調律を行えば良いと、秋弥は考えていた。
それは封術師見習いとしての制約に多かれ少なかれ抵触してしまう行為ではあるが、現層世界に及ぼうとしている脅威を知覚して、それに対処できるだけの力を持っているのに何もしないという選択肢は初めから無いのも同然だった。
目的が明確化したところで、秋弥は常時展開させたままの防護膜を解除して一息吐いた。
ずいぶんと妙なことになってきたな、と思う。
最初は調律者の護衛として請けた仕事だった。それが途中から？？これは秋弥自身も望んでいたことだった？？調律師と別行動で隣神『禰子』の退治を行うことになった。しかもどちらかと言えば結果論ではあるものの、『禰子』の退治こそが今回の仕事の肝であった。
そして問題の大元であった廃病院の隣神を異層世界へ還したことで、ここでの仕事はほとんど終わりと言っても良い？？はずだった。
それがまさか、新たな層間共鳴振動現象に巻き込まれるとは思ってもみなかった。
それにこの層間共振は、秋弥が隣神を廃病院から追い払った頃を見計らって？？まるで何処からかそれを視ていたかのように狙い済ましたかのようなタイミングで発生したようにも思えた。
偶然にしては出来すぎだ、と秋弥は思考する。
この世界に偶然はない。あるのは理論に基づき厳密なまでに洗練された基盤の上に築かれた精緻な論理だけだ。

だからこそ、秋弥はこれを偶然だとは考えていなかった。
偶然だとは、認めていなかった。
星の記憶（すべての答え）に記された確定した未来ではないと、考えていた。
もう一度、今度は大きく息を吐く。
蒼の装具を強く握り、寄りかかっていた壁から背を離す。
目指すべき場所は、既に決まっていた。

★☆★☆★

防護膜に加えて加速術式の干渉力を高めた秋弥は影に濡れた廃病院内を疾駆した。
時刻は『逢魔ヶ刻』と呼ばれる、この世ならざる者が本来の力に目覚めつつある時間帯になろうとしている。
層間共振によって新たに生まれようとしている異層領域を通って隣神が顕現しようとするならば、今を置いて他には無いだろう。
廃病院とはいえ建物を崩落させるほどの共振現象だ。予想では振域レベル三、あるいは四を超えているかもしれない。
世界多重層構造理論では現層世界のエリシオン固定振動数を基準として、多層世界の固有振動数との変動値を計測することで振域を段階分けしている。
振域レベルは現層世界との変動値が大きくなるほど段階を増し、現層世界にとっての『現実味』が乖離していく。
異層世界に住まう存在は現層世界の概念や法則を超越した未知の力を操り、現層世界を侵食する。
現時点で現層世界の最直近にあるとされる異層は、霊体や幽体と呼ばれる存在が暮らす世界であると言われている。この異層世界は極小規模の層間共振でも容易に現層世界と重なり合うため、わずかでも異層認識力を持つ人々の目にも留まりやすい。これが振域レベ

ル〇に相当するのだが、レベル〇の異層領域は封術師が調律を行わなくても、星の自浄作用の一つである『世界の自己修復能力』によって自動的に元の状態へと正される。

振域レベル一以降は封術師??とりわけ調律師の調律を必要とする段階を指す。隣神は実体を持ち、振域レベルが低いほど??つまり、現層世界に近い固有振動数を持つ異層世界ほど、その世界の生物、すなわち隣神は根棲や禰子のように現層世界に存在する生物に近しい外見をしている。

なお、日本を襲った四度の地震ではいずれも振域レベル五以上の層間共振を引き起こしており、一部ではユニコーンやグリフォン、ドラゴンなどといった空想上の生き物が目撃されたという、いかにも眉唾ものの噂もあったらしい。

しかし、歴史を紐解くと、これら伝説上の生き物達の原点（ルーツ）は過去に発生した層間共振で顕現した隣神であり、時と場合によっては、勇者や英雄と呼ばれた者達が未知なる力??現代における封術を駆使して戦ったのではないかとも考えられている。

秋弥は崩れ落ちた階段を、壁を蹴って一気に駆け上がる。

三階まで上りきると、階段はそこで途切れていた。

逡巡する間もなく、秋弥はデバイスを立ち上げて総一郎から送られてきたメールに添付されていた廃病院の案内地図を開いた。すると、ホログラムウィンドウ上に病院の全体図が三次元オブジェクトで表示される。設定項目の中からワイヤーフレームモードを選んで表示を変更すると、病院内部の様子が丸わかりとなった。

秋弥が上ってきた階段は一階のエントランスフロアから最も遠い場所にある階段で、三階の一般病棟まで通じている。これより更に上の階へ行くためには、エントランス寄りのやや幅広の階段を使うしかないようだ。

秋弥はメニューを開いてオブジェクトの操作を続ける。

三階より上だけをクローズアップして眺めると、エントランス寄りの階段でも五階までしか上れないようだった。

だが、秋弥が目指している場所はそこではない。
と、病院内を縦に貫いている直方体が秋弥の眼に止まった。
ワイヤーフレームではわかり辛かったため、その部分にだけテクスチャを貼り付けて元に戻す。どうやら資材搬入用の昇降機らしい。昇降機の終着点は、秋弥が目指している場所に繋がっていた。
デバイスを閉じると、秋弥は階段ホールへは行かずに昇降機のある中央ナースステーションへと向かった。
本日二度目となるナースステーションの前で立ち止まり、辺りを見渡す。
薄闇に紛れたナースステーションのカウンター奥に、昇降機の扉らしきものが見えた。
秋弥はカウンターに手を突いて飛び越え、元はガラスで仕切られていたのであろう看護師の詰め所に入る。かすかな夕陽の光だけを頼りにして昇降機の前まで歩いた。
電気が通っていないため、昇降ボタンを押しても扉は開かない。秋弥は扉の隙間に装具を差し込むと梃子の原理を利用して隙間を広げる。その間に今度は指を滑り込ませると、力を加えて左右に開いた。
顔を覗かせて昇降機内部を上下に眺める。そしてもう一度見上げると、踏み込みに力を入れて内部へ飛び込んだ。
正面の壁に足を着けると同時に運動方向を改変する。壁を蹴ってさらに対面へと跳躍。その繰り返しによって、秋弥は昇降機内部をジグザグに昇った。
精密な術式コントロールと秋弥自身の脚力によって瞬く間に最上階の目前まで到達すると、三階の昇降機の扉を開けたときのように蒼の装具を隙間に突き刺した。秋弥自身はドアの淵に立ち、手首を捻って隙間を作り、手動で扉を開いた。
その瞬間、水平線の彼方へと沈みつつある夕陽の光を正面から受けて、その眩しさに眼を細めた
そして、白よりも橙に近い光輝に紛れるようにして幾筋もの光の

ラインが秋弥目掛けて殺到した。
閃光を直視した際に生じたわずかな隙を突いて、光の筋が秋弥の身体を拘束する。身体の自由を奪われた秋弥は思わず地面に膝を突いた。
その手から蒼の装具が滑り落ちる。装具は波音のような不思議な音を奏でて地面に転がると、世界に溶けるようにして跡形も無く消滅した。
俯けていた顔を上げると、秋弥は逢魔ヶ時に沈む神来町の町並みを背景にして、立つ人物の姿を認めた。
逆光による影に身を染めたその人物は、大仰に両手を広げると言った。
「やぁ九槻君、ご機嫌はいかがかな？」
「……向江さん」
人影？？向江は眼鏡を軽く押し上げると、口の端を吊り上げて笑った。
「いやいや、まさか本当に禰子を倒してしまうなんてね。僕も吃驚したよ。だってそうだろう？　調律師が護衛役の封魔師を依頼して、封術師（ライセンス）認定位も持たない見習いがやってくると誰が思う？　普通は思わないだろう」
彼の言い分は尤もだったが、しかし秋弥には共感することが出来なかった。
なぜなら、秋弥自身が封術師見習いという身分である以上に、封術師としての能力は肩書きだけでは計ることが出来ないと知っていたからだ。
封術学園で封術師見習いが学ぶことは調律や封魔を扱う技術である。
それは自分自身が持つ『可能性の力』の制御方法であり、決して、根本的な地力の底上げではない。
封魔師見習いの中には封魔師を越える力を持つ者もいれば、既にその力のほとんどを制御できている者もいる。それでも彼らが封術

学園に通っているのは、国内で封術を行使するための公的な資格証（ライセンス）を得るためであり、その資格証を得るための近道が封術学園に通うことだからだ。
「そうですね。まさか向江さんが違法封術師だったとは思いもしませんでしたよ」
ピクリ、と向江の眉が持ち上がった。
「次元振動を人為的に起こして、一体何をするつもりだ？」
秋弥の口調がぞんざいなものに変わる。
向江の手に握られたバタフライナイフ型の装具を一瞥して、再び視線を戻した。
「……君が何を言っているのかわからないな」
しらを切る向江に、秋弥は言った。
「あんたは俺と別行動を取った後、地下に降りたフリをしてこの場所で別の調律を行っていたんだろう？」
その言葉は疑問系の様相を呈しているが、その口調は、ほとんど断定しているに等しかった。
「異層領域が生まれる条件として考えられる最悪のケースの一つに、調律師が現層世界の固有振動とは異なる固有振動を故意に発生させて共鳴、共振を起こすことで人為的に異層領域を引き込むというケースがある。調律術式は現層世界から異層領域を切り離すだけではなく、逆に異層領域を現層領域に引き寄せることも出来るんだ」
ただし、層の持つエリシオンの固有振動には互いに干渉を引き起こさないように十分なバッファが組まれているため、調律によって偶発的に異層領域と干渉を起こすことは限りなくゼロに近い。
さらに言えば、異層世界との回線（ルート）が全く繋がっていない状態の現層領域に異層を近付けようとするのだから、術師が故意にそれを行わなければ、まず起こりえない。
「あんたは調律術式を悪用して異層領域を現層領域に干渉させようとしたんだ」
「……口の減らないガキだな。命が惜しくないのか？」

「どっちにしても俺を殺すつもりなんだから、関係ないだろ」
「……ハハ、ハハハハハハ。君の言うとおりだよ」
向江はゆっくりと振り返ると、顔を手で押さえて、空に向かって哄笑した。
「全く、頭のまわるガキは嫌いだよ。だけどまあ、これから君は僕の開いた異層領域から偶然顕現した隣神の手で殺されてしまうんだから、別に構わないさ」
「なるほどな、それが目的というわけか」
典型的な主義者の思想だ。
それも、封術が可能にする力に完全に魅せられ、魅入られてしまっているタイプの??。
「ふん、勘違いしてもらっては困るな。これは不幸な事故だよ。だけどそれも仕方の無いことだとわかるだろ？」
封術師に危険は付きものなんだから、と。
今にも実体を与えたバタフライナイフ型の装具に舌なめずりをしそうな表情で向江は言った。
「自分の手は染めずに、同じ術師を殺すのか」
そして秋弥は、静かに呟いた。
「何だと？」
「向江さんが力を誇示したいのなら、一人で勝手にやってくれ。オーディエンスは一人いれば十分だろ」
吐き捨てるように言った秋弥に、向江は一瞬呆然とした。
「無関係の他人まで、あんたの独り善がりに巻き込むなよ」
「……ガキが。この状況を理解しているのか？」
「わかってるさ。無駄な時間を取らされたってことくらいな」
言うや、秋弥は身体を拘束されたままで器用に立ち上がった。
「待て！　逃げられると思ってるのか！？」
その動きを逃走と見た向江が、右掌に炎球を生み出しながら言葉と威圧で制する。
秋弥はわずかに炎球を見ただけで直ぐに視線を向江に固定し、心

底呆れたように盛大な溜息を吐いた。
　その仕草が向江の神経を余計に逆撫でしたのか、炎球は彼の感情を表しているかの如く煌々と揺らめき、サッカーボール大ほどの大きさにまで膨らんだ。
「封術師が目の前の異層を放って逃げるわけないだろ。あんたの勝手な基準で考えるな」
「ハッ、何を馬鹿なことを。お前は今から死ぬんだよ！」
「そうやって無抵抗の術師に己の無力さを痛感させながら事故に見せかけて殺し、自分の方が格上だという幻想（現層）を抱いて自己満足に浸るのか」
「何とでも言うがいいさ。どうせ今のお前には何も出来ないんだからな！」
　馬鹿にした口調で秋弥を罵る向江に程度の低さを感じながら？？。
「出来るさ。封術師見習いに危険は憑き者だからな」
　落ち着いた口調で言葉を紡ぐと、秋弥は己を縛り付ける幾重もの光の筋を、何の苦も無く解いた。
「……っ！？」
　束縛術式があっさりと解かれたことに気が動転したは向江が、咄嗟に掌の炎球を秋弥目掛けて放った。
　だが、秋弥は余裕の態度を一切崩すことなく、

「？？リコリス！」

　一輪の紅い花の名を告げた。
　次の瞬間、炎球と秋弥の間に紅が舞った。
　花弁を舞い散らせながら空中に咲いた一輪の紅い彼岸花（リコリス）は、瑞々しい二本の腕を円を描くように動かして正面へと伸ばす。
　たちまちのうちに幾何学的な紋様？？術式の練り込まれた封術紋が浮かび上がり、襲い来る炎球を丸ごと飲み込んだ。
　炎球はリコリスの髪を靡かせる程度の熱風だけを残して、跡形も

無く消滅する。
　刹那の間に起こった出来事に、向江の思考は完全に置き去りとなっていた。
　それでも向江の深層意識は、リコリスが放つ狂気に良く似た干渉圧から無意識的な恐怖を感じ取ったのだろう。「ひっ」という擦れた声を伴って彼の身体を動かした。
　その場に尻餅をつき、震える足と腕を使って後ずさる向江に向かって、リコリスが右腕を空へと掲げた。
　意識しないようにしていても、向江の眼は自然とリコリスの手の動きを追ってしまう。
　見上げた薄闇の空に浮かぶそれが己を裁く神の鉄槌であることを自覚する前に、向江の意識は深い闇の底へと沈んでいった。

第１５話「封術師見習い×封術師見習い」

★☆★☆★

秋弥はリコリスの鉄槌を受けて地面に倒れ伏した向江を、冷め切った瞳で見下ろしていた。

??違法封術師。

出会うのは初めてだったが、よもや鷹津封術学園の卒業生が違法封術に手を染めているとは予想外だった。

おそらく向江は、学生の頃から違法に封術を使ってきたに違いない。封術師としての意識の低さがそれを助長させたのかは、今となっては定かではないが……。

「秋弥様ぁ」

秋弥の呼びかけに応じて顕現したリコリスは向江の存在なんて最初から眼中に無いかのように、発動した術式の効力もろくに確認せずに顕現してからずっと秋弥のそばにぴったりとくっついていた。

何処か期待に満ちた瞳で見上げてくるリコリスの柔らかい髪を優しく撫でながら、秋弥は言った。

「さてと、後は残った異層領域を調律したら終わりだな」

「秋弥様、この人間はどうするの？」

制服の裾を引っ張って秋弥の意識を自分に向けさせると、リコリスは今更のように向江（それ）を指差した。

「放っておいてもしばらくは眼を覚まさないだろう。異層領域を全部調律した後で然るべき機関に引き渡すさ」

「ふぅん……」

向江を一瞥した秋弥の心底興味無さそうな態度に、リコリスもま

た、どうでも良さそうな態度で応じた。
「でも秋弥様。『かんとくしゃ』がいないと秋弥様は封術を使えないんじゃないの？」
「まあそうだな。……だけどこの場合は例外だろう」
見習いとしての制約を破ることについてまるで意に介した風もない秋弥の台詞に、リコリスは紅い瞳を大きく見開いて慌てた。
「ダ、ダメだよ！　秋弥様が封術師になれなくなっちゃうのは絶対にダメっ！」
夕闇の空に金色の髪を揺らして必死に訴える彼女の姿に、秋弥は思わず苦笑を漏らした。
「秋弥様には全然関係ないんだから、こんな異層なんて放っておけばいいよ！」
「そういうわけにもいかないよ」
「むぅ……そうだ！　リコリスが秋弥様の代わりに調律をするから、それなら大丈夫だよね！」
確かに隣神であるリコリスが封術を使うのであれば、封術師見習いの秋弥が制約を破ることにはならない……のだろうか。
言いながら自分でも名案だと思ったのか、リコリスは早速紅の装具『レーヴァテイン』を召還した。
「だから、ね。秋弥様は休憩してて」
「はいはい」
「『はい』は一回だよ」
リコリスに背中？？正確には腰の辺り？？を押されて入口付近まで押し戻された秋弥は、しかし不意に人の気配を感じて立ち止まった。
押しているように見えて、実際には秋弥の歩調に合わせて押すフリをしていたリコリスも、秋弥よりわずかに早く気配を察知して足を止めていた。
気配？？空間領域を伝播する存在情報の干渉圧力？？を察知する能力は人在らざるリコリスの方が断然高い。

秋弥は先に気配に気づいたリコリスの視線を追うようにして彼女の視線の向き先??建物の外縁に備え付けられた非常階段の方を見詰める。
その非常階段を使って、誰かが屋上へと上がってくる足音が聞こえきた。
それも、一つの音だけではなかった。複数の足音が一定のリズムを奏でている。
来訪者に対する警告の意味も込めて、リコリスは空間領域への干渉圧を高めようとしていた。秋弥が手振りでそれを軽く制すると蒼の装具を召喚する。リコリスが立ち位置を微妙に変えて秋弥の制服の裾を軽く摘まむと、彼の背後に身を移した。
足音がだんだんと大きくなる。
「……っ!?」
非常階段を上がってきた人物を見た秋弥は、思わず声を漏らした。
「こんばんは、九槻君」
その人物は秋弥の見知った人物だった。
鷹津封術学園の白い制服に身を包んだ女子学生??星条悠紀が夕闇の中でもはっきりとわかる微笑を浮かべた。
「……星条会長」
「ワタシもいるよ、クツキ」
続いて、治安維持会長のスフィアが悠紀の横に並んだ。
鷹津封術学園の二人の会長は地面に倒れ伏している向江の姿を一瞥すると、まずはスフィアが先に口を開いた。
「いやいや、ずいぶんとご活躍だったようだね。おや?　そこで倒れている男は封術師じゃないのかい?」
楽しそうな口調でニヤニヤと笑う。
別段隠し立てをしても仕方が無いので、秋弥は多少面倒に思いながらも召還した蒼の装具を仕舞うと、浅間から受けた依頼の事も含めて出来る限り掻い摘んで二人に状況説明をしようとした。
しかしその矢先に非常階段から新たな人物が姿を現したことで、

秋弥の言葉は遮られてしまった。
「はぁはぁ……、先に、行っちゃう、なんて、酷い、ですよ。かいちょー……」
階段を上りきったところで両膝に手を突き、肩で息を切らしたおさげ髪の女子学生が悠紀に訴え掛けた。
「あ……、ごめんね、亜子」
振り返った悠紀が遅れて上がってきた女子学生？ー鵜上亜子（うのかみ　あこ）に謝罪する。封術学園の白い制服を着用していることから、悠紀と同じく学生自治会役員の一人であることが窺えた。
亜子は乱れた呼吸を整えると膝を叩くようにして上体を起こす。
低い背丈に丸みを帯びた童顔はどう見ても秋弥より年下に見えたが、制服の上からでもわかる女性らしいメリハリの利いたプロポーションはスフィアに勝るとも劣らず、アンバランスな魅力を醸し出していた。
「はぁ、もう良いですよぅ。……あっ、そこの異層領域を調律すれば良いんですね？」
亜子は異層調査術式を発動している様子もないのに、向江が生み出した異層領域のある？？はずの虚空を眺めて言った。
（……重層視覚保有者か？）
現層世界の領域に他の層が重なる重層現象を視覚的に認識出来る者が稀だがいる。その者は封術を用いなくても、眼で視るだけで現層領域と異層領域を見分けることが出来ると言われている。
断定は出来ないが、一瞬で異層を見極めた亜子の瞳はその希少能力である可能性が高かった。
「えぇそうよ。休む間もなくて申し訳ないけれど、お願いするわね」
「はぃ、任されましたぁ」
「待ちなさい、人間共！」
「はひっ！？」
突然現れてトントン拍子に話を進める学生自治会の面々に、今までジッとしていたリコリスが堪らず口を挟んだ。

秋弥の背後から半身を覗かせて二人を睨み付ける。
干渉圧こそ放出していなかったものの、この世ならざる者が纏う威圧感と眼光に中(あ)てられて、異層に対して人一倍過敏な視覚を持つ亜子が悲鳴を上げて萎縮した。
「この仕事は秋弥様が請けたものなのよ。それを後からノコノコとやって来た人間共なんかに横取りなんてさせないわよ」
静かな怒気を孕んだリコリスの声音に??、
「……貴女が隣神リコリスね」
悠紀が表情に笑みを貼り付けたまま、ゆっくりと彼女に眼を向けた。
悠紀、スフィア、亜子のうち、リコリスの事を一方的にだが見知っているのは悠紀とスフィアの二人だけだ。亜子は少女の外見をした高位隣神を目の当たりにして、可哀想にも完全に怯えてしまっているが、二人の会長は隣神リコリスと直接対峙してもなお、少しも態度を崩さなかった。
「……秋弥様、ねぇ」
小声で呟き、ニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべているスフィア。
そんなスフィアとは対照的に、悠紀は表情を困り顔へシフトさせて幼子を諭すような口調で言った。
「九槻君は封術師の監督者がそばに付いていないと封術が使えない決まりになっているの。それはわかっているわよね?」
これはリコリスに対する問いかけであると同時に、秋弥に対する確認でもあった。
封術師見習いとしての制約を破ったらどうなるかわかっているのかと、彼女は言っているのだ。
「そうね。だけどリコリスが封術を使う分には何の制約はないわ」
「本当にそう? 貴女が封術を使うということは、九槻君が封術を使うのと同じことにはならないかしら?」
「ふん、何を言うかと思えば戯言を。これ以上言葉を口にするようなら今直ぐにでも星の記録から存在ごと抹消してあげましょうか?」

「止せ、リコリス」
これ以上黙って傍観していると取り返しの事態に発展しそうだと判断した秋弥は、即座にリコリスの頭の上に手を置いて制止を掛けた。
彼女は勢い良く振り返ると、秋弥を見上げて抗議の声を上げた。
「どうして止めるのよ秋弥様！　この人間が勝手なことばかり言うから？？」
「リコリス」
しかし、秋弥は最後まで言わせずに語気をやや強めて彼女の名を呼ぶ。ピクリと撥ねた彼女の肩にゆっくりと手を移動させて、腰を屈めて目線を合わせた。
「星条会長の言っていることは間違っていないよ。お前が封術を使うことと俺が封術を使うことは完全に同義だ」
「……っ！？　そんなのおかしい！」
わななわと声を震わせるリコリスの気を落ち着かせるため、彼女の頬に触れる。
そしてリコリスにだけ聞こえるように、身体を寄せて耳元でそっと囁いた。
「おかしくはない。俺とリコリスは一心同体なんだから」
その囁きはリコリス頭の中を一瞬で真っ白にして、顔中を真っ赤に染め上げた。
「だから今は、俺の言うことを聞いてくれるな？」
「うん……。リコリスは秋弥様の言うことなら何でも聞くわ」
「良い子だ、リコリス」
リコリスの頬をもう一度撫でてから身体を離す。手を引いて彼女を後ろに下がらせると、改めて悠紀に向き直った。
「リコリスが無礼なことを言って申し訳ありませんでした、会長」
「良いわよ。それよりもこれ以上異層領域を放置しておくと拙いことになりそうだから、先に調律しても良いかしら？」
「えぇ、それは構いません。ですが……」

「九槻君の言いたいことはわかっているわ。だけどまずは……亜子、調律をお願い」
悠紀が訳知り顔で秋弥と眼を合わせて頷く。次いで、未だに震えている亜子に調律の指示を出した。
「は、はひぃ」
亜子は情けない声を出しながらもリコリスを本能的に避けるように迂回して異層領域のそばに寄ると、装具を召還して調律術式の準備に入った。薄暗い廃病院の屋上に術式の発動に伴うエリシオンの発光現象が生じる。調律を行うために意識を深いところまで落とした亜子には、もう周囲の音はほとんど届かないだろう。
「それでは教えてください、星条会長。封術師見習いは封術師の監督者がいなければ学外での封術使用が認められていないはずです。なのに何故会長達は当たり前のように封術を使っているのですか？」
少し前の自分を棚に上げて、悠紀に問うた。
「それはだね、クツキ。これがワタシ達の『課外活動』だからだよ」
問いに答えたのは悠紀ではなくスフィアだった。彼女は豊かな胸を押し上げるように胸の下で腕を組みながら、得意満面に答えた。
「課外活動？」
「そう、課外活動」
しかし、スフィアはその言葉だけで説明を終えてしまった。苦笑している悠紀にどういう意味かと視線で訴えかける。
「それだけじゃ九槻君に伝わらないわよ、スフィア」
窘めるような口調の悠紀に、スフィアは軽く肩を竦めると一歩後ろに下がった。どうやら説明役を悠紀に譲ったらしい。譲るなら最初から口を挟まなければいいのにと、秋弥と悠紀は内心で同じことを思っていた。
「……えっと、課外活動というのは学生自治会の仕事の一つで、活動内容は封術師でなければ解決できない問題への対処よ。そう、今の九槻君みたいにね」
秋弥は驚愕に眼を見開いた。

「九槻君と違うのは、私達は学園側からの要請で動いているということ。だから私達学生自治会役員は学外でも封術の使用が特別に認められているわ。もちろん、一般的な封術師見習いとはまた別の制約があるのだけれど、それは今の貴方に話すことではないわね」

言外に「学生自治会に入れば詳しく教える」という意味を含んだ悠紀の言葉に、秋弥は初めて自治会長に呼び出された日のことを思い出していた。

？？……大小いろいろとありますが、一番の理由は興味がないからです。

？？逆に言えば、興味を引くような何かが学生自治会にあれば、キミは入ってくれるんだね？

？？だったらクツキ、キミはそれほど遠くないうちに学生自治会に入るよ。

スフィアとのやりとりが脳裏に思い起こされる。

封術学園を卒業した学生のほとんどは封術師となり、即戦力として第一線で活躍する。

しかしそこで気絶している向江のように、多くの封術学園生は人並程度の実戦経験しか積んでいない状態で封術師となる。『星鳥の系譜』に連なる名家の学生や、秋弥のように自主的に封術師のサポートに付いて経験を積んでいない限り、本当の意味で即戦力として活躍することは難しい。

だが、学生自治会の役員に与えられた課外活動という名の特権はそれを可能にしている。

そこには名家の血縁である必要も、封術師のサポートという立ち位置も必要ない。

確かにそれは秋弥にとってこれ以上ないほど魅力的であり、興味以上の対象だった。

「それじゃあ次は私の方から質問させてね。この場所で一体何があったのかしら？」

悠紀の問いは亜子の登場で有耶無耶になっていた話だった。

秋弥は学生自治会の課外活動に関する驚きも醒めやらぬまま、半ば事務的に廃病院で起こった出来事の顛末について悠紀に説明した??真摯な態度で秋弥の話に耳を傾けていた悠紀の隣で欠伸を噛み殺していたスフィアはスルーした。

「……ふぅん、そっか。それはご苦労様でした」

一頻り話を終えた後、悠紀が労いの言葉を口にする。

「九槻君の封術の使用は制限を少し逸脱しているようにも思えるけれど、今回は許容範囲内ということにしておきましょう。……それにしても、学園を卒業したばかりだというのに違法封術に手を染めてしまうだなんて……。九槻君には嫌な思いをさせてしまったわね」

思いやりの籠もった言葉と柔らかな瞳に見詰められて、秋弥はわずかに表情を緩めた。

「でも、安心して。後のことは私達で引き継いでおくから」

「わかりました。よろしくお願いします」

ニコリと微笑んだ悠紀に、秋弥は軽く頭を下げる。

いろいろと予想外の出来事が起きたものの、これで本当に終わりだ。封術師見習いの身分では仕事料はもらえないため誰かに催促する必要もないし、向江の末路がどうなるかも知るところではないし知りたくもない。

後はもう、家に帰るだけだ。

封術を使うことが出来ない以上、来たときのように昇降機内を通っていくことは出来ないので、秋弥は悠紀達が上ってきた非常階段から帰ろうとして歩き出そうとした。

そのとき??。

「待つんだ、クツキ」

スフィアに呼び止められて、歩き出そうとしていた足を止める。

振り返ると彼女は笑みを殺して秋弥の??制服の裾を摘んで一緒に歩いていたリコリスを凝視していた。

「ワタシからもキミに聞かせてほしいことがある」

「……なんですか。スフィア会長」

その只ならぬ視線は、とてもじゃないが断れる雰囲気のものではなかった。
「クツキ……、キミはその隣神をどうしたいんだい？」
「……どう、とは？」
漠然としすぎている質問に秋弥は聞き返したが、その言葉をほとんど無視する形でスフィアは続けた。
「その娘はワタシ達と同じ人間じゃない。まるで人間のようだけれど、全く人間じゃない。むしろワタシ達人間にとって脅威となる存在だ。違うかい？」
「……」
秋弥が何も反応しなかったことを肯定と取ったのだろう。きょとんとしたリコリスの紅い瞳をジッと見詰めたまま、スフィアはさらに言葉を続けた。
「その娘からは一切の悪意も、一縷の敵意も、一片の害意も、一分の殺意も、何も感じとれない。だけどそれは、彼女が人間を取るに足らない存在だと思っているからじゃないのかい？」
「??人間」
「その娘がワタシ達人間のことを『人間』と『秋弥様』で明確に区別していることからもそれは読み取れる。その娘はいつかきっとワタシ達『人間』にとっての脅威となる。それがわからないキミじゃないだろう？」
「いい加減口を慎みなさい、人間！　それ以上くだらない御託を並べ立てるようなら??」
「??スフィア会長」
殺すわ、と言い掛けたリコリスの言葉に、秋弥は言葉を重ねて遮った。
「確かにリコリスは隣神です。だけど俺は、リコリスを俺達と同じ『人間』として接しています。……それだけじゃ不満ですか？」
隣神??その元々の語源は『隣人』。現層世界の隣に住まう人（ヒト）という意味だった。それが時代の流れとともに、いつしかヒトからカ

ミへと転じてしまったのである。
秋弥の抑圧された感情のうねりが深層意識を伝ってリコリスへと届く。
彼の言葉に火照った頬を両手で押さえて照れ笑いを浮かべるリコリスを見て、スフィアは表情を崩すと不敵な笑みを浮かべた。
「いいや、不満はないよ。ただ、いつの日かキミがワタシ達『人間』の敵に回らないことを願うよ」
「……それじゃあ、俺はもう帰りますよ」
結局言いたいことだけを言われたような気もするけれど、気にしたところでどうしようもない。
今度こそ二人に背を向けて階段を下りる秋弥の背中に向かって、二人から別れの言葉が投げ掛けられた。
「うん、良い休日を」
「またね、九槻君」
それは、再会を約束する別れの言葉だった。

第１６話「エピローグ～新しい始まり～」

★☆★☆★

既にある程度予想はしていたものの、連休中に浅間総一郎が九槻家を訪ねて来たことで秋弥の予想は確信へと変わった。
総一郎をリビングに通すと、彼は秋弥にすべてを告白した。
まず、違法封術師、向江仁のこと。
総一郎と向江の間に少なからず親交があったことは事実だった。
ただしそれは表向きの話で、向江が封術を悪用していることを学園側から事前に知らされていた総一郎は、違法封術に手を染める向江を断罪するために、ある計画を立てた。
それが今回の一件。
調律師である向江が違法に封術を扱う現場を押さえるため、総一郎は身近で尤も腕の立つ封魔使い（総一郎談）である秋弥を利用した。
しかし、総一郎はただ彼を利用したわけではなかった。
そこには別の??あるいは真の、と言い換えるべきかもしれない本当の理由が隠されていた。
それは??。
「学生自治会の『課外活動』ですね?」
「気づいていたのかい?　いや、悠紀君の話したことがヒントになったのかな」
驚いたというよりも、むしろ関心したように総一郎は眼を見開いた。
あの場に悠紀とスフィアが居合わせたのは、偶然ではない。

学園側に『課外活動』の一環として今回の事件の解決を依頼した人物こそ、浅間総一郎その人なのである。
蓋を開けてみれば大した話ではない。
浅間家は封術の黎明期に《始まりの封術師》達によって集められた神職者の家系の一つだ。
そして封術学園を創立した《始まりの封術師》達は、そのときに作られた封術使い達の情報網（ネットワーク）を利用して将来を担う封術師見習い達を効率良く育てるために封術絡みの仕事を斡旋する方法を見出した。
それが、現在の『課外活動』の前身である。
「秋弥君には、封術学園が行っている『課外活動』の実態を見知ってもらいたかったんだよ。この活動は秋弥君にとっても、有益なことだろうと思ってね」
「……えぇ、浅間さんの打った一芝居はこれ以上無いくらい効果的でしたよ」
人が悪いな、と秋弥は内心で嘆息した。
総一郎は秋弥が学生自治会から既にスカウトを受けているという事実を知っているのだろうか。いや、知っていても知らなくても、結局は同じ事だった。
まんまと総一郎の思いどおりになっている感が否めなかったが、これも天恵なのかもしれないと、秋弥はそう思った。
そしてこの時点で秋弥は、ある決心を固めたのだった。

★☆★☆★

五月の大型連休が明けた翌日の放課後。
ＬＨＲを終えると、秋弥は挨拶もそこそこに教室を出た。
向かう先は一階の学生自治会室。
今朝、学内ネットワークからアポイントメントの申請をした際に、先方から指定された時間は放課後の今の時間だった。

申請を行ってからものの一分も経たないうちに受諾の知らせが届いたことには驚いたが、学生自治会も暇ではないのだろう。
その時間を割いてもらっている身としては、早く用事を済ませるに超したことはない。
気持ち、足早で廊下を歩く。学生自治会室のドアの前でデバイスを立ち上げ、入室者予定リストに一件だけ登録されている自分の名前を選択しようとしたところで、先回りするように施錠の解除音が鳴った。
何処かから廊下の様子でも監視しているのだろうかと訝しみながら扉を開く。
相変わらずの装飾華美で絢爛豪華な自治会室内には、既に六人の学生の姿があった。
正面??執務用の重厚な机の上に肘を突いて指を組み、にこやかな笑みでこちらを見詰める星条悠紀。
その隣には、朝倉瞬が背筋を伸ばして自然本体で立っていた。
治安維持会長であるスフィア・智美・アンダルシアは執務机の上に腰掛けて足を組み、何処か得意げな微笑を浮かべている。
三人掛二脚のソファには、鵜上亜子が落ち着きなくそわそわしながら座っていた。彼女の正面には男子学生と女子学生が一人ずつ。それぞれに学生自治会役員の白い制服を着こなしている。扉の開閉音に気づいて振り向いたらしい二人は秋弥を興味深げに眺めていた。
学生自治会室には、自治会役員全員と治安維持会の長が一堂に会していた。
おそらく秋弥の来訪に合わせて、悠紀が全員に召集をかけたのだろう。
全ての視線が秋弥へと集まる中で、彼は臆することなく堂々と部屋の中央まで歩いた。
「いらっしゃい、九槻君」
「よく来たね、クツキ」
見目麗しい二人の会長から人好きのする笑顔を向けられて、表情

を崩さない男子は少数だろう。秋弥は釣られるように表情を和らげた。
「用件は既に伺っているから、改めて言わなくても良いわ」
「そうですか。手間が省けて助かります」
「ふふ……、それでも一応、形式だからね」
ころころと笑った後で、悠紀は言った。
「？？九槻秋弥君。貴方を学生自治会の役員に任命します」
彼女の宣言に、隣に立つ朝倉の眉がピクリと動いたが、ここで口を挟むような無粋な真似はしなかった。
皆が秋弥の言葉を静かに見守っている。
まるで時間が止まってしまったかのような錯覚すら覚えそうな静寂の中で、秋弥はゆっくりと息を吸うと、
「一年三組九槻秋弥、不肖未熟ながらも喜んで拝命いたします」
姿勢を正して、直立不動で応えた。

自治会役員を拝命した瞬間、拍手の音が生まれた。
拍手は直ぐに二つになり、三つ、四つと音が重なる。
しばらくして音が止むと、執務机から降りたスフィアが秋弥のそばまでやってきて彼の肩に手を置いた。
「これからよろしくね、シュウヤ」
「こちらこそ、よろしくお願いします。スフィア会長」
互いに砕けた口調でやりとりを交わす。
秋弥を除くと自治会室の中で唯一人だけ一般学生用の黒い制服に身を包んでるスフィアだったが、彼女の存在感はその中でも群を抜いているなと、改めて思う。
それに役員を拝命した途端、呼び方が名字から名前に変わっていたが、彼女の飄々とした態度も相まって、あまり馴れ馴れしさは感じられなかった。
「あっ！　ずるいわよ、スフィア。私ともよろしくね、秋弥君」

それにちゃっかりと便乗する悠紀。
彼女は本当に一体、何と戦っているのだろうか。
「約束どおり、秋弥君には手取り足取り教えてあげるからね」
『何を』を省きながら妙に艶っぽい声音で小悪魔的な微笑みを浮かべた悠紀に、隣に立っていた朝倉が目を見開いて固まる。
「星条会長。なんだかその発言はとてもえっちぃですよ」
くねくねと身をよじらせながら言ったのは亜子の正面に座る女子学生だった。
「俺のときは手取り足取り教えてくれなかったのに。嫉妬しちゃいますよ、もう」
さらに、女子学生の隣に座っていた男子学生が面白くなさそうな表情で言った。
「分かってないわね、美空。……誘ってるのよ」
「はっ！？　もしかして誘い受けってやつですか」
「さあ、どうかしらね」
「誘い受けでも誘い攻めでも、会長に誘われるなら俺はどちらだって構わないです！」
「み、みーちゃんもたっくんも、テンション高すぎですよぅ」
亜子が赤面しながら二人を止めに入るが、気弱そうな亜子には荷が重い役目だった。
しかし誰も助けに入ろうとしないところを見ると、どうやらこんなやりとりは日常茶飯事らしい。
「あ、そうだ」
一頻り盛り上がると、悠紀が唐突にポンと手を叩いた。
「秋弥君の役職は会計補佐になるんだけど。まだちゃんとほかの役員の紹介をしていなかったわね。せっかく全員集まっているんだから、一人ずつ自己紹介してもらおうかな」
確か入学式で自治会役員の紹介があったはずだが、正直あまり覚えていなかったので悠紀からのアイコンタクトにひとつ、頷いた。
悠紀も頷き返すと、視線をそのままスライドさせてスフィアに眼

を向ける。だが、役員でもなければ今更な感もある彼女は首を横に振る仕草で自己紹介を断った。
「……それじゃあまずは私から」
小さく吐息を漏らして仕切り直した悠紀は、席を立って優雅な仕草でお辞儀をした。
「学生自治会会長の星条悠紀です。学年は四年よ。改めて言うことではないけれど、今年入学した妹の奈緒が秋弥君と同じクラスにいるわ。既に仲良くしてもらっているそうだけれど、これからは姉妹共々仲良くしてね」
入学式の舞台で新入生男子一同を魅了した蠱惑的な笑顔を向けられた秋弥は直視し続けることに耐えきれず、視線をわずかに逸らした。
その様子に満足したのか、悠紀は笑みを称えたまま満足そうに座り直した。
「次は僕の番だな。……学生自治会副会長で四年の朝倉瞬だ。役員となった以上、僕はもう君を一般学生と同じようには扱わないから、そのつもりでいてくれよ。……それと、あまり星条会長に迷惑を掛けるなよ」
朝倉に睨め付けられて困ったように悠紀を見ると、彼女もまた秋弥と同じような表情で苦笑していた。初めて会ったときにも思ったことだが、身内には厳しく、一般学生に対しては面倒見の良い先輩なのだろう。そしてオマケのように付け加えられた台詞ではあったが、どうやら彼が悠紀に向けている好意は本物のようだ。
「役職の順から行けば次は俺の番になるのかな。朝倉副会長と同じく学生自治会副会長で三年の時任達彦（ときとうたつひこ）だよ。よろしく、九槻書記補佐」
時任はソファから身を起こして身体ごとこちらを向くと、軽く会釈をした。アッシュカラーに染めたセミロングの髪。耳に付けられたピアスが照明の光を浴びて輝く。それに負けないくらいの輝きを放つ白い歯が唇の隙間から覗き、整った顔立ちに甘い表情を貼り付

けて笑んだ。
モデル体型の身体に着崩した制服姿の時任からは、女子学生に人気のありそうな印象を受けた。
「それと星条会長は俺にこそ相応しい人だから、間違っても変な気を起こさないようにな」
「何バカなこと言っているのよ、時任君。……ごめんね、秋弥君。彼、ちょっと頭がおかしいの」
朝倉とは違った方向で警告する時任だったが、容赦の無い悠紀の一言によってあっさりと一蹴されてしまった??。
のだが、
「星条会長に罵られるなら本望ですよ」
いろいろな意味で残念な時任に形式的な会釈を返すと、彼は着席した。
「じゃあ次は亜子の番ね」
「は、はひっ」
悠紀に促されるとたった二文字の返事を噛みながら、亜子は糸で吊されたパペットのようにぎこちない動きでカクカクと立ち上がった。
「えっと、学生自治会会計で三年の鵜上亜子です。よ、よろしくお願いします、九槻さん」
はにかみながら自己紹介をする。どんなに控えめな表現をしても??スタイルを除いてしまえば??とてもじゃないが高校三年には見えない。中学一年と言われても納得してしまうだろう。
自治会役員全員から愛玩動物を眺めるような生暖かい視線を向けられて恐縮した様子の亜子は、糸が切れたようにぺたんと座り込んだ。
「最後はあたしだね。学生自治会書記で三年生の西園寺美空(さいおんじ みそら)よ」
美空は席を立ち、右側で結(サイドポニー)ったストレートの黒髪を揺らして秋弥の前まで進み出てくると、右手を伸ばして握手を求めた。
その手を握って挨拶を返したのだが、何故か手が離れなかった。

「九槻君にはあたしの補佐をしてもらうことになるんだけど。細かいことは会長達が優しい～く教えてくれると思うから、無理せず頑張ってね」
「おいおいミソラ、会長達ってなんだい？」
「そんな、皆まで言わなくても分かってるじゃないですか。九槻君にラブコールを送ったのは会長達二人なんですからね」
美空は瞳を輝かせて、握ったままの秋弥の手に左手も重ね合わせた。
「入学早々二人のお姉様に迫られる新入生。シチュエーションとしては、萌えます！」
「おやおや」
「二人のお姉様に振り回されて最初は嫌々付き合っていた新入生でしたが次第に二人に心を許し始めるんです。その陰で、恋の炎に身を焦がすお姉様方。新入生に対するスキンシップは競うように過激になり、二人はプライベートでもそれぞれに密会を交わすようになっていくんです。そして？？」
「美空、そろそろ戻ってきなさい。秋弥君が呆れているわよ」
「？？はっ！？　すみません、いつもの癖でトリップしていました」
慌てて両手を離すと、美空はニコリと微笑んで元の場所へと戻っていった。
その背を見送り、この自治会に入って本当に大丈夫なんだろうかと秋弥は内心で溜息を吐いた。
「……以上が学生自治会のフルメンバーよ。美空も言ったけれど、秋弥君には彼女の補佐役となってもらうわね」
「はい、承知しました」
「諸々の手続きは私の方でしておくわ。後で役員専用の常駐アプリケーションを添付データで送るから、インストールしたら連絡先だけは登録しておいてね」
おどけた調子で水晶を連想させるようなヘテロクロミアの蒼い瞳を閉じてウィンクをする。

「あ、それと一番大切なことを忘れていたわ。秋弥君用の役員制服なのだけれど、寸法データは入学案内で測ったときのもので良いかしら？　見た感じ窮屈そうには見えないけれど、もし測り直すなら？？」
と、悠紀は何処かから取り出したメジャーから目盛の振られた帯を引っ張り出した。
「いえ、遠慮しておきます」
悪い予感がして即座に断る。すると悠紀は不服そうな顔でメジャーを仕舞った。
「残念……、それでは直ぐに制服を手配するわね。数日で届くと思うから、以後はその制服を着用してね」
「はい」
「以上で話は終わりよ。制服が届くまでは正式な役員としては登録されないから、それまでは特に用もなく呼び出したりはしないけれど、いつでも遊びに来てね」
役員になったら用もなく呼び出されたりするのか、と先行きが思いやられる彼女の台詞にげんなりしながら、秋弥はとりあえず首を縦に振った。
「ははっ、シュウヤは中々手強い相手のようだね、ユウキ。アサクラ副会長のようにはいかないか」
「なっ！？　スフィア会長、突然何を言い出すんだ！」
「照れなくても良いよ、アサクラ副会長」
「照れてなんかいない！」
「……四角関係か。グッとくるシチュだわ」
「おい西園寺！　お前の変な妄想に僕まで巻き込まないでくれ！」
「あらぁ、あたしにそんなことを言って良いんですか朝倉先輩。此処ではない別の世界の朝倉先輩が私の想像どおりになっちゃいますよ」
「う〝……」
「星条会長と俺の甘酸っぱいラブストーリーならばどんどん妄想し

てくれて構わないぞ、西園寺書記」
「時任君は主人公の友人Ａだから、そんな超展開にはならないわ」
「それじゃあスピンオフで」
「相変わらずいつも元気が良いね、トキトウ」
「スフィア会長もいつだってお美しいですよ」
「ははは、それじゃあ美しいワタシのために先日発売したニューデバイスを買ってくれるかい？」
「あれ、何だか急に部屋の温度が上がったような気がするかな。ちょっと外に涼みに行ってきます」
「……たっくん、逃げた」
「ほら、あこちもいつまでも縮こまってないで思い切って九槻君に抱きついてみなさいよ！」
「え、えぇーっ！　何なんですかその流れは！？」
「亜子のおっきなおっぱいなら九槻君もメロメロよ！　レッツ五角関係！」
「ふぇぇー……」
美空のセクハラまがいの発言に、亜子は頭を抱えて蹲ってしまった。
「こら、美空。あんまり亜子をイジメないの」
「はーい」
「そういうユウキがアコのことを一番イジってる気がするけれどね」
「だって可愛いんだもの。秋弥君もそう思うでしょ？」
「えぇまあ、そうですね」
秋弥は適当な返事を返しながら、自然な笑みを浮かべた。
封術学園に入学して、もうじき一ヶ月が経とうとしていた。

第１６話「エピローグ～新しい始まり～」（後書き）

これにて一章「封術師編」は終了となります。一章は世界観の説明と導入部という位置付けとなっていましたが、誤字脱字稚拙な文章の中、ここまでお付き合いいただきありがとうございました。

次回「新入生編」は九月中旬頃から投稿する予定です。もう一人の主人公（メインヒロイン）が登場しますので、今後もお付き合いいただけたらと思います。

第17話「三十人目のクラスメイト」

★☆★☆★

学生自治会専用の白い制服が九槻家に配送されたのは、拝命二日後の午後だった。

予め用意しておいたのではないかと疑いたくなるくらいの手際の良さであるが、あの自治会長ならば然もありなんと、姉の月姫（かぐや）と二人で納得した。

そして翌日？？。。

秋弥はランニングを終えてシャワーで汗を流した後、真新しい白の制服に袖を通してからダイニングへと向かった。

「とても良く似合っていますよ」

朝食の準備を済ませてキッチンから戻ってきた姉が、秋弥の姿を見て微笑む。

その率直すぎる感想に、しかし秋弥は頬を緩ませて照れ笑いを浮かべた。

姉に褒められたことが嬉しかったのもあるが、それ以上に朝から姉の笑顔が見れたことの方が秋弥にとって大きかった。

一般学生用の黒を基調とした制服よりも、役員専用の白を基調とした制服の方が自分には合っていると秋弥はそう自己評価をしていた。専用制服は色が異なる以外に、右袖の裏生地に本人認証タグが編み込まれている。学園内のほとんどの非接触式認証端末で使えるように既に設定済みであると、今朝方、学生自治会長である星条悠紀（ほしじょうゆうき）から送られてきたメールには書かれていた。

「普通の制服も似合っていましたが、自治会の制服の方が秋弥には

合っていますね」
陽だまりのようなニコニコ笑顔で月姫が言う。
実は俺も同じ事を考えていたんだと秋弥が告げると、「まあ！」という風に口元を両手で覆った。
「星条会長とスフィア会長って、姉さんと同じクラスだったんだっけ？」
「ええ、その頃は二人共まだ会長ではなかったけれど」
「そうか。会長選挙って学年末だったか」
月姫は四校統一大会の事故以来、封術学園を休学している。統一大会の時期は十月なので、会長選挙を経て悠紀とスフィアがぞれぞれの委員会のトップに立ったことを彼女が知ったのは、つい最近のことだった。
今となっては学園の二大スターとなった二人に囲まれた学園生活を送りながら、どの部活動や委員会にも属さずに一般学生で在り続けた月姫。
悠紀の言葉を借りるならば、「自治会長は私よりも月姫の方がずっと適任」で、スフィアの言葉を借りるならば、「カグヤは学園の誰よりも強い力を持っていた」ということなのだが、二人に一目置かれていた月姫の心境は、本人にしかわからない。
「二人共少し個性が強いから、秋弥が振り回されたりしないか心配ですね」
少しどころかかなり個性的なのだが、それは友人を姉なりにオブラートで包み込んだ表現だったのだろう。秋弥の心情を敏感に読み取った月姫が苦笑した。
「私から二人に何か言っておいた方が良いかしらね？」
「心配してくれるのは嬉しいけど、大丈夫だよ。うまいことやっていくさ」
姉の提案に、秋弥は首を横に振って答える。
月姫にそんなことをされたら、会長達からどんな風にイジられることになるかわかったものじゃない。というのが秋弥の本音なのだ

が、そんなつまらないことでわざわざ姉の手を煩わせることもないだろうという思いも確かにあった。
むしろ逆に、月姫から二人の弱みについて聞き出したいくらいなのだが、訊ねたらあっさり教えてくれそうな気がしたので、今は聞かずにおいた。
「悠紀のときも最初はそうだったのだけれど、クラスで一人だけ制服の色が違うから、あまり悪目立ちしないようにね」
「しないよ。すると思う？」
「どうかしら」
指の背を唇に当ててクスクスと笑う姉に、秋弥は軽く肩を竦めた。
「だけど、リコリスが顕現（あらわれて）して問題になったのでしょう？　そういうことが今後も無いとは限りませんよ」
「……会長の話だと、四月の月例会議じゃ結論は先送りになったみたいだしな」
「……秋弥にとって悪い方向に話が転がらないと良いのですけどね」
一転して不安そうに眼を細める月姫に、秋弥は返す言葉が見つからずに押し黙った。
袋環が月例会議でどのような報告と提言を行ったかは聞かされていないが、簡単に結論が出るようなことではないと、秋弥は重々承知していた。
リコリス？？高位の隣神である彼女は、本人が望むと望まざるとに関わらず人間にとっての脅威として見なされる。
学生自治会長であり、封術師の名家が連なる『星鳥（ほしどり）の系譜（けいふ）』序列第一位でもある悠紀に頼めば何らかの口添えや擁護はしてもらえるかもしれないが、星条家に秋弥の事情やリコリスの存在を広く知られることは避けなければならなかった。
ゆえに、今はただ、大人しく結果を待つだけである。
「秋弥様……、ごめんなさい」
秋弥の心情を察知したリコリスが存在（エリシオン）の光を伴って顕現する。彼の隣にちょこんと腰掛けると、わずかに潤んだ真紅の瞳が彼を見上

げた。
「謝らなくていいよ。何もお前が悪いわけじゃないんだから」
「甘やかしちゃダメですよ、秋弥。間違ったことをしたのなら、きちんと叱ってあげないと」
慰める秋弥と諌める月姫。
板挟みとなったリコリスは暫く二人の間で視線を行き来させたが、最終的に意思決定を秋弥へと委ねた。
姉に言われたら敵わない秋弥は、頭を掻いてから口を開いた。
「まあ、なんだその……、リコリスも十分反省してるみたいだし、本当にお前の助けがほしいときにはちゃんと呼ぶから。だから、学園にいる間はもうちょっと我慢しててな」
秋弥が姉に弱いことを知っているリコリスはてっきり叱られると思って身構えていたのだが、彼の台詞を最後まで聞き終えると、途端に顔を綻ばせた。
「秋弥様ぁ」
感極まって抱きついてきたリコリスを受け止めて、その頭を優しく撫でる。
「もぅ……」
正面では「仕方がないですね」とでも言いたげに眉尻を下げた月姫が二人の様子を暖かな視線で見守っていた。

★☆★☆★

着る制服が変わっただけで周囲から好奇な視線を浴びるようになった。特にそれが顕著だったのは一年三組の教室へと向かう道すがらで、自治会役員の白い制服が一学年の集まった階層にいることが物珍しかったのだろう。逆の立場を思うとその気持ちはわからないでもないが、一挙手一投足が常に監視されているような気がして、

居心地が悪かった。
いつもよりも少しだけ長く感じられた教室までの道を歩く。
秋弥が自治会入りしたことは三組のクラスメイト全員の知るところとなっているので、今更それほどの騒ぎにはならないだろう。
努めて普段通りに三組の教室に入った秋弥は、その思いゆえに中の様子がいつもより騒がしかったことに気づくことが出来なかった。
ドアを開けたところで秋弥の白い制服に気づいたクラスメイト数人の視線が動いたが、少しの間興味深げな視線を向けられただけで、直ぐに元の雑談へと戻っていった。
もう少しだけ好奇な視線を向けられるかと思っていた秋弥はその様子を怪訝に思いながら、自然に耳に入ってくる雑談の話題をBGMにして自席へと向かう。
彼の席の周囲では玲衣、堅綾、奈緒のいつものメンバーが集まって雑談に興じていた。
いつもなら時間ギリギリにやって来る堅持(けんじ)が既にいることにやや面食らったが、たまにはそういう日があっても良いだろうと、秋弥は思い直した。
「おはよう」
「お、秋弥。おはようさん」
「おはよっ」
「おはようございます、秋弥さん」
「おはようございます」
それぞれに挨拶を交わす。秋弥の席に我が物顔で座っていた玲衣が席を空けようとして立ち上がるのを手で制する。
高性能多機能携帯端末(デバイス)が学習道具の代わりとなるようになってから、紙媒体による教材はほとんど使われなくなった。先進的な技術を独自の教育理念によって積極的に取り入れている封術学園では、一般教科の授業も含めて、すべての授業がデバイスを用いて行われる。そのため、デバイスさえ持っていればそれ以外の学習道具は必要とされていない。

今日日、学生鞄を持ち歩いている学生は少なく、学園組織の一員に属することを表す制服さえ着用して、学生証とデバイスさえ持ち歩いていれば、手ぶらで通っても特に注意を受けることはない。
ブレスレット型のデバイスを使用している秋弥も、毎日手ぶらで学校に通っている。
そのまま手近な机の椅子を引いて腰掛けると、誰かに聞こうと思っていた教室内の騒ぎの元について、早速堅持が話題を振ってきた。
「おい秋弥、お前知ってたか？」
「なんだ、藪から棒に」
「その反応は知らないってことだな」
「いや、誰だってそう訊ねられたらそんな反応になるだろう。……この騒ぎと何か関係のあることか？」
周りを見回しながら問う秋弥に、堅持は頷きを返した。
「今日うちのクラスに転校生が来るってんで、噂になってんだよ」
「転校生？　こんな時期に？」
秋弥達が入学してからまだ一ヶ月と少ししか経っていないこんな時期に転校生とは、また珍しい話だった。それに家庭の事情などで転出していくのならばともかくとして？？それ以前に寮のある封術学園において、そのような事情で転出していく学生などほとんどいないのだが？？封術学園に転入制度なんてあっただろうか？
「違うよ、沢村君。新入生だよ」
しかし、秋弥の思案は奈緒の訂正によってわずかにだが氷解した。
「ほら、うちのクラスって最初から全員合わせて二十九人しかいなかったけど、元々後から一人入る予定だったんだよ」
「そっか。言われてみれば確かにそうだよなぁ」
「普通、欠員とかって後ろの組とかにまわされるよね。だけど他のクラスは三十人いるし、今まで不思議に思わなかったことが不思議なくらいだよねっ！」
うんうん、と頷く玲衣。
確かに三十人目が最初から入学予定だったのであれば、それは転

入生ではなく、新入生と呼んで正しいようにも思える。
「それに、噂によるとどうやらその新入生は女子だって話だぜ！」
「はいはい、お約束お約束」
「いやこれマジな話なんだって！　同じ部活のヤツが職員室で新入生の姿を見たってよ。……後ろ姿だけだけど」
　堅持が入部した拳術部??封術によって肉体能力を高めて戦う武術を扱う部活??は部員数も比較的多く、四校統一大会にも代表選手を輩出している過去を持っている。
「どうせ何かの見間違いとかでしょ。別のクラスの女の子だったとか、女の子かと思ったら実は夜空君とかねっ」
「おい、最後なんかおかしいぞ！　いや有り得ないことじゃないけども！」
「あ、でも女の子という話は本当だと思うよ。お姉ちゃんがそんな風なことを言ってたから」
「星条会長がそういうなら、本当かもね」
「俺と星条さんの扱いが違いすぎるっ！」
「それはいつもどおりの気がしますが……」
　さらりと酷いことを言った綾の言葉に、しかし堅持以外の全員が頷いた。
「九槻君はお姉ちゃんから何も聞いてないの？」
「ん、ああ初耳だよ。それに俺は最初から二十九人しかいないと思ってたし」
「あら、少し意外」
「そうか？　入学してから辞めることになる人もいれば、入学前でやむを得ず辞める人だっているだろう」
　持って回ったような言い方だったが、全員が秋弥の言葉に息を呑んだ。
　封術を行使するための干渉機構『装具（そうぐ）』は人の『意（こころ）』から生まれる。事象に干渉（アクセス）出来るという強力無比な性質を持つが、その反面、その心は脆く壊れやすいという矛盾にも似た二面性を持っている。

学生でいる間は封術師見習いという身分になるが、命の危険がまるで無いというわけでもない。隣神の脅威が迫れば封術師見習いでも実践に投入されることだってあるし、違法に封術を行使する違法封術師と戦わなければならないこともある。

そのとき、必ずしも学生が無事で済むとは限らない。訓練とは違う実践で致命的な怪我を負うこともあれば、相手の心の力に圧倒されて文字通り、心が折られてしまう可能性もゼロではない。

昨年の卒業生は百十余名。入学当初は最大百五十人いたはずだが、その一割近くは何らかの事情で辞めていった者達なのである。

入学前に辞めてしまう理由もほとんど同様で、封術師の家系に生まれた者ならば封術学園に入学する前から封術師のそばに付いて隣神との戦いに身を置くこともある。異層感知の訓練を受けていないために気づかぬうちに異層と重なっている領域へと入ってしまい、異層認識力（オラクル）を辿ってきた隣神から攻撃を受けて命を落としてしまうこともだってある。

総一郎に付いて封術の仕事を手伝っていた秋弥だからこそ、三組の定員が三十人ではなかったことに特別疑問を持っていなかったのだが、そうではない四人は気まずそうに瞳を揺らした。

「まあ、何にしてもこの盛り上がりはそのせいってわけだな。会長も知ってたなら教えてくれれば良かったのに」

「……お姉ちゃんのことだから、九槻君を吃驚させたかったのかも知れないよ」

十分にあり得る話だったので笑うに笑えなく??笑おうとすればどうしても苦笑になってしまう??そうかもしれないな、とだけ答えておいた。

「んん？　もしかしてシュウ君も新入生の女の子に興味があるのかなっ？」

「そ、そうなんですか、秋弥さん！」

「秋弥だって人の子だぜ。そりゃあ当然、興味あるだろ」

「人並みにはな……、五月に新入生ってのも気にはなるし」

「あー……その話なんだけどよ。オレも気になっていろいろ調べてみたんだけど、たぶんその新入生が通ってた学校って??」
そこまで言ったところで、突然教室のドアが開いて袋環が入ってきた。話に夢中で気づかなかったが、いつの間にか本鈴が鳴っていたらしい。
入口に立って教室内を見渡す袋環。教室中が転入生の噂話で持ちきりであったことは、学生達の落ち着かない様子から察したらしい。話を打ち切って各自の席へと戻っていくクラスメイト達の視線は、常に袋環のいる方向へと向いている。堅持達も解散して各自の席へと着き、全員が席に着いたことを確認した袋環は一度背後を振り返って噂の新入生に付いてくるように告げた。
教壇へと歩いて行く袋環の背中に付き従うように、しとやかな所作で教室に入ってきた新入生に、教室中の視線が釘付けとなった。
日本人離れした白磁のような肌。完璧なまでに洗練された大きさの瞳に愛らしい桜色の唇。顔立ちは精巧に作られた人形のように整っている。静かに正面を振り向いたときに、一本一本が透き通るように細く美しい栗色の髪を靡かせて、制服を押し上げる胸元に優しく手を当てて、優雅な仕草で一礼した。
「聖條女学院中等部から来ました、天河聖奈(あまかわ せいな)です」
瞬間、どよめきが起こる。
「学院の事情により入学が遅くなりましたが、これからどうぞよろしくお願いします」
そして、ニコリと微笑んだ聖奈の笑顔に、男子のみならず女子までもが一瞬で心を奪われたのだった。

第17話「三十人目のクラスメイト」（後書き）

第2章「新入生編」の連載を開始します。連載ペースは週一で、一話は文庫換算で約二十ページを予定していますが、いろいろと事情により前後することがあると思います。

九槻秋弥と遅れてきた新入生、天河聖奈が（たぶん）活躍する第2章も、引き続きよろしくお願いいたします。

第１８話「遅れてきた新入生」

★☆★☆★

ニコリと微笑んだ聖奈はクラスメイト達の中に一人だけ、白い制服を着用している男子学生の姿を見つけた。
不意に、その男子が聖奈の視線に気づき、眼が合った。
聖奈は何故かその男子学生の瞳から眼を逸らすことが出来なくなり、意図せずして彼と見つめ合うような形になってしまう。
だが、あっさりと男子学生が視線を外したことで緊張状態にあった聖奈の身体は直ぐに弛緩した。内心で小さく息を吐いたところで、横に立つ袋環が彼女の座席について指示を出した。
いつの間にか用意されていた三十番目の座席に初めて気づいたクラスメイト達の視線が飛び交う中。
聖奈は指示された座席へと向かう途中で、通路の左右に並び座る学生達のうち、彼女の前の座席に座ってこちらに小さく手を振っている女子学生に軽く目を向けた。
生気に満ちた活発そうな印象の女子学生だ。
声には出さず、口の動きだけで「よ・ろ・し・く・ね」と伝える女子学生に、聖奈は笑顔を返した。

★☆★☆★

今日の一コマ目は専門科目の封術理論であったため、袋環は朝の

ＳＨＲからそのままの流れで封術理論の講義を行った。
　誰もが聖奈に声を掛けたくてウズウズしている様子を感じ取った袋環は溜息を吐きながら定刻よりも十分早く授業を切り上げて??ただしＳＨＲ後の小休憩時間を挟まずに授業を行っていたため、実質的な授業時間にほとんど違いはない??教室を出て行くと、クラスメイト達は一斉に聖奈の席の周りに集まった。
　彼女の前に座っていた玲衣はそれに巻き込まれないように一足早く席を立って、いつものように秋弥の席の周りにやって来ていた。
「いやぁ、やっぱすごい人気だな」
「転入生??新入生か。それが珍しいっていうのもあるけど、だってあのルックスだよっ」
「綺麗な方ですよね。それに、聖條女学院ってあのお嬢様学校ですよ」
「由緒正しき名家の令嬢が通うっていう触れ込みのアレね。綾と奈緒ももしかしたら通ってたんじゃない？」
「うぅん……、私の家は名家といっても封術師の名家だから」
「『星鳥』の女の子は聖條女学院よりも封術学園に通うと思う。でも、ここに入学できていなかったら私は今頃聖條女学院に通っていたかも」
「はぁ……、やっぱり私達一般人とは違うね」
　天然系の奈緒に悪気は無いのだが、彼女は何故玲衣が気落ちしてしまったのかわからずに小首を傾げていた。
「それは良いとして、玲衣は真っ先に天河さんのところに行くと思ってたけどな」
「……その台詞。似たようなことを前にシュウ君にも言われたかも……」
「つまりはそういうイメージってことだな」
「何か不服だよっ！」
「そうか？　そんなことないよな、秋弥」
「ごめん、否定は出来ない」

「そんなぁ～……」
しょんぼりする玲衣を余所に、綾と奈緒がクスクスと笑った。
「あっ！　そういえば天河さんが挨拶したとき、何かシュウ君と見つめ合ったりしてなかった？」
しゅんとしていたかと思うと、急に玲衣が机に身を乗り出してきた。
玲衣の座席は教壇を正面として廊下側から二列目の前から五番目。秋弥の座席は窓側から二列目の前から四番目なので、玲衣の視点からは秋弥の方を向いていた聖奈の視線が見えていたのだろう。
ちなみに堅持は秋弥の前の座席で、綾は廊下側一列目の一番目。奈緒の座席はその二つ後ろとなっている。
「え、アレってオレのことを見てたんじゃないの？」
若干、秋弥を咎めるような玲衣の言葉に、しかし食いついたのは堅持だった。
彼の残念な発言に玲衣はがくりと肩を落とした。
「そんなわけないじゃない……。常識的に物事を考えなさいよ」
「オレじゃ非常識だっていうのかよ！？」
「実際問題、視線が通ってるか通ってないかくらいわかるでしょ」
「ぐぬぬ……」
玲衣の正論に堅持が恨みがましい視線をこちらに向けてきたが、秋弥は軽く肩を竦めてやり過ごした。
「いや、俺にも良くわからないんだけど。たぶん、俺だけ白い制服を着てたから目立ったんだろう」
今朝の月姫との会話を思い出した秋弥がそう告げると、玲衣は納得したように頷いた。
「それはあるかも。教壇の上から見ると白一色って感じだもんね」
「やっぱり皆さん、気になりますよね」
「偶然にも新入生が来てくれたおかげで話題の標的にされなくて助かったけどな」
おどけた調子の秋弥に、皆が笑った。

★☆★☆★

二コマ目の授業を終えた秋弥と堅持の二人は、女子メンバーを教室に残して先に学生食堂へと向かっていた。

休憩時間中に「お昼の前にちょっと用事があるから、先に行って」と玲衣が言っていたので、綾と奈緒にも玲衣と一緒に後からゆっくりと来るように伝えて男子メンバーは食堂の場所取りである。

学生食堂に入ると、秋弥の自治会役員専用制服に気づいた学生達の眼が一斉にこちらを向いた。主に教室や自治会室で食事を取っているという役員の昼食事情を知らない秋弥は、図らずも自治会の役員であるということの意味を思い知る形となった。

その視線を避けるように入口から死角になりやすい手頃な場所の座席を確保すると、三人がやって来るまでの時間で堅持と他愛の無い雑談に興じた。

話題はもちろん、秋弥の制服と新入生の天河聖奈の話だ。

間近で役員専用の制服を見れる機会なんて滅多に無い堅持は、ここぞとばかりに白い制服の生地に触れたり、特殊な機能はないのかと訊ねてきた。だが、一般制服の基調色を変えただけだと言うと残念そうな顔をした。

「それじゃあ単なる色違いだっていうことか」

「そういうことだな。今朝姉さんにも言われたけど、良い意味でも悪い意味でも目立つだけだから、気をつけないとな」

「さっきみたいにな。つかお前がその制服を着てから改めて思うんだけどよ。入学早々、自治会役員に選ばれるとかすごくね？」

「総代が役員として選出されることは良くある話みたいだけどな」

「時期的に考えて、って話だよ。特にうちのクラスは『星鳥』の名家出身が三人もいるし、それに今度は聖條のお嬢様が入学してきた

んだぜ」
「お嬢様か……。確かにちょっとした仕草や所作が上品な感じがしたな」
「だろ？　聖條女学院の女の子なんて俺達にとっちゃ高嶺の花だぜ。それが同じクラスにいるってんだから、こんな奇跡みたいなアドバンテージを利用しない手はないぜ」
熱弁を奮う堅持だったが、秋弥の温度は彼ほど高くはなかった。
「止めとけって。またぞろ玲衣に弱みを握られることになるだけだぞ」
「ぐっ……、いや、だけどここで立ち向かわなかったら男が廃るぜ。聖條って全寮制だから、世間ずれしていなさそうなところを突くしかないか」
「……ならもう無理には止めないけど。処世術も身に付けていそうだし、うまくあしらわそうな気がするけどな」
背もたれに身体を預けた秋弥は、クラスメイト達の注目が一斉に集まるここぞという場面で聖奈が見せた微笑を思い出していた。
どんな理由があったにしても、一人だけ入学が遅くなった聖奈がクラスにいち早く溶け込むためにはどうしたら良いか。その方法として彼女が選んだのは、自身の容姿や経歴も計算に入れた振る舞いをすることだったのではないかと、秋弥は考えていた。
逆にそれが聖奈にとっての自然な振る舞いであるとすれば、彼女は無意識のうちに多くの人を惹きつけるだろう。
封術師を目指す者にとって、その制御不可能なカリスマ性は危険だ。
心の力が事象を操る力である以上、人心を掌握する才に秀でた者は己でそれを制御することが出来なければ、存在そのものが隣神以上の脅威になりかねない。
スフィアの言葉を借りるまでもなく、人間の敵が必ずしも人間ではないとは限らないのである。
「まあ無難にストレートにぶつかっていって、砕けるのが一番良い

と思うぞ」
「砕ける前提かよ……」
「砕け散ってみるか？」
「破片も残らないのか！？」
「実際のところ、相手を最大限引き立てながら、やんわりと断わりそうだな」
「そういう奥ゆかしいところがまた良い！」
もう好きにしてくれ、と嘆息する秋弥。
あまり勝手な想像を膨らませすぎて、後で落胆しなければ良いが……。
「あ、いたいた～」
と、秋弥達の姿を見つけた玲衣達がこちらに近付いてきた。
溌剌とした声に振り向いた二人は、女子三人に連れられる形で、今まさに話題にしていた渦中の人の姿を見つけて目が点になった。
「あ、あああ、天河さん！？」
堅持が思わず席を立った。だからどうしたということでもないが、反射的に腰を浮かせてしまうほど彼が驚いているのだということに違いはない。
その分、秋弥はいち早く冷静になることが出来た。
玲衣の言っていた用事というのはこのことだったのかと、秋弥は合点がいった。新しいクラスメイトを昼食に誘うなんていう競争率の激しそうなイベントに対して、玲衣が一体どんな手を使ったのかは想像も付かないが、席の前後同士ということもあってか、勧誘には無事成功したようだ。
驚いたのは、何も秋弥達だけではない。
聖奈もまた二人？？主に秋弥の姿を認めて、今朝のこともあってかわずかに目を見張った。
「……すみませんが、ご一緒させていただきますね」
それでも直ぐに微笑みを浮かべると、先に座って待っていた二人に頭を下げた。

入学初日で学園のことを右も左もわからない聖奈は、しかしキョロキョロと視線を這わせるような真似はせず、玲衣に促されるままに彼女の隣の席に着く。
なお、堅持と向かい合って座っていた秋弥の両隣に綾と奈緒。堅持は席を右にずらして、その隣に玲衣、そして聖奈という座席配置となっていた。
「二人はもう何か頼んだのかな？」
「いや、これからだよ」
「それじゃあ先に料理頼んじゃおうか」
玲衣の掛け声で一斉にデバイスを起動させると、彼女は聖奈の面倒を見ながら食堂メニューの中から料理を選ぶように伝える。
緊張に背筋を伸ばしたままの堅持だったが、待っている間に今日の昼食は決めていたようで、ややぎこちない手つきでデバイスを操作すると、あっという間に料理を選び終えた。
それぞれが料理を選び終えてデバイスを片付ける。
料理が運ばれてくるまでの間に、秋弥と堅持は聖奈に自己紹介を済ませてしまうことにした。
「オ、オレは沢村堅持。よよよよろしく！」
「九槻秋弥だ。……この制服が気になってるみたいだから言っておくけど、これは学生自治会役員用の制服なんだ」
キョドりながらの堅持と、達観した様子の秋弥。
二人から自己紹介を受けた聖奈は、今朝からずっと気になっていた事柄が本人に気取られていたと知って頬を赤らめた。
ほどなくして、給仕姿の夜空が料理を運んできた。夜空は秋弥の白い制服に一瞬目を奪われ、次に聖奈の容姿に気を取られたが、学生バイトとはいえ給仕として働く者として、接客のマナーを忘れることなく、各人の前に料理を並び終えると「それでは失礼いたします」と恭しく一礼して持ち場へと戻っていった。
「牧瀬さん達はいつも、ここで昼食を取っているのですか？」
「うん、だいたいそうだね。今度から聖奈も一緒に食べよ？」

「え、良いのですか？」
玲衣からの意外な申し出に聖奈は目を白黒させて、全員の顔を見回した。
「もちろんだよっ！　ね、シュウ君」
「ん……、ああ、俺は構わないよ」
答えながら、秋弥は右隣の綾にも視線で同意を求めた。
「皆さんで食べた方が楽しいですしね」
「もちろん、大歓迎です」
「断るわけないじゃん」
その連鎖は全員へと繋がり、皆が快諾した。
「というわけだから、後は聖奈次第だねっ」
他の皆からも同意を得て、改めて玲衣が聖奈に訊ねる。
「ありがとうございます。これからも是非ご一緒させてください」
はにかんだ聖奈の笑顔に、堅持が小さくガッツポーズをした。

★☆★☆★

放課後、秋弥は自治会室を訪れていた。
学生自治会に決まった活動日はなく、また、呼び出されたわけでもないのだが、正式に自治会役員となった初日に挨拶もせずに帰ったのでは、会長二人からどんな仕打ちを受けるかわかったものじゃない。
そんな考えもあって、自治会室の前までやってくる。
「失礼します」
これまでのように内部の許可を必要とせず、自動認証のみで入室する。
誰もいなければ踵を返して帰るだけだと、淡い期待をしていた秋弥だったのだが、件の会長二人は秋弥が訪ねてくるのを待っていた

かのように平然と午後のティータイムに興じていた。
「やっと来たか、シュウヤ」
「こんにちは、秋弥君。直ぐに紅茶を淹れてあげるから、ソファに掛けててね」
「……お構いなく」
なんて言っても無駄なんですよね、と小声で付け足しながら、スフィアの向かいに腰掛ける。
「うんうん、白い制服でも似合っているね」
「ありがとうございます」
「んん？　つれない反応だね」
スフィアは珍しく（？）正直な感想を述べたにも関わらず、秋弥からあまり気のない反応を返されて訝しんだ。
「ふむふむ……、いろんな人から同じようなことを言われ続けたから、ワタシ達が何を言ってもキミは今更何とも思わないというわけだね」
しかし、見事に図星を突かれてしまって、秋弥は視線を彷徨わせる。
その様子がよほど可笑しかったのか、スフィアは彼をからかうことが出来て満足したようだった。
「今日はお二人しか来ていないんですか？」
「普段からこんな感じだよ。行事でも無ければ自治会の仕事はデバイス一つで済ませてしまえるからね。言ってしまえば自治会室（このばしょ）は組織としての体裁を保つために用意されているようなものだよ」
「そういうものですか」
「自治会室は実質的に歴代自治会長専用の個室という意味合いが強いんだ。自治会長ともなると学内にいると煩わしく思える場面が多くなるからね」
「招集命令が無ければ自治会室（ここ）に来なくても良いというは、本当だったんですね」
「ユウキとワタシに会いたければ、毎日だって来てくれて構わない

んだよ」
どう答えて良いかと迷っているうちに、紅茶を淹れ終えた悠紀が戻ってきた。
「はい、どうぞ」
ソーサーをローテーブルに置く。
秋弥は湯気を立ち上らせたティーカップを見て、首を傾げた。
「星条会長、ティーカップを変えたんですか？」
秋弥の前に置かれたティーカップは、彼が初めて自治会室に呼ばれたときに用意されたものと違っていた。
取っ手部分と外縁が金で彩られ、カップの側面には様式化された単色の花柄が描かれる。ティーカップを持ち上げると、ソーサーにも同色の花柄が描かれていた。
「この間のは来客用のものだったのよ。それで、こっちは秋弥君専用のティーカップよ」
「役員は全員、自分専用のカップを持っているんだよ。シュウヤのティーカップはワタシ達で選んでおいたよ」
「それは……わざわざすみません、ありがとうございます」
「どういたしまして。気に入ってくれると嬉しいな」
と、不意にスフィアが吹き出した。
何事かとそちらに眼を向けてみれば、笑った顔のままで、「聞いてくれよ」と前置きした。
「そのティーカップは昨日、ユウキに誘われて二人で買いに行ったんだけどね」
「わわわっ、止めてよスフィア！」
慌てて身を乗り出した悠紀がスフィアを制止しようとする。しかしローテーブルを挟んで反対側に座るスフィアの口を閉ざすことが出来ずに、結局は彼女が言葉を続けるのを許してしまった。
「他の役員達のものもユウキが選んで用意したものなんだけれど、キミのティーカップを選んでるときのユウキはそれはもう舞い上がっちゃっててね。ひとつひとつ手に取っては、アレはどうかコレは

どうかって訊ねてきて大変だったよ」
「嘘！　全部スフィアの嘘だからね、秋弥君」
悠紀が声を荒げて否定するも、紅潮した顔がその発言を裏切っていた。
最早スフィアの口を止めることは無理だと諦めて、悠紀は対象を秋弥へと移した。
「スフィアは何でも大げさに言いたがる癖があるのよ。真に受けてないとは思うけど、私、秋弥君のこと信じてるからね」
悠紀にジッと見詰められて、秋弥は返答に迷った。
「信じるのは会長の勝手ですが、取捨選択くらいは自分でしますよ。……このティーカップ、とても気に入りました」
途端、悠紀は黒と蒼の二色の瞳を目一杯見開いたかと思うと、秋弥から視線を外してそのまま身体ごと背を向けてしまった。
スフィアは相変わらずヘラヘラとした笑みを浮かべているだけで、何も言おうとはしない。
とりあえず悠紀が元の状態に戻るまでは何を言っても無駄だろうと思い直して、秋弥は紅茶に口を付けた。
仄かなサクラのフレーバーが、鼻腔をくすぐった。

「あー……、こほん。ところで秋弥君。新しく来た学生とは仲良くしているかしら？」
気を取り直した悠紀が、わざとらしい咳払いをしてから言う。
「今日来た新入生ですか……、知っていたのなら教えてくれれば良かったのでは？」
「あら、教えてほしいなんて一言も言われていないのだけれど」
非難めいたことを言う秋弥に、悠紀は先ほどの意趣返しだとばかりに悪戯っぽく黒い瞳を閉じてウィンクした。
どうやら今朝、奈緒と見解が一致したとおり、悠紀が何も言わずにいたのは、ただ秋弥を吃驚させたかっただけのようだった。

「でも急で驚いたでしょう、聖條から来たお嬢様だったから」
「詳しいですね。自治会は学生データも管理してるんでしたっけ？」
「えぇ、そうよ。乙女の秘密（身長・体重・スリーサイズ）までは閲覧出来ないけれど、基本情報だけならね」
「……誰も求めてませんよ」
げんなりしながら言った秋弥に、スフィアが顔を上げた。
「何と……、シュウヤ。キミは女の子に興味が無いというのか」
秋弥は危うく、口に含んでいた紅茶を噴き出すところだった。
間一髪でそれを飲み下して、直後に軽く咳き込みながら抗議の声を上げた。
「そんなこと言ってませんよ！」
「何をそんなに慌てているんだい？　おかしなシュウヤだね」
「頭が痛くなりそうだ……」
額を押さえて項垂れる秋弥。
悠紀とスフィアのペースにまんまと乗せられていることに気づいてはいるのだが、この二人の包囲網から逃れることはそう容易いことではなかった。
「……仲良くも何も、天河は今日来たばかりですよ」
「おやおや？　だけどシュウヤと新入生が一緒にいる姿を目撃したという情報をこちらは握ってるんだけどね」
「……何処情報なんですか、それ」
「我々治安維持会の情報網を侮ってもらっては困るよ、シュウヤ」
「治安維持会は学内で諜報活動もしているんですか……」
スフィアが会長を務める治安維持会が何人で構成されているのか、普段どんな活動を行っているかを秋弥はまだ知らない。
秋弥が苦い顔をすると、スフィアがさらりと種明かしをした。
「まあその制服を着て食堂に行けば、嫌でも皆の注意を引くよ」
「……なるほど。会長達は普段、昼食はどうしてるんですか？」
「ワタシはここか、教室で食べているかな」
「私は大体毎日ここで、亜子や美空と一緒に食べているわ」

「あんまり食堂には行かないんですね」
「行きたくないわけじゃないんだけどね。皆が注目してくるから食べ辛くって……」
先ほどのスフィアの言葉を思い出して、秋弥は納得した。何故なら秋弥もまた、今日堅持と共に食堂へ行ったとき、他人からの視線を一段と強く感じていたからだ。
全学生中、現時点で六人しかいない役員が物珍しいということは理解しているが、昼食くらいは落ち着いて食べたいものである。
その秋弥の内心を読んだのか、悠紀がこれからは自治会室で一緒に食べないかと提案してきた。
それも良いかなと思ったが、秋弥はクラスの皆と食べる方を選んでやんわりとお断りした。
「そう。それじゃあ、たまにで良いから一緒に食べましょうね」
「そのときは事前にワタシにも連絡を頼むよ」
「それで、新入生の天河聖奈さんと仲良くお昼を食べていた秋弥君。彼女は、この学園でもうまくやっていけそうかしら？」
悠紀がさり気なく話を元の軌道に戻す。その言葉にわずかだが棘を感じたのは気のせいだろうか。
「玲衣……クラスメイトの一人が気に掛けてるんで、大丈夫だと思いますよ」
「女の子？」
「ただの幼馴染みですよ。騒々しいヤツですが面倒見が良くて、早速天河を昼食に誘ったんですよ」
「それで今日、食堂で一緒にいたんだね」
「そういうことになりますね」
「なるほどね……。それじゃあ天河さんの事は秋弥君に任せても大丈夫そうね」
「……何でそうなるんですか」
「これから一緒にいる機会が増えると思うから。新入生は右も左もわからないんだから、ちゃんと面倒を見てあげてね」

俺だってまだ新入生なんですが、と言ったところで取り合ってもらえないのだろう。
秋弥は反論しかけた言葉を飲み込んで肩を落とした。
とはいえ、何かをしろと言われているわけでもないので、普通に接すれば良いのだと思う。
悠紀の言葉は、聖條との違いで困ったことがあったら助けてあげてほしい、という意味だと秋弥は解釈した。
「話は変わるんだけど、紅茶が飲み終わった後で秋弥君には早速、やってもらいたいことがあります」
「仕事ですか？」
顔を上げて、視線を悠紀へと向ける。
彼女は薔薇の花柄が描かれた大人しめのティーカップを持ち上げると、一口飲んで喉を潤した。
「自治会の仕事ではないのだけど、スフィアと一緒に学内を見回って、校則で定められている以上の干渉力を及ぼす封術を行使している学生がいれば、それを取り締まって来てもらいたいのよ」
「治安維持会の仕事の手伝いということでしょうか」
自分の言葉でまとめると、悠紀が首肯した。
「そういうことになるわね。とは言っても実際に取り締まるのはスフィアで、秋弥君はその付き添いかな」
「おいおい、ユウキ。もしかしてシュウヤにワタシの監視をさせるつもりかい？」
心外だと言わんばかりにスフィアは腕を組んで足を組み直した。
「だって、貴女を一人にすると大した問題でもないのに大事になるんだもの」
「検挙率が高いんだから良いじゃないか」
「それと同じくらい、学生の負傷率も高いのだけれど？」
「名誉の負傷さ」
「貴女が無傷なのだから、誰にとっても不名誉なだけよ」
「でもそれが治安維持会の仕事だろう？」

「余計な怪我人を出すための組織ではないわ」
「何の犠牲も無く、何かを為すことは出来ないよ」
神妙な面持ちでスフィアは言うが、
「かっこよく言ってもダメよ。事実は不変的だわ」
悠紀は全く取り合わなかった。
「ああ言えばこう言うな、ユウキは」
「ああ言えばこう言うわね、スフィアは」
互いに乾いた声で笑い合う二人。
最初から段取りが決まっている台本どおりのやりとりを、秋弥は呆れ顔で見物していた。
「そういうことだから、秋弥君。今日はスフィアに付き添って治安維持会の仕事がどんなものか学んできてね」
「了解しました」
そんなことだろうとは思っていたが、そこには二人の茶番にすっかり慣れてしまっている秋弥がいた。

第１９話「治安維持会の仕事」

★☆★☆★

学園内を見回りながら、校則で定められた干渉力以上の情報干渉を必要とする封術を行使している学生がいればそれを取り締まる。

それが、治安維持会の主な仕事である。

見回るコースは特に定められていない。

ただし、特別訓練棟だけは元々封術見習いである学生達の封術を向上させるための訓練施設であるため、施設使用許可が下りている組織や学生は施設内においてどのような封術を行使しようとも、治安維持会に咎められることはない。

もちろんこれは学生自治会によって施設の使用者が特定されているからであり、問題が発生すれば直ぐにわかるからなのだが、学園の他の施設ではそうもいかないため、治安維持会が見回ることでこれに対応している。

ちなみに、自治会室の隣に維持会室というものがあるのだが、ほとんど使用されておらず??会長であるスフィアが自治会室に入り浸っているせいでもあるが??維持会メンバーもスフィアへの定期連絡さえ怠らなければ、比較的自由な行動が許されている。

なお、治安維持会のメンバーは一般学生よりも学内での封術使用制限が緩くなっているため、彼らが問題を起こせば、一般学生よりも思い罰則が与えられることになる。

メンバーの選出は学園組織側から最大二人と、会長推薦枠から最大二人の合計五人。

維持会メンバーは全員、右腕に赤い腕章を巻いているのだが、秋

弥は学園内でスフィア以外の維持会メンバーに出会ったことは、まだ、なかった。
「他のメンバーと見回るところとか重なったりしないんですか？」
「心配無用だよ。今日は全員非番にしてあるからね」
この学園の治安は本当に大丈夫なのかと早くも頭がクラクラしてきた秋弥だったのだが、今更それを嘆いていても仕方が無い。
特別訓練棟は見回る必要が無いので、まずは手近なところから見回っていくことにした。
とはいえ、封術教師の研究室がある多目的棟で問題を起こす兵（つわもの）はいないということで、二人は現在、本棟の中央通路を歩いていた。
「事件なんてそれほど頻繁に起こるものなんですか？」
「誰だって自分の力は誇示したがるものだからね。頻繁というほど起こっていたらそれはそれで問題なのだけれど、常に注意するに越したことはないんだよ」
秋弥は教室で激昂した鶴木が感情のままに封術を発動させたときのことを思い出していた。
下級生？？特に装具を手にしたての学生達の間では、封術を行使した小競り合いが多いのだと、スフィアは言った。しかし家系的に封術を学んでいない学生同士の喧嘩ならば、それほど強力な封術を行使することも出来ないため、学生の自治性を高めるという意味合いもあって、出来る限り当人同士で解決してもらうことを由としている。
そう聞くと治安維持会が出動するケースは比較的少ないようにも思えるのだが？？。
学年が上がるほど自制が出来るようになるため、本来であれば封術絡みの問題は減少していく傾向にあるはずなのではないかと秋弥が問うと、近年ではむしろ横這いなのだと言われてしまった。
「実際のところ、難しい問題だよね。封術人口は年々わずかながら増えていってるけれど、相対的に責任感や義務感を持った学生が減っている。ただ力（オーラクル）を持っているというだけで、ちょっと背伸びして

封術学園に入学出来てしまうようなケースだってあるからね。キミが一緒に仕事をした封術師のムカエも、実はその一人なんだよ。問題を起こすのはそういう学生が多い。在学中も、卒業後もね」

果たして本当にそうだろうか。

『星鳥の系譜』である封術師の名家、鶴木家の者でさえも些細なことで簡単に封術を行使したのだ。

現在ではむしろ、一般家庭から封術師見習いとなる者の方が増えており、その中には『星鳥』以上の力を潜在的に持った者だって少なからず、いる。だが、脈々と続く封術師の血統がそんな彼らよりも劣っていることを認められないという者も多くいるのではないかと、秋弥は考えていた。

「まあ誰だって学生生活くらいは何事も無く、平穏無事に過ごしたいものさ」

それは秋弥が入学当初から思っていたことだったのだが、それこそ今更だったので曖昧な笑みを返すだけに留めた。

「この時間だとだま教室に残っている学生もいるからね。下の階から順に見て回っていこう」

とは言うものの、教室棟では特に問題らしい問題は起こっていなかった。

余談だが、二人が一年三組??すなわち秋弥のクラスを訪ねたときには、教室にまだ残っていたクラスメイト達がスフィアと一緒にいる秋弥の姿を見つけて羨望や嫉妬の眼差しを向けてきたり、スフィアが徐ろに秋弥の座席に腰掛けて意味有り気にニヤニヤしたりして大変だった。

スフィアの教室を訪ねたときには逆に困らせてやろうかと内心で思っていた秋弥だったのだが、下級生を連れたスフィアが自身のクラス??四年一組を訪ねたときには、上級生女子の興味の対象がスフィアではなく秋弥に集まったりして、別の意味で気苦労が絶えな

かったのだった??。

★☆★☆★

「封術絡みの事件が起こるとしたら、部室棟かグラウンドの方ですか?」

「グラウンドも時間帯によっては特別訓練棟のように封術結界の制限を掛けているからね。今の時間は大丈夫だけど、一応見回っておこうか」

二人は本棟の一階まで降りると、北西に位置するグラウンドに向かうため、一度外に出た。

陽はまだ落ちていない。

部活に励む学生達の声が二人のいる場所まで届いてきていた。

「運動系の部活動といえば、十月には四校統一大会があるよね。選手候補の視察も兼ねて、様子を見ておくのも良さそうだ」

四校統一大会といえば、全国に四校ある封術学園から代表選手を輩出して封術の技量を競い合う大会である。

統一大会は異層世界の脅威から将来の現層世界を護る有望な封術師見習い達が出場するということもあって、毎年多大な賑わいを見せている。また、統一大会の開催期間だけは一般の人々も大会を観戦することが出来るので、観戦チケットはプレミア価格で取引されたりする背景もあったりする。

学園の代表選手に選ばれるということは、封術師見習いにとっての一種の名誉であると同時に、封術師としての将来に対するステータスにもなり得る。

運動系の部活動??特に封術を用いた部活に参加する学生達は、毎年一度行われる四校統一大会のために己の技術を磨いていると言っても過言ではなかった。

「あれ、秋弥じゃん。こんなところで何してるんだ？」
グラウンドに入ってランブルボール（封術によって強化したラケットを用いて、一定の高さまで浮かせたボールを高速で打ち合う競技）を遠巻きに眺めていた秋弥は、背後から声を掛けられて振り返った。
声の主は、動きやすそうなTシャツ姿の堅持だった。
「すみませーん！　ちょっと用事があるんで後で合流しまーす！」
ランニングの途中だったのだろう。一定のペースで走り去っていく集団の背中に堅持が声を張り上げると、集団の中の一人が腕を上げてそれに了承した。
「拳術部はランニング中か？」
「ああ、運動前のウォームアップにな。お前こそ何してるんだ？」
「俺は？？」
「おや、キミはシュウヤの友達かい？」
言い掛けたところで後ろからスフィアが割り込んできて、秋弥は沈黙を余儀なくされた。
「うぉあっ……って、ひょっとしてスフィア会長ですか？　治安維持会の？」
「うん、そうだよ」
金髪灰眼に抜群のプロポーションを持つ英国風美少女が突然現れたことに驚いた堅持だったが、その容姿と右腕の腕章から、直ぐに彼女が誰なのか思い至ったようだった。
「おぉ……噂以上の美人」
「はは、有り難く受け取っておくよ」
「！？」
内心で呟いたつもりが声に出していたことに気づいた堅持は咄嗟に目を見張った。
途端、秋弥にはスフィアの瞳の奥に、黒い光がうっすらと揺らいだように見えた。
何かよからぬ事を企んでいる瞳だ。

「もう一度聞くけど、キミはシュウヤの知り合いかい？」
繰り返しの質問のはずが、『友達』から『知り合い』へと微妙に格下げされていたのだが、気に留める者は秋弥以外にはいなかった。
「は、はいっ！　自分は秋弥と同じクラスで拳術部員の沢村堅持と申します！」
堅持は上級生の？？それも治安維持会の長であるスフィアから話しかけられて、上ずった声で答えた。
そんな下級生の様子を見慣れていたスフィアは、普段のニヤニヤとした笑みを浮かべている。
その笑顔から何かを企んでいそうな雰囲気を感じ取った秋弥は、彼女の背後で小さく溜息を吐いた。
「そうか、サワムラは拳術部なんだね。拳術部からは毎年優秀な選手が『事象の地平面（イベント・ホライゾン）』の代表として選ばれているから、キミも代表選手の一人になれるように精進するんだよ」
しかしスフィアは、堅持を普通に激励しただけで他には何も言わなかった。
『事象の地平面』とは四校統一大会の競技種目の一つで、長方形のコートを二分してそれを互いの陣地とし、敵陣にいる相手選手にボールを当てるというスポーツである。互いの身体や競技用のボールに封術を使用しても良いため、一般には封術版ドッジボールとして認知されている。
『事象の地平面』は男子のみ出場可能な競技で、各校代表選手五名と控え選手二名を選んで出場させる。
入部したての一年生である堅持が『事象の地平面』に出場できる可能性は、その封術の能力を鑑みてもほとんど皆無と言って良いのだが。学園の二大巨塔、治安維持会の会長から直々にエールを送られて、堅持は一段とやる気が出たようだった。
「はい、精一杯頑張ります！」
「うんうん、新入生は元気が良くて素直で可愛らしいね。何処かの誰かさんとは大違いだ」

まさかこのタイミングでこちらに飛び火してくるとは思っていなかった秋弥は、少々面食らった。
スフィアからジト眼を向けられて、思わず苦い顔をする。
この上級生は事あるごとに秋弥（ひと）をからかわないと気が済まないのだろうか。
「……元気が無くて素直じゃない後輩ですみませんでしたね」
「ココロが籠もってないぞ、シュウヤ。封術の力の源はココロだと、最初の講義で教わらなかったのかい？」
「はあ、もう何でも良いですから。スフィア会長はちょっと静かにしていてください」
諦めモードの秋弥はおざなりな感じでスフィアをあしらうと、堅持に眼を向けた。
「……おいおい秋弥。お前、スフィア会長にそんな口を利いて大丈夫なのか？」
と、堅持は秋弥の肩に腕を回しながら、不安げな面持ちで彼にだけ聞こえるように小声で言った。
「ん、どういう意味だよ」
「スフィア会長と言えば、運動系の部じゃ知らない人はいないくらいの超有名人なんだぞ」
「それが何か問題なのか？」
「……オレも部活の先輩から聞かされた話なんだけどよ。スフィア会長は封術の過剰行使者（エクシーザー）に対して全く容赦が無いらしい。……うちの部では『金髪を見かけたら全力で逃げろ』って言われてる」
どうやら先ほどの挙動不審な態度はスフィアの美貌に中てられて緊張したのではなく（それもあるかもしれないが）、先輩から聞かされていた件の人物を目前にして、萎縮したためだったようだ。
「もしかしてお前と一緒にランニングしてた人達って、お前を贖罪（スケープ・ゴート）の羊にして逃げたんじゃないのか……」
「言うな。否定出来ん……」
堅持と共にランニングをしていた拳術部のメンバーには上級生も

混じっていたのだが、その中の誰かがスフィアの存在にいち早く気づいたのではないかと二人は予想した。
「お前もそろそろランニングに戻った方が良いんじゃないか？　あまりここで油を売ってたら、怖い上級生に眼を付けられるぞ」
「そうだな……、それじゃあそろそろ行くぜ」
「ああ、部活頑張ってな」
「あ、そうだ。結局お前、ここでスフィア会長と何してたんだ？」
「それは？？」
　このパターンは、と思ったときには既に遅かった。
　再びひょっこりと現れたスフィアが、例のニヤニヤ笑顔を浮かべて悪戯っぽく言った。
「シュウヤはワタシと、放課後デートをしているんだよ」
　そのときの堅持の顔を、秋弥はしばらく忘れられなかったという……。

★☆★☆★

　その後、堅持を説得するために無駄な労力を消費した秋弥と、彼をからかうことが出来て上機嫌のスフィアは、グラウンドを離れて部室棟のある別棟へと向かっていた。
　封術学園では規定人数さえ揃えば顧問がいなくても部を設立することが出来る。もちろんその設立目的や活動内容が明文化されていなければ学生自治会の認可は下りないのだが、顧問がいなくても部として認められる辺りは、学生の自主性を重んじる封術学園ならではと言えるだろう。
　また、部として認可されれば部室棟の一室が部室として割り当てられる。ただし部室は約八畳ほどの広さなので、拳術部のように部員数が多い場合は、必要に応じて多目的棟や特別訓練棟の一部施設

を貸し出すようにしている。
「つまり、基本的には七、八人で構成された少人数の部が、部室棟に部室を持っていることになるね」
「ということは、運動系よりも文科系の部がここには多く集まっているということですか？」
「察しが良いね。運動系の部活動の多くは封術学園の花形である四校統一大会の出場に重点を置いているれけど、文科系の部活動はどちらかと言えば封術の理論体系に主眼を置いている。善し悪しの話ではないけれど、運動系に人が多く集まるのに対して、相対的に文科系の部に入る人は少ない。文科系の部は運動系の部に比べて数は多いが、全体の人口を見ると、運動系には遠く及ばないんだよ」
部室棟に来るのはオリエンテーション以来二度目のことだが、あのときはまだ授業時間中であったため、どの部室も活動していなかった？？していたらそれはそれで問題なのだが。
オリエンテーションのときには閑散としていた部室棟だったが、今は放課後の時間帯なので、学生の姿がそこかしこにチラホラと見受けられた。
「シュウヤは何処かの部活に入ろうとは思わなかったのかい？」
「どうしたんですか、急に？」
質問に質問で返しても答えは得られないだろうが、秋弥は咄嗟に聞き返していた。
「いやね、部活に入っていたら学生自治会には入れなかったからさ。いや、それは逆かな。学生自治会に入ったら、部活を辞めなければならなかったからさ」
しかしスフィアは、珍しくシュウヤの問いに答えてくれた。
「元々、俺は部活にも学生自治会にも入るつもりはありませんでしたからね」
「……さっきの事を根に持っているのかい、シュウヤ」
素直に答えたつもりだったのだが、言葉に幾分皮肉が混じってしまったのはどうしようもなかった。

「組織の掛け持ちが禁止されているのでしょう？　校則にそう書いてありましたね」
「そのとおりだよ。ここで言う組織というのは部活動だけじゃなくて、自治会や維持会も含めた学園の組織という意味だからね。学園祭や四校統一大会の準備委員のように、一時的に集められる場合は除くけどね」
　すれ違う学生達がスフィアに会釈や挨拶をする。それにひとつひとつ応えながら、二人は見回りを続けた。
「実は治安維持会のメンバーにも欠員が出ていてね。……いや、欠員という言い方はこの場合少し間違っているかな。治安維持会長？？つまりワタシの指名枠がまだ一人分、空いているんだよ」
　治安維持会の役員は会長を含めて最大で五人。会長職は現会長からの直接指名によって選ばれ、その際に新会長は役員を二人まで指名でき、残りの二人は学園側からの推薦で選ばれる。
　自治会長と維持会長の同意が必要な学生自治会役員にもこれまで二つの空席があったのだが、そのうちの一つは先日秋弥が拝命したことによって既に埋まっていた。
「今だから本当のことを言うんだけど、空席にはキミを迎え入れようかと思っていたんだよ」
　思い掛けないスフィアの言葉に、秋弥が足を止める。
　すると、数歩先に進んでいたスフィアが金色の髪を靡かせながら振り返って、わずかに眼を細めた。
「自治会長の任命権と維持会長の推薦枠。どちらがより優先されるかどうかという単純な話ではなくて、ワタシはただ純粋に、キミの持つその力に興味を持ったんだ」
　スフィアの言う『その力』というのが、紅の異能型装具や隣神リコリスのことだけを指しているのではないと、秋弥は朧気ながらに思った。
　彼女の真意は窺い知れなかったが？？。
「もっとも、今はキミに興味があるけどね」

「それは……、俺が九槻月姫の弟だからですか？」
「さあ、どうだろうね」
見当違いの問いだったのだろうか、適当にはぐらかされてしまう。
「……それでもスフィア会長は、星条会長に権利を譲ったんですか？」
話を掘り返すつもりもなかった秋弥は、話を進めることにした。
「そうだね。だってキミは、治安維持会には絶対に入らないと思ったからさ」
首を傾げると、スフィアは普通の微笑みを浮かべた。
それはいつもの人を喰ったような笑みではなく、純粋な微笑み。
不覚にも、見とれてしまうほどの。
「治安維持会は学園の中だけで閉じた組織なんだ。誰に褒められるということもないけれど、学園の内側に限って言えば立派な仕事だと、ワタシは思う。だけど、だからキミの興味を引くような活動は何もしていないとも言える。維持会長になれば自治会の課外活動にも参加出来るようになるけれど、ワタシが会長でいる在り続ける限り、キミが維持会の会長になれることは決してない。だからワタシはキミを諦めた。いや……、キミが言うとおりユウキに譲ったんだ。それが、誰にとっても最良の選択（オプティマ・オルタナティブ）だと思ったから？？」
「……スフィア会長」
くるりと背を向けたスフィアに向かって秋弥は声を掛けたのだが、しかし何と言って良いかわからずに口を噤んだ。
「ははは、少しワタシらしくもない話をしてしまったかな。ユウキには内緒だよ？」
普段どおりの飄々とした口調で、しかし眼を合わせず、背も向けたままのスフィア。
雑談はこれでお仕舞いとばかりに歩みを再開した彼女の後を追いかけて、秋弥は彼女のやや後ろを同じ歩調で歩く。
表情を窺うような野暮な真似はしない。
そんなことをしなくても、秋弥には先ほどよりもほんの少しだけ、

スフィアのことを知る事が出来たと、そう思えた。

部室棟の各階廊下を巡回しつつ、南階段と北階段をジグザグに上りながら、四階に差し掛かったとき、廊下で怒鳴り合う二つの声が秋弥の耳に聞こえてきた。

「おや、これは事件かな」

「行ってみましょう」

二人は人集りの出来ている中へと割って入る。

治安維持会の腕章を見た??あるいは噂に聞く恐怖の維持会長を見た??学生達は、スフィアと共にいる見慣れない自治会役員を訝しんだが、それでも二人のために道を空けた。

人集りの中央では、数人の学生が互いに一歩も引かない様子で向かい合っていた。

互いの手には装具が握られている。

グラウンドや特別訓練棟の訓練施設のように強力な封術結界が張られていない部室棟で、秋弥は今まさに小競り合いを演じている彼らへと眼を向ける。

現場に治安維持会長が居合わせていることを知らない小競り合いメンバーのうちの一人??眼鏡を掛けた男子学生が言った。

「君達の言い分はいつだってそうだ。悪い方にばかり考えて、前を見ようとしない！」

それに対して、線の細い男子学生が食って掛かる。

「お前達の方こそ、いつもいつも良いことばかり考えて、過去を振り返ろうとしないじゃないか！」

「人間の眼がどうして前に付いているか知っているかい？　前を向いて歩いて行くためさ！」

「人間が何故昔のことを覚えているか知っているか？　過去の出来事を思い出すためだ！」

「最悪のケースばかり考えて、明るい未来を考えない君達に何を言

われたって構うものか！」
「最高のイメージばかりに気を取られて、過ちを繰り返そうとしているお前達に何を言われたところで怖くないね」
何に対してのやりとりなのかはわからないが、二人の議論が平行線を辿っていると、秋弥は思っていた。
「ああ、また彼らが言い争いをしているのかい」
「スフィア会長は知ってるんですか？」
「ポジティ部とネガティ部の言い争いは日常茶飯事だからね」
「は？　ポジティブとネガティブ？」
「違うよシュウヤ。ポジティ部とネガティ部さ」
微妙にイントネーションの違うスフィアの言葉から、秋弥は語句を脳内変換すると、
（ただの駄洒落じゃないか……）
がくりと肩を落とした。
「ポジティ部はプラスの考え方がどれくらい封術の干渉力に影響を与えるかを追求している部で、ネガティ部はマイナスの方面から物事を捉えて事象の改変に必要とされる干渉力が最低どの程度になるかを追求している部だよ」
スフィアからの説明を受けた秋弥は、冗談みたいな部の名前に反して思いの外まともな活動内容に驚いた。
「まあモノの考え方が互いに違うから、こうして良く言い争っているんだけれどね」
「……止めなくて良いんですか？」
「過剰行使さえしなければ、それは当人達の問題さ。彼らもそれは弁えているからね。ほら、見てごらん。メンバーの一人が周囲に封術結界を張っているだろう」
示された先を見ると長い髪の女子学生??どちらの部員かはわからない。案外、野次馬の一人かもしれない??が床に片膝と片手を突いて、周囲に封術結界を張っていた。
校則で定められている規則内の封術でも、扱いを間違えれば火災

や停電、水害などを及ぼしかねない。
学園設備を倒壊させるような封術の行使は以ての外だが、それ以外でも状況によっては厳罰が下されることもある。
その辺りの重み付けについては、現場に居合わせた自治会や維持会役員の裁量によって一任されていたりもするから、程度は知れないが。
「彼らの事は放っておいても大丈夫だろうけど、一応最後まで見守ってみようか」
完全に傍観者を決め込んだ様子のスフィアに倣い、秋弥も人集りの最前列で傍観することにした。
ところで二人は一体何の議論をしているのだろうか。
「どうして食べてもいないのに目玉焼きに醤油は有り得ないと決めつけるんだ！」
「それで失敗したらせっかくの目玉焼きが台無しになるからだ！そうなるくらいだったら俺は最初からいつもの食べ方を選ぶ！」
……どうでもいい内容の議論だった。
「ほらみろ、また悪い方向に考えたね！　それで君達の未来はまた一つ閉ざされたんだよ！」
「そうやって進んだ先が閉ざされていたら、お前達は失敗を振り返るか？　振り返らないだろう？」
「そりゃあそうだよ。また次がある。そう考えて、閉ざされた先に新しい道を作って歩くね！」
「その考え方が間違っているというんだ。次があるというその甘い考え方は『現在（いま）』を見ていない。現在を最良にするためには、常に最悪のケースを考えておくべきだ」
「それは間違っているね。より良い未来を目指すために歩みを進めることで、『現在（いま）』という結果に満足出来るんだよ」
しかし、どうでもいい議論から展開されたにも関わらず、二人の議論はいつしか哲学的な部分へと向かっていた。
ただし、平行線上に立つ二人の結論が『ひとつ』に行き着くこと

はない。
と、不意に細い男子学生??言動の内容から見て、ネガティ部の学生が装具を相手に向けた。
曲刀の形をした装具から封術で組み上げられた風の球が放たれる。
眼鏡の男子学生??ポジティ部の学生が直ぐさま長槍に似た装具を構えて、これを受け止める。
だが、眼鏡の男子学生が咄嗟に発動した風の盾では風の球を完全に相殺しきることが出来ず、一部が受け流されて彼の背後で封術結界を張っていた女子学生に直撃した。
女子学生は声を上げる間もなく、人集りに向かって吹き飛ばされる。
それを見た眼鏡の男子学生は、封術結界が解けてしまったにも構わず、無我夢中で火系の封術を発動させようとした。
細い男子学生もそれを防ぐために新たな封術の演算を開始する。
拙いな、と秋弥は思った。
細い男子学生の身体から一瞬だが生じたエリシオン過剰光(オーバーレイ)の色は緑。
これと前(さっき)の封魔術式から連想して、彼の得意属性は『風』のようだが、風系の封術は火系との相性が非常に悪い。
封術結界が解けた今の状況で火系の封術に風系の封術をぶつければ、それによって拡散された火が周囲に飛び火してしまう可能性が高かった。
止めに入るべきではないのかと、秋弥が視線を横に移す。
しかし、そこに在るべきスフィアの姿が、無かった。
視線を急いで正面へと戻す。
スフィアは一瞬にして二人の間に飛び込んでいた。
交差させた両腕の手に装具を召還すると、彼女はその引き金を同時に引いた。
発砲音は一つ。
発射された弾は二つ。

加速と緩衝という二重の制御術式が掛けられた二つの銃弾が、刹那の間に二人の術者を無力化していた。

★☆★☆★

「??というのが一連の顛末です」

自治会室に戻った二人は、悠紀に部室棟で起こった出来事を報告していた。

悠紀は執務用の机上で行っていた他の作業の手を止めて、秋弥の報告を聞いている。

スフィアはというと、ソファに腰掛けて寛いでいた。

「ありがとう、秋弥君。状況は概ね理解しました」

二人を止めに入ったスフィアが瞬く間に術者の意識を奪ったことで、構築途中にあった術式は発動が無効化されて、事無きを得るに至った。

緩衝制御の効果によって威力を抑えられた銃弾??スフィアはゴム弾だと言い張っているが、封術で造られた銃弾であるため、真偽の程は定かではない??のおかげで、軽い脳震盪程度で済んだ当事者達は、目覚め頭にスフィアの姿を認めた途端、青醒めた表情で畏まって互いに謝罪をした。

また、人垣がクッション代わりとなったことで、逸れた風球の一部を受けた女子学生に怪我が無かったことも、幸いだったと言えるだろう。

「当事者達には反省文でも書かせましょうか。それで良いわね、スフィア?」

「その辺りの裁量はシュウヤに一任するよ。現場にいたのはワタシだけじゃないからね」

気怠そうな感じのする声で言うスフィアに、悠紀は溜息ひとつ。

「……とスフィアは言っているのだけれど、秋弥君はそれで良いかしら？」
「良いんじゃないですか。本来だったらもっと大事になっていたかもしれませんが、スフィア会長が現場にいたのは不幸中の幸いとも言えますしね」
「そうね。それじゃあ今回はその点も踏まえた反省文にしておきましょうか」
干渉力の強い封術はそれだけで強力な事象改変をもたらす。
だがしかし、封術は扱い方を誤れば、それがたとえどんな些細な術式であったとしても、予期せぬ事態を招くことがあるのだと、秋弥は改めて思い知ったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6967v/

封術学園～有望な術師達～

2011年10月4日03時20分発行